若江遺跡第27次発掘調査報告

1988

財団法人 東大阪市文化財協会

はしがき

府道大阪東大阪線の改良工事等に伴って発掘調査が進められてきた若江遺跡は弥生時代から室町時代に至る複合遺跡であることが判明しています。若江遺跡は弥生時代から室町時代の集落と若江寺、若江郡衙、若江城を包括した遺跡であります。昭和47年の若江小学校校舎増築工事に伴う調査をはじめ、公共下水道管埋設、住宅建設など種々の開発工事に伴う調査が幾度となくおこなわれ、重要な遺構・遺物が発見されています。

今回の調査では、若江城に伴う堀、塼立建物、井戸などの遺構と、古墳時代から江戸時代に至る多くの遺物を検出いたしました。中でも堀は今まで東西方向に伸びていることが確認されていましたが、新たに南北方向に伸びる２本の堀を検出しました。また、城の東側には塼立建物もみつかっています。堀内からは多量の遺物が出土し、城の構造および当時の人々の生活を知るうえで大きな成果を得ることができました。しかし、若江遺跡の一端を見たにすぎず、今後、発掘調査によってその全貌の解明に努力していきたいと思います。

最後に、調査および報告書作成にあたって御協力・御指導をいただいた方々に厚くお礼申し上げるとともに、本書が歴史研究をはじめ、広く活用されることを心から願うものであります。

昭和63年３月

財団法人　東大阪市文化財協会
理事長　木　寺　宏

例　　言

1. 本書は、大阪府八尾土木事務所が進めている府道大阪東大阪線(旧称四条・長堂線)の拡幅工事に伴って発掘調査を実施した若江遺跡の調査報告書である。
2. 現地調査および遺物整理は、財団法人東大阪市文化財協会が大阪府八尾土木事務所の委託を受け、現地調査を昭和58年10月17日から12月29日まで、遺物整理を昭和62年10月1日から昭和63年3月31日まで実施した。
3. 調査・整理は次の事務局体制により進めた。

理 事 長　秀平勇造（東大阪市教育委員会教育長）昭和58年12月まで
　　木寺　宏（東大阪市教育委員会教育長）昭和58年12月より
事務局長　寺澤　勝（東大阪市教育委員会社会教育部参事）
庶務部長　吉田照博（東大阪市教育委員会文化財課課長代理）昭和61年4月まで
　　下村晴文（東大阪市教育委員会文化財課主任）昭和61年12月より
調査部長　原田　修（東大阪市教育委員会文化財課主査）
庶 務 部　安藤紀子（東大阪市教育委員会文化財課）
調 査 部　上野節子（財団法人東大阪市文化財協会）
調査担当　才原金弘（東大阪市教育委員会文化財課）
調査補助　有山淳司　相田正明　長峰繁己　田中幹久　谷村幸夫　田中富佐子　平井二美子　今井喬子　本田けい子　岡村多美子　清水美香　高岡史子　松尾美絵　高須明美　新谷久美子

4. 本書の執筆と編集は才原がおこなった。
5. 図版に収めた遺構写真は才原と補助員が撮影し、遺物写真は加賀雅治氏(日本アートフレーム)に委託した。
6. 調査における土色名は、農林省農林水産技術会議事務所監修・財団法人日本色彩研究所監修の『新版標準土色帖』に準じた。
7. 石材の同定は大阪市立自然史博物館の石井久夫氏の御教示によるものである。
8. 調査の実施にあたっては、大阪府八尾土木事務所に格別の御協力をいただいた。記して御礼申し上げる次第である。

本　文　目　次

Ⅰ．調査に至る経過……1
Ⅱ．位置と環境……2
Ⅲ．調査の概要……4
　1．　調査の方法……4
　2．　A 地区の調査……6
　3．　B 地区の調査……9
　4．　C 地区の調査……17
　5．　D 地区の調査……29
Ⅳ．出土遺物……32
　1．　土器……32
　2．　瓦……67
　3．　金属器……76
　4．　銭貨……83
　5．　土製品……86
　6．　石製品……88
　7．　木製品……91
Ⅴ．まとめ……94
　1．　遺構について……94
　2．　遺物について……95
　観察表……97

挿　図　目　次

第１図　調査位置図……3
第２図　調査位置図……4
第３図　地区割図……5
第４図　Ａ地区断面実測図……6
第５図　塼立建物実測図……8
第６図　Ｂ地区断面実測図……10
第７図　堀１実測図……13
第８図　Ｂ地区遺構実測図……14
第９図　Ｂ地区遺構実測図……15
第10図　掘立柱建物１実測図……17
第11図　Ｃ地区断面実測図……18
第12図　Ｃ地区遺構実測図……20
第13図　堀３実測図……21・22
第14図　壁下地実測図……23
第15図　堀３断面実測図……24
第16図　井戸３・４実測図……25
第17図　井戸４・溝５実測図……26
第18図　掘立柱建物２実測図……28
第19図　掘立柱建物３実測図……28
第20図　掘立柱建物４実測図……28
第21図　Ｄ地区断面実測図……30
第22図　自然流路実測図……31
第23図　塼立建物出土土器実測図……42
第24図　堀２出土土器実測図……44
第25図　堀２出土土器実測図……45
第26図　井戸２出土土器実測図……46
第27図　井戸１出土土器実測図……47
第28図　土坑・ピット出土土器実測図……48
第29図　井戸・土坑・ピット出土土器実測図……49
第30図　堀３出土土器実測図……50
第31図　土器溜り出土土器実測図……52
第32図　土器溜り出土土器実測図……53

第33図　整地層 2 出土土器実測図……54
第34図　整地層 1 出土土器実測図……56
第35図　整地層 1 出土土器実測図……57
第36図　整地層 1 出土土器実測図……57
第37図　整地層 1 出土土器実測図……58
第38図　整地層 1 出土土器実測図……59
第39図　整地層 1 出土土器実測図……60
第40図　整地層 1 出土土器実測図……61
第41図　整地層 1 出土土器実測図……62
第42図　自然流路出土土器実測図……63
第43図　自然流路出土土器実測図……64
第44図　自然流路出土土器実測図……65
第45図　自然流路出土土器実測図……66
第46図　瓦実測図……69
第47図　瓦実測図……70
第48図　瓦実測図……71
第49図　瓦実測図……72
第50図　瓦実測図……73
第51図　瓦実測図……74
第52図　金属器実測図……77
第53図　金属器実測図……78
第54図　金属器実測図……79
第55図　銭貨拓影……84
第56図　土製品実測図……86
第57図　土製品実測図……87
第58図　石製品実測図……88
第59図　石製品実測図……89
第60図　石製品実測図……90
第61図　木製品実測図……92

表　目　次

第１表　ピット計測値……16
第２表　ピット計測値……27
第３表　土師器皿分類表……34
第４表　土釜分類表……36・37
第５表　摺鉢・揑鉢分類表……38・39
第６表　軒平瓦観察表……68
第７表　軒丸瓦観察表……68
第８表　鉄釘計測値……80・81
第９表　銭貨一覧表……85
第10表　礎石石材一覧表……94

図　版　目　次

図版１　遺構（Ａ地区）　１．塼立建物全景（西より）　２．塼立建物全景（南東より）
図版２　遺構（Ａ地区）　１．塼立建物全景（西より）　２．塼立建物掘り方断面
図版３　遺構（Ａ地区）　１．南側塼立検出状況　２．東側塼立検出状況
図版４　遺構（Ｂ地区）　１．遺構全景（西より）　２．遺構全景（東より）
図版５　遺構（Ｂ地区）　１．柱穴（西より）　２．柱穴（西より）
図版６　遺構（Ｂ地区）　１．堀２（西より）　２．堀２（東より）
図版７　遺構（Ｂ地区）　１．堀２内逆茂木検出状況　２．堀２内逆茂木検出状況
図版８　遺構（Ｂ地区）　１．土坑３、井戸１（西より）　２．土坑１
図版９　遺構（Ｂ地区）　１．土坑２　２．井戸１
図版10　遺構（Ｃ地区）　１．遺構全景（東より）　２．遺構全景（西より）
図版11　遺構（Ｃ地区）　１．堀３遺物出土状況　２．堀３遺物出土状況
図版12　遺構（Ｃ地区）　１．堀３遺物出土状況　２．堀３遺物出土状況
図版13　遺構（Ｃ地区）　１．堀３（西より）　２．堀３（西より）
図版14　遺構（Ｃ地区）　１．柱穴（東より）　２．土坑８・９・10
図版15　遺構（Ｃ地区）　１．井戸３・４、土坑12、溝５　２．溝５上面植物遺体検出状況
図版16　遺構（Ｃ地区）　１．溝５内暗渠　２．溝５内暗渠上蓋除去
図版17　遺構（Ｃ地区）　１．井戸４　２．井戸４内土管検出状況
図版18　遺構（Ｄ地区）　１．断面　２．自然流路（東より）

図版19	遺構（D地区）	1.　自然流路（西より）	2.　自然流路（東より）
図版20	遺物	塼立建物出土土器	
図版21	遺物	塼立建物出土土器	
図版22	遺物	塼立建物出土土器	
図版23	遺物	1.　塼立建物出土土器	2.　塼立建物出土土器
図版24	遺物	1.　塼立建物出土土器	2.　塼立建物出土土器
図版25	遺物	堀２出土土器	
図版26	遺物	1.　堀２出土土器	2.　堀２出土土器
図版27	遺物	1.　堀２出土土器	2.　堀２出土土器
図版28	遺物	1.　堀２出土土器	2.　堀２出土土器
図版29	遺物	1.　堀２出土土器	2.　堀２出土土器
図版30	遺物	井戸２出土土器	
図版31	遺物	井戸２出土土器	
図版32	遺物	井戸１出土土器	
図版33	遺物	井戸１出土土器	
図版34	遺物	井戸１、土坑２・４、ピット31出土土器	
図版35	遺物	1.　井戸１出土土器	
		2.　土坑２・３出土土器	
図版36	遺物	堀３、ピット56出土土器	
図版37	遺物	1.　土坑８出土土器	2.　土坑７・11出土土器
図版38	遺物	1.　土坑12、井戸３出土土器	
		2.　ピット45・48・54・59・70出土土器	
図版39	遺物	1.　堀３出土土器	2.　堀３出土土器
図版40	遺物	土器溜り出土土器	
図版41	遺物	土器溜り出土土器	
図版42	遺物	1.　土器溜り出土土器	2.　土器溜り出土土器
図版43	遺物	1.　土器溜り出土土器	2.　土器溜り出土土器
図版44	遺物	1.　土器溜り出土土器	2.　整地層２出土土器
図版45	遺物	1.　整地層２出土土器	2.　整地層２出土土器
図版46	遺物	整地層１出土土器	
図版47	遺物	整地層１出土土器	
図版48	遺物	1.　整地層１出土土器	2.　整地層１出土土器
図版49	遺物	1.　整地層１出土土器	2.　整地層１出土土器
図版50	遺物	1.　整地層１出土土器	2.　整地層１出土土器
図版51	遺物	1.　整地層１出土土器	2.　整地層１出土土器

図版52	遺物	1.　整地層１出土土器	2.　整地層１出土土器
図版53	遺物	1.　整地層１出土土器	2.　整地層１出土土器
図版54	遺物	1.　整地層１出土土器	2.　整地層１出土土器
図版55	遺物	1.　整地層１出土土器	2.　整地層１出土土器
図版56	遺物	1.　整地層１出土土器	2.　整地層１出土土器
図版57	遺物	自然流路出土土器	
図版58	遺物	1.　自然流路出土土器	2.　自然流路出土土器
図版59	遺物	1.　自然流路出土土器	2.　自然流路出土土器
図版60	遺物	1.　自然流路出土土器	2.　自然流路出土土器
図版61	遺物	1.　自然流路出土土器	2.　自然流路出土土器
図版62	遺物	瓦	
図版63	遺物	瓦	
図版64	遺物	瓦	
図版65	遺物	瓦	
図版66	遺物	瓦	
図版67	遺物	瓦	
図版68	遺物	瓦	
図版69	遺物	金属器	
図版70	遺物	1.　金属器	2.　金属器
図版71	遺物	金属器	
図版72	遺物	金属器	
図版73	遺物	銭貨	
図版74	遺物	1.　土製品	2.　土製品
図版75	遺物	土製品	
図版76	遺物	土製品、石製品	
図版77	遺物	1.　石製品	2.　石製品
図版78	遺物	石製品	
図版79	遺物	木製品	
図版80	遺物	木製品	

Ⅰ．調査に至る経過

若江遺跡は東大阪市若江本町、若江北町、若江南町一帯に広がる弥生時代から室町時代の複合遺跡である。本遺跡がある若江周辺は開発がすでに進み、ほとんどが住宅地となっている。

東大阪市と大阪市を結ぶ府道大阪東大阪線(旧称四条・長堂線)は生活、産業道路として重要な役割を果している。しかし人口の増加、産業の発展に伴う車の急速な普及により、現在の道路機能はその限界に達している。このような事情から大阪府八尾土木事務所では道路拡幅工事の計画が進められた。工事予定地は本市が周知している若江遺跡内にあたり、大阪府八尾土木事務所と東大阪市教育委員会が事前協議した結果、発掘調査の必要が生じた。発掘調査は昭和49年より実施され、以後、継続的におこなわれて今日に至っている。

若江遺跡が周知されたのは、昭和９年の旧楠根川改修工事の際に多量の弥生土器、土師器、須恵器が出土したことによる。[1] また、昭和42年には若江公民館建設工事の際に土釜積みの井戸１基がみつかっている。

若江遺跡が本格的に発掘調査されたのは、昭和47年の若江小学校校舎増築工事の際であった。調査では鎌倉時代から室町時代までの井戸、柱穴、土坑、溝などの遺構と多量の土器、瓦、石製品などが出土した。これらの遺構、遺物は若江城、若江寺、中世の集落のものと考えられた。また、昭和49年には東大阪市教育委員会によって若江遺跡の範囲確認調査が国庫補助事業で実施された。[2] 調査では礎石列、塼列などの遺構が検出され、若江城関連のものと考えられた。さらに、同年より公共下水道管埋設工事に伴う調査が実施され、井戸、溝、柱穴などが検出され、中世の集落が広範囲にわたっていたと考えられている。

昭和49年は大阪東大阪線拡幅工事に伴う若江遺跡の調査開始年でもあった。この調査は継続的に実施され、若江遺跡の範囲、性格、時期などの大きな成果を得ることができた。昭和49年に実施された第４次調査[3]より、第10次[4]、第12次[5]、第14次[6]、第17次[7]、第20次、第24次、第25次[8]、第26次調査と続き、今回で第27次調査となる。一連の調査では弥生時代から古墳時代の遺物包含層を部分的ではあるが確認しており、当時期の集落があったことが窺える。中世の集落も広がっており、井戸、建物跡、溝、土坑などが検出されている。これらの調査で最も大きな成果が得られたのは若江城関連の遺構、遺物が検出されたことである。若江城の東西方向に走る堀が検出され、また、南北方向に走る堀も数本検出された。さらに、若江城の礎石や付属施設と考えられる塼立建物もみつかっている。若江城との関連を思わせる遺物も多く、刀、鏃、鉄砲の玉、小札などの武器、武具が出土している。

今回の調査は東大阪市教育委員会の依頼を受けて、財団法人東大阪市文化財協会が、大阪府八尾土木事務所と委託契約を交わして実施することになった。調査面積410㎡であり、幅約1.5ｍの細長いトレンチである。調査は現地調査を昭和58年10月17日から12月29日まで、遺物整理を昭和62年10月１日から昭和63年３月31日まで実施した。

Ⅱ．位置と環境

若江遺跡の周辺に人々が住み始めるのは弥生時代前期からである。若江遺跡の南西に山賀遺跡があり、北西には瓜生堂、高井田遺跡がある。当時は若江遺跡の北に河内湖が広がっており、大小５本からなる旧大和川(恩智川、玉串川、楠根川、長瀬川、平野川)と北からは淀川が流れ込んでいた。旧大和川と淀川の土砂流出によって河内平野は形成された。当時の人々は自然堤防上に集落を営み、後背湿地に水田をつくっていた。また、生駒西麓の扇状地や扇状地から平野部へ移行する地点にも前期の集落が出現し、中垣内、鬼虎川、縄手遺跡などがあげられる。これらの遺跡は中期～後期まで続くものが多い。若江遺跡では後期の土器が出土しており[9]、弥生時代後期には集落が存在していたと考えられる。

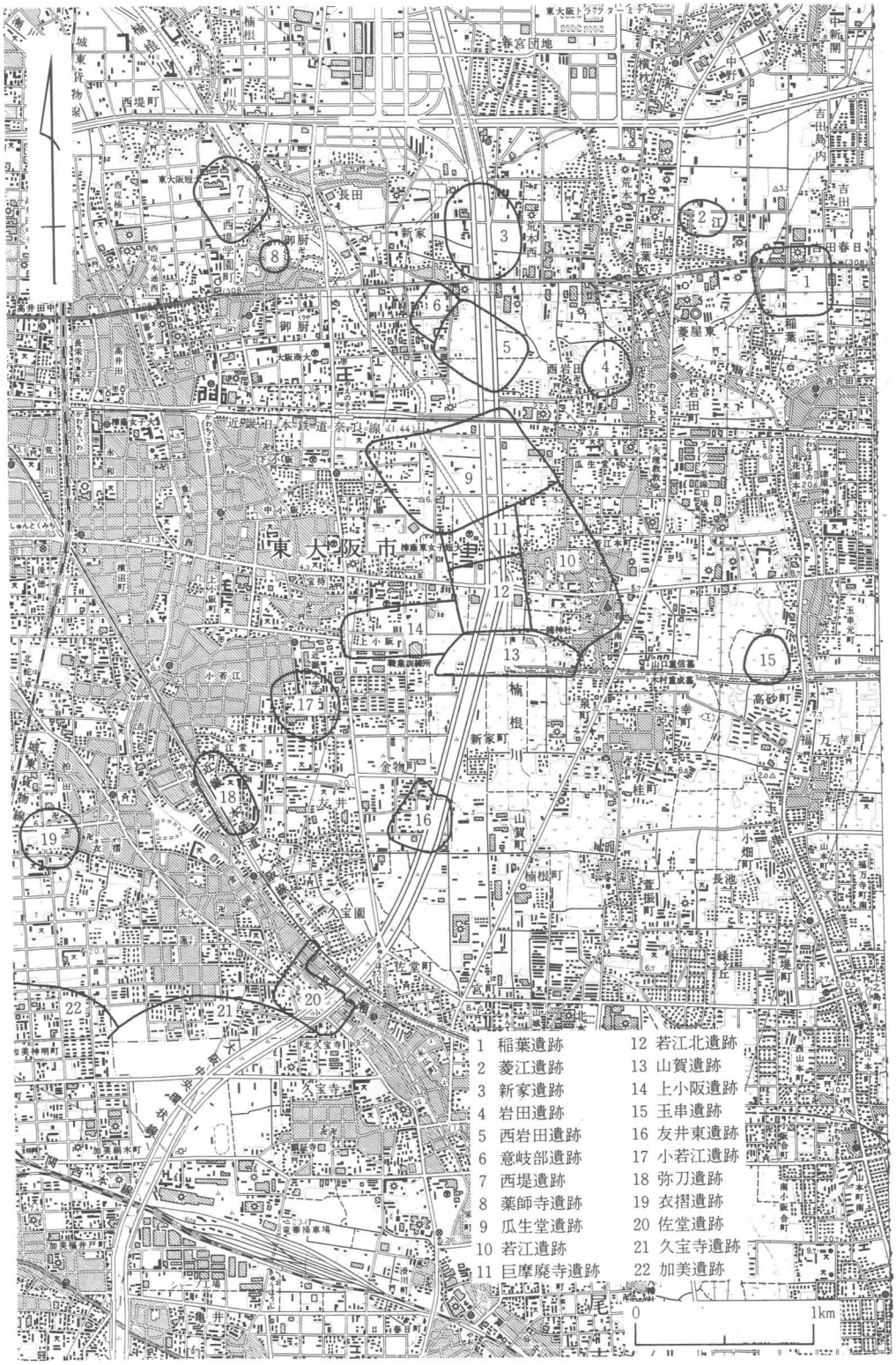
古墳時代になると若江遺跡の周辺では山賀、瓜生堂、西岩田[10]、意岐部遺跡などがあり、集落ができていた。古墳時代の人々も弥生時代の人々が集落を形成した場所と同じ所を選んでいる。若江遺跡では明確な遺構は見つかっていないが、同時期の遺物が多量に出土していることから、集落があったと考えられる。生駒西麓の扇状地にも点々と集落が存在しており、掘立柱建物などが検出されている[11]。また、古墳時代の中期～後期には多くの古墳が造営されており、生駒西麓の各尾根筋に群集墳が存在する。出雲井[12]、山畑[13]、花草山、五里山古墳群などがあげられる。

奈良時代以降になると若江遺跡では人々の生活が活発になったらしく、多量の遺物や遺構が出土している。若江の地には若江寺、若江郡衙、若江城が存在したと考えられており、その遺構と思われるものが見つかっている。若江寺は白鳳時代に建立された寺院であるが、多量の瓦は出土しているものの明確な遺構は検出されていない。東大阪市域には河内寺[14]、法通寺[15]、石凝寺[16]など若江寺と同時期の寺院があり、河内寺や法通寺では遺構も検出されている。河内国若江郡をおさめる郡衙も若江にあったと推定される。

若江城は明徳元年(1390年)、畠山基国が河内国の守護になったころ、守護代遊佐氏の本拠として築かれた。応仁の乱以後、若江城は幾度も戦乱に巻き込まれている。また、天正９年(1581年)、宣教師ルイス＝フロイスがローマに書き送った「日本耶蘇会年報」の一節には若江城が姿を消したことを伝えている。近年の調査で、若江城の遺構と考えられるものが多く見つかっている。東西方向に伸びる堀の中には逆茂木が打たれており、また南北方向に伸びる堀も見つかっている。以前に検出されていた礎石建物や塀列についても再考され、若江城関連の遺構と考えられている。

若江遺跡では若江寺、若江郡衙、若江城だけでなく、中世の集落も存在しており、掘立柱建物、井戸、溝などの遺構と各種の遺物が出土している。

若江の地に弥生時代後期から人々が住み始め、若江寺、若江郡衙、若江城などが建てられた大きな要因として立地条件が考えられる。若江遺跡は自然堤防上にあり、周辺より一段高くなっていることから生活に適した場所であったと思われる。


東大阪市
1 稲葉遺跡
2 菱江遺跡
3 新家遺跡
4 岩田遺跡
5 西岩田遺跡
6 意岐部遺跡
7 西堤遺跡
8 薬師寺遺跡
9 瓜生堂遺跡
10 若江遺跡
11 巨摩廃寺遺跡
12 若江北遺跡
13 山賀遺跡
14 上小阪遺跡
15 玉串遺跡
16 友井東遺跡
17 小若江遺跡
18 弥刀遺跡
19 衣摺遺跡
20 佐堂遺跡
21 久宝寺遺跡
22 加美遺跡
0
1km

第1図　遺跡周辺図

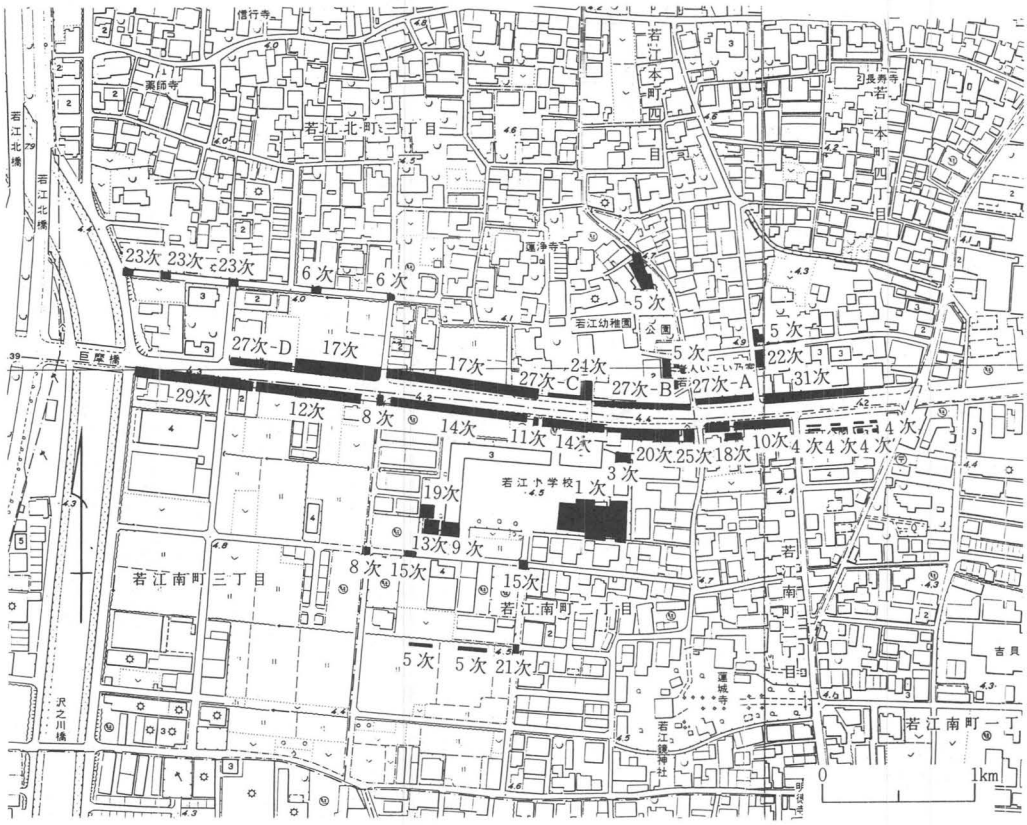
Ⅲ．調査の概要

1．調査の方法

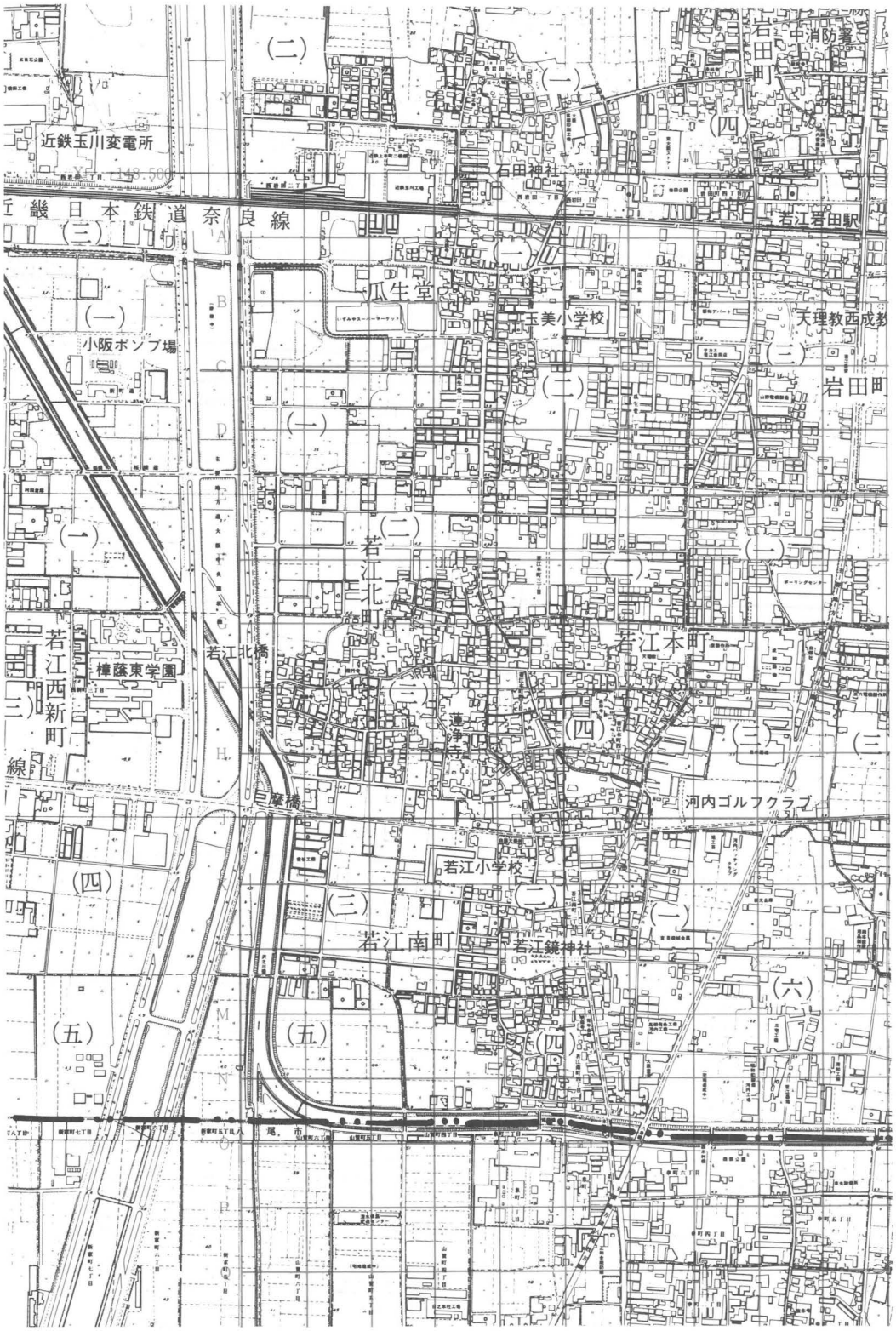
昭和54年に若江遺跡を包括する範囲で地区割をおこなったが、さまざまな不備な点がでてきたので、今回、あらたに地区割を設定した[17]。国土座標に準拠する地区割を使用した。この地区割は東大阪市西岩田(X＝－148.5、Y＝－36.5)を起点とし、100m方格を大区画とし、東西方向(Y軸)を東へⅠ・Ⅱ・Ⅲ……、南北方向(X軸)を南へA・B・C……とした。さらに大区画を細分し、5ｍ方格を小区画として、東南隅の交点を地区名とした。大区画と同一方向にY軸を1･2･3…、X軸をa・b・c……とした。最小区画の表示は東北隅でVK19eとなる。

また、一方では調査の簡便化を図るため、調査範囲を東からA～D地区と仮称した。本報告では、遺構・断面実測図には正式地区名を記載したが、本文中の記述は遺構の性格を考えて、仮称地区名を使用した。

調査の方法は盛土を機械掘削し、下層を各層ごとに精査した。調査は道路事情などを考慮して、各地区ごとにおこなった。埋め戻しが完了後、次の地区へと移った。



第２図　調査位置図



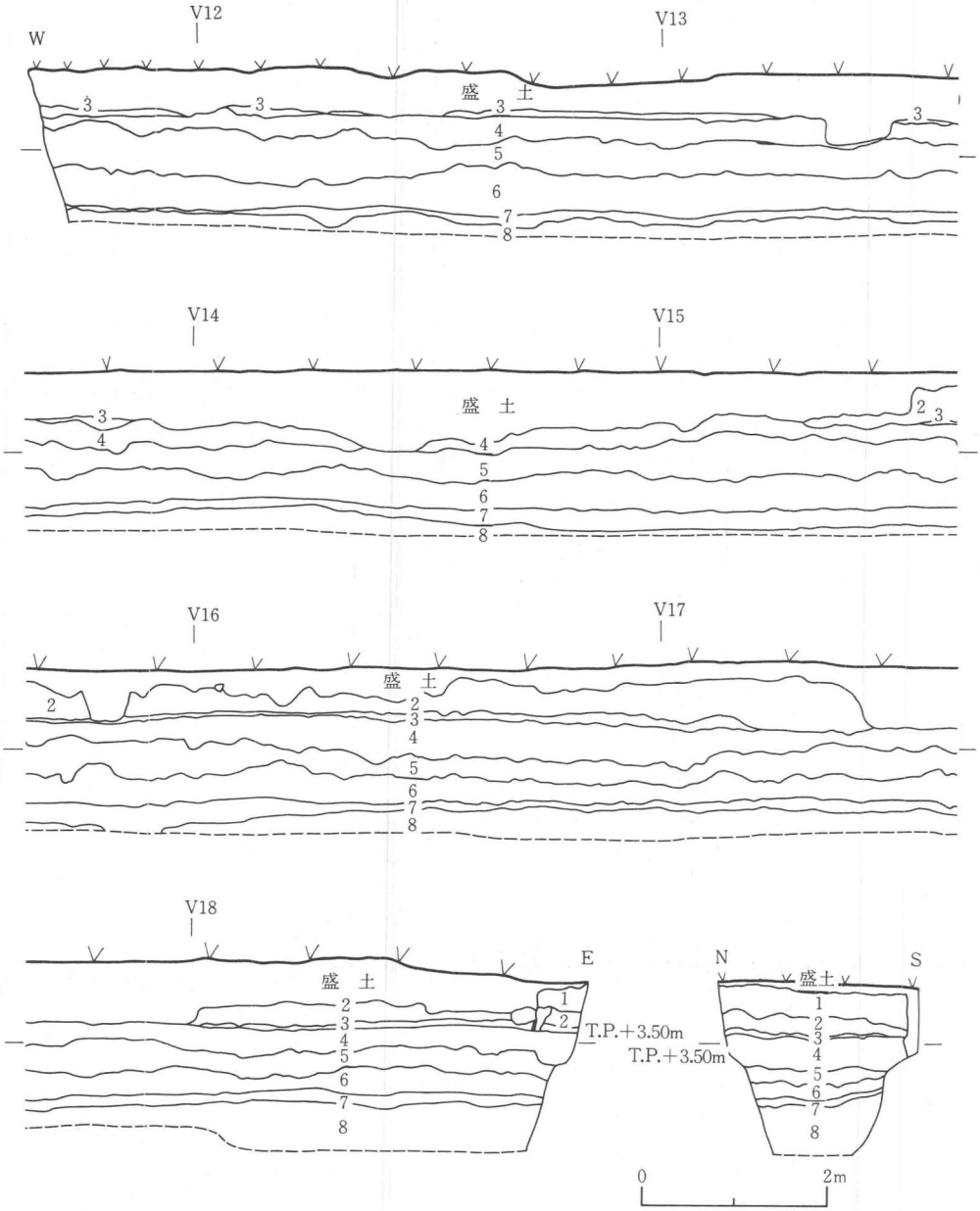
第３図　地区割図（1/10,000）

2．A地区の調査

1）層位（第４図）

A地区は今回の調査では最も東に位置する。西に向かってB、C、D地区となる。A地区の調査範囲は幅1.5m×長さ37mである。断面実測は北壁と東壁でおこなった。以下、確認した土層を列挙した上で特徴を記す。

第１層　暗褐色(10YR3/3)粘質シルト層。極細砂～中粒砂を多量に、細礫、粗粒砂を少量含む。



第４図　A地区断面実測図

炭化物がごくわずかに混じる。調査地の東端部にしか見られない。

第２層　褐色(10YR4/4)シルト～粗粒砂層。径約１～２cmの細礫を少量、径１cm以下の細礫を多量に含む。若干の粘性がある。微量の炭化物が混じる。

第３層　暗褐色(10YR3/4)極細砂～粗砂層。径1cm以下の細礫を多量に含む。炭化物はほとんど無い。

第４層　暗褐色(10YR3/3)粗砂混りシルト層。径約２～３cmの礫が極少量、径１～２cm以下のものを多量に含む。若干の粘性がある。第１層に土質は似ているが、層全体に含まれる礫は大きさ、量ともに第１層よりも少し優っている。極微量の炭化物が混じる。

第５層　暗褐色(10YR3/3)粘質シルト層。径１～２cm程度の礫を微量、径１cm以下のものを少量含む。粗～極細砂がやや多量に含まれる。極微量の炭化物が混じる。

第６層　にぶい黄褐色(10YR4/3)粘質シルト層。径約1cm以下の細礫を極微量、粗～細砂を多量、極細砂をやや多量に含む。第５層に比べて粘性が強い。極微量の炭化物が混じる。

第７層　灰色(5Y4/1)シルト質粘土層。径約5mm以下の細礫を微量、粗砂を微量、中粒砂～極細砂を多量に含む。上部は平均約４cmの厚さを測る暗灰黄色(2.5Y5/2)の酸化層が全体に広がる。炭化物はほとんど無い。

第８層　灰色(10Y4/1)シルト質粘土層。径約5mm以下の細礫を極微量、粗砂～中粒砂を微量、細～極細砂を多量に含む。炭化物はほとんど含まない。

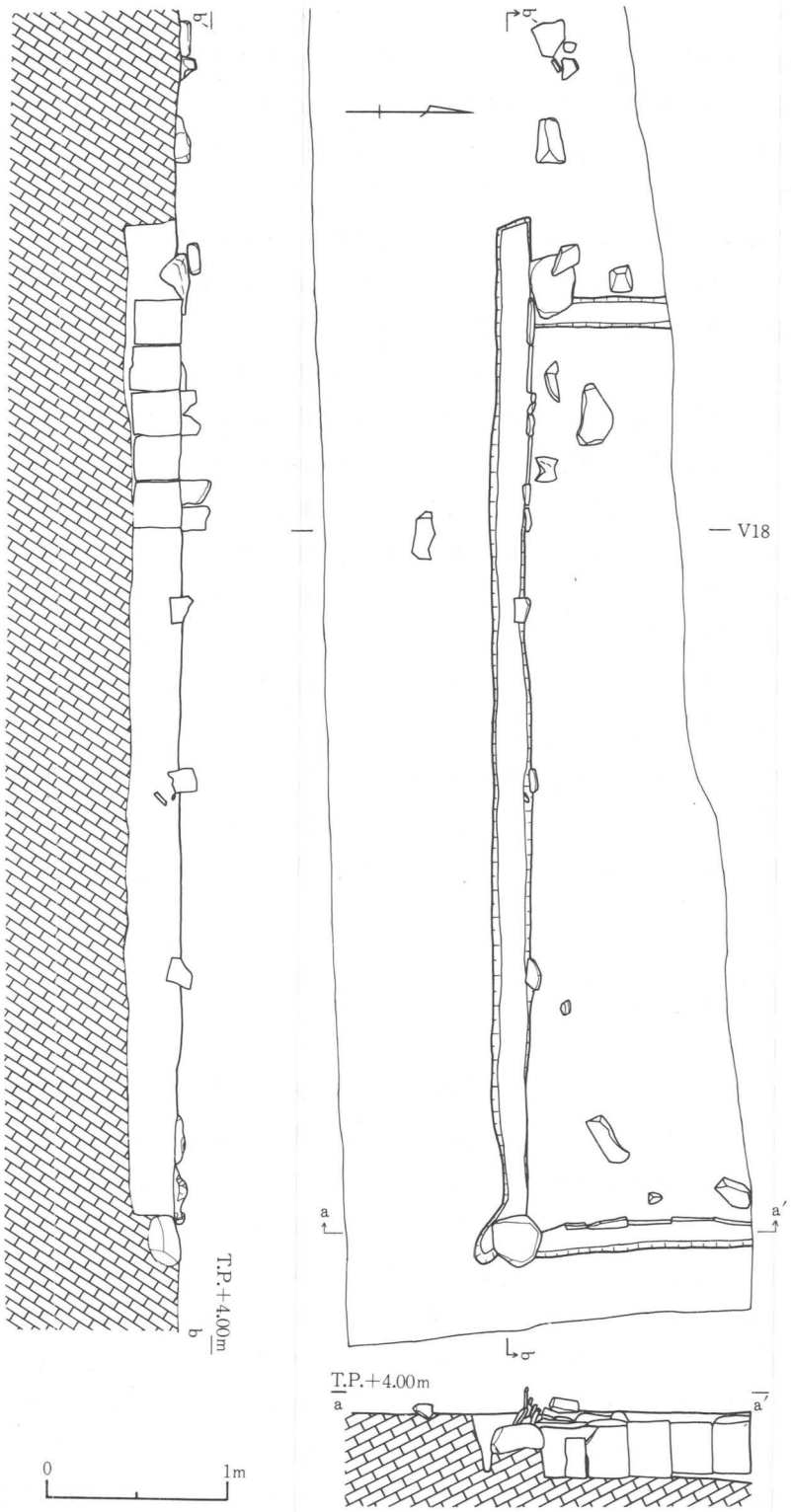
第１層～６層までは若江城関連の整地層である。以下、整地層２と記す。整地層２はＢ地区東で検出した堀１より東に伸びており、西では検出されていない。整地層の厚さは1ｍ前後である。上層は整地層面で攪乱を受けており、本来はさらに厚かったと考えられる。

2）遺構

Ａ地区では塼立建物１を検出した。

塼立建物（第５図）

塼立建物は調査地東側で検出した。整地層２より切り込む。南・東・西の３面を検出したが、大部分は北側の調査地外にある。今回、検出した遺構は建物の基壇と考えられる。塼立建物の構築は四方に幅20cmを測る溝を掘り、一段目の塼を立て並べた後、南東と南西隅に径30cm大の礎石と考えられる石を置く。また、建物内にあたる部分には10～20cm大の裏込め石を入れる。裏込め石は部分的に残っており、塼がよく残った所で認められる。１段目の塼を立てた後、建物内に埋土をする。その後、２段目の塼を積み上げて埋土をする。２段目の塼は削平を受けており保存状態が悪いが、主に下段の塼が原位置を保っている部分で検出した。完存するものはなく、すべて破片である。塼立と掘方内の埋土についての前後関係は明らかにできなかったが、掘方内に立て並べた塼の外側に厚さ約２cmの暗灰黄色粘土(2.5Y4/2)を全面に張りつけた後、砂で埋める。塼の内側では粘土の張りつけは認められなかった。塼立建物の規模は南側5.4m、東側1.5m、西側1.0mを測る。主軸の方向はほぼ南北である。塼は１段目で原位置を保って検出さ



第５図　塼立建物実測図

れたが、東側と南側でそれぞれ５枚が立った状態であった。他の部分は廃絶時に抜き取られたと考えられる。１枚の塼は幅23cmあり、これより全容を知り得る南側で使用された塼の枚数を復原すると23枚になる。塼立建物からは土師器皿(１～53)、瀬戸焼水滴(54)・合子(55)、染付(56)、瓦器摺鉢(57)・揑鉢(58)、備前焼摺鉢(59)、土師器羽釜(60)の土器や金属器などが出土した。土師器皿は完形品が帯状に掘方上面に広がって検出された。出土遺物より塼立建物の時期は16世紀後半と考えられる。

３．Ｂ地区の調査

1）層位（第６図）

Ｂ地区はＡ地区の西に位置する。調査範囲は幅1.5m×長さ 60ｍ である。断面実測は南壁でおこなった。以下、確認した土層を列挙した上で特徴を記す。

第１層　黒褐色(10YR3/2)粘質シルト層。極細～中粒砂を多量、粗粒～細礫を少量含む。微量の炭化物が混じる。

第２層　黒褐色(10YR3/1)粘質シルト層。細粒砂を多量、中粒砂を少量含む。径５mm程度の細礫をわずかに含む。炭化物は極めて少ない。

第３層　暗赤褐色(5YR3/2)シルト質粘土層。細～中粒砂を含む。多量の炭化物が混じる。

第４層　暗赤灰色(2.5YR3/1)シルト質粘土層。細～中粒砂を含む。微量の炭化物が混じる。

第５層　黒褐色(2.5Y3/1)シルト質粘土層。細～中粒砂、細～中礫を含む。

第６層　オリーブ黒色(5Y3/1)粘質シルト層。微量の炭化物が混じる。

第７層　黒色(10YR2/1)シルト質粘土層。細～中粒砂を多量、径5mm程度の細礫を極微量に含む。

第８層　灰色(7.5Y4/1)粘質シルト層。極細～細粒を多量、粗粒砂をやや多量、細礫を少量含む。

第９層　黄灰色(2.5Y4/1)シルト質粘土層。細～中粒砂を少量含む。

第10層　黒褐色(2.5Y3/2)粘質シルト層。細粒砂を多量、中～粗粒砂を少量含む。

第11層　黒褐色(2.5Y3/1)粘質シルト層。細粒砂を多量、径５mm程度の細礫を含む。

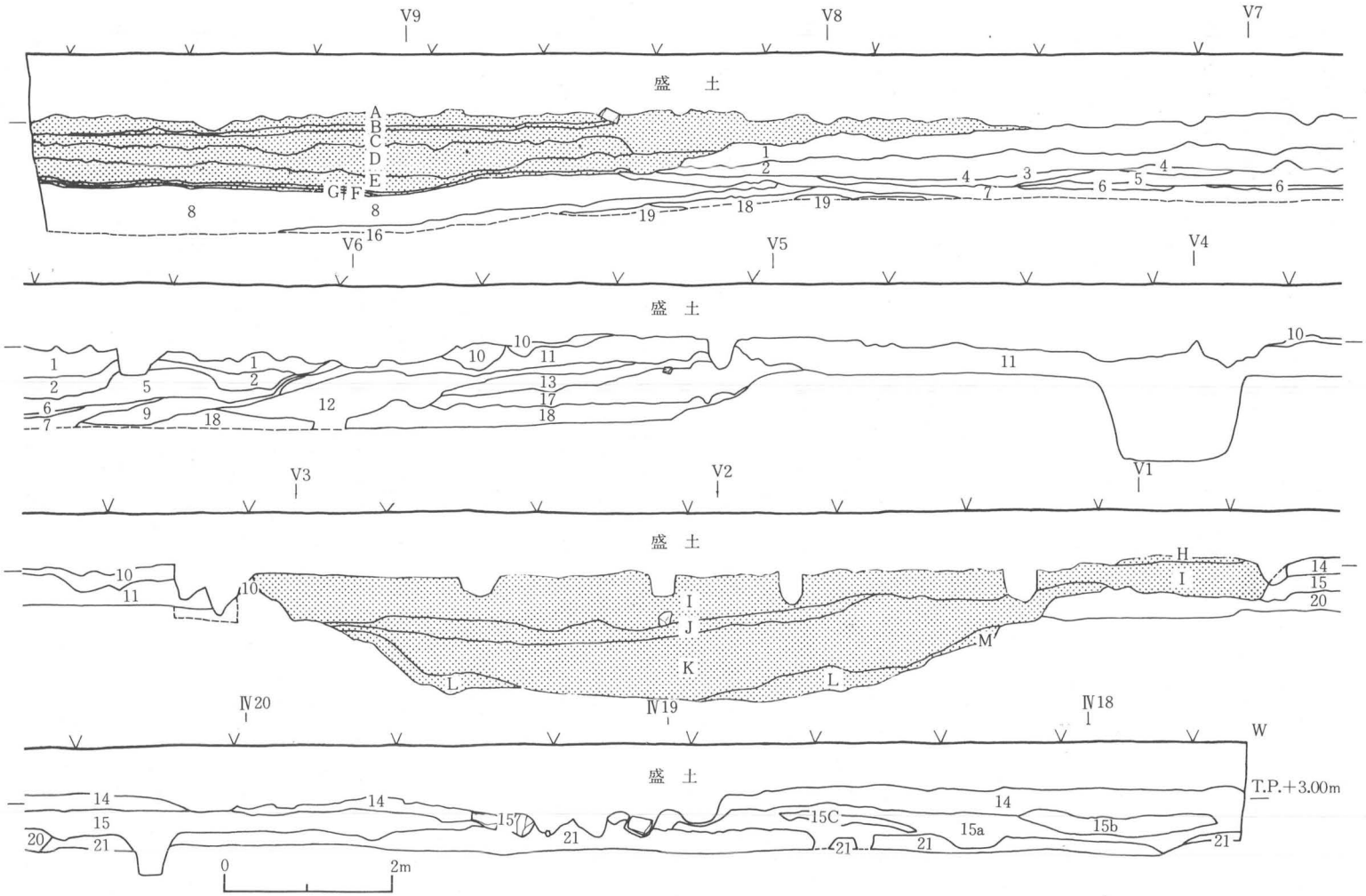
第12層　オリーブ黒色(5Y3/1)粘土層。細砂を微量含む。

第13層　黒褐色(2.5Y3/1)粘質シルト層。細粒砂を多量、径５mm程度の細礫を少量含む。

第14層　オリーブ黒色(5Y3/1)粘質シルト層。極細～細砂を極多量、粗粒砂～径５mm程度の細礫を多量に含む。径１～２cmの礫を少量含む。

第15層　灰オリーブ色(7.5Y4/2)シルト質粘土層。粗粒砂～径5mm程度の細礫を少量含む。極微量の炭化物が混じる。

第15a層　灰オリーブ色(7.5Y4/2)シルト質粘土層。細粒砂を多量、粗砂～径8mm程度の細礫を少量含む。



第６図　Ｂ地区断面実測図

第15b層　オリーブ黒色(5Y3/2)粘質シルト層。粗砂を多量、細礫～径20cm程度の礫を含む。瓦溜り層。

第15c層　黒色(2.5GY3/1)シルト層。細砂を極微量含む。

第16層　オリーブ黒色(7.5Y3/2)粘土と細～粗粒砂の互層。東から西へ行くにつれて砂が混じり、西で消滅する際には攪乱され、ほぼ均一に混じる。植物遺体が少量混じる。

第17層　黒色(2.5Y2/1)粘質シルト層。粗砂粒を少量、径5mm程度の細礫を極微量含む。植物遺体が少量混じる。

第18層　オリーブ黒色(7.5Y3/2)粘土層。植物遺体が混じる。

第19層　細～中粒砂層。

第20層　黒色(7.5Y2/1)シルト質粘土層。粗砂～径5mm程度の細礫を極少量含む。

第21層　暗緑灰色(7.5GY4/1)シルト層。細砂を極微量含む。

堀1内層位

A層　黒褐色(10YR3/1)粘質シルト層。粘質シルトはブロック状に含む。細～粗粒砂、細礫を少量含む。

B層　オリーブ黒色(2.5Y4/3)粘質シルトと極細砂がほぼ1：1で混じる層。細～粗粒砂を少量、細礫を極微量含む。

C層　黒褐色(2.5Y3/2)粘質シルト層。細～中粒砂を多量、細礫を微量、赤い砂を極微量含む。

D層　黒褐色(2.5Y3/2)粘質シルト層。細～粗砂粒を多量、径1cm程度の礫を少量、径2～3cmの礫を微量含む。C層に比べて粘性が強い。赤い砂もやや多く含む。

E層　黒褐色(10YR3/2)粘質シルト層。細～粗砂粒を極多量、径0.5～1cmの礫を少量含む。C層、D層、E層の赤い砂の含有量がD層＞C層＞E層、粘性もD層＞C層＞E層となる。C～D層とも極微量の炭化物が混じる。

F層　暗灰黄色(2.5Y4/2)粘質シルト層。細～中粒砂が薄くあり、硬い。

G層　灰色(5Y4/1)シルト質粘土層。細～中粒砂を多量、径5mm程度の細礫を少量含む。

堀2内層位

H層　暗オリーブ灰色(5GY3/1)粘土層。極細砂を多量に含む。

I層　オリーブ黒色(7.5Y3/1)粘質シルトに暗オリーブ灰色(5GY3/1)粘質シルトが10～40%の割合で混じる層。細～中粒砂を多量、径5mm程度の細礫を少量含む。層の中央部では径10～20cmの石が十数個入る。炭化物と青い物質を微量含む。

J層　オリーブ黒色(5Y3/2)シルト質粘土層。中～粗粒砂を少量含む。東半分では炭化物、1～2cmの焼土塊を多量に含むが、中央付近から激減し、わずかに混じるのみとなる。西へ行くにつれて中～粗粒砂の量が増す。青い物質を極微量含む。

K層　中～粗粒砂に1～2cm程度の細礫が少量混じった層。黒色(7.5Y2/1)シルト質粘土、細～中粒砂、同シルト質粘土、粗砂の順で重なる互層。東部では攪乱されているが、西の方へ行くと安定している。植物遺体と炭化物がやや多く混じる。青い物質を極微量含む。

L層　黒色(7.5Y$^{2}/_{1}$)シルト質粘土層。中～粗粒砂がブロック状または均一に10～50%の量で混じる。全体的に植物遺体を少量含んでおり、シルト質粘土の部分では２～５mmのレンズ状、ラミナ状に植物遺体が堆積するところもある。

M層　暗緑灰色(7.5GY$^{4}/_{1}$)シルト質粘土層。極細～シルト質砂を多量に含む。極微量の炭化物が混じる。

B地区の基本層位は第１層～21層までである。A層～G層は堀１内層位、H層～L層は堀２内層位である。基本層位の第１層～15ｃ層は整地層である。以下、整地層１と記す。整地層１は落ち込み１があった時期に整地されており、東で約1ｍ、西で0.5mを測る。整地層１は堀１の東では認められず、西側へ広がっており、C地区にまで至る。整地層１内には古墳～奈良時代の遺物を多量に含んでいる。遺物は磨滅も少なく、大きな破片や完形になるものが多く、同時期の遺物包含層や遺構を破壊した土で整地した可能性が高い。第16層～21層は自然堆積による層である。堀１内のA層～G層は人為的な埋土である。堀２内のH層～J層は人為的な埋土であり、K層～M層は自然堆積によるものである。上層は攪乱が著しい。

2) 遺構

B地区では堀２、井戸２、土坑４、溝４、落ち込み１、柱穴と考えられるピット32(ピット5・15は欠番)、掘立柱建物１を検出した。

堀１（第７図）

堀１は調査地東側で検出した。整地層１より切り込んでおり、北肩のみを検出した。北肩は２段で落ちており、深さ0.5mを測る。現在までの調査で確認されている堀１にあたるが、堀がほぼ東西方向に伸びていたのに対し、今回の調査地点では、やや北東方向に向きを変えていることが明らかになった。また、今までの調査では堀１の南肩と堀底を確認していたが、今回の調査であらたに北肩を検出した。堀内はA～G層に分層され、A～E層が埋土、F・G層が堆積層である。堀内からは出土遺物がほとんどないが、今日までの調査成果から遺構の時期は16世紀中葉～後半と考えられる。

堀２（第８図）

堀２は調査地中央で検出した。整地層１より切り込んでおり、東が第10層、西が第14層上面である。また、西側では土坑４、ピット２～４・32の上面を削っている。堀２は南北方向に伸びており、幅12m、深さ1.6mを測る。東西の肩は共に３段で落ちており、東肩は急傾斜である。西肩の１段目は遺構精査時に検出することができず、断面観察の結果より判明した。堀内の西側部分で逆茂木と考えられる径10～15cmを測る杭３本を検出した。杭の根元周囲はピット状に砂が堆積しており(図版７-２)、下部に掘り進むにつれて径が小さくなる。杭はK層の時期に打たれ、そのためK層の砂を巻き込んでいったと考えられる。堀内は大きく６層に分層され、H～J層が埋土、K・M層が堆積層である。堀内からは土師器皿(61～105)、備前焼摺鉢(106・107)・壺(112)、須恵器揑鉢(108)、瓦器揑鉢(109)、摺鉢(110・111)・香炉(113～116)・盤(118)・火

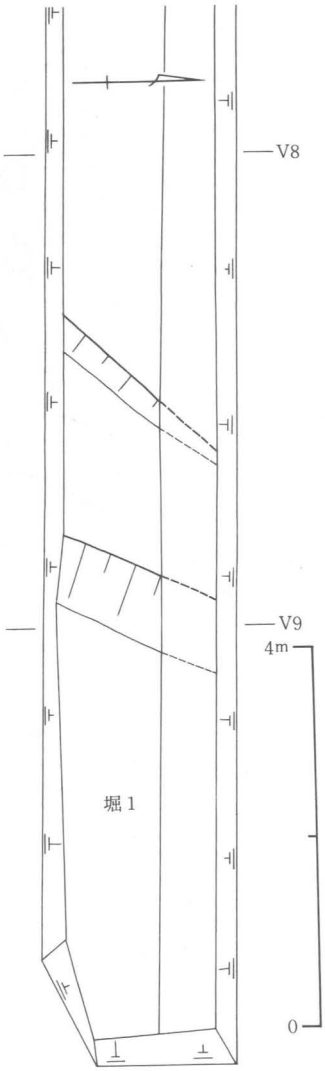
舎(117・119)・羽釜(120～123)、青磁椀(124)などの土器が出土した。他に瓦、石製品、金属製品などがあるが、特に金属製品の出土量が多く、鎌、鏃、刀子、鯉口、皿、銭貨、飾り金具、飾り釘、釘などがある。釘は80本ほど出土している。金属製品はJ層の2～3cmの粘土塊を含む炭層より検出しており、いずれも二次焼成を受けて黒色に変化している。このことから若江城関連の建物が焼けた際に堀内に焼け残ったものを廃棄したと考えられる。堀の時期は出土した遺物から16世紀後半に埋ったと考えられる。

井戸1（第9図）

井戸1は調査地中央北で検出した。第21層より掘り込む。径0.65m、深さ1.25mを測る素掘りの井戸であり、ほぼ垂直に底まで掘削する。掘方上面から約20cmの位置で、径2～3cmを測る竹を斜めに突き刺しているのを確認した。竹は長さ40～50cmが残る。井戸内からは瓦器椀(142～151)・鉢(152)、土師器皿(153～158)などの土器が出土した。瓦器椀や土師器皿が完形品で竹の下部周辺に埋められており、井戸廃絶時に供献されたと考えられる。井戸の廃絶時期は瓦器椀より14世紀前半と考えられる。

井戸2（第9図）

井戸2は調査地中央北で検出した。第21層より切り込む。井戸の約⅔は調査地外にある。径1.0m以上、深さ1.0mを測る素掘りの井戸であり、ほぼ垂直に底まで掘削する。井戸の底には瓦器椀や土師器皿などの完形品が集中して埋められており、掘削時に供献された土器と考えられる。井戸内よりは瓦器椀(136～139)、土師器皿(125～135)・羽釜(140・141)が出土した。出土した瓦器椀より井戸の時期は12世紀中と考えられる。



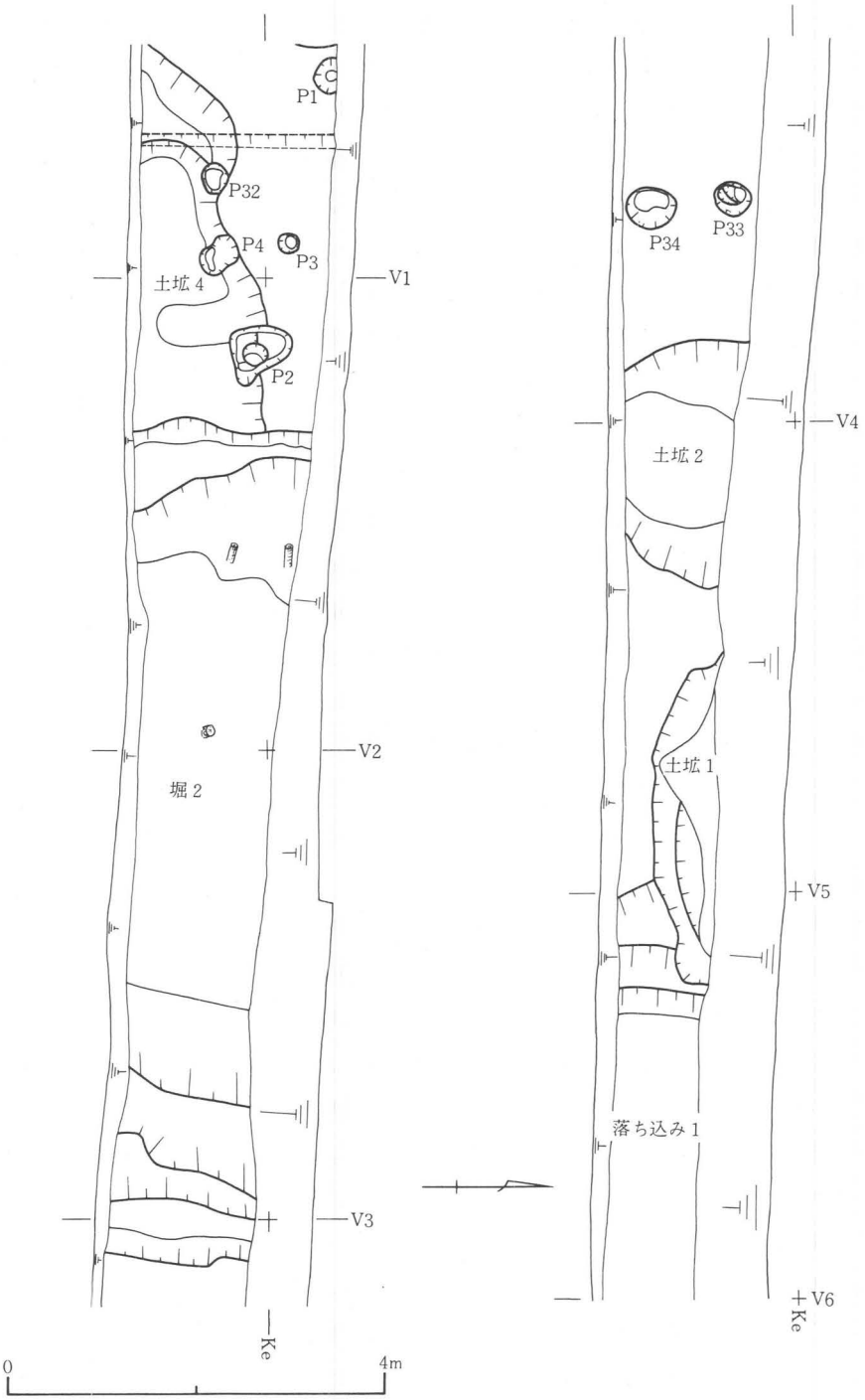
第7図　堀1実測図

土坑1（第8図）

土坑1は調査地東北で検出した。第22層より切り込む。土坑の大部分は調査地外にある。土坑1によって落ち込み1の一部が切られる。細長い楕円形を呈し、東西3.5m、南北0.7m以上、深さ0.45mを測る。東側の一部で2段に落ちる。土坑内より土師器皿(175)が出土した。遺構内は整地層1によって埋められていることから、16世紀中葉以前の時期と考えられる。

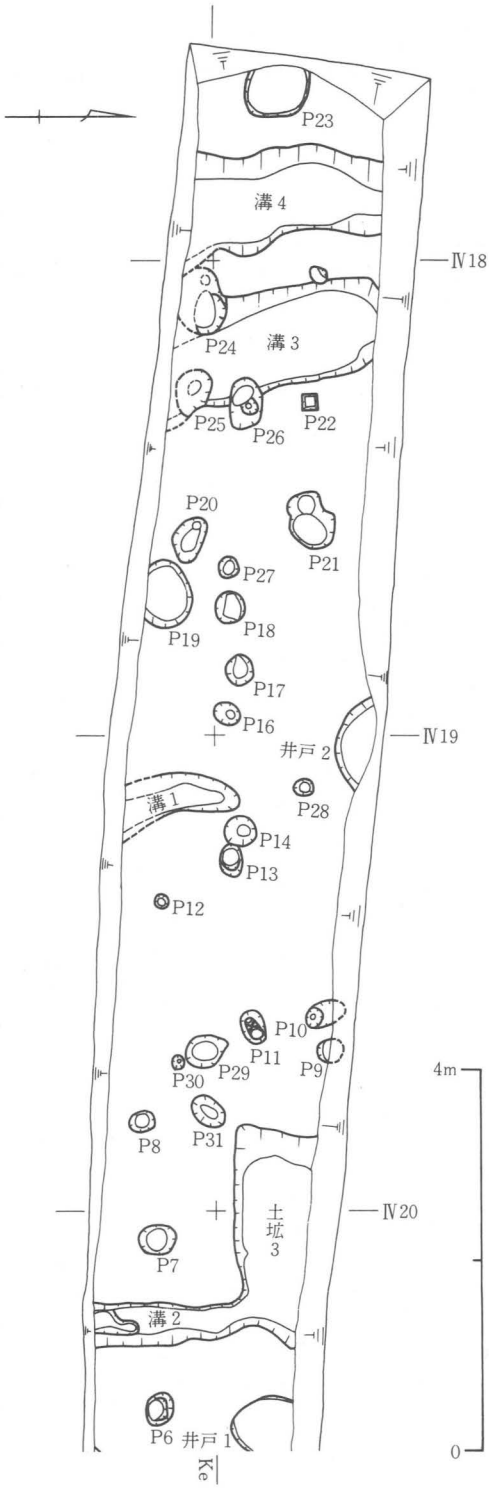
土坑2（第8図）

土坑2は土坑1の西で検出した。土坑の北と南は調査地外にある。楕円形を呈すると考えられる土坑であり、底に向かってやや径が小さくなる。東西2.5m、南北1.2m以上、深さ1.0mを測



第8図　B地区遺構実測図

る。土坑内からは古墳時代～中世に至る土器が出土しており、須恵器(159～164)、土師器(165～167)、瓦器椀などがある。土坑2は整地層1によって埋められていることから、土坑1と同一の時期と考えられる。



第９図　Ｂ地区遺構実測図

土坑３（第９図）

土坑３は調査地中央北で検出した。第21層より切り込む。土坑の北は調査地外にある。方形を呈すると考えられる土坑であり、浅い皿状に落ち込む。東西2.2m、南北0.8m、深さ0.2mを測る。南東角から溝２が南へ伸びる。土坑内からは古墳時代～中世に至る土器が出土しており、須恵器(168)、土師器小皿(169)、青磁椀(170)などがある。遺構の時期は土器から13～14世紀と考えられる。

土坑４（第８図）

土坑４は調査地中央で検出した。第21層より切り込む。土坑の南は調査地外にあり、堀２によって上面の大部分を削られている。細長い楕円形を呈すると考えられる。西側では２段で落ちる。東西4.0m以上、南北1.3m以上、深さ0.4mを測る。土坑内からは古墳時代～中世に至る土器が出土しており、須恵器杯(171)、土師器皿(172～174)、瓦器椀などがある。遺構の時期は土器から12～13世紀と考えられる。

溝１（第９図）

溝１は調査地中央で検出した。第21層より切り込む。溝は調査地内から始まっており、南東方向に伸びる。幅0.4m、深さ0.1mを測る浅い溝である。溝内から遺物は出土していないが、第21層より切り込んでいることから溝の時期は11～14世紀と考えられる。

溝２（第９図）

溝２は溝１の東で検出した。第21層より切り込む。南北方向に伸びる溝で、北側で土坑３の南東角に接続する。幅0.5m、深さ0.3～0.4mを測り、南へ向かって深くなる。溝内からの出土遺物はないが土坑３と同一時期と考えられる。

溝３（第９図）

溝３は調査地西側で検出した。第21層より切

り込む。南東から北西方向に伸びる溝であり、幅1.0m、深さ0.1mを測る。ピット24～26に切られる。溝内から須恵器、土師器、瓦器の細片が出土した。遺構の時期は溝1と同一時期と考えられる。

溝4（第9図）

溝4は溝3の西で検出した。第21層より切り込む。溝3と同じ方向へ伸びる溝であり、幅1.0m、深さ0.1mを測る。溝内からは出土遺物はないが、遺構の時期は溝1と同一時期と考えられる。

落ち込み1（第8図）

落ち込み1は調査地西側で検出した。第22層より切り込む。西肩のみを検出した。落ち込みは南北方向に伸びており、東に向かって3段で落ちる。深さ0.7mを測る。落ち込みの北で土坑1によって切られる。落ち込み内は整地層1によって埋められている。落ち込み内からは古墳時代から中世に至る土器が出土した。整地層1によって埋められていることから、落ち込みの時期は16世紀中葉以前と考えられる。

ピット1～34（第8・9図）

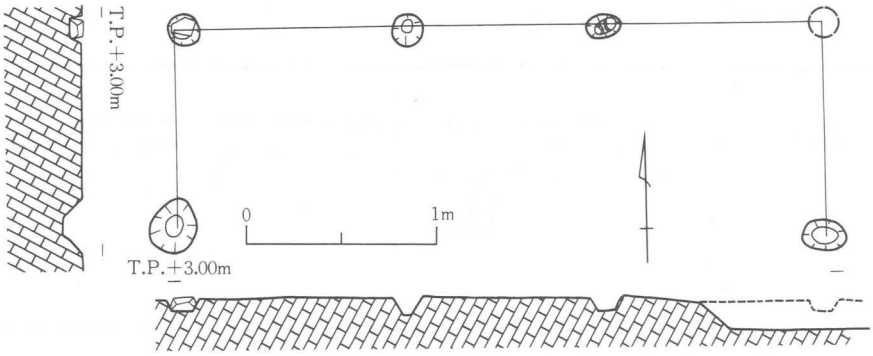
B地区では32の柱穴と考えられるピットを検出した。ピットは調査地西側に集中する。大部分は第21層より切り込む。平面形が円形、楕円形、方形を呈するものがある。根石をもつピット18もある。ピット内からは須恵器、土師器、瓦器などが出土したが、ほとんど細片である。詳細な遺構の時期は不明であるが、11～14世紀の時期が妥当と考えられる。ピットの径や深さなどは第1表にまとめて記した。

掘立柱建物1（第10図）

昭和59年、若江遺跡第30次調査が実施された。第30次調査地は今回の調査地の南側に接した東西方向の区域であった。今回の調査地と平面実測図を継ぎ合わせた結果、掘立柱建物を検出した。掘立柱建物は調査地西で検出した。第21層

第1表　ピット計測値

番　号	形　　態	深さ(cm)	径・幅(cm)
1	楕円形	9	40
2	〃	20	60
3	円　形	16	20
4	楕円形	17	40
5	—	—	—
6	楕円形	27	40
7	円　形	22	40
8	〃	19	25
9	〃	5	25
10	楕円形	12	30
11	〃	15	40
12	円　形	6	17
13	楕円形	14	30
14	円　形	20	32
15	—	—	—
16	円　形	13	25
17	〃	10	35
18	〃	6	30
19	〃	13	70
20	楕円形	19	50
21	〃	21	60
22	方　形	6	15
23	円　形	10	65
24	楕円形	10	70
25	〃	10	30
26	〃	15	55
27	円　形	5	20
28	〃	12	20
29	楕円形	10	40
30	円　形	3	15
31	楕円形	10	40
32	円　形	7	30
33	〃	43	35
34	〃	33	45



第10図　掘立柱建物１実測図

より切り込む。規模は東西3間(6.8m)、南北1間(2.2m)以上で主軸の方向はほぼ南北である。掘立柱建物はピット11・14・18と第30次調査地のピット２ケ所よりなる。柱穴は円形ないしは楕円形を呈し、ピット18は根石をもつ。柱穴から詳細な時期を決定する土器は出土していないが、第21層より切り込んでいることから11～14世紀と考えられる。

４．Ｃ地区の調査

1）層位（第11図）

Ｃ地区はＢ地区の西に位置する。調査範囲は幅1.5m×長さ24mである。断面実測は南壁と西壁でおこなった。以下、確認した土層を列挙した上で特徴を記す。

第１層　黒褐色(2.5Y3/2)粘質シルト層。細粒砂を多量、中～粗粒砂を少量含む。径２～３mm程度の細礫を微量、径１cm程度の小礫を極微量含む。少量の炭化物が混じる。

第２層　オリーブ黒色(5Y3/2)シルト質粘土層。極細～細粒砂を多量、粗砂粒～径２～３mm程度の細礫を少量含む。

第３層　黒褐色(2.5Y3/2)粘質シルト層。暗オリーブ色(5Y4/3)を径1～4cm程度のブロック状に約40%含む。粗砂粒～径２～３mm程度の細礫を少量含む。多量の炭化物が混じる。

第４層　オリーブ褐色(2.5Y4/3)粘質シルト層。微量の炭化物が混じる。

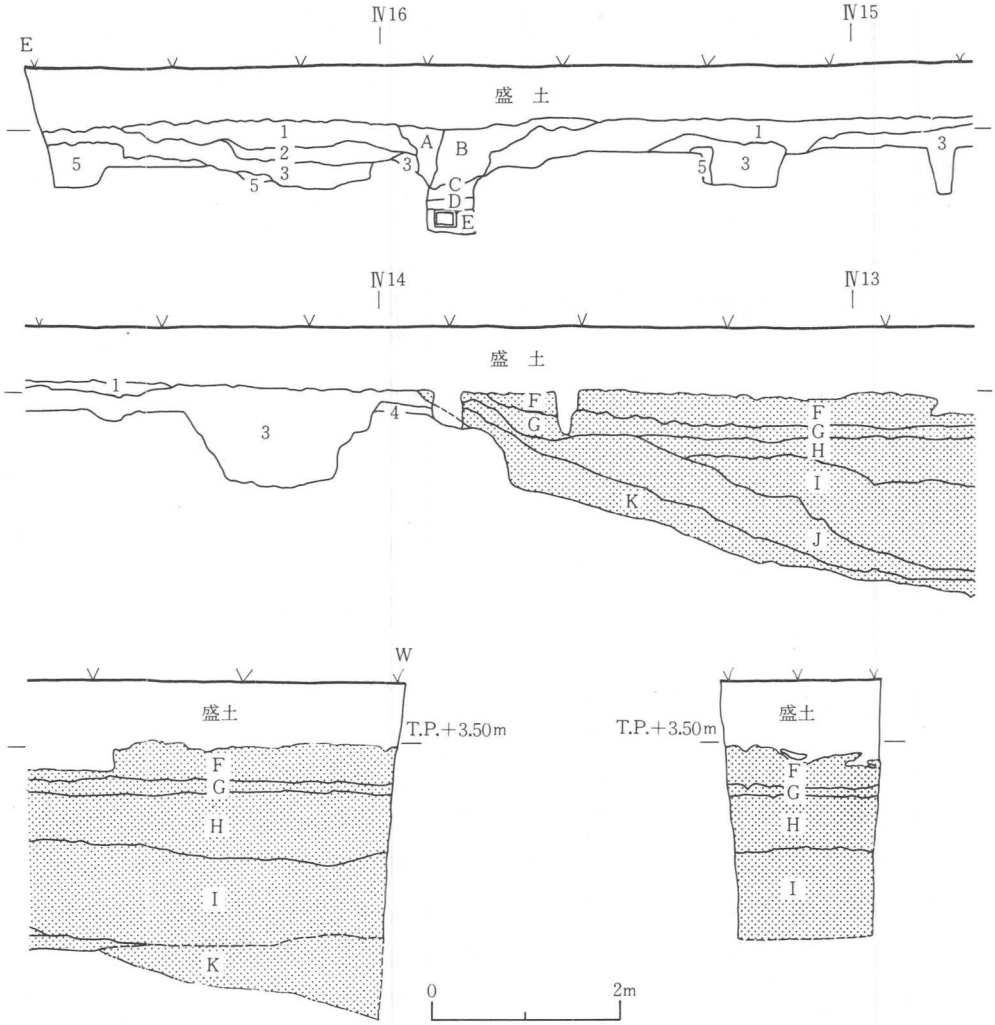
第５層　オリーブ黒色(5Y3/1)粘質シルト層。細粒砂を多量、中粒砂を少量含む。炭化物が少量、植物遺体が極微量混じる。

溝５内層位

Ａ層　オリーブ黒色(5Y3/2)シルト質粘土、砂、シルト質粘土に炭化物が多量に混じった層。全体的に炭化物と植物遺体が少量混じる。

Ｂ層　黒褐色(10YR3/2)粘質シルト層。細～中粒砂を多量、粗粒砂～径２～３mm程度の細礫を微量含む。少量の炭化物が混じる。

Ｃ層　灰色(10Y4/1)粘質シルトとシルトが３：７の割合で混じる層。粗粒砂を微量含む。植物



第11図　C地区断面実測図

遺体が微量混じる。

D層　灰色(10Y5/1)シルト質粘土層。極細砂を多量、中～粗粒砂を少量含む。層中に混じる植物遺体は極微量であるが、暗渠直上には2～3cmの厚さで植物遺体を敷いている。

E層　灰色(10Y4/1)粘質シルト層。細粒砂を微量、粗粒砂を極微量含む。炭化物、植物遺体が極微量混じる。

堀3内層位

F層　暗オリーブ灰色(5GY4/1)粘質シルト層。極細～細粒砂を極多量、粗粒砂～径2～3mm程度の細礫を多量、0.5～1cm程度の小礫を少量含む。植物遺体が少量、炭化物、青い物質が微量混じる。

G層　暗オリーブ灰色(2.5GY4/1)粘質シルト層。極細～細粒砂を極多量に含む。植物遺体、

炭化物、青い物質が微量混じる。南側断面では堀３の肩にむかうにつれ、中～粗粒砂の含まれる量が増える。

Ｈ層　灰オリーブ色(7.5Y4/2)粘質シルト、暗オリーブ灰色(5GY4/1)シルト質粘土、及びシルト質砂がほぼ４：４：２の割合でブロック状に混じる層。極細砂を多量、中～粗粒砂を少量、２～５mm程度の細礫を少量含む。植物遺体、炭化物が極微量混じる。

Ｉ層　暗オリーブ灰色(2.5GY4/1)粘土と極細～中粒砂に粗粒砂が少量、径0.5～1cm程度の細礫を微量含む層。ほぼ１：１で混じる。全体的に植物遺体、炭化物を少量、青い物質が微量混じる。

Ｊ層　暗オリーブ灰色(2.5GY4/1)シルト質粘土、オリーブ黒色(7.5Y3/2)粘質シルト、及び極細～中粒砂がほぼ同じ割合で混じる層。全体的にみて上層から17～24cmの厚さで粘質シルトが多く混じり、東西方向の中央部で厚さ１～３cm、長さ１ｍにわたる植物遺体が入る。その下は20～23cmの厚さでシルト質粘土が多くなる。径２～５mm程度の細礫を少量、径0.5～1cm程度の小礫を極微量含む。全体的に植物遺体、炭化物、青い物質が少量混じる。

Ｋ層　暗オリーブ灰色(2.5GY4/1)シルト質粘土とシルト～細粒砂(中～粗粒砂を少量含む。)がほぼ６：４で混じる層。シルト質粘土には植物遺体、炭化物が多量、青い物質が微量混じるが、砂の部分ではほとんど混じらない。

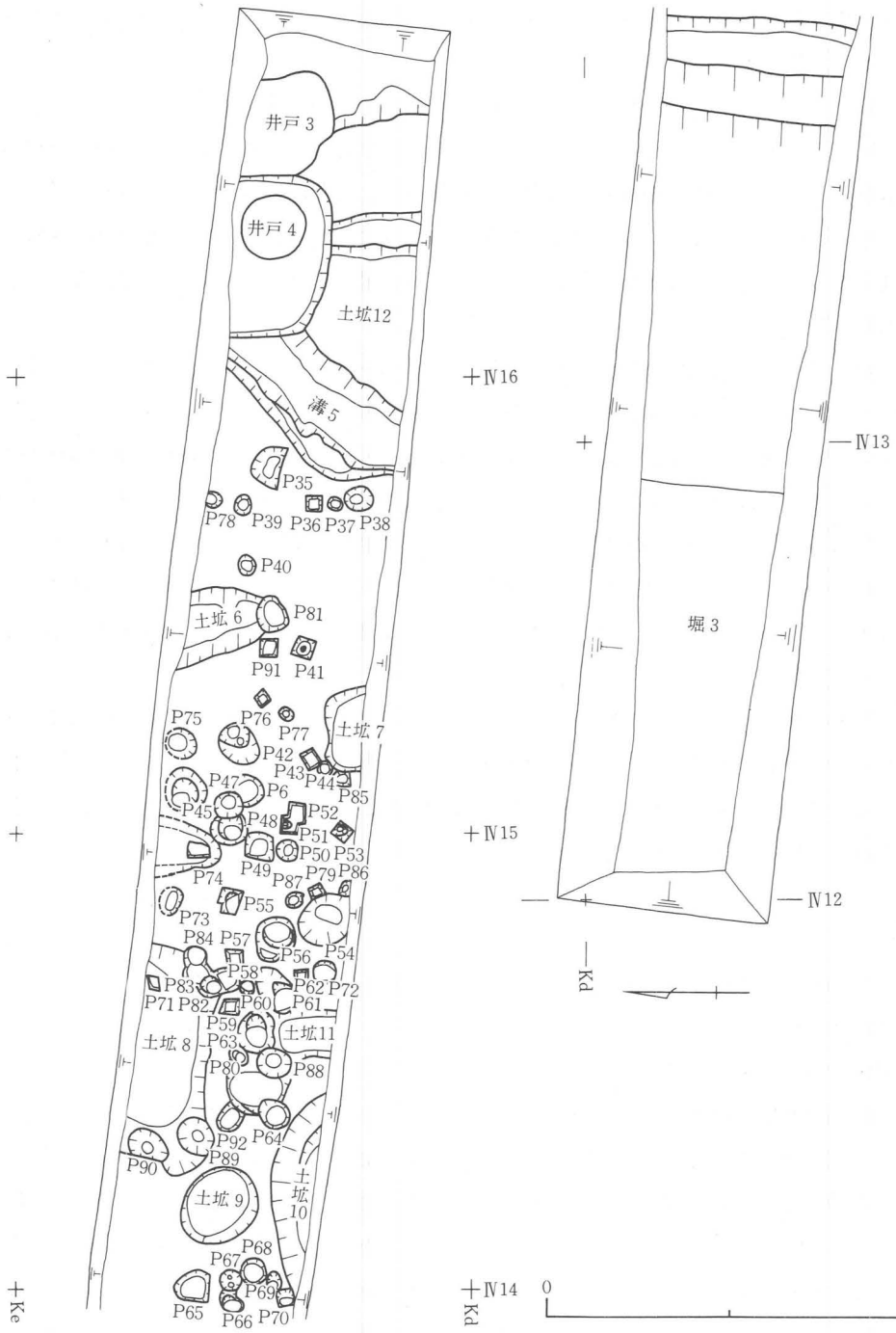
Ｃ地区の基本層位は第１層～５層までである。Ａ層～Ｅ層は溝５内層位、Ｆ層～Ｋ層は堀３内層位である。基本層位の第１層～３層はＢ地区より続く整地層１である。第４層、５層は自然堆積による層である。溝５内のＡ層～Ｅ層は人為的な埋土である。堀３内のＦ層～Ｊ層は人為的な埋土であり、Ｋ層は自然堆積によるものである。

2) 遺構

Ｃ地区では堀１、井戸２、土坑11(土坑５・13は欠番)、溝１、柱穴と考えられるピット58、掘立柱建物３を検出した。

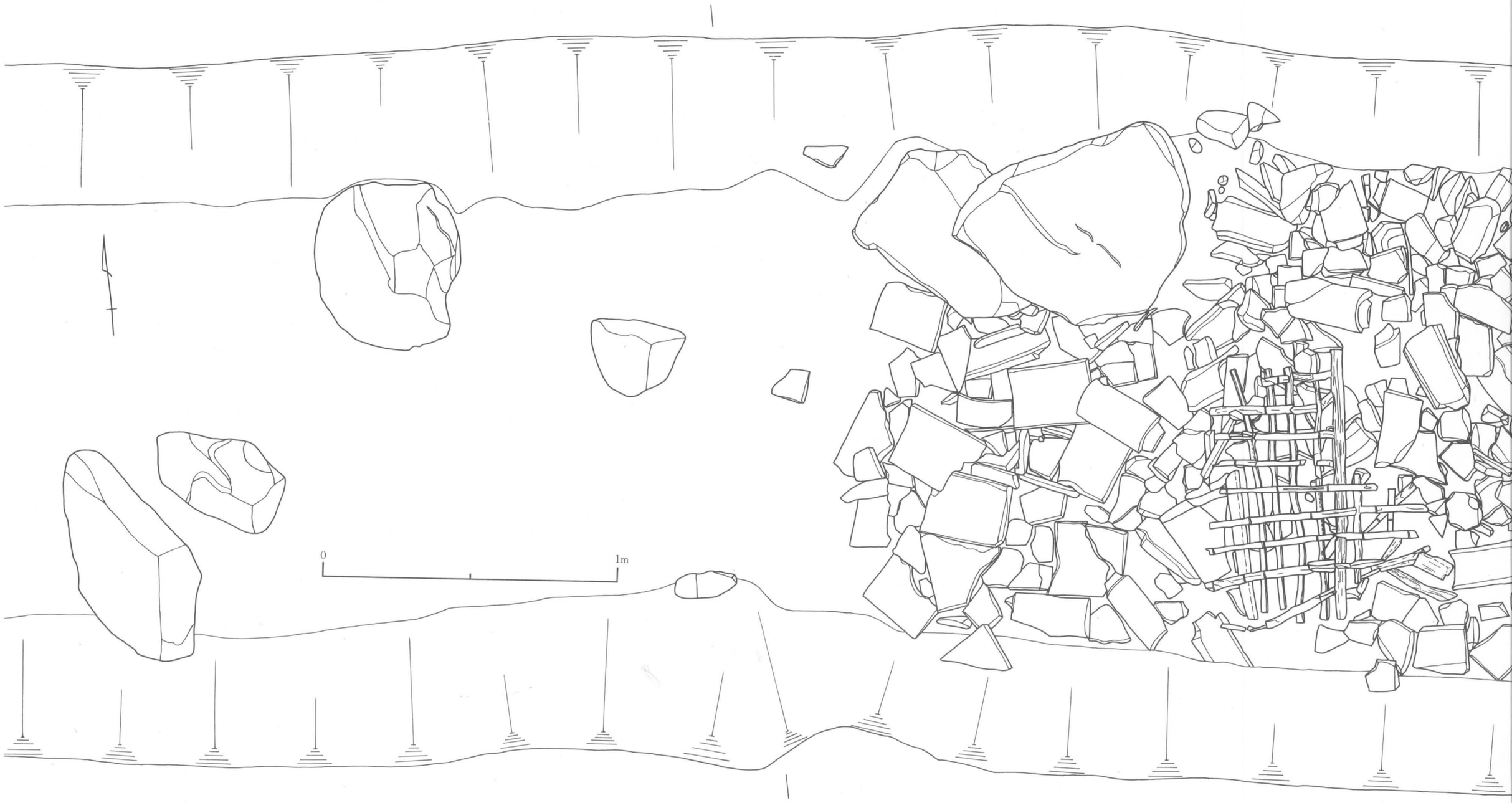
堀３（第12・13・15図）

堀３は調査地西側で検出した。整地層１より切り込む。堀は南北方向に伸びており、東肩を検出した。西肩は調査地外にある。東肩は３段で落ちており、急傾斜を呈する。堀内の調査は深さ2.1mまで実施したが、湧水と壁面崩壊の危険が生じたので中止した。堀底の確認は調査地西でボーリング棒によって土質サンプルを採取しておこなった。その結果、0.8mの深さで層が変化することが確認でき、堀底と考えられた。堀は幅10m以上、深さ2.9mを測る。堀内はＦ～Ｋ層に分層できＦ～Ｊ層は人為的な埋土であり、Ｋ層は自然堆積である。堀の東肩より約７ｍの範囲で多量の瓦と壁下地、礎石が検出された。瓦は肩近くでは破片が多く、底にいくにしたがい完形品が増える。軒平瓦、軒丸瓦、鳥衾、棟端瓦、平瓦、丸瓦が出土したが、圧倒的に平瓦、丸瓦が多い。瓦はＪ層より出土した。土器は土師器皿（227～237)、羽釜（239)・白磁椀(238)、瓦器羽釜(240)・甕(241・242)・火舎(243)、備前焼摺鉢(244)などが出土した。木槌・箸・桶な

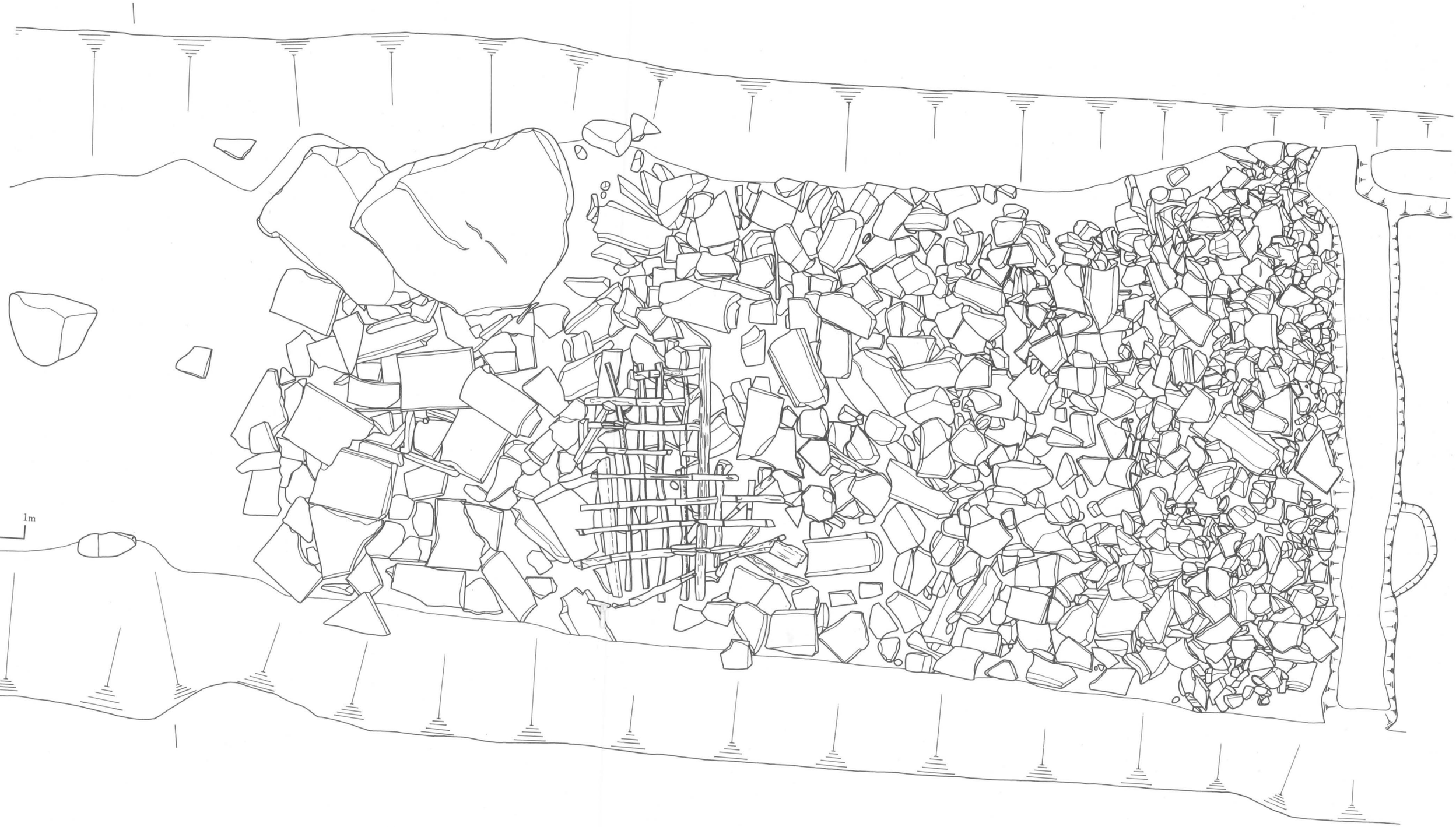


第12図　C地区遺構実測図

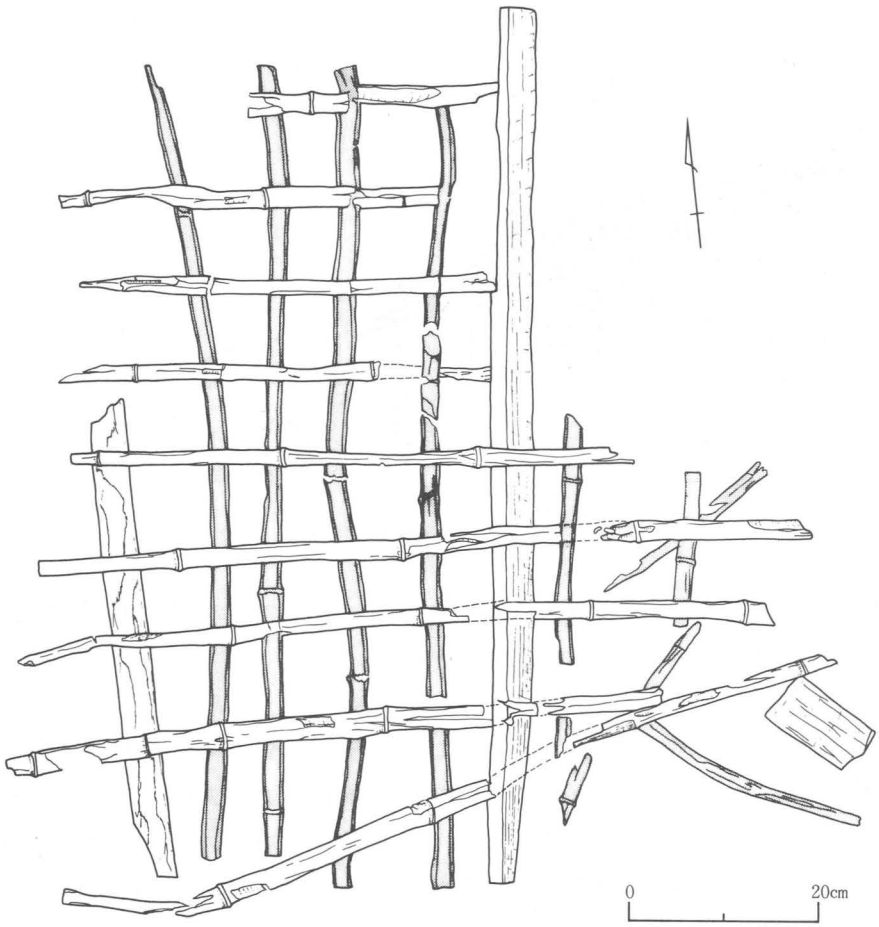
どの木製品も多く出土した。堀は瓦、壁下地、礎石の堆積状況からみて、若江城関連の建物を上屋から順次取り壊して廃棄し、F～J層の人為的な埋土によって埋めたと考えられる。出土遺物からみて堀は16世紀中葉～後半の時期に埋められたと考えられる。



第13図　堀 3 実測図



第13図　堀３実測図



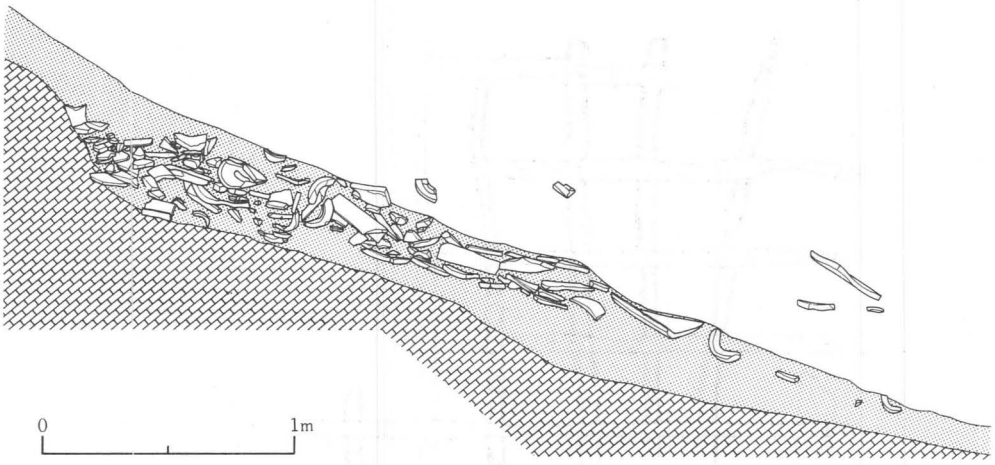
第14図　壁下地実測図

壁下地（第14図）

壁下地は堀３内で検出した。壁下地の骨組みは角材、板材、竹を使用する。検出状況では壁の天地は確認できなかった。約50cmの間に角材と板材を配し、碁盤の目状に竹を組む。竹は９本×６本がほぼ原位置を保っていた。竹は半截したものを使用しており、割り面が交差するように組む。竹組みの中には壁の粘土と考えられる物質が部分的に残っていたが、漆喰はなかったことが化学分析の結果で得られている[18]。残存長94cm、残存幅90cmを測り、竹の組み合せによる一区画は８～10cmである。

井戸３（第15図）

井戸３は調査地東側で検出した。第６層より切り込む。全形の約⅔を検出した。残り⅓が北側の調査地外にある。西肩は井戸４によって切られている。井戸は東西1.1ｍ以上、南北1ｍ以上、深さ1.5ｍを測る。井戸の底で曲物を井筒として3段積んでいるのが確認された。曲物の径は上段が45cm、中段が40cm、下段が35cmを測り、全長が63cmある。曲物の上部には多量の瓦が詰まった状態で出土した。本来は上部が瓦積みであったのを井戸廃絶時に取り壊して埋めた可



第15図　堀３断面実測図

能性が考えられる。井戸内より黒色土器(206)、瓦器椀(207～210)の土器と軒平瓦などが出土した。出土した瓦器椀より井戸の時期は12世紀と考えられる。

井戸４（第15・16図）

井戸４は調査地東側で検出した。整地層１より切り込む。全形の約⅔を検出した。残り⅓が北側の調査地外にある。西側で井戸３、南側で土坑12を切る。井戸は東西1.8ｍ、南北1.1ｍ以上、深さ1.9ｍを測る。井筒は径0.6～0.7ｍを測る桶が使用されていたらしく、竹のたがが６ケ所残っていた。桶は井戸の廃絶時に抜き取られたと考えられる。また、掘方の上面より1.5m下の位置で井戸より北西方向に伸びる土管を検出した。土管は井戸に対して直角に配置されており、２枚の板によって支えられていたと考えられる。板は逆Ｊ字形の切り込みが土管と接する部分に施されているが２枚の内１枚が桶同様に抜き取られている。土管は溝５に接続しており、井戸より溝5に水を流していた上水道のような施設と考えられる。井戸内より時期を決定できるような遺物が出土しておらず、溝の時期から近世の遺構と考えられる。

土坑６（第12図）

土坑６は調査地中央で検出した。切り込み面は不明。北側部分は調査地外にある。南側をピット84に切られる。東西0.8ｍ、南北1.0m以上、深さ0.3mを測る。土坑より須恵器、土師器、瓦器などの細片が出土した。土坑の時期は11～14世紀と考えられる。

土坑７（第12図）

土坑７は調査地中央で検出した。第５層より切り込む。南側部分は調査地外にある。やや不整形な円形を呈し、東西0.9m、南北0.4m以上、深さ0.4mを測る。土坑より瓦器椀(177)、土師器皿(178～180)が出土した。土坑の時期は瓦器椀より13世紀初めと考えられる。

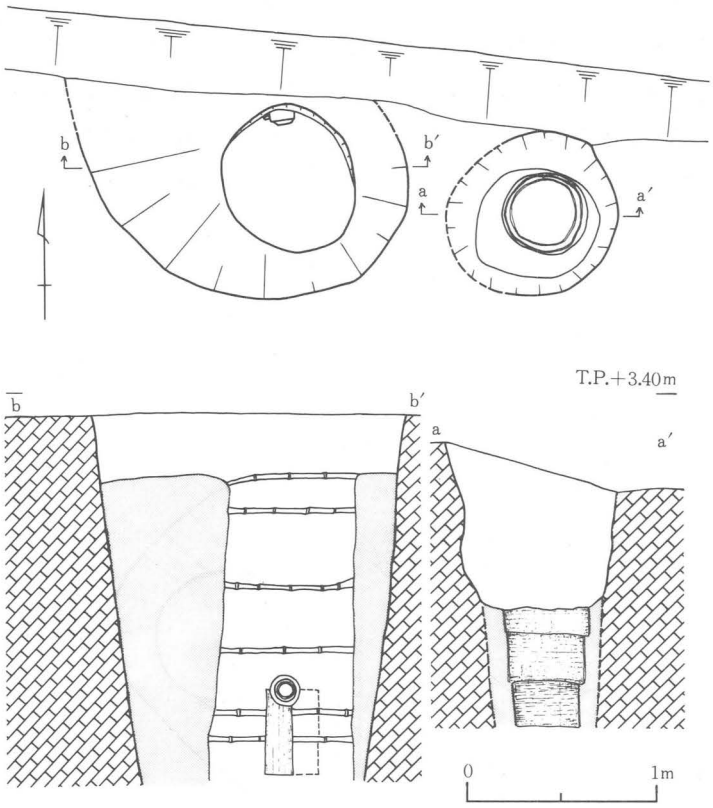
土坑８（第12図）

土坑８は調査地中央で検出した。切り込み面は不明。北側部分は調査地外にある。隅丸方形

を呈する土坑であり、東西2.5m、南北0.8m以上、深さ0.2mを測る。土坑より瓦器椀(187)、白磁椀(188・189)、土師器皿(190～193)が出土した。土坑の時期は出土遺物より、13世紀初めと考えられる。

土坑9（第12図）

土坑9は調査地中央で検出した。第6層より切り込む。ほぼ円形を呈する土坑であり、径0.8m、深さ0.2mを測る。土坑より須恵器、土師器、瓦器などの細片が出土した。土坑の時期は11～14世紀と考えられる。



第16図　井戸3・4実測図

土坑10（第12図）

土坑10は調査地中央で検出した。第4層より切り込む。円形を呈すると考えられる土坑である。東側は2段で落ちる。東西2.2m以上、南北0.5m以上、深さ0.8mを測る。土坑より須恵器、土師器、瓦器などの細片が出土した。土坑の時期は11～14世紀と考えられる。

土坑11（第12図）

土坑11は調査地中央で検出した。第6層より切り込む。平面形がL字形を呈する土坑であり、南側は調査地外にある。東西1.2m、南北1.1m以上、深さ0.2mを測る。土坑より土師器皿(204・205)が出土した。出土遺物より土坑の時期は12～14世紀と考えられる。

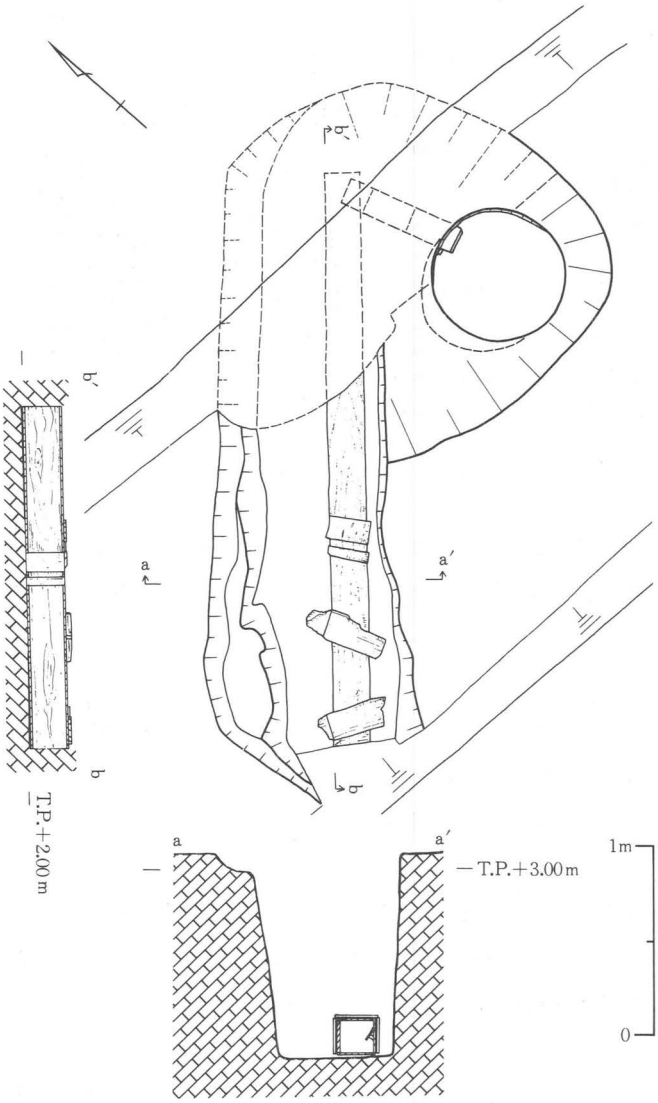
土坑12（第12図）

土坑12は調査地東側で検出した。第5層より切り込む。西側は溝5、北側は井戸4によって切られている。平面形は不明である。東西2.0m、南北1.2m、深さ0.2mを測る。土坑より土師器皿(201～203)が出土した。土坑の時期は出土遺物より12～14世紀と考えられる。

溝5（第17図）

溝5は調査地東側で検出した。整地層1より切り込む。南西から北東方向に伸びる溝である。溝肩は東で1段、西で2段で落ちており、急傾斜を呈する。幅1.0m、深さ0.6mを測る。溝内はA～E層に分層できるが、すべて人為的な埋土である。溝底には幅20cm、長さ0.9mを測る板を

方形に組み、接ぎ合わせている。板は鉄釘によって止める。板の上面には植物の茎などを厚さ約3cmほど敷き詰める。溝5は北側で井戸4より伸びる土管と接続していると考えられる。また、今回の調査地より南で実施された第14次調査で検出された溝9と同じ遺構である。[19] 井戸4より湧き出た水を溝5を通して南側へ送る上水道の施設と考えられる。溝内から遺物は出土していないので時期の決定はできないが、第14次調査の溝9より出土した土器より近世のものと考えられる。



第17図　井戸4・溝5実測図

ピット35～91（第12図）

C地区では55の柱穴と考えられるピットを検出した。ピットは調査地の西側に集中する。明確な切り込み面は不明であるが、第4～6層より切り込む。平面形が円形、楕円形、方形を呈するものがある。ピットの切り合いも多く認められる。ピット43より土師器皿(181)、ピット45より土師器皿(183)・白磁椀(184)、ピット46より土師器皿(182)、ピット48より瓦器椀(186)・皿(185)、ピット54より土師器皿(194)・瓦器椀(195・196)、ピット56より土師器皿(211～226)、ピット59より白磁皿(197・198)、ピット64より瓦器椀(199)、ピット70より瓦器椀(200)が出土した。ピット56より出土した土師器皿は、ほとんどが完形品であり、一括して埋納されたものである。また、他のピットからも須恵器、土師器、瓦器などの細片が出土した。遺構の時期は11～14世紀と考えられる。ピットの径や深さは第2表にまとめて記した。

掘立柱建物2（第18図）

掘立柱建物2は調査地中央で

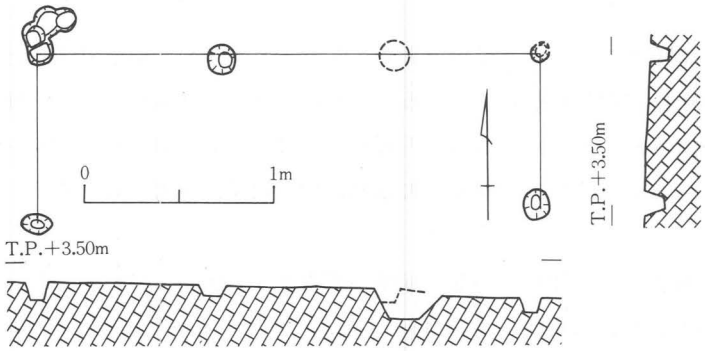
検出した。建物の一部は南側の調査地外に広がっていると考えられる。第４～６層より切り込む。規模は東西３間(5.4ｍ)、南北１間(1.8ｍ)以上を測る。主軸の方向はほぼ南北である。掘立柱建物はピット65・89・83・45・85よりなる。柱穴は円形ないしは楕円形を呈する。ピット45より白磁椀、土師器皿が出土しており、掘立柱建物２の時期は12～14世紀と考えられる。

掘立柱建物３（第19図）

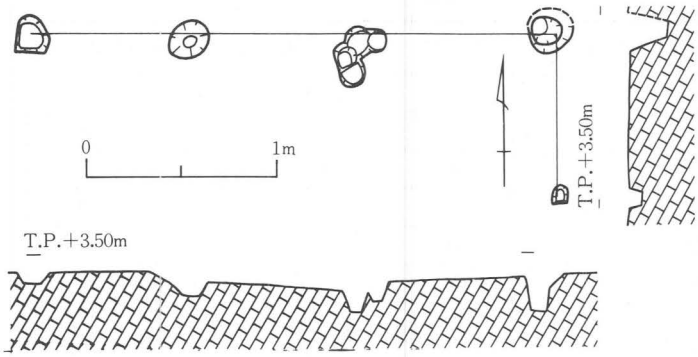
掘立柱建物３も調査地中央で検出した。建物の一部は南側の調査地外に広がっていると考えられる。第４～６層より切り込む。規模は東西３間(5.4ｍ)、南北１間(1.7ｍ)以上を測る。主軸の方向はほぼ南北である。掘立柱建物はピット58・47・78・38と第30次調査地のピット１ケ

第２表　ピット計測値

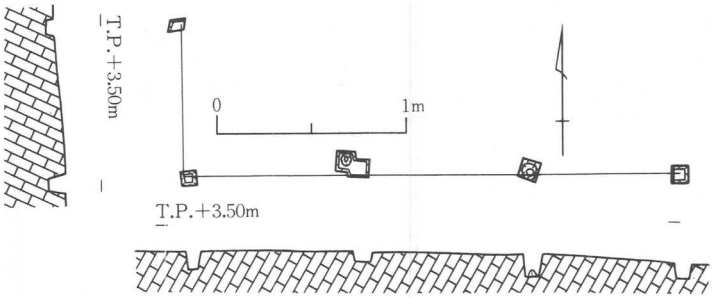
番　号	形　　態	深さ(cm)	径・幅(cm)	番　号	形　　態	深さ(cm)	径・幅(cm)
35	半円形	24	45	64	円　形	40	35
36	方　形	15	15	65	〃	8	40
37	円　形	11	15	66	〃	20	25
38	〃	25	30	67	〃	4	20
39	〃	22	20	68	〃	8	30
40	〃	20	23	69	楕円形	10	25
41	方　形	23	23	70	方　形	25	20
42	楕円形	37	50	71	〃	5	10
43	方　形	10	20	72	円　形	43	25
44	円　形	20	15	73	楕円形	30	30
45	〃	47	50	74	〃	26	50
46	〃	22	30	75	円　形	31	30
47	〃	13	25	76	方　形	10	15
48	〃	33	40	77	円　形	5	15
49	方　形	21	35	78	〃	10	15
50	円　形	23	25	79	方　形	10	15
51	方　形	14	20	80	円　形	44	20
52	〃	8	20	81	〃	53	40
53	〃	17	20	82	〃	31	25
54	円　形	50	60	83	〃	24	30
55	方　形	24	30	84	〃	20	25
56	楕円形	26	50	85	〃	15	20
57	方　形	8	20	86	楕円形	12	20
58	円　形	16	25	87	円　形	5	20
59	方　形	19	15	88	〃	24	30
60	円　形	11	15	89	〃	13	40
61	楕円形	12	55	90	楕円形	38	45
62	方　形	18	15	91	方　形	22	20
63	楕円形	37	50	92	円　形	30	20



第18図　掘立柱建物２実測図



第19図　掘立柱建物３実測図



第20図　掘立柱建物４実測図

所よりなる。柱穴は円形ないしは楕円形を呈する。柱穴から詳細な時期を決定する土器は出土していないが、第４～６層より切り込んでいることから掘立柱建物３は11～14世紀の時期と考えられる。

掘立柱建物４（第20図）

掘立柱建物４も調査地中央で検出した。建物の一部は北側の調査地外に広がっていると考えられる。第４～６層より切り込む。規模は東西３間(5.2m)、南北１間(1.6m)以上を測る。主軸の方向はほぼ南北である。掘立柱建物はピット62・52・41・36・71よりなる。柱穴は方形を呈する。柱穴から詳細な時期を決定できる土器は出土していないが、第４～６層より切り込んでいることから掘立柱建物４は11～14世紀の時期と考えられる。

5．D地区の調査

1）層位（第21図）

D地区はC地区からやや距離をおいて西に位置する。調査範囲は幅1.5m×長さ40mである。断面実測は北壁でおこなった。以下、確認した土層を列挙した上で特徴を記す。

第1層　オリーブ灰色(2.5GY5/1)粘質シルト層。中～粗粒砂を少量、径2～5mmの細礫を極微量含む。

第2層　灰色(5Y4/1)シルト層。中～粗粒砂を微量、径2～4mm程度の細礫を極微量含む。極微量の炭化物が混じる。

第3層　灰色(5Y4/1)粘質シルトと細～中粒砂がほぼ7：3の割合で混じる層。径3mm程度の細礫を極微量含む。炭化物が少量、植物遺体が微量混じる。

第4層　灰色(5Y4/1)シルト質粘土と細～粗粒砂がほぼ1：1の割合で混じる層。径2～3mm程度の細礫を極微量含む。極微量の炭化物が混じる。

第5層　暗オリーブ灰色(2.5GY4/1)シルト質粘土層。細～粗粒砂を少量含む。調査地の東に行くにしたがい砂が増える。植物遺体が少量混じる。

第6層　暗オリーブ灰色(2.5GY3/1)粘土と極細～細粒砂がほぼ1：1の割合で混じる層。径2mm程度の細礫を極微量含む。植物遺体と炭化物が少量混じる。

第7層　暗オリーブ灰色(2.5GY4/1)粘土層。極細～細砂を極微量含む。植物遺体、炭化物、青い物質が微量混じる。

第8層　暗オリーブ灰色(5GY3/1)シルト質粘土層。細砂を少量含む。全体的にみて砂は調査地の中央～西にかけて増える。植物遺体と炭化物が少量、青い物質が極微量混じる。

第9層　暗オリーブ灰色(2.5GY3/1)シルト質粘土層。細～中粒砂を多量、径2～5mm程度の細礫を少量含む。植物遺体と青い物質が微量混じる。

第10層　黒褐色(2.5Y3/2)シルト質粘土層。細～中粒砂を多量、粗砂を少量、径2～4mm程度の細礫を微量含む。炭化物、植物遺体が混じるが、全体的にみて西へ行くにしたがい激増する。

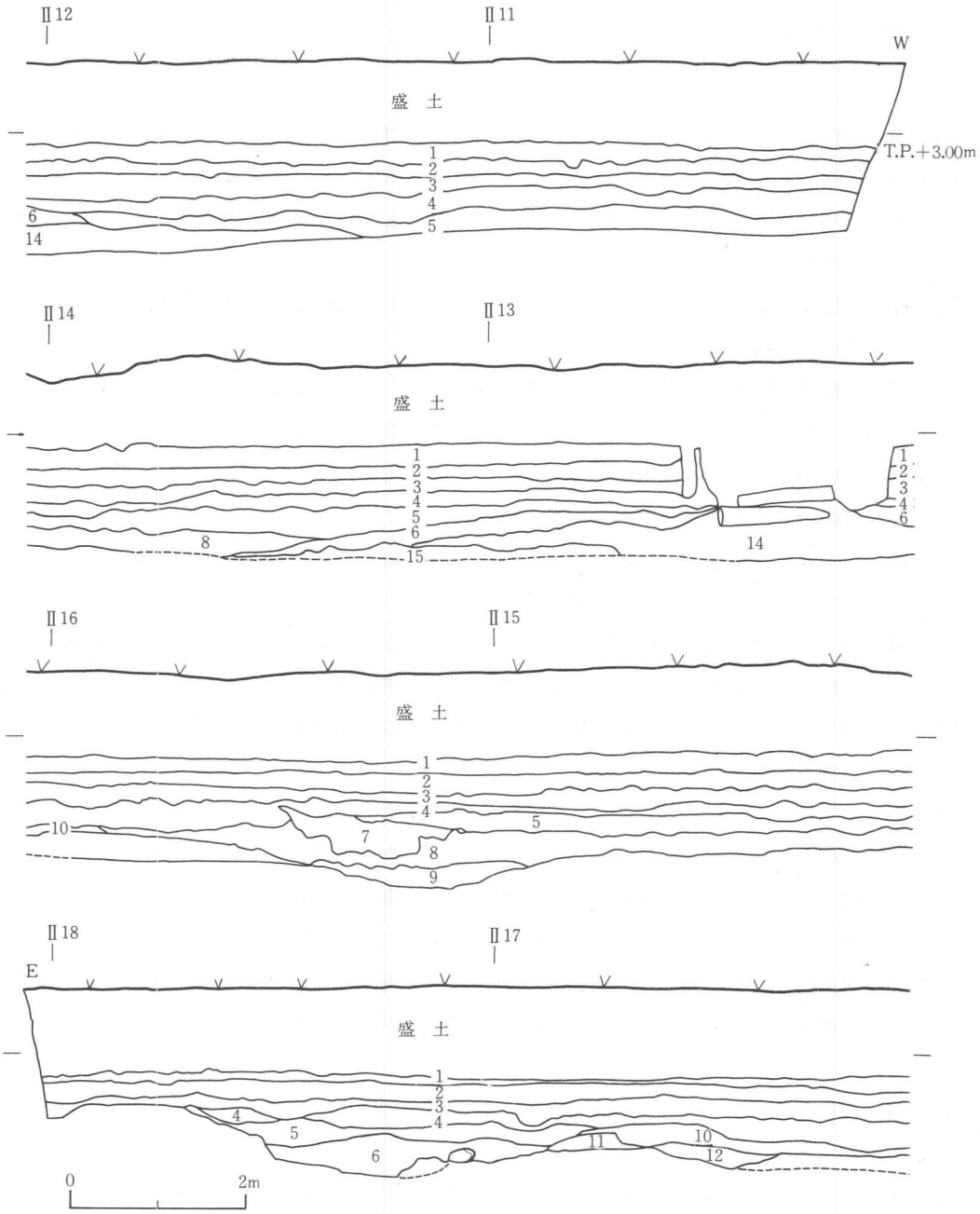
第11層　極細～細砂に粗粒が少量混じる層。暗灰黄色(2.5Y3/2)粘土をブロック状に全体の2～3割程度含む。

第12層　暗オリーブ灰色(2.5GY4/1)粘土層。多量の砂を含む。植物遺体が多量、炭化物が微量混じる。

第13層　上部は中粒～粗砂層で径3～5mm程度の細礫を多量に含む。下部は極細～細粒砂を多く含む層。

第14層　暗オリーブ灰色(5GY3/1)粘土と細～中粒砂がほぼ6：4の割合で混じる層。植物遺体と炭化物が少量混じる。東へ行くにしたがい砂が激減する。

第15層　上、中、下部をそれぞれ、暗オリーブ灰色(2.5GY3/1)シルト質粘土、オリーブ黒色



第21図　D地区断面実測図

(7.5Y3/1)シルト質粘土、暗オリーブ灰色(5GY4/1)粘質シルトで占める層。中部では細砂を少量含む。全体的に植物遺体と炭化物が少量混じる。

D地区で確認した第1層～15層はすべて自然流路内の堆積層である。北西と南東部で流路の肩の傾斜面を検出した。自然流路からは中世～近世の遺物が多量に出土した。

2) 遺構

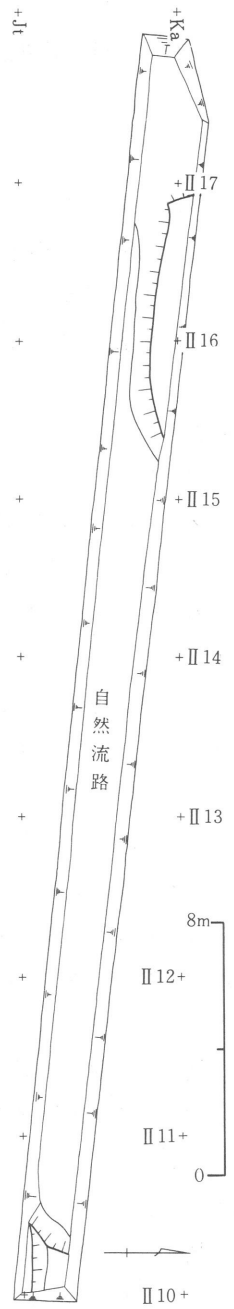
D地区では自然流路１と土器溜り１を検出した。

自然流路（第22図）

自然流路は調査地全域で検出した。切り込み面は調査地外にあるので不明である。南西から北東方向に伸びる自然流路であり、河川と考えられる。自然流路の大部分は調査地外にあるため全形を知り得ないが、南西肩と北東肩の傾斜面を検出した。推定幅15m、深さ1.5mを測る。自然流路より輸入磁器(545～548)、日本製陶磁器(549～554・567～572・576～578)、瓦器摺鉢(555・566)・盤(573)・火舎(574・577・578)・甕(579)・羽釜(602～617)・鍋(618)・鉢(619)・椀(620～629)・皿(580～599)・ミニチュア羽釜(600・601)、土師器皿(580～594)の土器と木製品が出土した。出土遺物より自然流路の時期は近世と考えられる。

土器溜り

土器溜りは自然流路の南東隅で検出した。切り込み面は不明である。掘り方は検出することができなかったが、径１ｍ、深さ20cmの範囲に土器が埋っていた。土器溜りより瓦器皿(245～248)・羽釜(292・296)・椀(298～318)、土師器皿(249～292)・羽釜(294・295)、須恵器捏鉢(297)が出土した。遺構の時期は13世紀後半と考えられる。



第22図　自然流路実測図

Ⅳ．出土遺物

1．土器

今回の調査では遺構、整地層などから多量の土器が出土した。古墳時代、奈良時代、中世のものを含むが、圧倒的に中世のものが多い。以下、出土した土器の概略を記す。中世の土師器皿、羽釜、摺鉢・揑鉢は型式分類をおこなった。また、各土器の法量、形態、技法などについては観察表に記した。

中世の土器

1）瓦器

椀　今回の調査で出土した瓦器椀は出土量が少なく、型式も数型式あるのみである。本遺跡より出土した瓦器椀の型式分類は勝田邦夫氏によっておこなわれている。[20] 氏は器体の形状、法量の変化、ヘラミガキの状態、見込みの暗文、調整手法などによって、A～M型式の13型式に分類されている。今回の調査では井戸内より一括性の高い資料が得られたが、型式差が少ないので氏の型式分類を踏襲する。井戸２よりC型式、井戸１よりL型式のものが出土した。C型式の椀(136～139)は器体が大きく、高台も高い。外面は分割によるヘラミガキ、内面は密なヘラミガキを施す。K型式の椀(142～150)は器体が浅い皿状を呈し、高台が消失する。内面に渦巻状の暗文を施す。また、土器溜りよりI・J型式の椀(298～315)が出土している。他の型式のものも若干ある。C地区の整地層１より口縁部内面に沈線をめぐらす大和型の椀(543)が出土した。

皿　皿は出土量が少ない。丸底に近い底部で、内面に暗文とヘラミガキを施すもの(471)、平底の底部で、内面に暗文とヘラミガキを施すもの(185・472・473)、内面にヘラミガキを施すもの(474)、内外面をナデ調整だけで終るもの(245～248・483・484・595～599)がある。

羽釜　羽釜は４型式のものがある。H～K型式があり、後で各型式の特徴を記す。H型式は122、I型式は121・602～617、J型式は123・191・296、K型式は293である。自然流路よりI型式のものが多く出土した。ミニチュア羽釜(600・601)は２点出土している。ミニチュア羽釜は鍔が実用品に比して短い。

甕　甕は３点(241・242・579)が出土している。いずれも大形であり、張りのある胴部より、口縁部が下方へ折れ曲る。胴部外面はタタキ、内面はハケメ調整する。

火舎　火舎は６点出土している。口縁部が直立するもの(117・574・577)、内弯するもの(193・578)がある。また、方形を呈すると考えられるもの(118)があり、スタンプ文様を施す。ヘラミガキするものが多い。

香炉　香炉は堀２より４点出土している。つくりはいずれも丁寧である。胴部が外上方へ伸び口縁部が外反する大形のもの(113)、小形のもの(115・116)がある。脚部は3ケ所に施す。また、内傾する胴部より口縁部が外反するもの(114)がある。113・114は口縁部が波状を呈する。

すべてのものにスタンプ文様が認められる。

摺鉢・揑鉢　4型式の摺鉢・揑鉢がある。E～H型式であり、後で各型式の特徴を記す。E型式は348・564・565、F型式は58・110・111・566、G型式は57・347・555～563、H型式は109である。109は揑鉢であり、他は摺鉢である。G型式のものが自然流路より多く出土している。

鍋　鍋は1点(618)出土している。上方へ伸びる胴部より口縁部が外反した後、角度を変えて上方へ立ち上がる。口縁部内外面は横ナデ調整、胴部外面はナデ調整、内面はハケメ調整する。

鉢　鉢は2点(152・619)出土している。丸底に近い体部より口縁部が短く外反する。152は口縁端部に沈線を施す。153は口縁端部が丸く終る。体部外面はナデ調整し、内面はナデ調整の後、ヘラミガキを施す。

盤　盤は2点(118・573)出土している。平底の底部より体部が短く上方へ立ち上がり、口縁部に至る。

2) 土師器（第3表）

皿　皿は今回、出土した土器の中でも最も量が多いものである。皿は大形、中形、小形のものがある。目やすとして口径が10cm未満を小皿、10～12cmを中皿、12cm以上を大皿としてあつかう。形態の特徴から大きく3型式に分類され、A～C型式がある。また、B型式はB_1～B_5型式、C型式はC_1～C_3型式に細分できる。今回の調査で出土した皿は9型式である。以下、各型式ごとの特徴を記す。詳細は観察表に記してあるが、B_1-aのaはB_1型式のうちで、底部が上げ底のものである。また、色調は褐色系と白色系で記した。

A　丸底に近い底部より体部が内弯する。口縁部は外反した後、内弯する。口縁端部を内側へ巻き込む。

B_1　丸底に近い平底の底部より口縁部が外上方へ伸びる。口縁端部は丸く終るものと尖がり気味のものがある。

B_2　丸底に近い平底の底部より口縁部が外反する。口縁端部は丸く終るものと尖がり気味のものがある。

B_3　丸底に近い平底の底部より口縁部が内弯する。口縁端部は丸く終るものと尖がり気味のものがある。

B_4　丸底に近い平底の底部より体部が内弯気味に立ち上がる。口縁部と体部の境に明瞭な段がつく。口縁部はやや内弯する。口縁端部は丸く終るものと尖がり気味のものがある。

B_5　平底の底部より口縁部が短く外上方へ伸びる。口縁部と体部の境に稜があり、やや肥厚する。口縁端部は丸く終るものと尖がり気味のものがある。

C_1　平底の底部より体部が大きく逆八の字形に開く。口縁端部は丸く終るものと尖がり気味のものがある。

C_2　平底の底部より体部が大きく逆八の字形に開く。口縁部が外反する。口縁端部は丸く終るものと尖がり気味のものがある。

C_3　平底の底部より体部が大きく逆八の字形に開く。口縁部が内弯する。口縁端部は丸く終

第3表　土師器皿分類表

	小　皿	中　皿	大　皿
A	172		
B_1	1	47	94
B_2	174	342	134
B_3	271	283	290
B_4	501	223	292
B_5	30	178	
C_1	35	42	103
C_2	82	46	531
C_3	87		105

るものと尖がり気味のものがある。

羽釜　羽釜は7型式のものがある。A～G型式であり、後で各型式の特徴を記す。A型式は140・141、B型式は465、C型式は294・295・459～461・544、D型式は462・463、E型式は239、F型式は60、G型式は464である。

3) 須恵器

揑鉢　揑鉢は2点(108・297)出土している。D型式のものであり、後で特徴を記す。

4) 陶磁器

出土量は土師器、瓦器などに比べて少ない。輸入磁器、中近世の日本製陶磁器などがある。

輸入磁器　輸入磁器は完形品になるものはなく、いずれも破片である。青磁と白磁があるが

ほぼ同量が出土している。青磁は椀(124・319～321・480・540・545～548)と合子(482)の器種がある。白磁は椀(184・189・238・322・475～479・481)と皿(197・198・541)がある。青磁、白磁とも椀の出土量が多い。他に明の染付(56)も出土している。

日本製陶磁器　陶磁器は備前焼・瀬戸焼・伊万里焼・美濃焼がある。備前焼は摺鉢と壺が出土している。摺鉢は3型式のものがある。A～C型式であり、後で各型式の特徴を記す。A型式は466、B型式は106・244・576、C型式は59・107である。壺は小形で口縁部が丸く終るもの(112)と大形で口縁部が玉縁状を呈するもの(575)がある。瀬戸焼は水滴(55)・椀(550・551)、伊万里焼は椀(567～569)、美濃焼は皿(570・572)がある。瀬戸焼・伊万里焼・美濃焼は近世の自然流路内より多く出土した。

5) 羽釜の分類（第4表）

今回の調査では11型式の羽釜が出土しており、A～K型式に分ける。土師器と瓦器がある。以下、各型式の特徴を記す。

A　土師器。球形の体部より口縁部が大きく外反する。口縁端部は内側へ肥厚し、丸く巻き込む形状を呈する。鍔は長く、水平方向に伸び、端面は丸く終る。

B　土師器。形態はA型式と同様であるが、口縁端部の巻き込みが弱くなり、面をもって終る。鍔は欠損するので不明。

C　土師器。球形の体部より口縁部がくの字形に外折する。口縁端部は丸く終る。鍔はやや外上方へ伸び、端面は丸く終る。

D　土師器。球形の体部より口縁部が短く外反する。口縁端部は内外面へ肥厚し、丸く終る。鍔は水平方向に伸び、端面は丸く終る。

E　土師器。球形の体部より口縁部が上方へ立ち上がる。口縁端部は面をもつ。鍔は短く、やや下方へ伸びる。端面は面をもつ。

F　土師器。体部の張りは少なく、口縁部が内傾して終る。口縁端部は丸く終る。口縁部外面に数条の段をもつ。鍔はやや外上方へ伸び、端面は面をもつ。

G　土師器。体部の張りは少なく、口縁部が内傾して終る。口縁端部は面をもつ。鍔は短く、やや外上方へ伸びる。端面は面をもつ。

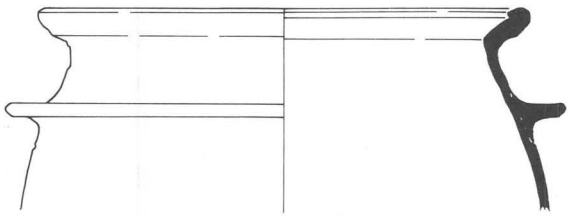
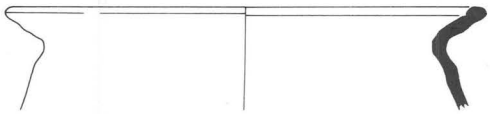
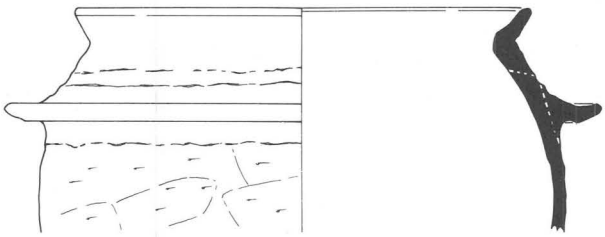
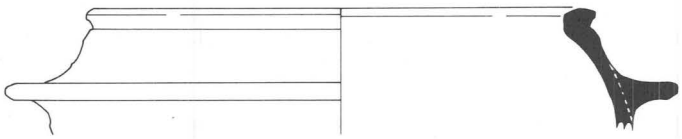
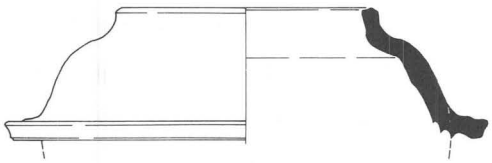
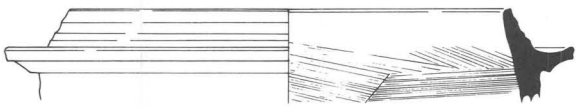
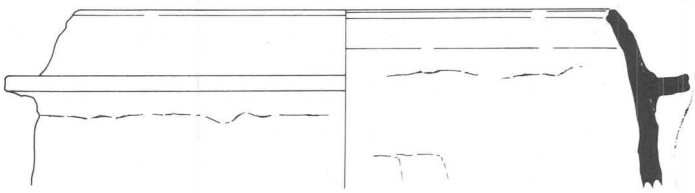
H　瓦器。体部の張りは少なく、口縁部が内傾した後、短く外反する。口縁端部は面をもつ。口縁部外面に数条の段をもつ。鍔はやや外上方へ伸び、端面が面をもつ。

I　瓦器。体部の張りは少なく、口縁部が内傾する。口縁端部は面をもつ。口縁部外面に数条の段をもつ。鍔は水平方向に伸び、端面は面をもつ。

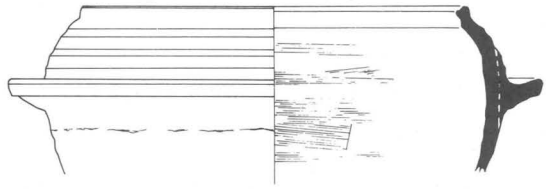
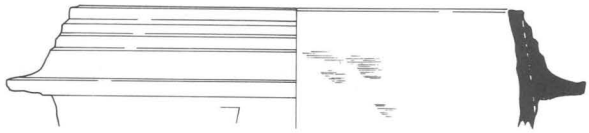
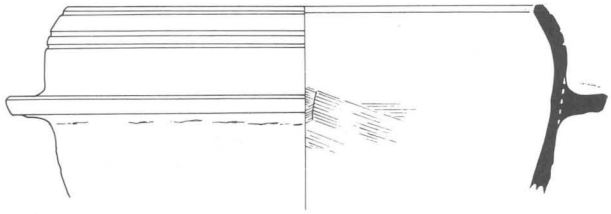
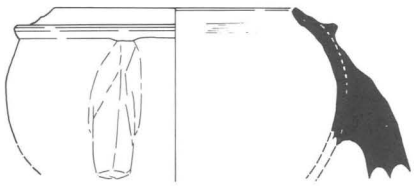
J　瓦器。体部の張りは少なく、口縁部が内傾する。口縁端部は丸く終る。口縁部外面に数条の沈線をもつ。鍔は水平方向に伸び、端面は面をもつ。

K　瓦器。球形の体部より口縁部が内弯する。口縁端部は丸く終る。鍔は短く、端面が丸く終る。体部下半に棒状の脚を3ケ所に施す。

第４表　土釜分類表

A	 140
B	 465
C	 459
D	 462
E	 239
F	 60
G	 464

第4表　続き

H	 122
I	 240
J	 123
K	 292

6）摺鉢・捏鉢の分類（第5表）

今回の調査では8型式の摺鉢・捏鉢が出土しており、A～H型式に分ける。備前焼・須恵器・瓦器の3種がある。以下、各型式の特徴を記す。

A　備前焼摺鉢。逆八の字形に開く体部より口縁部が内傾し面をもつ。口縁端部は丸く終る。体部内面におろし目を施す。

B　備前焼摺鉢　逆八の字形に開く体部より口縁部が幅広く上方へ立ち上がる。口縁端部は丸く終る。体部内面におろし目を施す。

C　備前焼摺鉢。逆八の字形に開く体部より口縁部が幅広く内傾する。口縁端部は丸く終る。口縁部に沈線を施す。体部内面にはおろし目を施す。

D　須恵器捏鉢。東播系のものである。逆八の字形に開く体部より口縁部がやや内傾する。口縁端部は尖がり気味に終る。

E　瓦器摺鉢。逆八の字形に開く体部より口縁部が短く外反する。口縁端部は丸く終る。体

部内面におろし目を施す。

F　瓦器摺鉢。逆八の字形に開く体部より口縁部に至る。口縁端部は内傾し、面をもつ。体部内面におろし目を施す。

G　瓦器摺鉢。逆八の字形に開く体部より口縁部が内傾する。口縁端部は尖がり気味に終る。体部内面におろし目を施す。

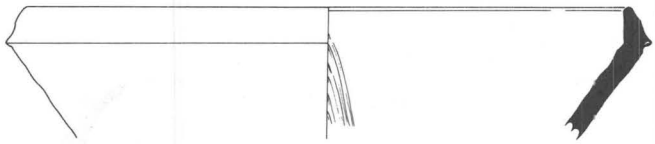
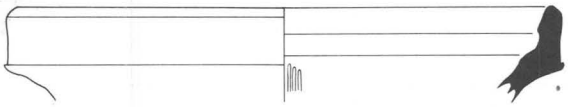
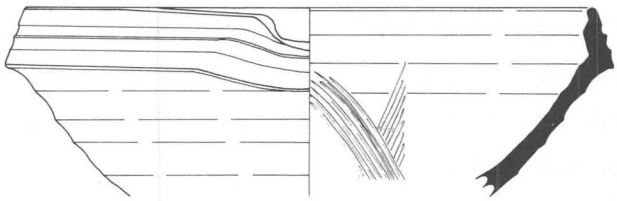
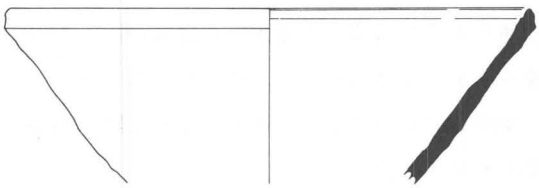
H　瓦器捏鉢。逆八の字形に開く体部より口縁部に至る。口縁端部は丸く終る。

古墳～奈良時代の土器

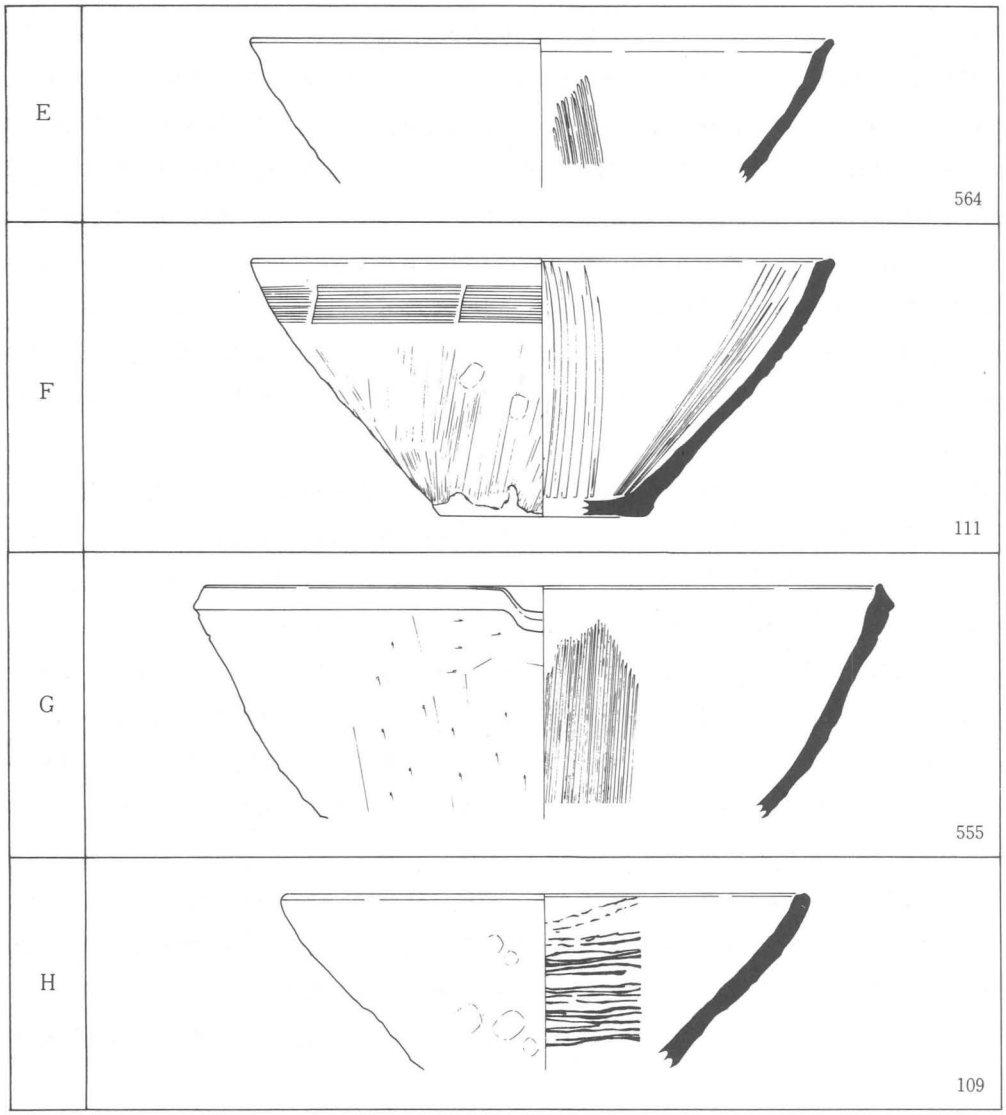
古墳～奈良時代の土器は出土量が多い。整地層１より多く出土した。須恵器・土師器・製塩土器・韓式系土器がある。

須恵器　杯、高杯、蓋、壺、甕、瑞、鉢、平瓶が出土している。杯は受部より口縁部が長く内傾するもの(160)、受部より口縁部が短く外反するもの(161・168・420)、平底ないしは丸底

第５表　摺鉢・捏鉢分類表

A	 466
B	 106
C	 59
D	 297

第5表　続き



の底部より体部が外上方へ立ち上がるもの(410～412・532・533)、高台がつくもの(405～409)がある。高杯は短脚のものであり、端面が面をもつもの(162・421・534)と丸く終るもの(422)がある。蓋は体部と口縁部の境に稜をもつもの(159)ともたないもの(171)がある。また、つまみを有するもの(413)もある。壺は筒状の頸部より口縁部が大きく外反するもの(414)、頸の長い長頸壺(415・416)、いわゆる坩(164)がある。甕は頸部に櫛描文様を施すもの(418)と無文(417)のものがある。瑔(419)は細い頸部より口縁部が外反した後、上方へ立ち上がる。鉢(423)は厚い平底の底部より体部が外上方へ立ち上がる。平瓶(163)は扁球形の体部より口縁部がゆるく外反する。

土師器　甕、羽釜、高杯、杯、皿、鉢、蓋が出土している。甕は長胴で張りが少なく、口縁

部が大きく外反するもの(165・424・425)がある。口縁端部を内側へ巻き込む。また、体部が球形を呈するもの(426～430)がある。口縁部と体部の境に横ナデによる稜がつくものが多い。羽釜(433・434)は長胴のものである。口縁部が大きく外反し、鍔が水平方向に伸びる。高杯(431)は杯部が浅い皿状を呈し、杯下部に段がつく。脚部は裾広がりである。杯部内面に放射状の暗文を施す。脚部のみのもの(167)もある。杯は丸底を呈し、体部内面に放射状の暗文を施すもの(166・449・535)と無文のもの(448・536)がある。丸底に近い平底で体部外面を指押えするもの(446・447)、ナデ調整するもの(440～445)、口縁部がゆるく外反し、高台を有するもの(439)がある。皿は口縁部がゆるく外反し、口縁端部が丸く終るもの(450～454・457・458)と内側へ巻き込むもの(455・456)がある。鉢は口縁部がゆるく外反し、口縁端部が面をもつもの(435・436)と内側へ巻き込むもの(437・438)がある。蓋(432)は体部の立ち上がりが少なく、口縁端部が丸く終る。

製塩土器　古墳時代と奈良時代の製塩土器が出土した。古墳時代のものは349～378である。丸底の底部より体部が上方へ立ち上がる。器壁が薄い。外面は粗雑であるが、内面は平滑に仕上げる。内外面の調整法から3型式に分類できる。[21] 内外面をナデ調整によって仕上げるもの(349～372)、外面をナデ調整、内面をハケメ調整で仕上げるもの(373～376)、外面をナデ調整し、内面を貝殻調整で仕上げるもの(377・378)がある。外面に指頭圧痕を残すものが多い。また、細片ではあるが外面にタタキ目を施すものも若干出土している。奈良時代のものは389～404である。形状を復原できるものはなく、すべて破片である。器壁が5mm前後のもの(400～402)と1cm前後のもの(389～399・403・404)がある。大部分は内外面をナデ調整によって仕上げるが、403・404は内面に布圧痕が残る。

韓式系土器　379～388は韓式系土器である。器種は甕(379)と甑(387・388)がある。379は張りのある体部より口縁部が大きく外反する。口縁端部が面をもつ。体部外面は縄蓆文を施す。380・381も縄蓆文であり、379と同一個体と考えられる。387・388は甑の底であり、孔を穿っている。外面は格子のタタキを施す。382～386は器種は不明である。内面はナデ調整し、外面は格子のタタキを施す。

A地区遺構内出土の土器

塼立建物（第23図）

塼立建物からは土師器(皿・羽釜)、陶磁器(瀬戸焼・備前焼)、輸入磁器(染付)、瓦器(摺鉢)が出土した。土師器の皿は塼立建物の掘方上面(南と東)で帯状に広がっていた。

土師器　皿と羽釜がある。皿は小皿、中皿、大皿があり、完形品になるものが多い。B、C型式のものが出土しているが、B型式が7～8割をしめている。中でもB_1型式が特に多い。53点中で褐色系22点、白色系31点を数える。小皿はB_1型式(1～25)、B_2型式(26～29)、B_5型式(30～33)、B_5-a型式(34)、C_1型式(35～39)がある。中皿はC_1型式(40～42)、C_2型式(43～46)、B_1型式(47～51)、B_2型式(52)がある。大皿はB_1型式(53)がある。口縁部内外面を横ナデ調整、内面の見込みをナデ調整、底部外面をナデ調整か指押えするものが大部分である。小皿B_5型式の中には内面全体を荒いハケメ調整(3本/1cm)するもの(30・32・33)があり、いずれも径が6cm前後を測る小形のものである。羽釜(60)はF型式のものである。口縁部外面に段を有し、体部内面をハケメ調整で仕上げる。

陶磁器　瀬戸焼の合子と水滴、備前焼の摺鉢がある。合子(55)は½を欠損するが、体部中央に稜があり、算盤玉形を呈する。色調は紫褐色である。水滴(54)は完形品である。平底の底部より体部が外上方へ伸びた後、内傾する。口縁部は上方へ立ち上がる。体部上半に注ぎ口と把手をつける。底部は糸切り。色調は茶褐色である。摺鉢(59)はC型式であり、片口部が残る。

輸入磁器　明の染付(56)がある。器種は皿であり、平底の底部より体部が内弯気味に立ち上がり、口縁部がゆるく外反する。見込みに菊に似た花を描く。

瓦器　摺鉢がある。F型式のもの(58)とG型式(57)が出土している。58は内面が風化しており、おろし目は不明である。

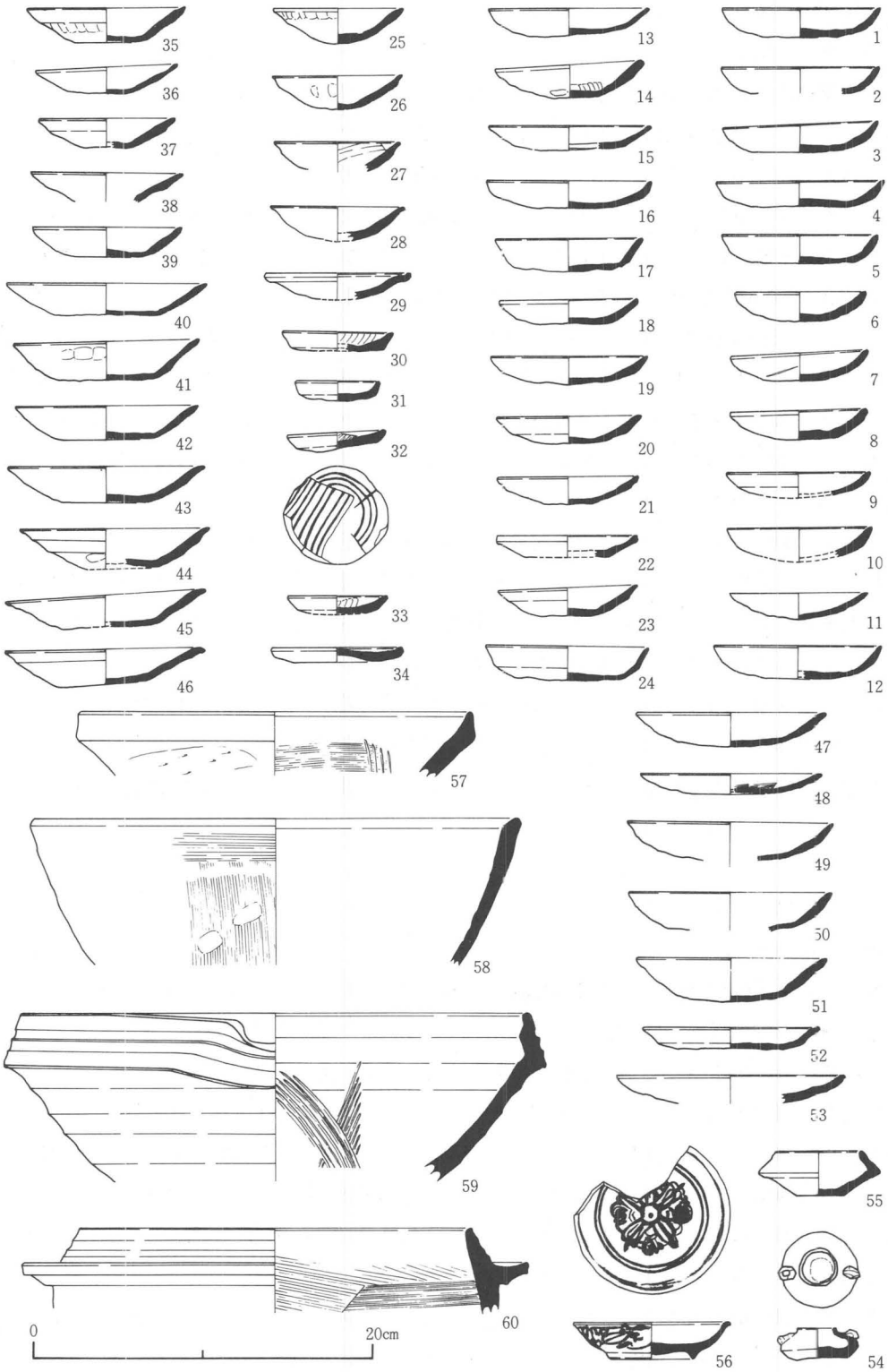
B地区遺構内出土の土器

堀2（第24・25図）

堀2からは土師器(皿)、陶磁器(備前焼)、須恵器(捏鉢)、瓦器(捏鉢・摺鉢・香炉・火舎・盤・羽釜)、輸入磁器(青磁)が出土した。

土師器　皿が出土しており、小皿、中皿、大皿がある。B、C型式のものが出土しているが、C型式が8割以上をしめている。中でもC_1、C_2型式のものが多い。45点中で褐色系13点、白色系32点を数える。小皿はB_1型式(61～63)、B_2型式(64・65)、B_3型式(66・67)、C_1型式(68～75)、C_1-a型式(78～81)、C_2型式(82～85)、C_2-a型式(86)、C_3型式(87・88)がある。中皿はC_1型式(89～91)、C_2型式(92・93)がある。大皿はB_1型式(94)、C_1型式(95～103)、C_3型式(104・105)がある。63は内面をハケメ調整する。

陶磁器　備前焼の摺鉢(106・107)、壺(112)がある。106はB型式のものである。107はC型式のものであり、口縁部に沈線をめぐらす。破片のため、おろし目は不明。112は小形の壺である。球形の体部より口縁部が短く外反するものである。体部内面に粘土紐の継ぎ目が残る。



第23図　塼立建物出土土器実測図

須恵器　D型式の揑鉢（108）がある。東播系のものである。逆八の字形に開く体部より口縁部がゆるく外反する。

瓦器　揑鉢はH型式のもの（109）があり、体部内面を丁寧なヘラミガキ調整する。摺鉢はF型式のもの（110・111）がある。111は全形を知り得るものであり、体部外面を縦方向のハケメ調整した後、上半を横方向のハケメ調整で仕上げる。内面はナデ調整した後、底部より口縁部までおろし目を放射状に施す。110は破片のためおろし目は不明。香炉は4点出土したが大きさや形に変化がある。113は大形のものであり、底部に脚を施す。口縁端部が波状を呈する。115・116は113より小形であり、口縁端部が丸く終る。112は壺形を呈するものであり、口縁端部が波状を呈する。いずれも体部にスタンプ文様を施し、丁寧なヘラミガキ調整で仕上げる。火舎は体部が直立し口縁部に至るもの（117・117′）と方形を呈するもの（119）がある。全体的に丁寧なヘラミガキ調整で仕上げる。盤は底部より口縁部が短く立ち上がるもの（118）である。羽釜はH型式のもの（122）、I型式のもの（120・121）、J型式のもの（123）がある。121は焼成後、口縁部に小円孔を穿つ。

輸入磁器　青磁椀（124）の底部がある。高台は高く、断面が台形を呈する。見込みにヘラ描きによる花柄、体部外面は連弁文を施す。

井戸2（第26図）

井戸2からは土師器（皿・羽釜）と瓦器が出土した。井戸の供献土器と考えられ完形品のものが多い。

土師器　皿と羽釜がある。皿は小皿と大皿がある。A、B型式のものが出土しているが、大部分はB型式のものである。A型式のものは白色系、B型式のものは褐色系である。小皿はA型式（125・126）、B_2型式（127・128）がある。大皿はB_1型式（129～131）、B_2型式（132～135）がある。羽釜は口縁端部を内側へ巻き込むA型式のもの（140・141）がある。形態、口径、胎土なども酷似する。

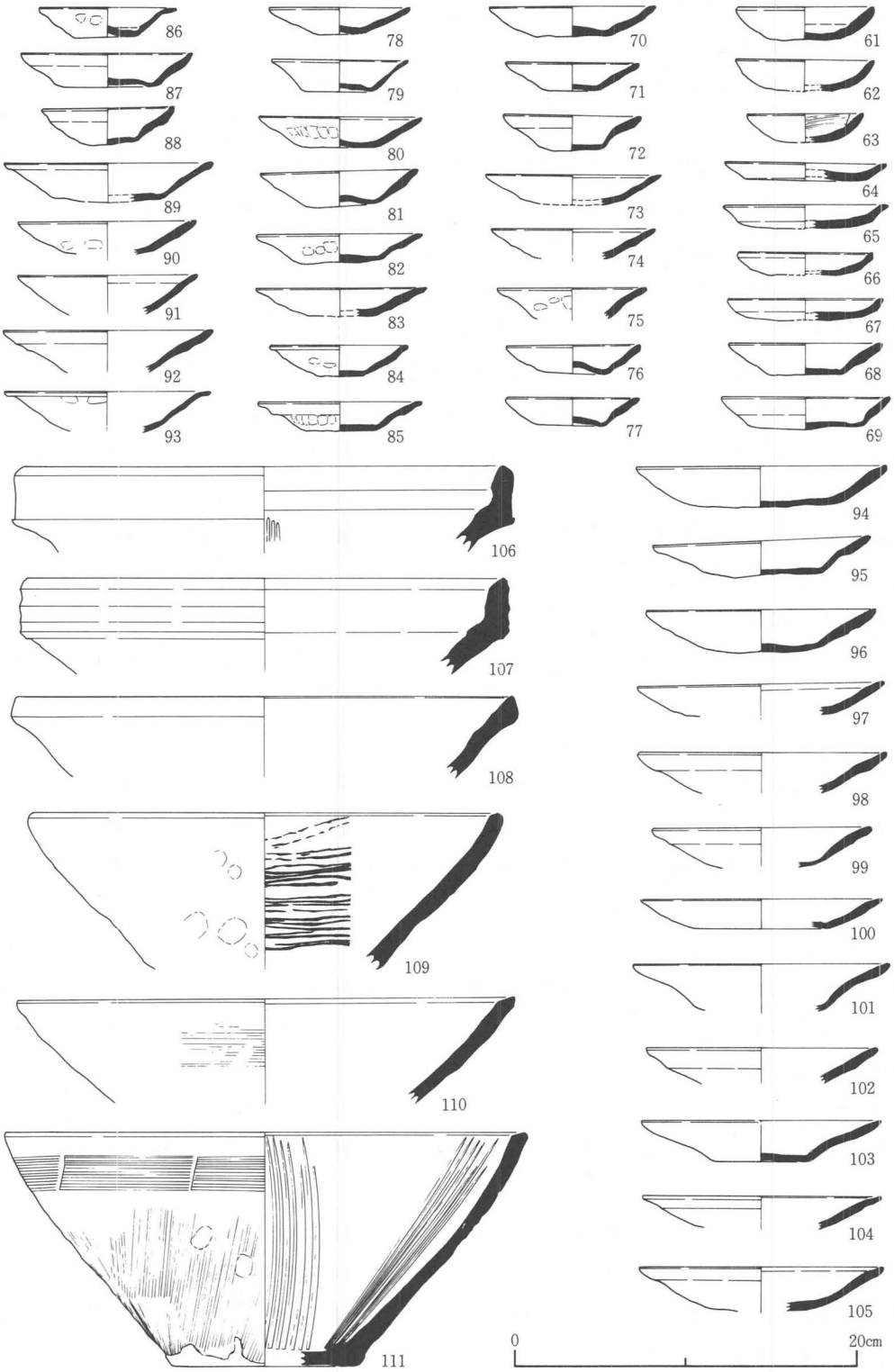
瓦器　瓦器は椀が4点出土している。C型式のもの（136～139）であり、器体は深く、高台が高い。体部内面は密なヘラミガキ調整し、外面は3～4分割のヘラミガキ調整する。137は内面に多量の炭化物が付着し、外面は二次焼成によるうろこ状の剝離痕が残る。136も137と同様な剝離痕が認められる。

井戸1（第27図）

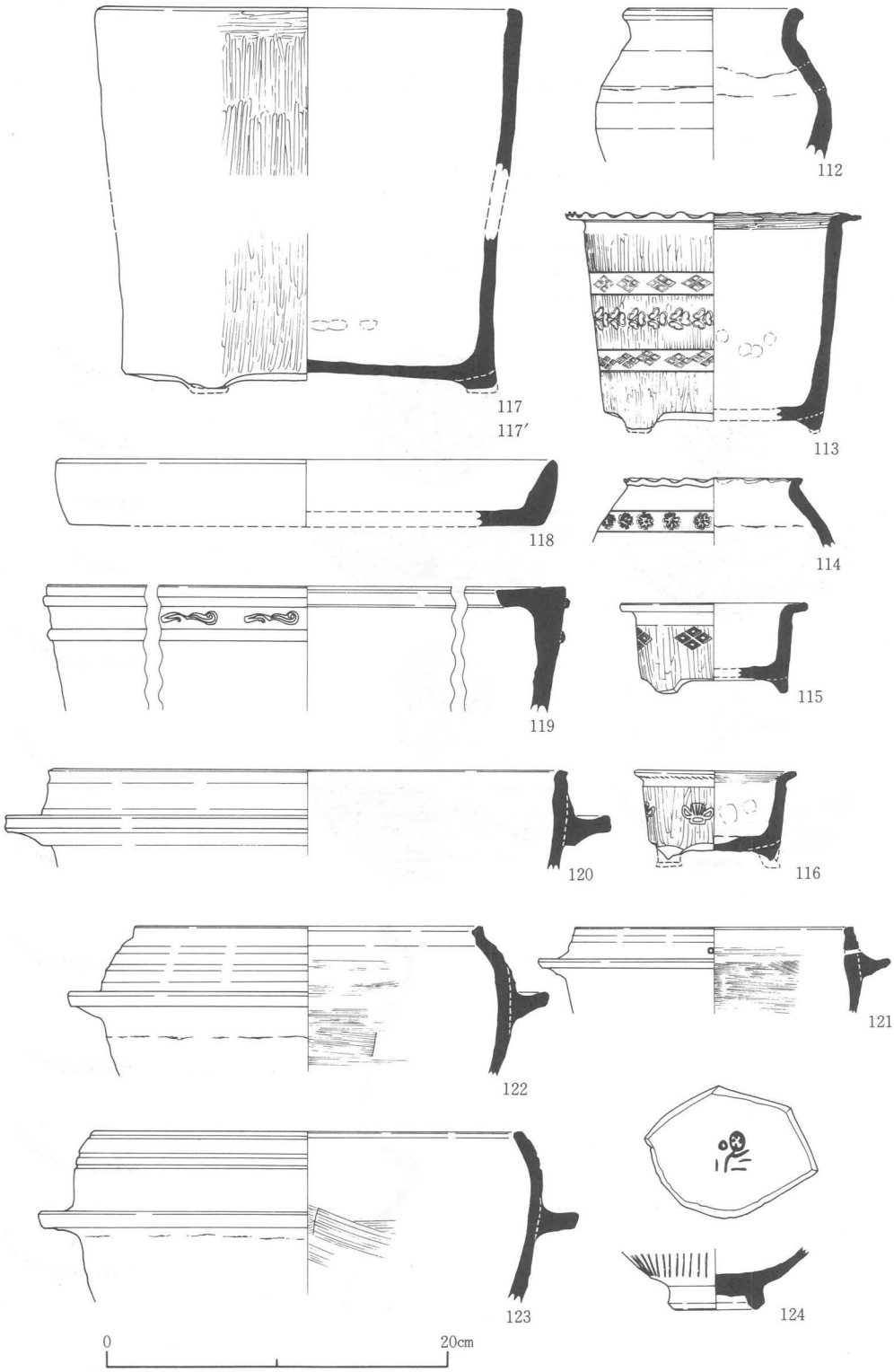
井戸1からは瓦器（椀・鉢）、土師器（皿）が出土した。井戸の供献土器と考えられ完形品になるものが多い。

瓦器　椀と鉢が出土した。椀はL型式のもの（142～151）である。丸底に近い底部をもち、高台は消失する。体部内面は数条の渦巻状の暗文を施す。142は見込みに平行線の暗文が残る。全体的に炭素の付着が悪く、つくりも粗雑である。鉢は丸底のもの（152）であり、口縁部に沈線を施す。体部内面に渦巻状の暗文を施す。

土師器　B型式の皿がある。すべて褐色系である。小皿と大皿があり、小皿はB_1型式（153～



第24図　堀２出土土器実測図



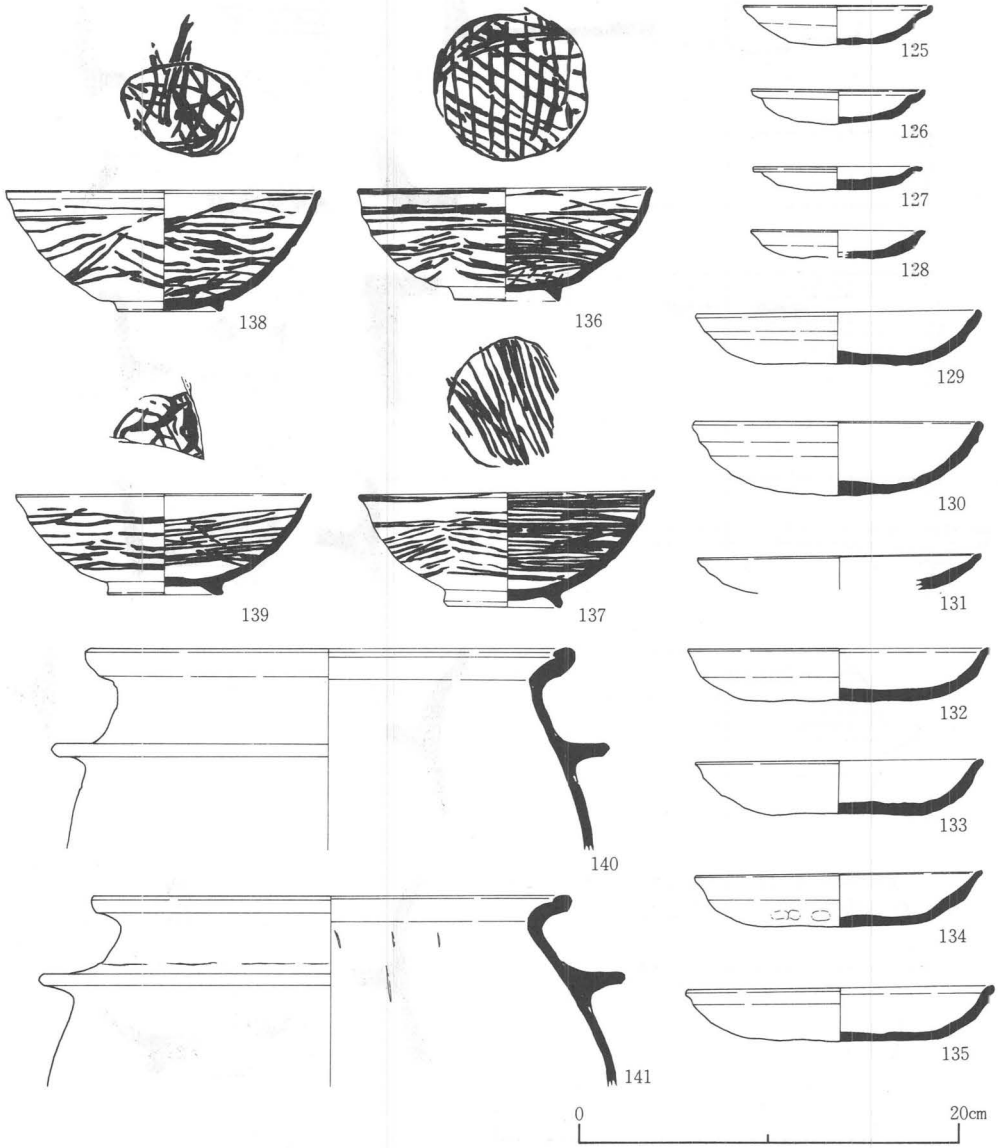
第25図　堀２出土土器実測図

156)、大皿はB$_3$型式(157・158)がある。

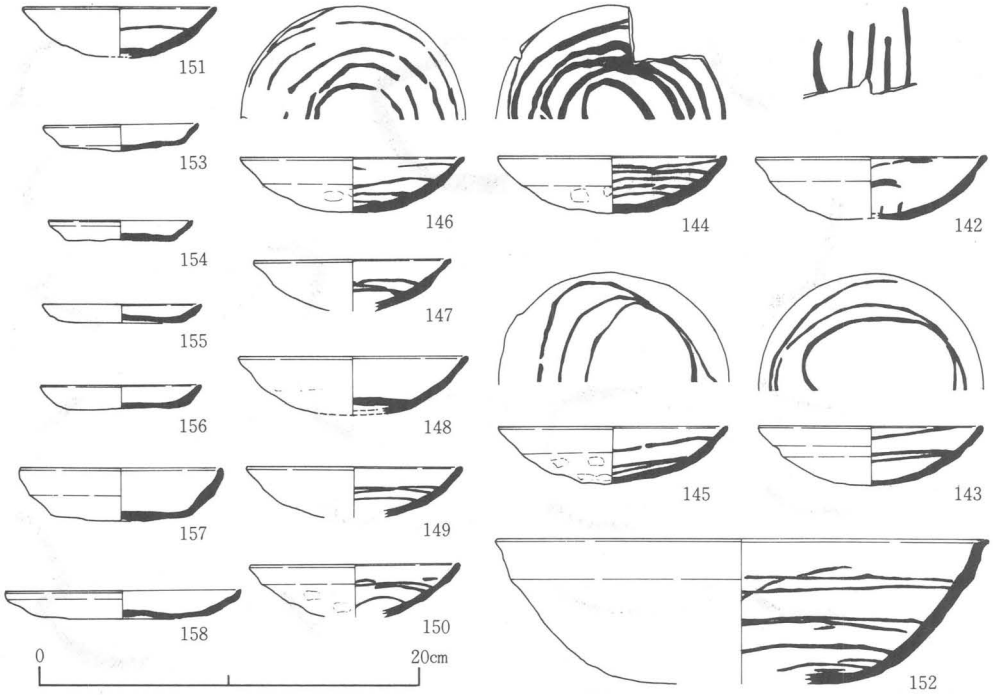
土坑2 (第28図)

土坑2からは古墳～奈良時代の須恵器(蓋・杯・高杯・平瓶・壺)、土師器(甕・杯・高杯)が出土した。

須恵器　蓋、杯、高杯、平瓶、壺がある。蓋は口縁部と体部の境に稜がつくもの(159)がある。杯は受部より口縁部が内傾するもの(160)と短く外反するもの(161)がある。高杯(162)は脚部のみである。平瓶は体部が扁球形を呈し、口縁部がゆるく外反するもの(163)である。壺は頸部が短く上方へ立ち上がるもの(164)がある。



第26図　井戸2出土土器実測図



第27図　井戸１出土土器実測図

土師器　甕、杯、高杯がある。甕（165）は長胴であり、口縁部が大きく外反する。口縁端部は内側へ巻き込む。杯(166)は体部内面に放射状の暗文を施す。高杯(167)は脚部のみが残存する。

土坑３（第28図）

奈良時代の須恵器(杯)と中世の土師器(皿)、輸入磁器(青磁)が出土した。杯（168）は口縁部が短く外反するものである。皿(169)はＢ$_1$-a型式の小皿である。青磁は椀(170)である。

土坑４（第28図）

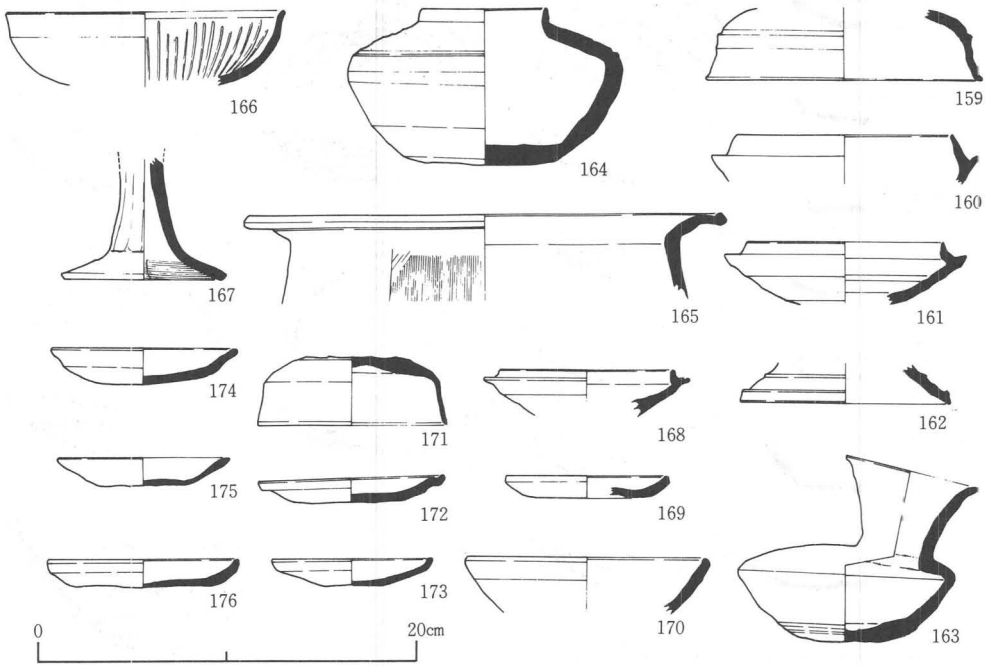
古墳時代の須恵器（蓋）、中世の土師器（皿）が出土した。171は蓋である。皿は小皿であり、Ａ型式のもの(172)とＢ$_1$型式のもの(173)、Ｂ$_2$型式のもの(174)がある。

土坑１（第28図）

土師器の小皿が出土した。Ｃ$_1$型式のもの(175)である。

ピット31（第28図）

土師器の小皿が出土した。Ｂ$_1$型式のもの(176)である。



第28図　土坑・ピット出土土器実測図

C地区遺構内出土の土器

土坑７（第29図）

瓦器(椀)と土師器(皿)が出土した。椀はI型式のもの(177)であり、見込みに連結輪状の暗文を施す。皿は中皿と大皿があり、中皿はB$_5$型式のもの(178)がある。大皿はB$_1$型式のもの(179)とB$_4$型式のもの(180)がある。

土坑８（第29図）

瓦器(椀)、輸入磁器(白磁)、土師器(皿)が出土した。椀はⅠ型式のもの(187)であり、見込みに平行線の暗文を施す。白磁は椀(188・189)であり、底部のみである。皿は小皿と大皿があり、小皿はB$_1$型式のもの(191)とB$_4$型式のもの(192・193)がある。大皿はB$_1$型式のもの(190)である。

土坑11（第29図）

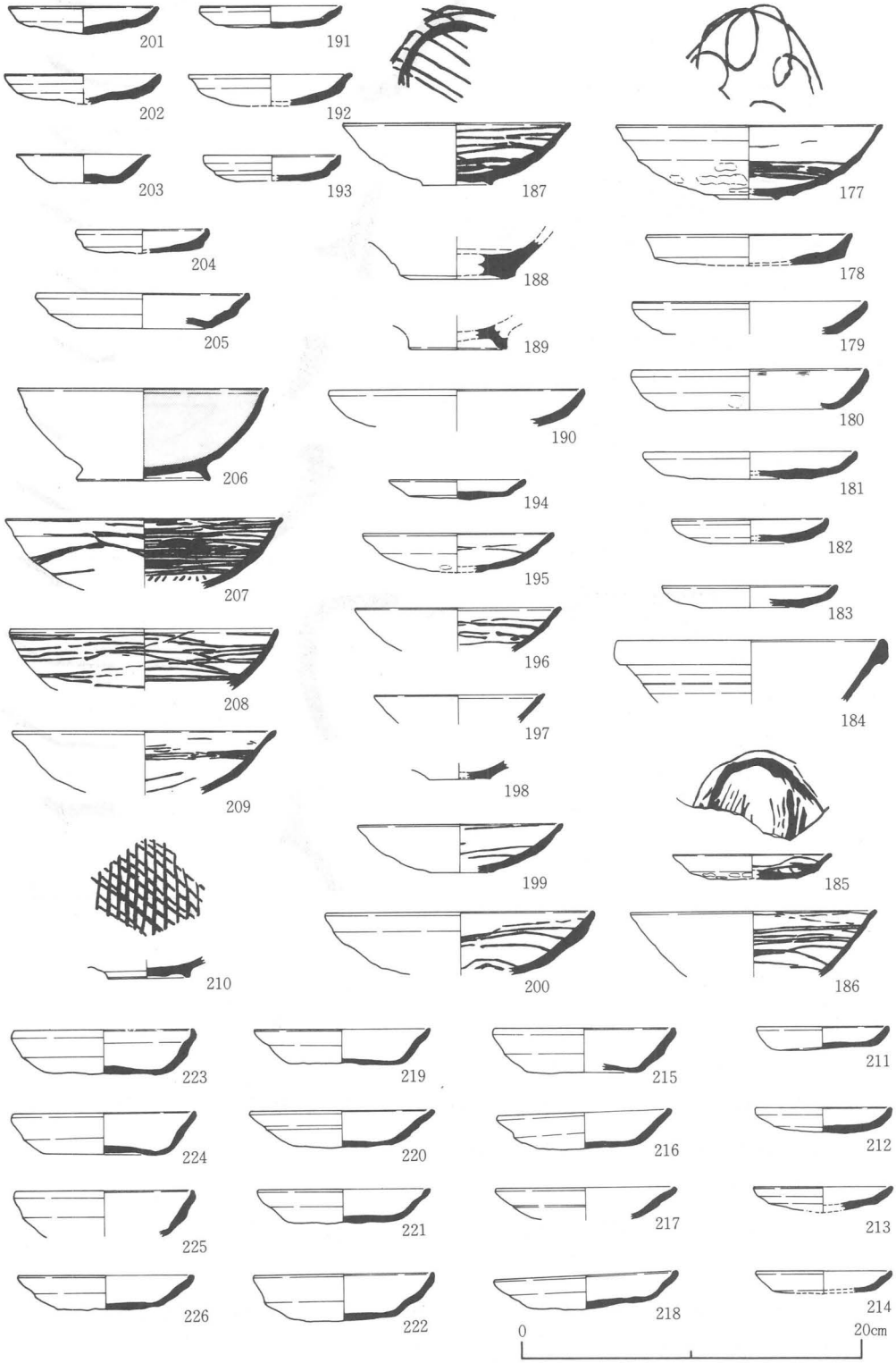
土師器(皿)が出土した。小皿(204)と大皿(205)があり、B$_4$型式のものである。

土坑12（第29図）

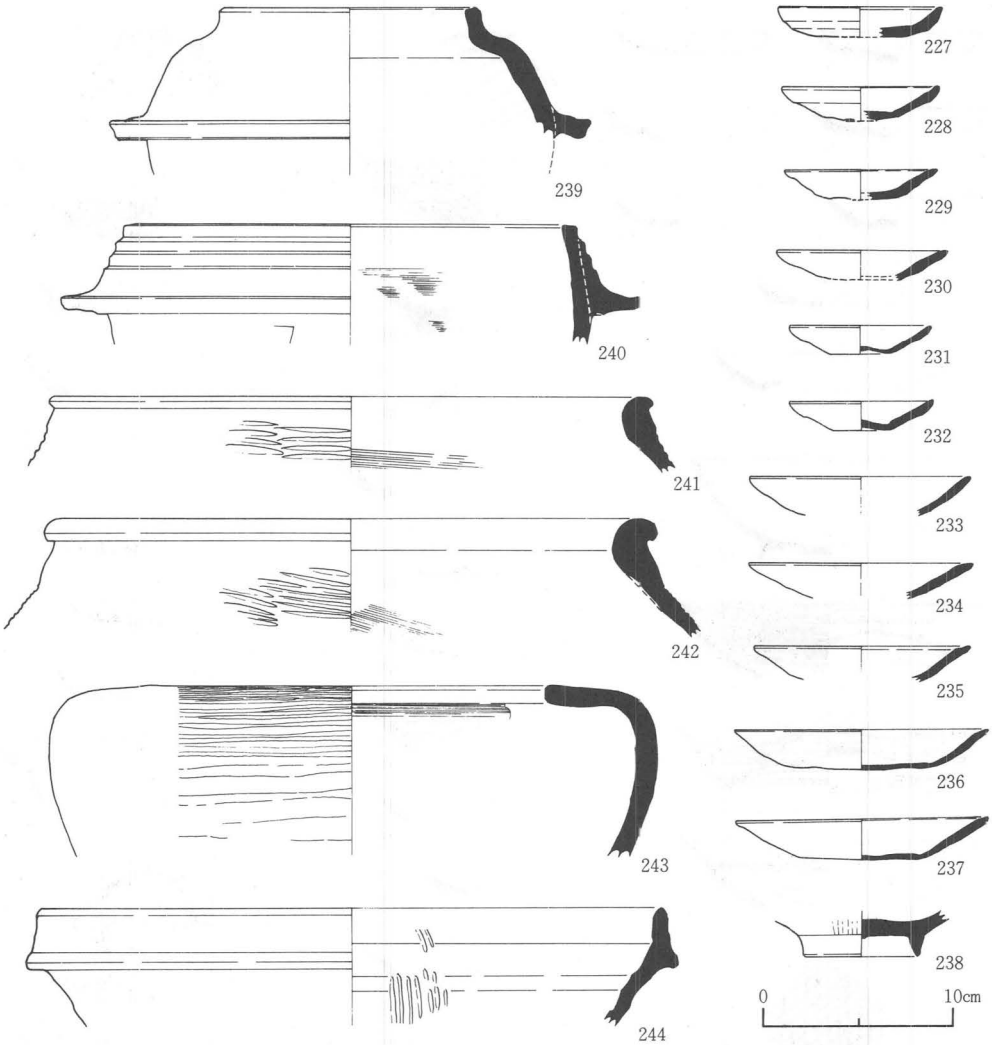
土師器(皿)が出土した。小皿であり、B$_1$型式のもの(201・202)とB$_2$型式のもの(203)がある。

井戸３（第29図）

黒色土器と瓦器が出土した。黒色土器は椀(206)である。高台が高く、八の字形に開く。内黒である。瓦器は椀があり、G型式のもの(207・208・213)とH型式のもの(209)がある。



第29図　井戸・土坑・ピット出土土器実測図



第30図　堀３出土土器実測図

ピット43（第29図）

土師器(皿)が出土した。大皿であり、B_1型式のもの(181)である。

ピット45（第29図）

土師器(皿)と輸入磁器(白磁)が出土した。皿は中皿であり、B_1型式のもの(183)である。白磁は椀で、口縁部が玉縁状を呈するもの(184)である。

ピット46（第29図）

土師器(皿)が出土した。小皿であり、B_3型式のもの(182)である。

ピット48（第29図）

瓦器(椀・皿)が出土した。椀はⅠ型式のもの(186)である。皿は小皿で、見込みに平行線の暗文を施すもの(185)である。

ピット54（第29図）

土師器(皿)と瓦器(椀)が出土した。皿は小皿で、B_5型式のもの(194)である。椀はＬ型式のもの(195)とＪ型式のもの(196)がある。

ピット56（第29図）

土師器(皿)が出土した。完形品が多くあり、埋納されたものと考えられる。小皿と中皿がある。小皿はB_1型式のもの(211～214)、中皿はB_4型式のもの(215～226)がある。いずれも褐色系である。

ピット59（第29図）

輸入磁器(白磁)が出土した。白磁は皿で、口縁部の残るもの(197)と底部のみのもの(198)がある。

ピット64（第29図）

瓦器(椀)が出土した。椀はＪ型式のもの(199)である。

ピット70（第29図）

瓦器(椀)が出土した。椀はＩ型式のもの(200)である。

堀３（第30図）

堀３からは土師器(皿・羽釜)、輸入磁器(白磁)、瓦器(羽釜・甕・火舎)、陶磁器(備前焼)が出土した。

土師器　皿と羽釜がある。皿は小皿、中皿、大皿がある。C_1型式のものが大部分である。小皿はB_1型式のもの(227)、C_1型式のもの(228～230)、C_1-a型式のもの(231・232)がある。中皿はC_1型式のもの(233～235)、大皿はC_1型式のもの(236・237)がある。227と233は褐色系、他は白色系である。羽釜はＥ型式のもの (239) がある。内面に多量の炭化物が付着する。

輸入磁器　白磁の椀 (238) がある。底部のみ残っており、高台は高く、断面が三角形を呈する。

瓦器　羽釜、甕、火舎がある。羽釜はＩ型式のもの (240) がある。甕は口縁部が短く外反するもの(241･242)であり、体部外面にタタキを施す。火舎は口縁部が水平に内弯するもの(243)であり、外面を丁寧なヘラミガキ調整する。

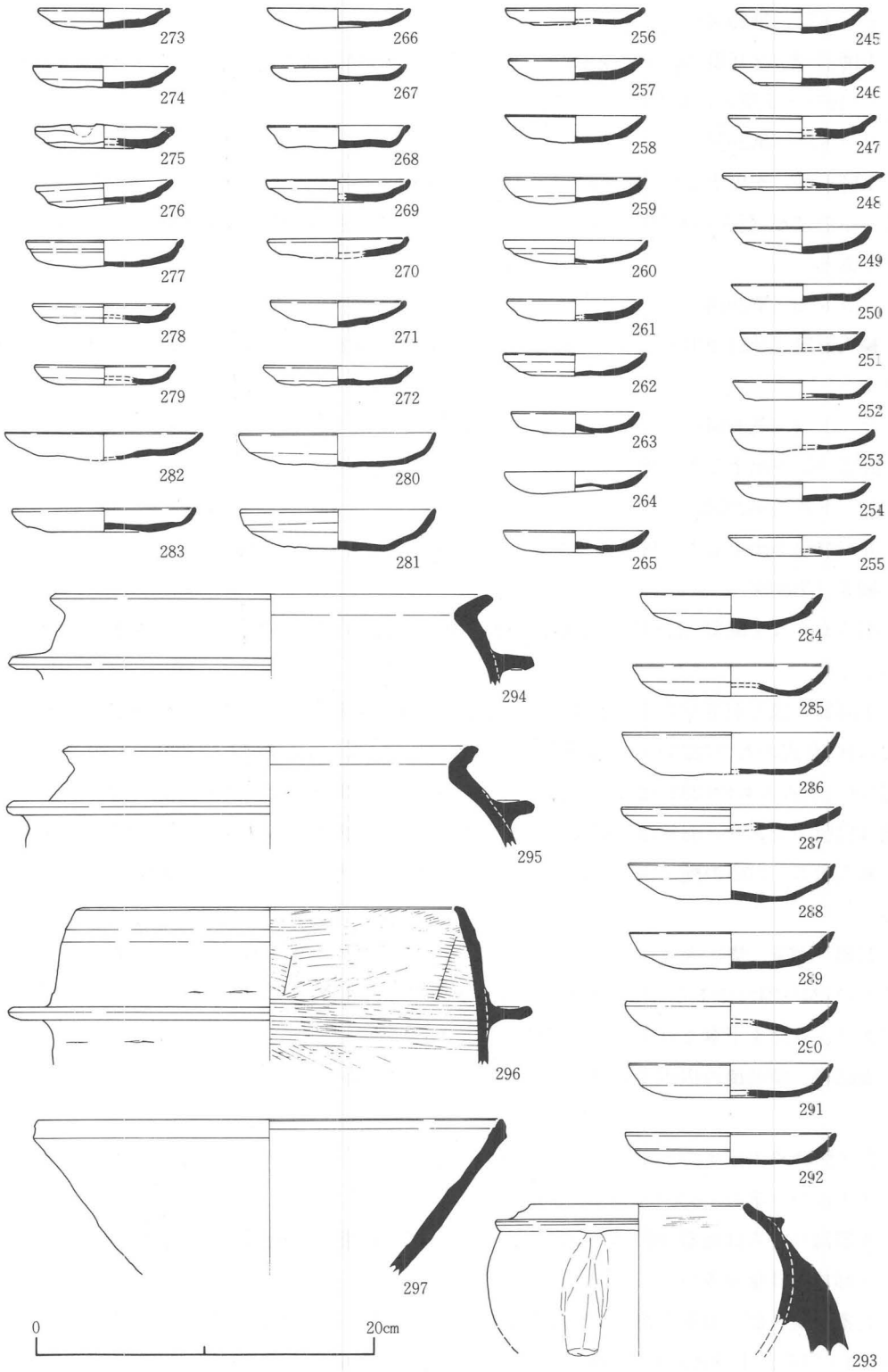
陶磁器　備前焼の摺鉢(244)がある。Ｂ型式のものである。

Ｄ地区遺構内出土の土器

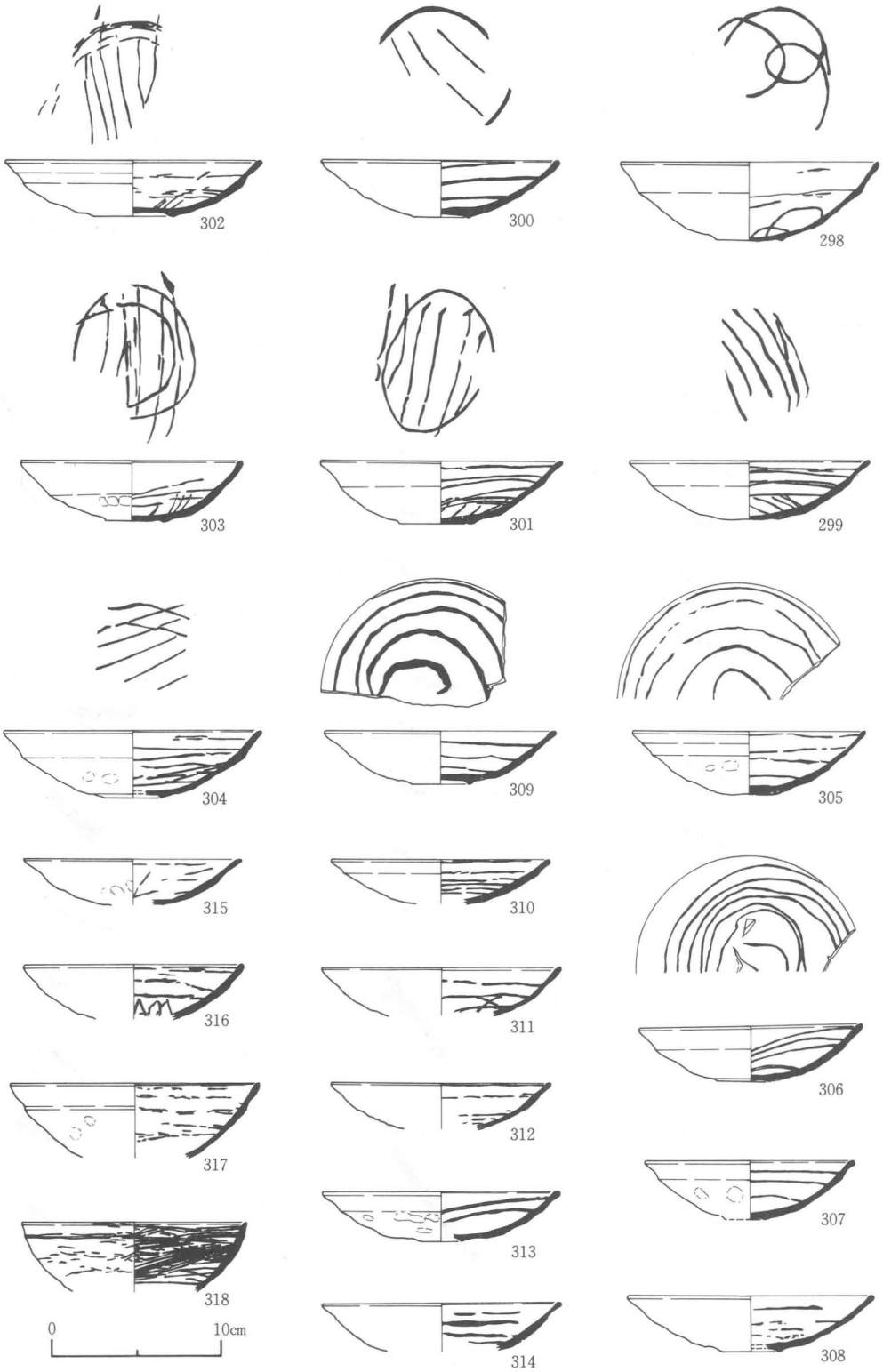
土器溜り（第31・32図）

土器溜りからは瓦器(椀・皿・羽釜)、土師器(皿・羽釜)、須恵器(捏鉢)が出土した。瓦器椀と土師器皿は量が多い。

瓦器　椀・皿・羽釜がある。椀はＦ型式のもの(318)、Ｈ型式のもの(317)、Ｉ型式のもの(298～304・316)、Ｊ型式のもの(305～315)がある。Ｉ・Ｊ型式のものが多い。Ｉ型式の見込みの暗文は連結輪状、平行線、ジグザグ状がある。皿は平底で口縁部がゆるく外反するもの(245～248)



第31図　土器溜り出土土器実測図

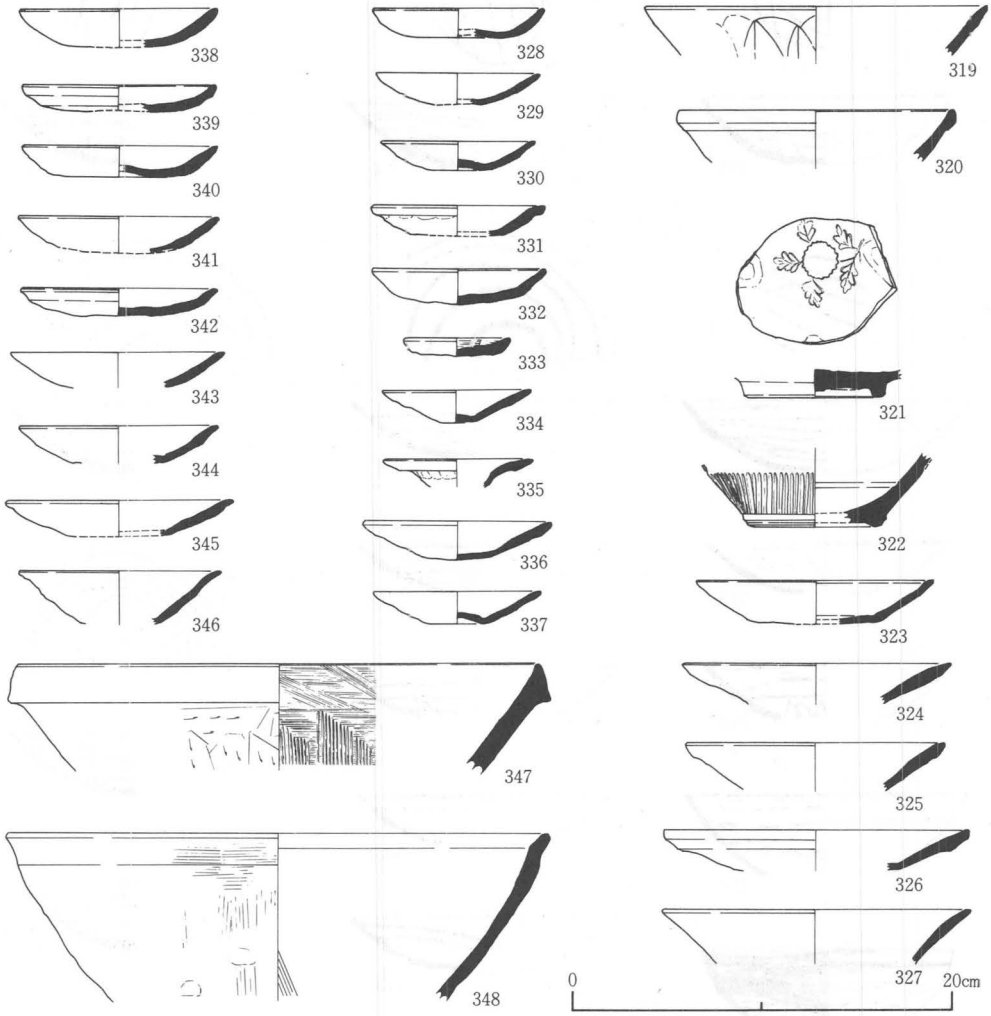


第32図　土器溜り出土土器実測図

であり、ヘラミガキ調整しない。羽釜はＪ型式のもの(296)とＫ型式のもの(293)がある。

土師器　皿と羽釜がある。皿は小皿、中皿、大皿があり、Ｂ型式のみである。小皿はB_1型式のもの(249～262)、B_1-a型式のもの(263～266)、B_2型式のもの(268)、B_3型式のもの(269～271)、B_4型式のもの(272～277)、B_4-a型式のもの(278・279)がある。中皿はB_1型式のもの(280・281)、B_3型式のもの(282)、B_3-a型式のもの(283)、B_4型式のもの(284)、B_4-a型式のもの(285)がある。大皿はB_1型式のもの(286～289)、B_3-a型式のもの(290)、B_4型式のもの(292)がある。すべて褐色系である。羽釜はＣ型式のもの(294・295)がある。

須恵器　捏鉢(297)がある。Ｄ型式のものであり、東播系である。



第33図　整地層２出土土器実測図

A地区整地層2内出土の土器（第33図）

整地層2からは輸入磁器(青磁・白磁)、土師器(皿)、瓦器(摺鉢)が出土した。出土量は少ない。

輸入磁器　青磁と白磁がある。青磁は椀(319・321)がある。319は体部外面に連弁文、321は見込みに菊花状のヘラ描き文様を施す。白磁は椀(320・322)があり、320は口縁部が玉縁状を呈する。

土師器　皿がある。皿は小皿、中皿、大皿があり、B、C型式のものがある。小皿はB_1型式のもの(328・329)、B_2型式のもの(331・332)、B_5型式のもの(333)、C_1型式のもの(334～336)、C_1-a型式のもの(337)、C_2-a型式のもの(330)がある。中皿はB_1型式のもの(338・339)、B_1-a型式のもの(340)、B_2型式のもの(341・342)、C_1型式のもの(343・344)、C_2型式のもの(345・346)がある。大皿はC_1型式のもの(323～327)がある。24点中で褐色系13点、白色系11点である。

瓦器　摺鉢がある。摺鉢はG型式のもの(347)とE型式のもの(348)がある。

B地区整地層1内出土の土器（第34～40図）

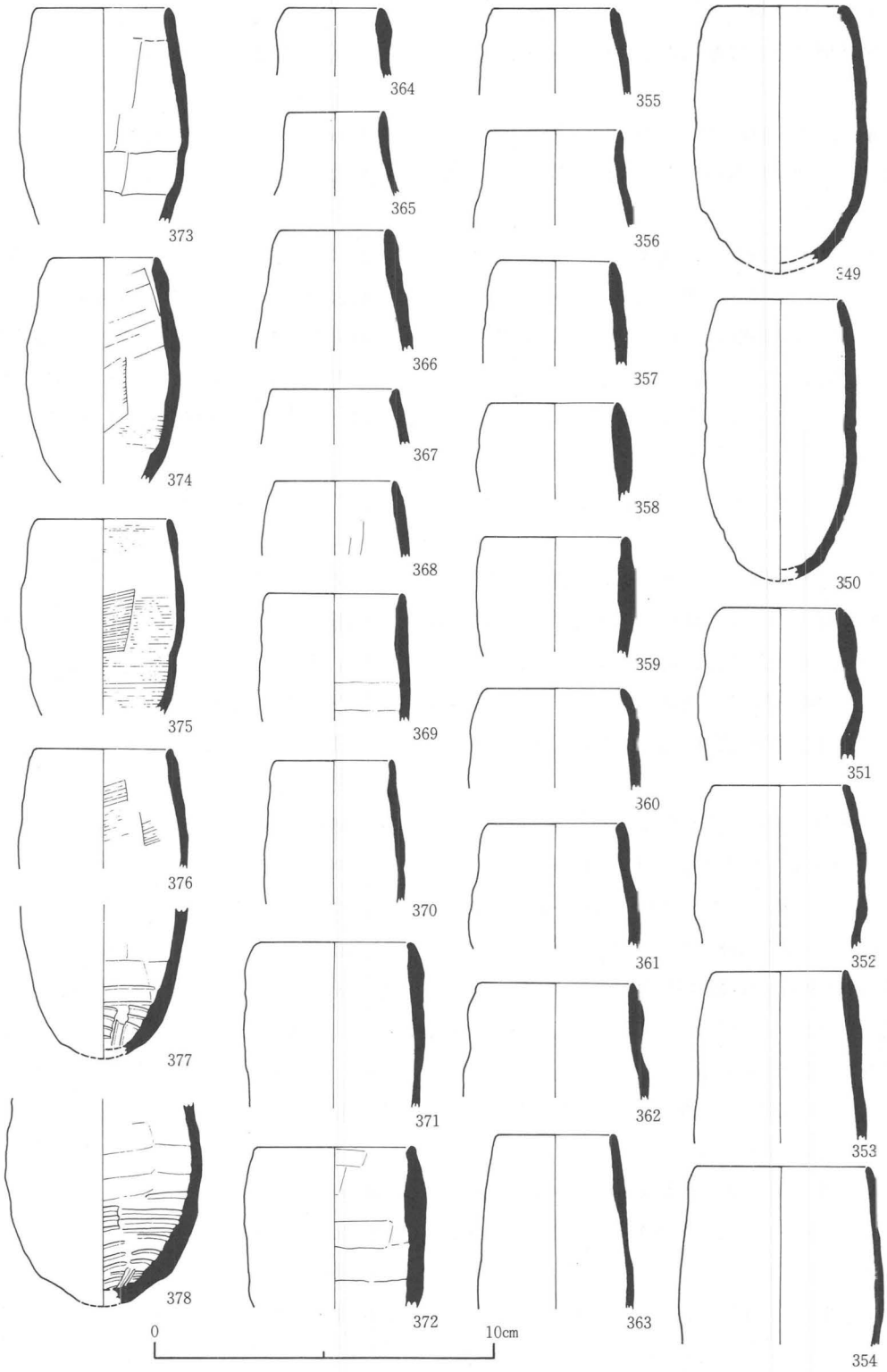
整地層1からは古墳～奈良時代の土器と中世の土器が出土した。古墳～奈良時代のものは製塩土器、韓式系土器、須恵器(杯・壺・蓋・甕・瑞・高杯・鉢)、土師器(甕・羽釜・高杯・杯・皿・鉢・蓋)がある。古墳～奈良時代の土器は前項で記したので各々については省略する。中世の土器は土師器(羽釜・皿)、陶磁器(備前焼)、瓦器(椀・皿)、輸入磁器(青磁・白磁)が出土した。

土師器　羽釜と皿がある。羽釜はC型式のもの(459～461)、D型式のもの(462・463)、G型式のもの(464)、B型式のもの(465)がある。皿は小皿、中皿、大皿があり、A～C型式のものがある。小皿はA型式のもの(485～490)、B_1型式のもの(491～496)、B_2型式のもの(497)、B_3型式のもの(498・499)、B_4型式のもの(500～502)、C_1型式のもの(503)、C_1-a型式のもの(504)がある。中皿はB_1型式のもの(505～507)、B_2型式のもの(508・509)、B_3型式のもの(510・511)、B_4型式のもの(512～515)、B_4-a型式のもの(516)、C_1型式のもの(517)、C_2型式のもの(518)がある。大皿はB_1型式のもの(519～523)、B_1-a型式のもの(524)、B_2型式のもの(525～527)、C_1型式のもの(528～530)、C_2型式のもの(531)がある。47点中で褐色系32点、白色系15点である。

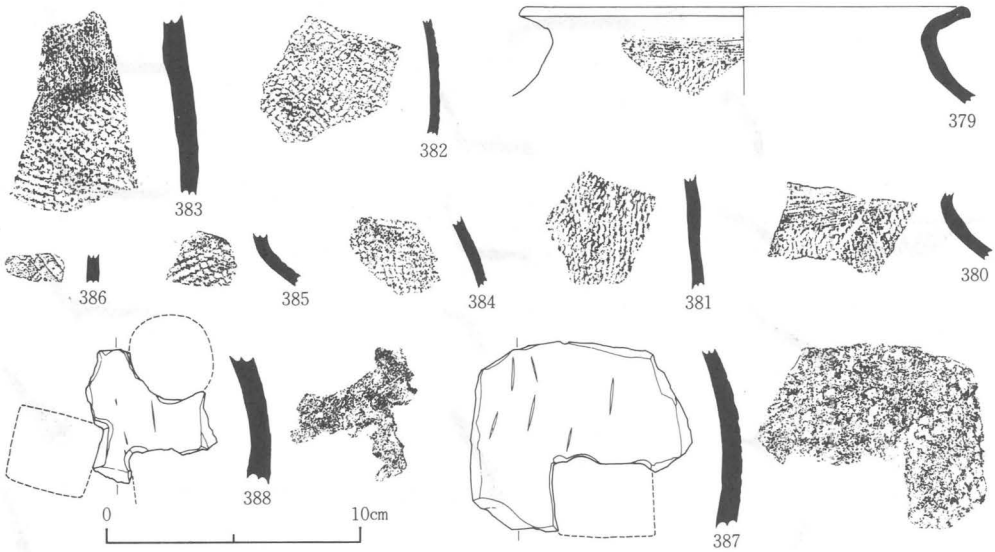
陶磁器　備前焼の摺鉢(466)がある。A型式のものである。

瓦器　椀と皿がある。椀はC型式のもの(467)、D型式のもの(468)、H型式のもの(469)、L型式のもの(470)がある。皿は小皿であり、丸底に近い平底の底部で、内面に暗文とヘラミガキを施すもの(471)と平底で口縁部が外反し、内面に暗文とヘラミガキを施すもの(472・473)、内面にヘラミガキを施すもの(474)、ナデ調整だけで終るもの(483・484)がある。

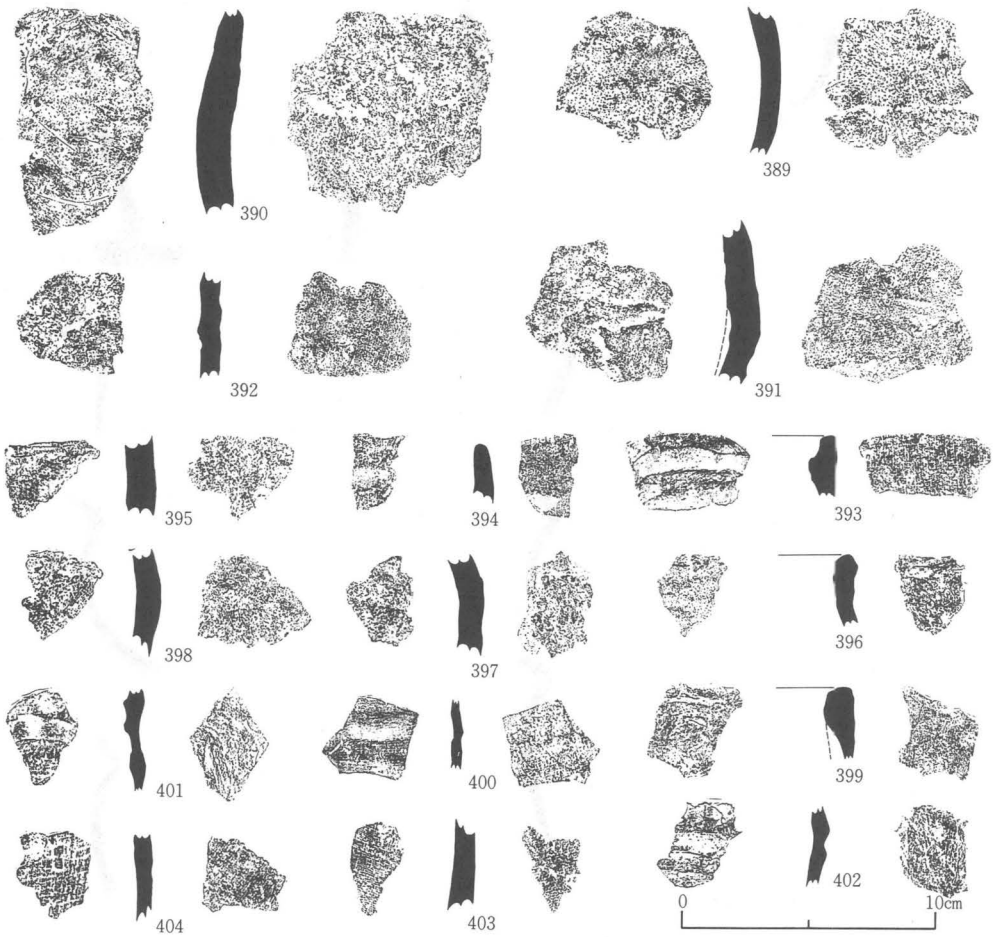
輸入磁器　青磁と白磁がある。青磁は椀(480)と合子(482)がある。白磁は椀があり、口縁部



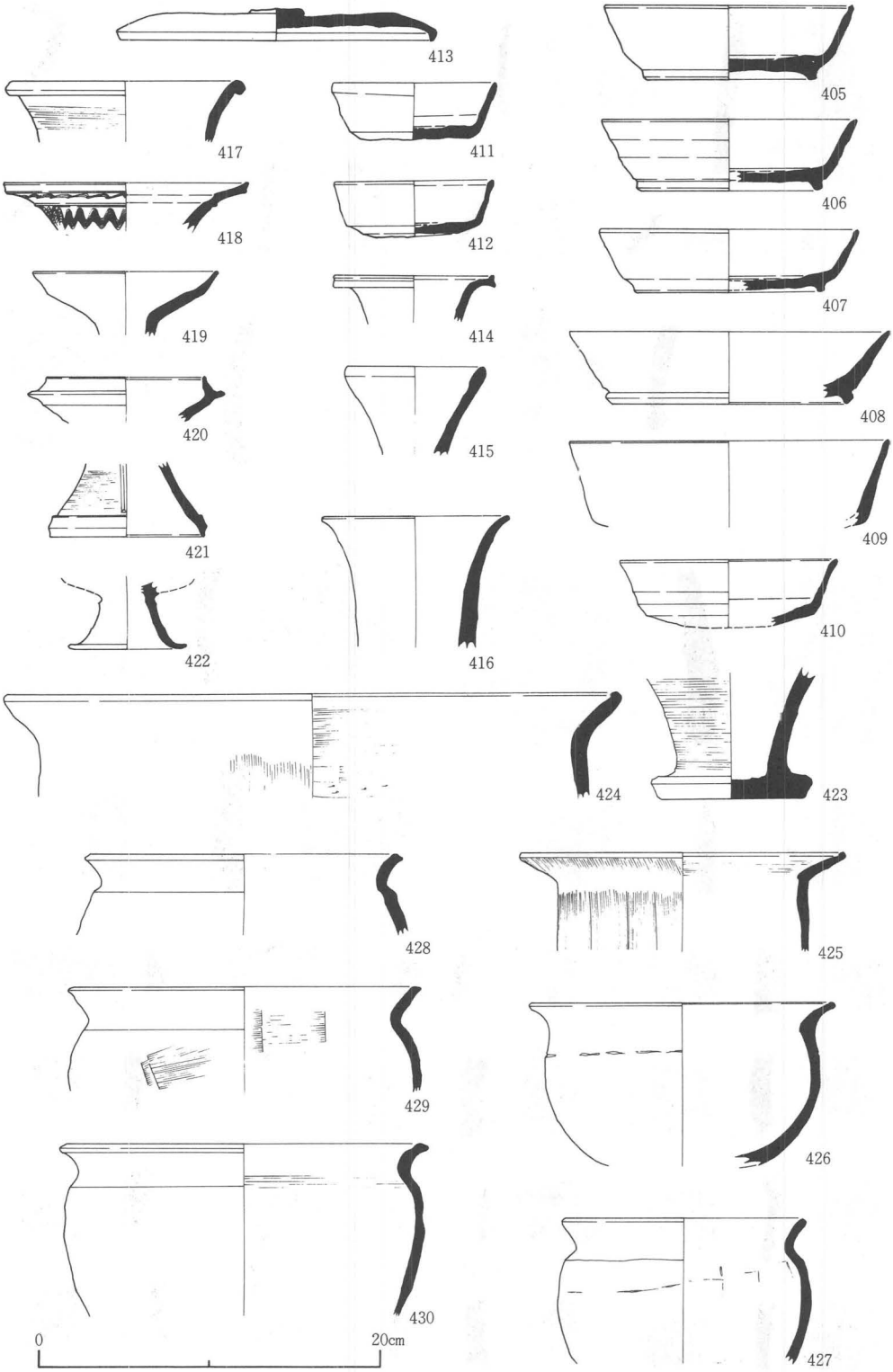
第34図　整地層１出土土器実測図



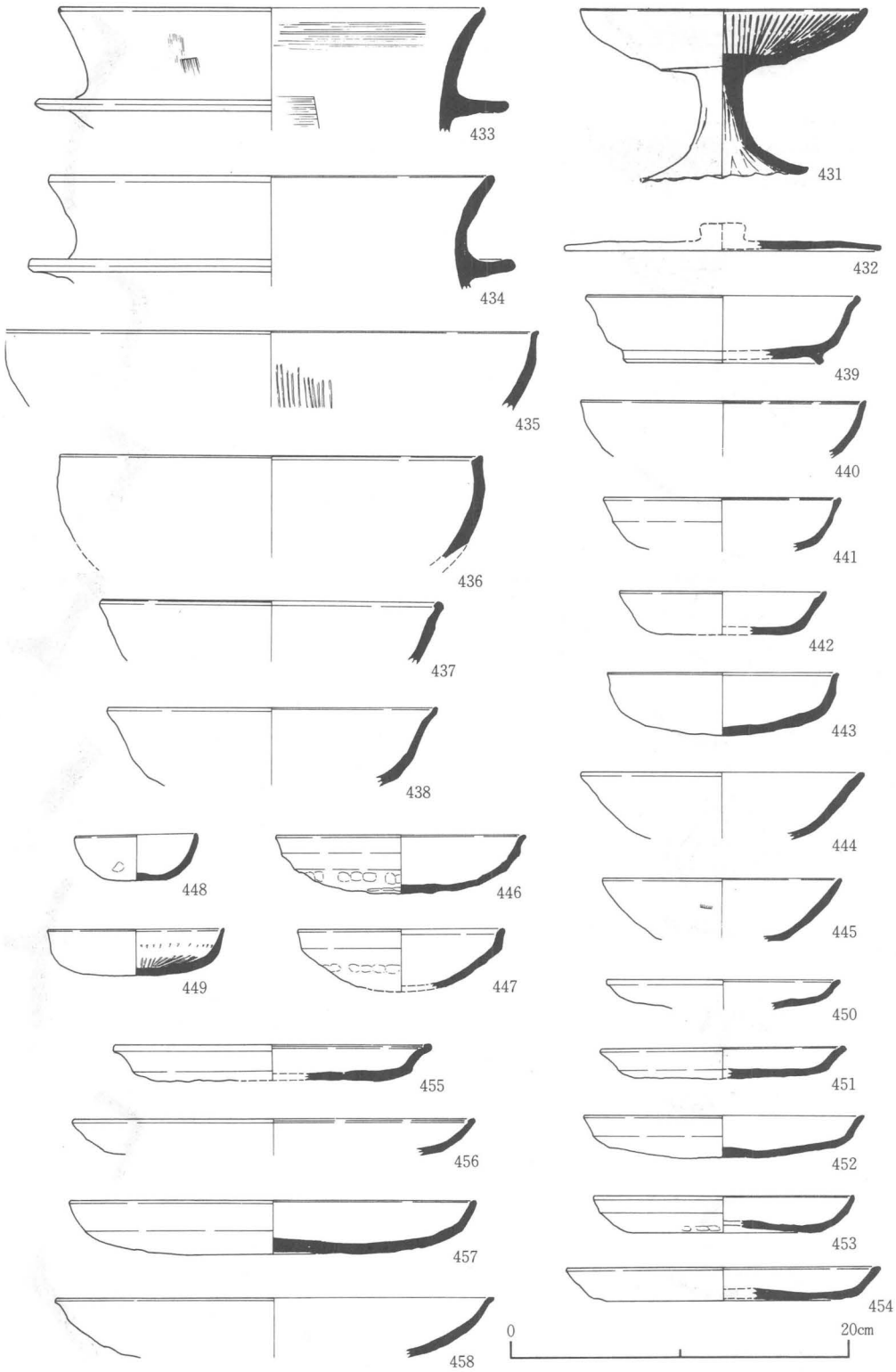
第35図　整地層１出土土器実測図



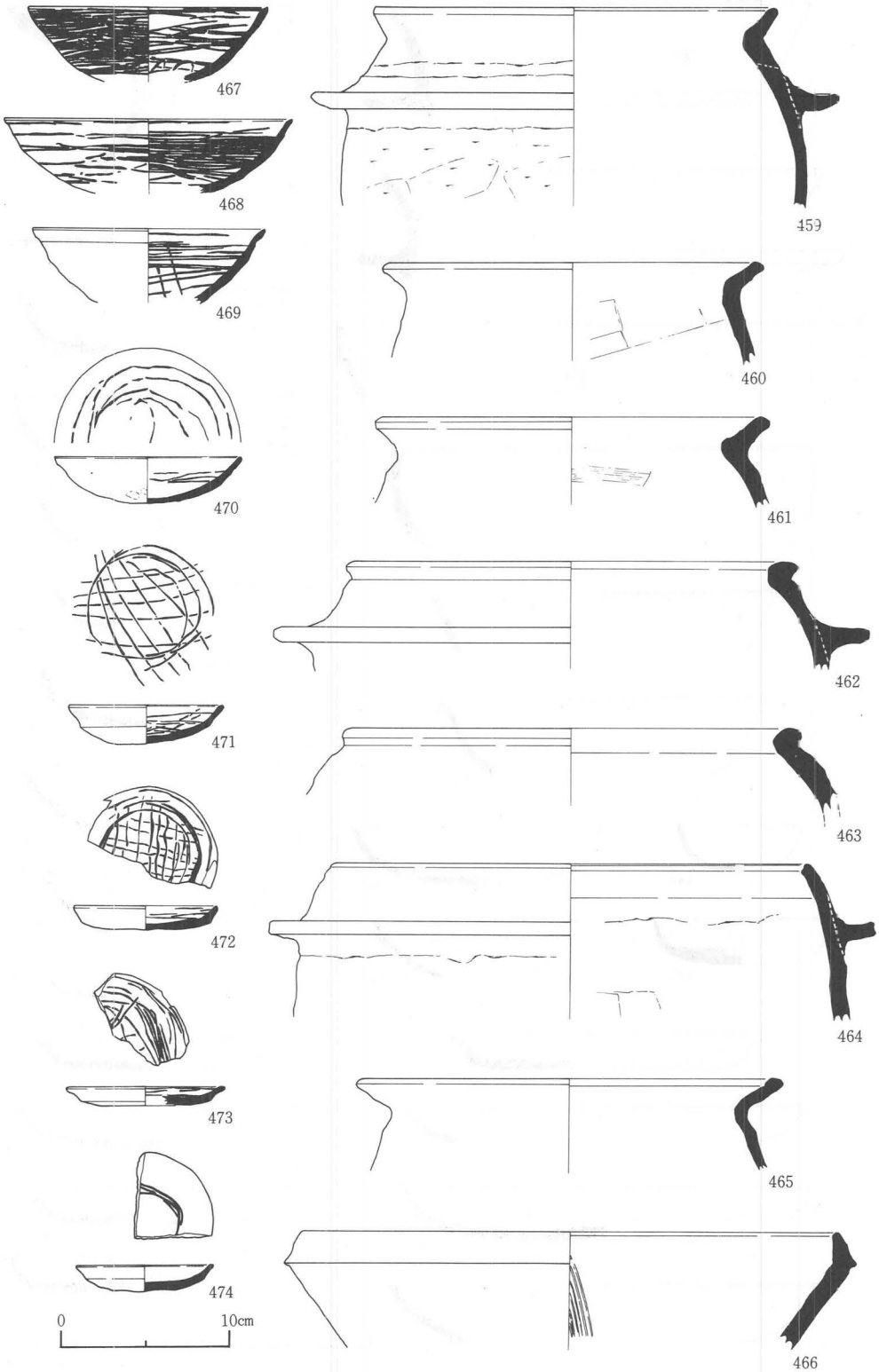
第36図　整地層１出土土器実測図



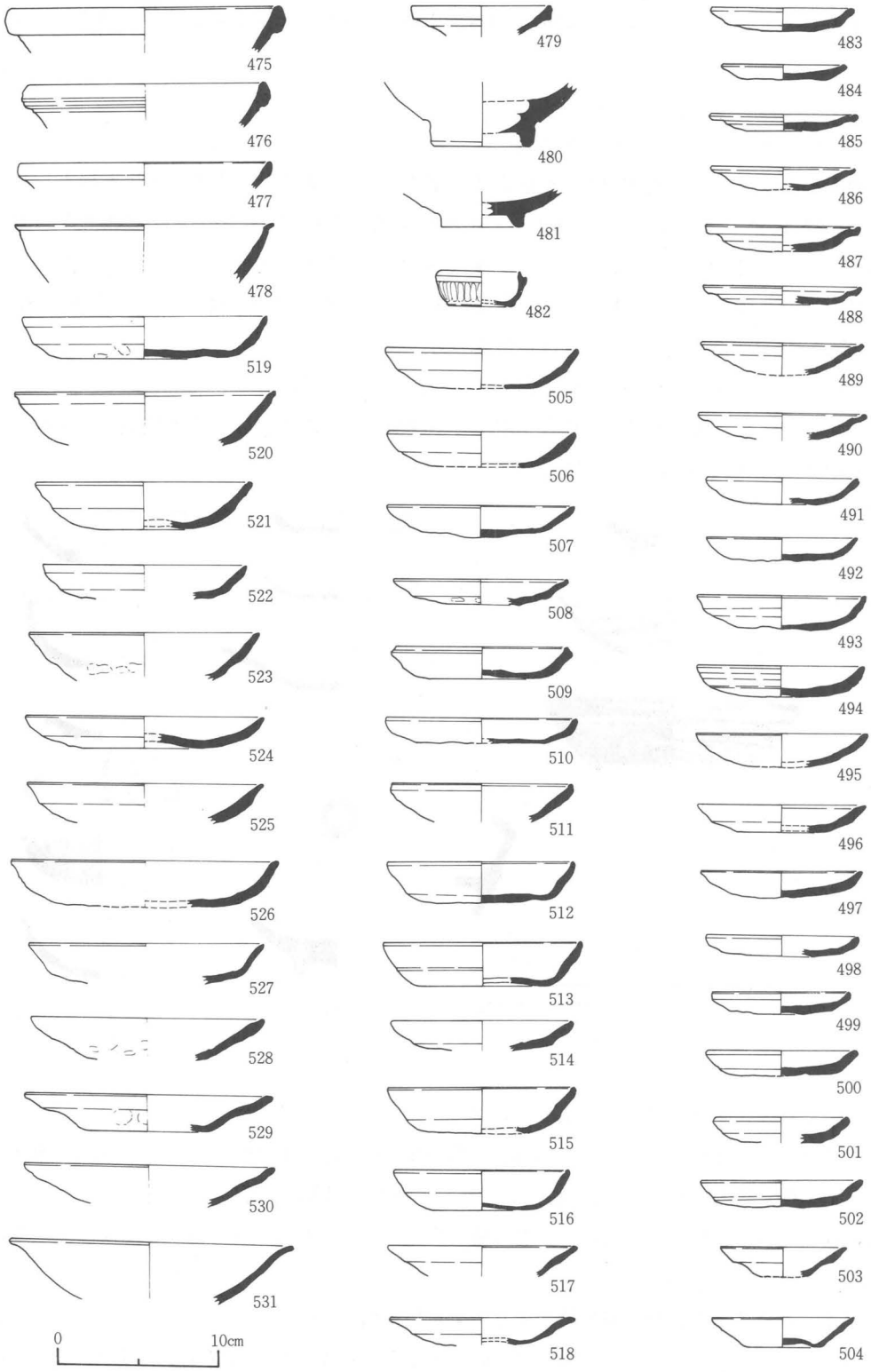
第37図　整地層１出土土器実測図



第38図　整地層１出土土器実測図



第39図　整地層１出土土器実測図



第40図　整地層１出土土器実測図

が玉縁状を呈するもの(475～477・479)、口縁部が外反するもの(478)、底部だけが残るもの(481)がある。

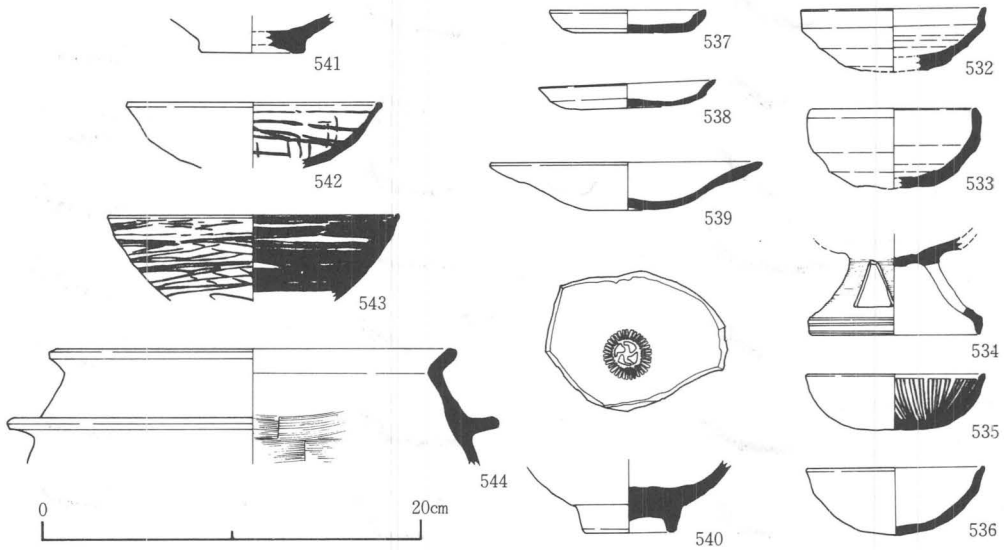
C地区整地層1内出土の土器（第41図）

整地層1からは古墳～奈良時代の須恵器(杯・高杯)、土師器(杯)と中世の土器が出土した。須恵器の杯は532・533、高杯は544である。土師器の杯は暗文を施すもの(535)と施さないもの(536)がある。中世の土器は土師器(皿・羽釜)、輸入磁器(青磁・白磁)、瓦器(椀)がある。

土師器　皿と羽釜がある。皿は小皿と大皿がある。小皿はB_4型式のもの(537・538)、大皿はC_1型式のもの(539)がある。羽釜はC型式のもの(544)がある。

輸入磁器　青磁(540)と白磁(541)の椀があるが、いずれも底部のみが残る。

瓦器　椀がある。椀はI型式のもの(542)と口縁端部に沈線をめぐらす大和型とよばれるもの(543)がある。543は内外面とも密なヘラミガキを施す。



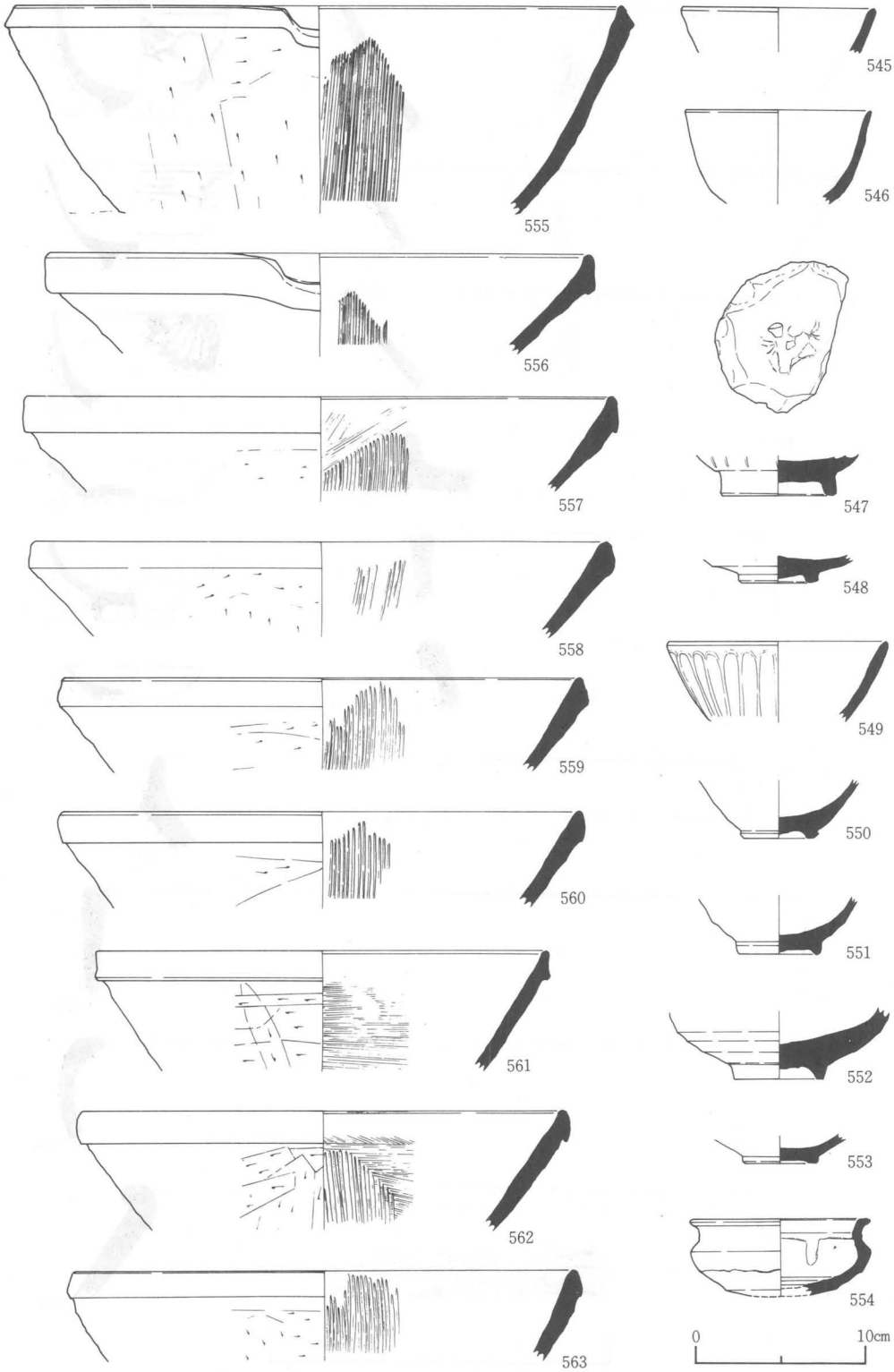
第41図　整地層1出土土器実測図

D地区自然流路内出土の土器（第42～45図）

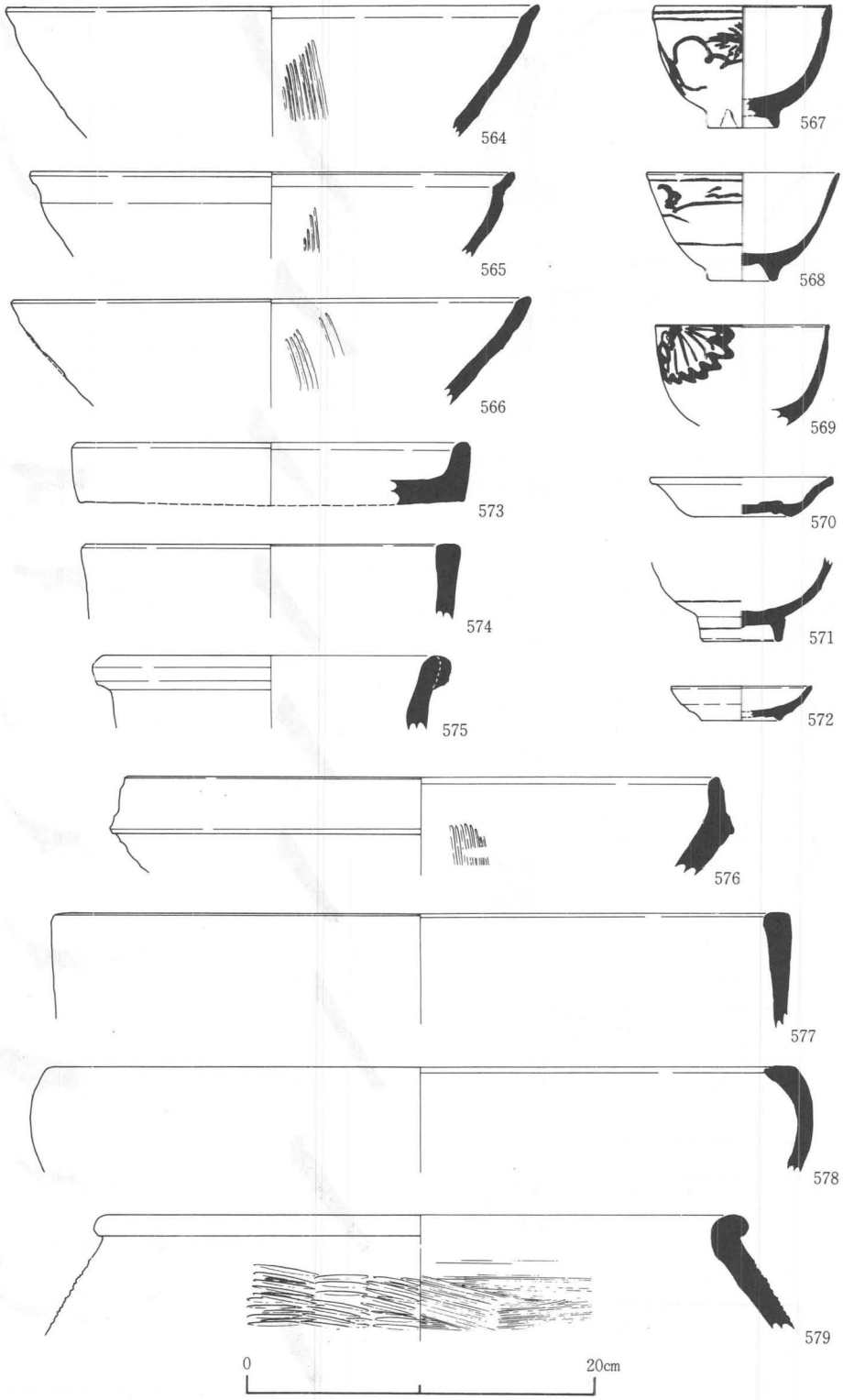
自然流路内からは輸入磁器(青磁・白磁)、陶磁器(瀬戸焼・美濃焼・備前焼)、瓦器(摺鉢・盤・火舎・甕・羽釜・鍋・鉢・椀・皿・ミニチュア羽釜)、土師器(皿)が出土した。

輸入磁器　青磁の椀(545～547)と白磁の椀(548)がある。547は体部外面に連弁文、見込みに花状のヘラ描き文様を描く。

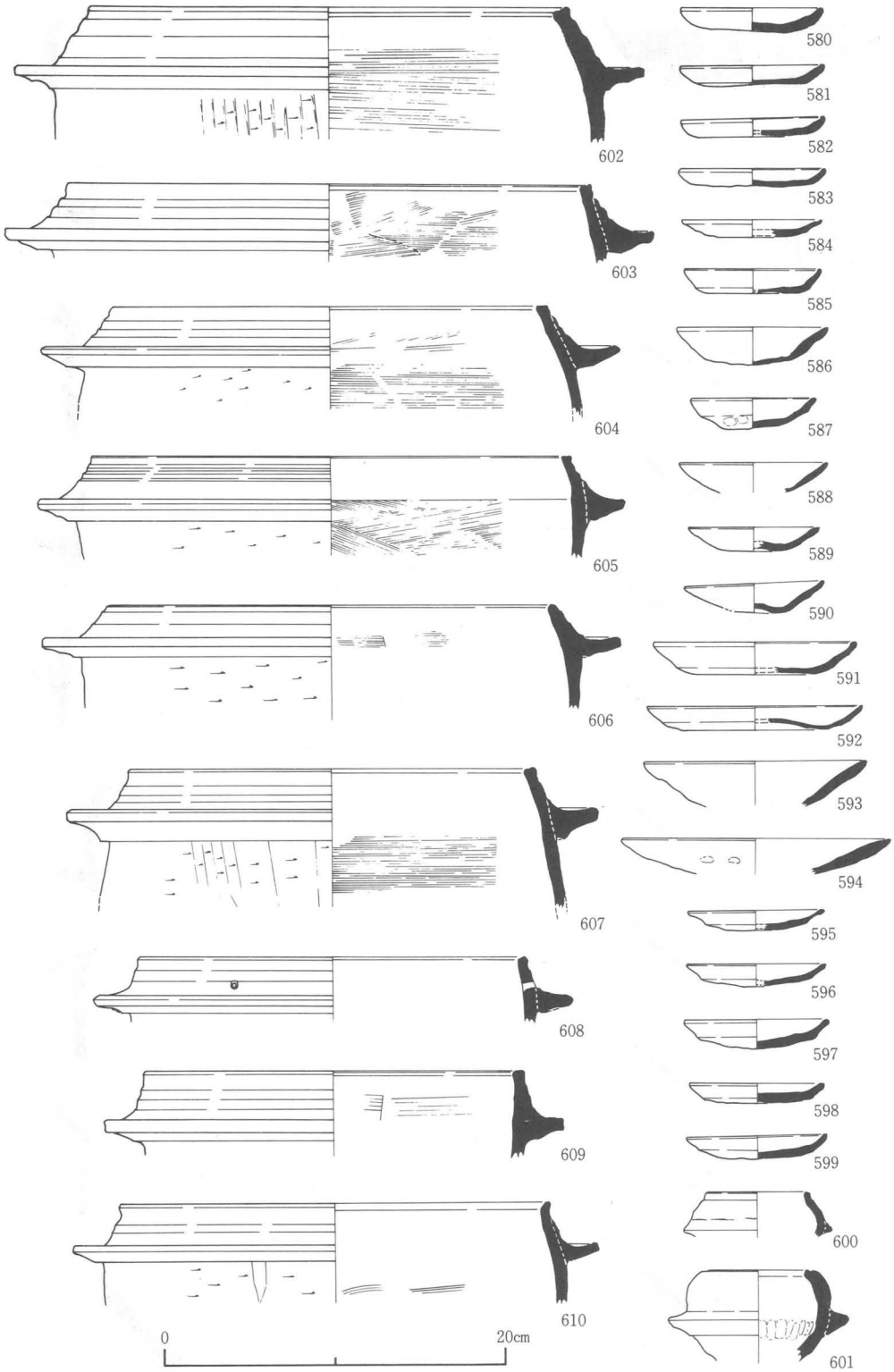
陶磁器　瀬戸焼、美濃焼、備前焼がある。瀬戸焼は椀(550・551)と鉢(554)がある。美濃焼は高台のついた皿(572)と鉄釉のかかった皿(570)がある。備前焼は口縁部が玉縁状を呈する壺(575)とB型式の摺鉢がある。他に数点の陶器がある。



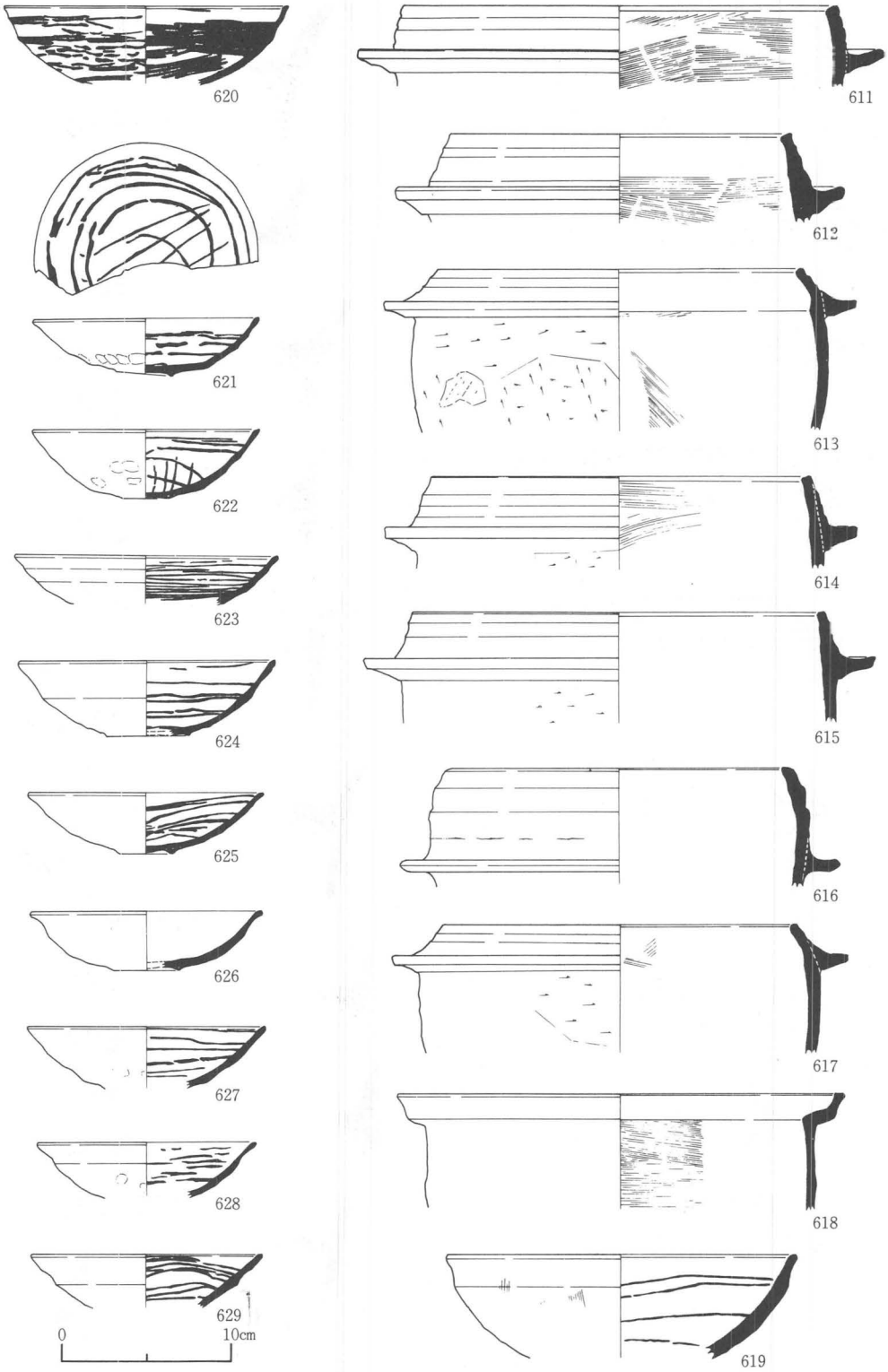
第42図　自然流路出土土器実測図



第43図　自然流路出土土器実測図



第44図　自然流路出土土器実測図



第45図　自然流路出土土器実測図

瓦器　摺鉢、盤、火舎、甕、羽釜、鍋、鉢、椀、皿、ミニチュア羽釜がある。摺鉢と羽釜の量が多い。摺鉢はG型式のもの(555～563)、E型式のもの(564・565)、F型式のもの(566)がある。盤は底部より口縁部が短く立ち上がるもの(573)である。火舎は口縁部が上方へ伸びるもの(574・577)と内弯するもの(578)がある。甕は口縁部が短く外反し、体部外面にタタキを施すもの(579)である。羽釜はF型式のもの(602～617)である。602は口縁部に小孔を穿つ。鍋(618)は張りの少ない胴部より口縁部が外反した後、上方へ立ち上がる。鉢は口縁部がゆるく外反するもの(619)であり、内面にヘラミガキを施す。椀はF型式のもの(620)、I型式のもの(621・622)、J型式のもの(623～629)がある。皿は小皿で、口縁部が外反するもの(595～599)である。ヘラミガキや暗文を施さない。ミニチュア羽釜は実用品より鍔が短いもの(600・601)である。

土師器　皿がある。小皿、中皿、大皿があり、B、C型式のものがある。小皿はB_1型式のもの(580～583)、B_2型式のもの(584)、B_4型式のもの(585)、C_1型式のもの(586～588)、C_1-a型式のもの(589・590)がある。中皿はB_4型式のもの(591)がある。大皿はB_1-a型式のもの(592)とC_1型式のもの(593・594)がある。589・593・594は白色系であり、他は褐色系である。

2．瓦（第46～51図）

瓦は白鳳～室町時代に至る時期のものが出土している。室町時代のものは主にC地区の堀3より出土した。軒平瓦、軒丸瓦、鳥衾、飾り瓦などがあるが、圧倒的に丸瓦、平瓦の出土量が多い。軒平瓦、軒丸瓦の詳細は第6・7表に記す。

1～5は重孤文軒平瓦である。顎は貼りつけの段顎形である。4のみ顎面に5条の深い凸形の並行線文を施す。1・3・5は同型であり、瓦当部に5重孤文を施す。平瓦部凹面は布目痕を残し、凸面は板状工具でナデて仕上げる。2は瓦当部に4重孤文を施し、平瓦部凹凸面を板状工具でナデて仕上げる。4は瓦当部に6重孤文を施し、平瓦部凹面に布目痕を残し、凸面を板状工具でナデて仕上げる。白鳳時代。

6・7は偏行唐草文軒平瓦である。顎は不明。外区は珠文と鋸歯文で飾る。内区は連続波状の茎から2本の蕨手が派生した形である。平瓦凹凸面は板状工具でナデて仕上げる。白鳳時代。

8・9は均整唐草文軒平瓦である。8は削り出しの曲線顎である。9の顎は不明。外区は珠文で飾る。9は茎より2本の蕨手が派生した形である。8は平瓦部凹部に布目痕が残り、凸部は板状工具でナデて仕上げる。9は平瓦部凹部を板状工具で仕上げる。凸部は不明。奈良時代。

10・11・13～16は均整唐草文軒平瓦である。顎は張りつけの段顎形である。瓦当部は断面四角形の周縁をめぐらす。10・14・15は瓦当部に界線を有する。平瓦部凹凸面はナデて仕上げる。11は5葉の中心花から左右に支葉が派生する。15の中心花は菱形の中に十字を表わす。平安時代。

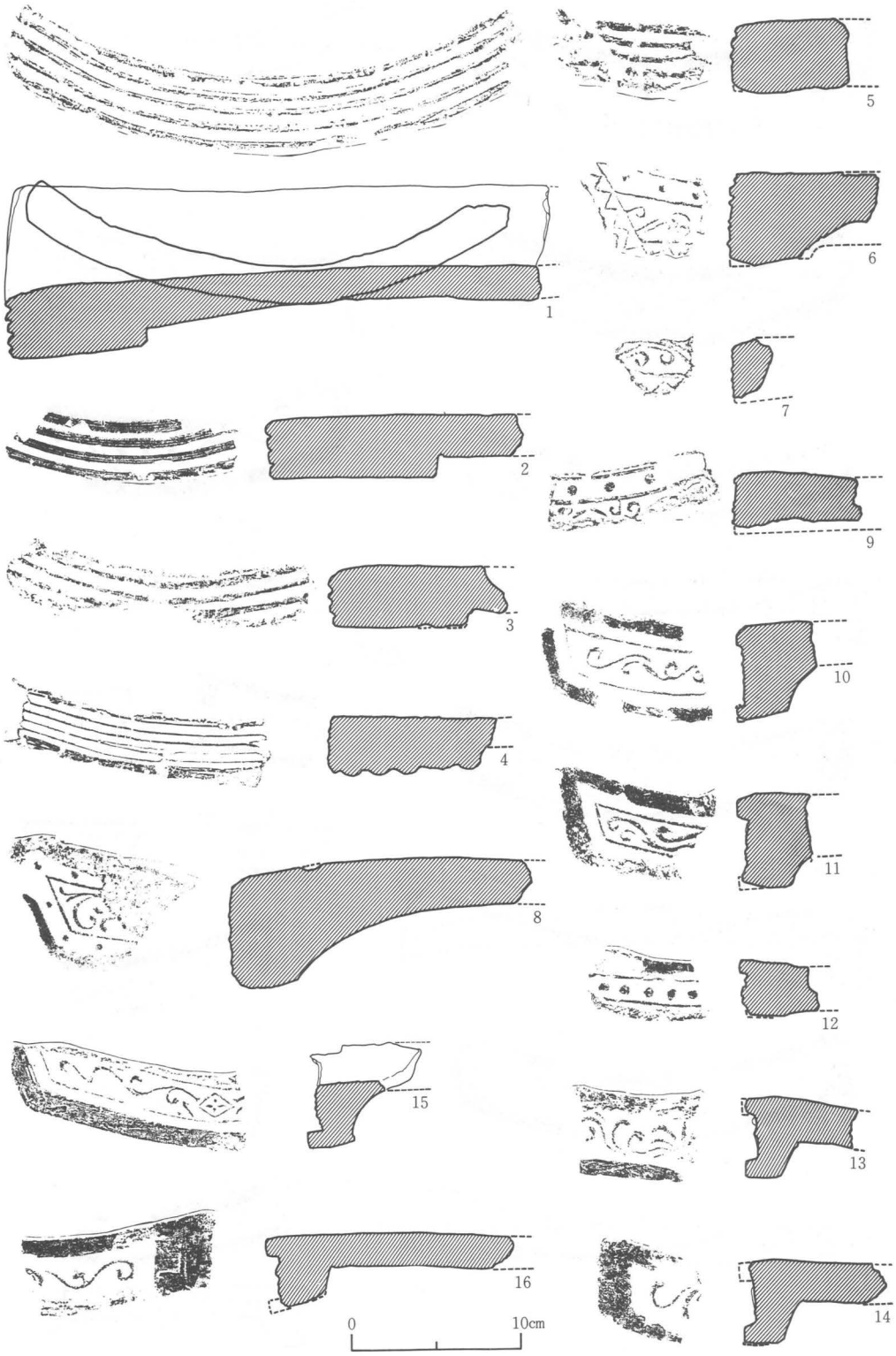
12は連珠文軒平瓦である。顎は曲線顎である。瓦当部は断面四角形の周縁をめぐらし、界線

第6表　軒平瓦観察表

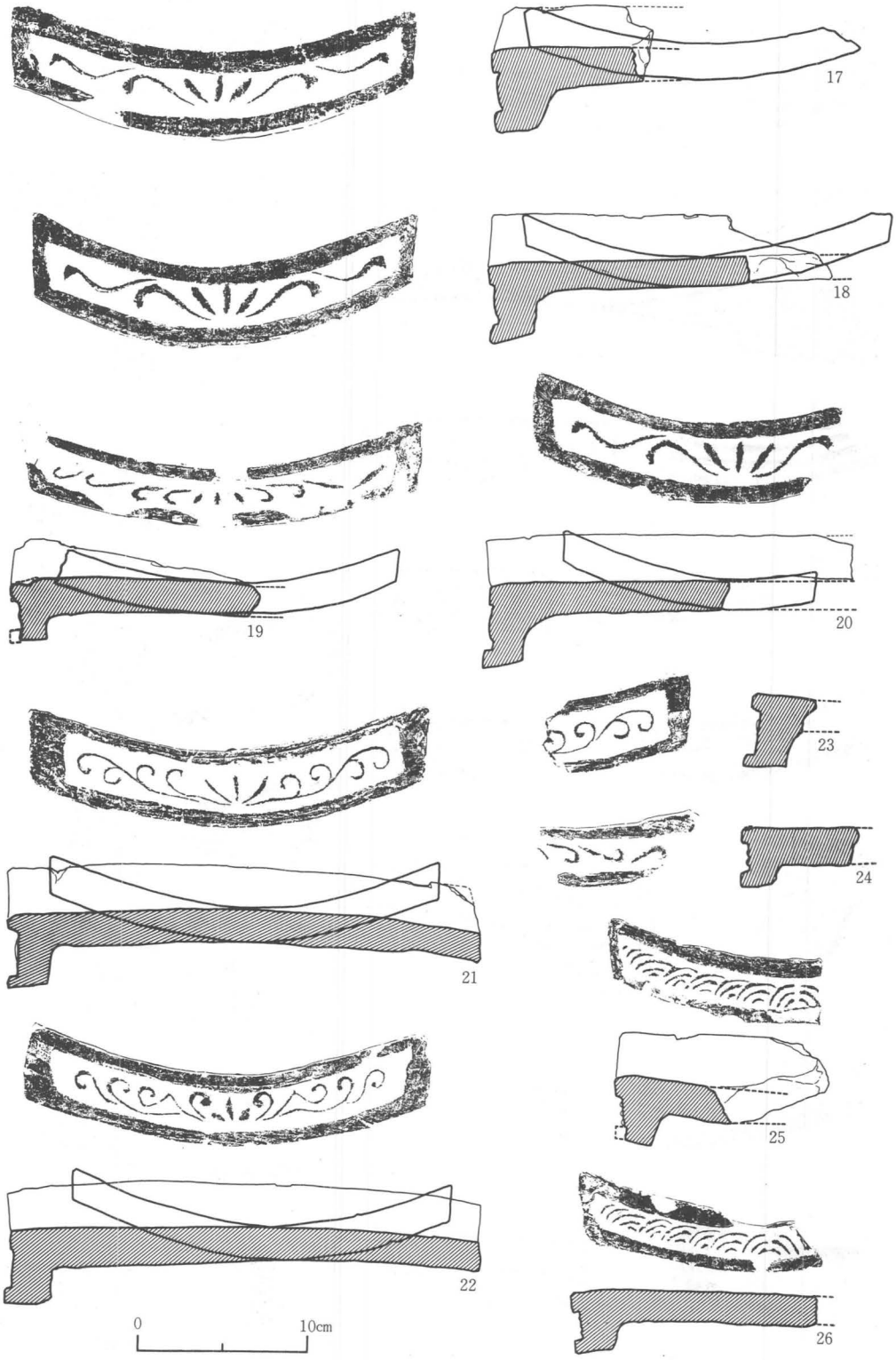
番号	出土地点	幅(mm)	顎幅(mm)	周縁		外区		内区	
				幅(mm)	高さ(mm)	文様	幅(mm)	文様	幅(mm)
1	C地区 井戸3		83					重孤文	
2	C地区 井戸3		103					重孤文	
3	C地区 井戸3		80					重孤文	
4	B地区 整地層1		91					重孤文	
5	D地区 自然流路							重孤文	
6	C地区 堀3		42			珠文 線鋸歯文	15	偏行唐草文	25
7	B地区 落ち込み1					線鋸歯文	11	偏行唐草文	
8	B地区 堀2		41			珠文	12	均整唐草文	28
9	D地区 自然流路							均整唐草文	
10	B地区 整地層1		30	12	6			均整唐草文	26
11	C地区 土坑10		32	11	7			均整唐草文	19
12	D地区 自然流路		27	7	5			連珠文	15
13	C地区 整地層1		22	10	7			均整唐草文	26
14	C地区 整地層1		25	10	8			均整唐草文	23
15	C地区 土坑10		27	10	10			均整唐草文	20
16	B地区 堀2		35	10	7			均整唐草文	25
17	C地区 堀3	240	25	13	5			均整唐草文	22
18	C地区 堀3	229	27	11	6			均整唐草文	22
19	C地区 堀3	235	28	9	4			均整唐草文	21
20	C地区 堀3		25	7	5			均整唐草文	25
21	C地区 堀3	237	24	7	6			均整唐草文	25
22	C地区 堀3	236	24	11	5			均整唐草文	26
23	C地区 堀3		26	7	7			均整唐草文	25
24	C地区 堀3		21	8	5			均整唐草文	15
25	C地区 堀3		23	10	4			波状文	15
26	C地区 堀3		23	8	5			波状文	15

第7表　軒丸瓦観察表

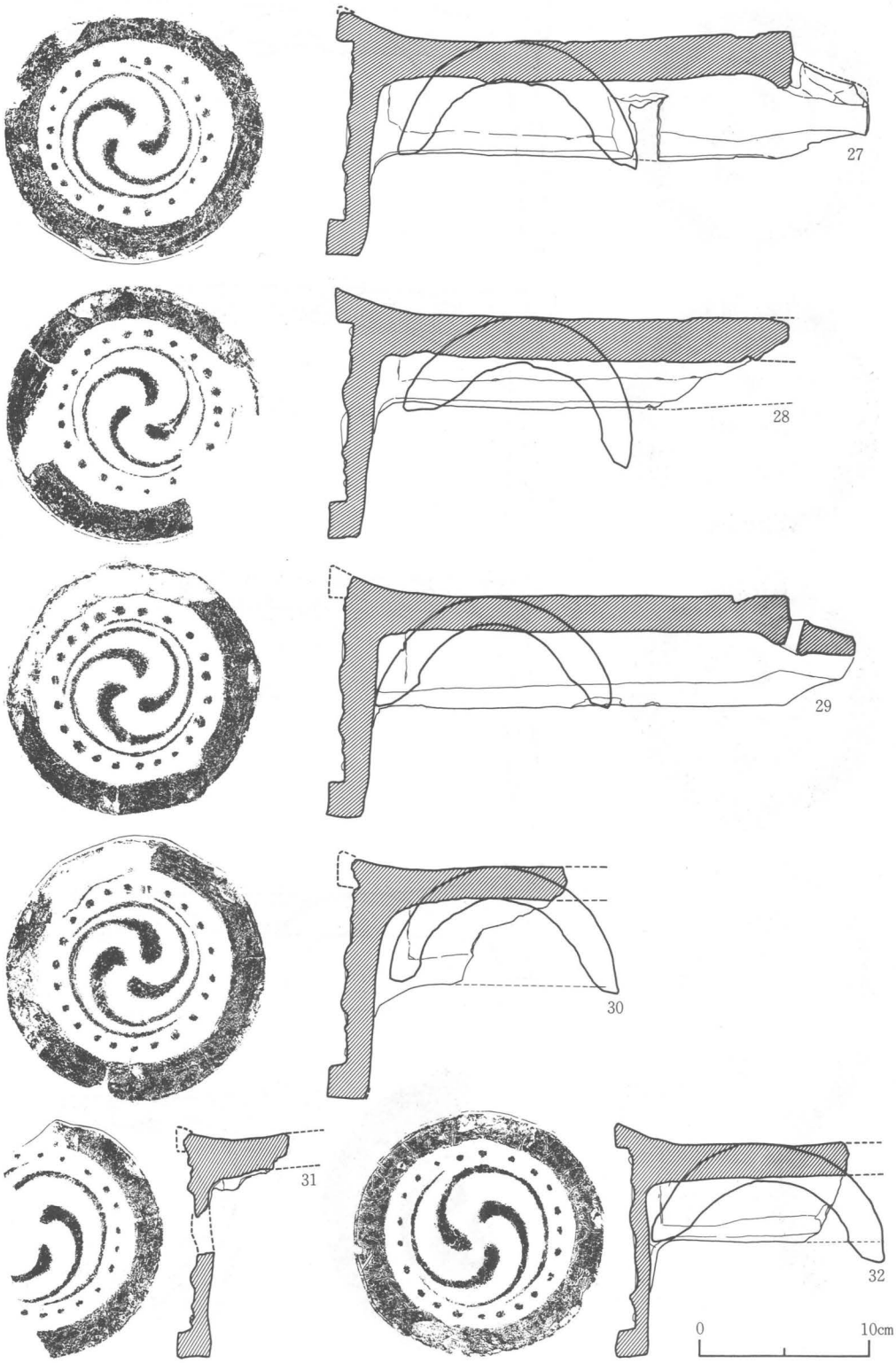
番号	出土地点	直径(mm)	周縁		外区		内区		備考
			幅(mm)	高さ(mm)	文様	幅(mm)	文様	径(mm)	
27	C地区　堀3	146	21	11	珠文	12	三巴左廻り	80	珠文 22
28	C地区　堀3	147	21	10	珠文	15	三巴左廻り	83	珠文(22)
29	C地区　堀3	146	19	9	珠文	15	三巴左廻り	80	珠文 22
30	C地区　堀3	145	19	11	珠文	13	三巴左廻り	77	珠文 22
31	C地区　堀3		15	9	珠文	10	三巴右廻り		
32	C地区　堀3	138	16	12	珠文	10	三巴右廻り	87	珠文 22
33	C地区　堀3	145	22	7	珠文	10	三巴右廻り	85	珠文 31
34	C地区　堀3	152	21	7	珠文	9	三巴右廻り	89	珠文 31
35	C地区　堀3	148	22	10	珠文	9	三巴右廻り	90	珠文 31
36	C地区　堀3		16	10	珠文		三巴左廻り		



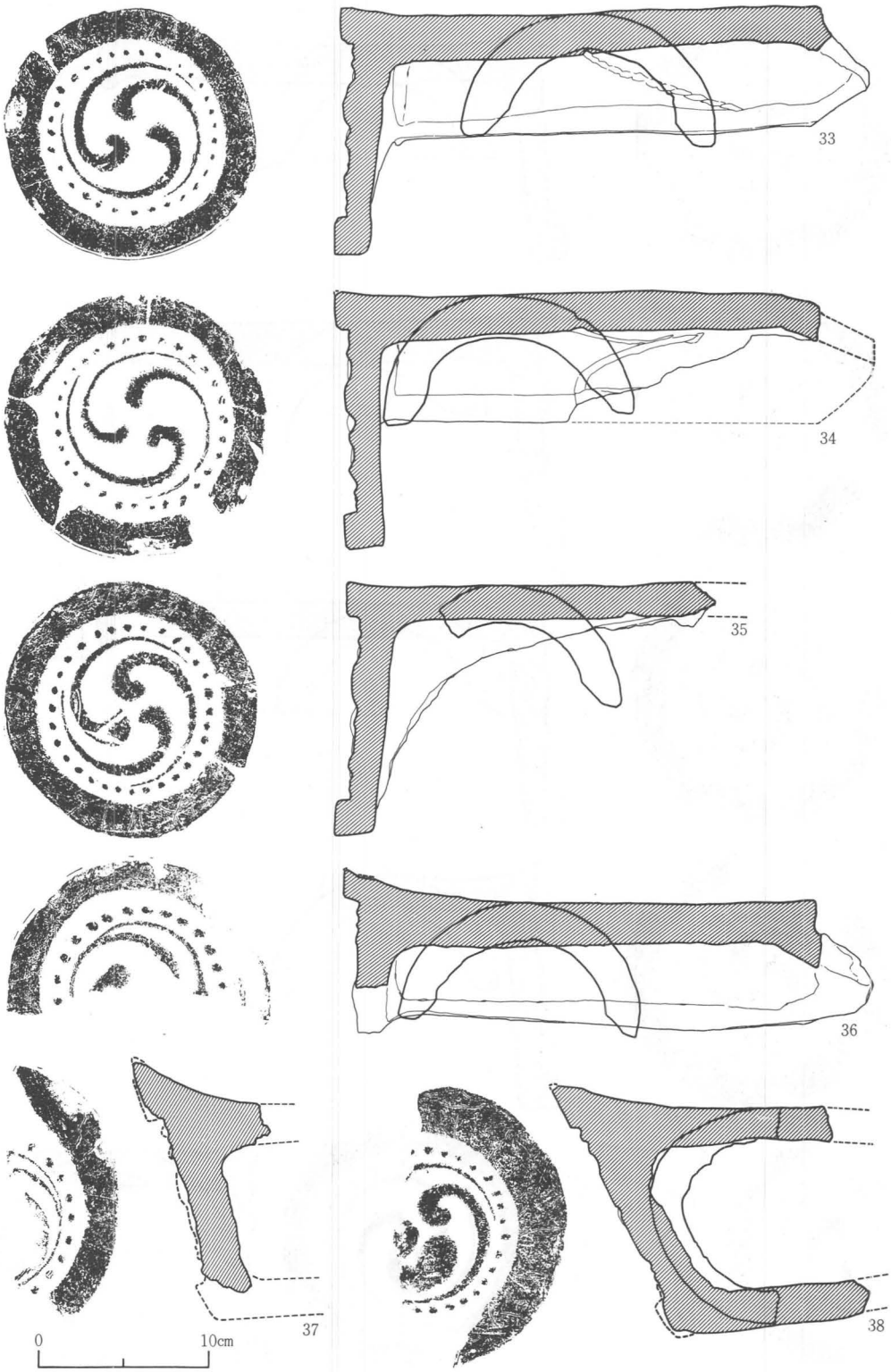
第46図　瓦実測図



第47図　瓦実測図

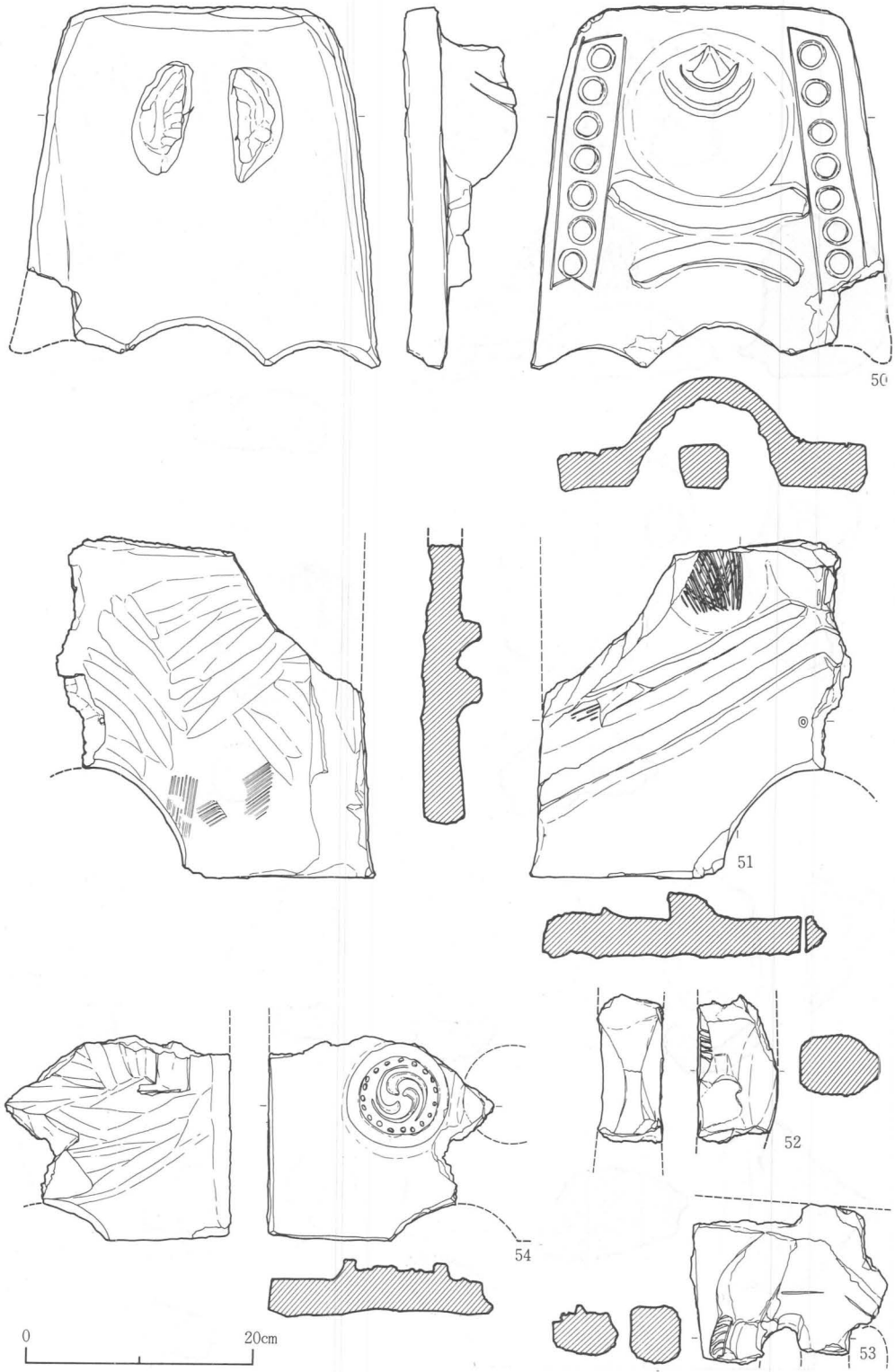


第48図　瓦実測図



第49図　瓦実測図

第50図　瓦実測図



第51図　瓦実測図

を有する。内区は丸みをもった珠文を一列に配する。平瓦部凹凸面はナデて仕上げる。平安時代。

17・18・20は同型の均整唐草文軒平瓦である。顎は貼りつけの有段顎である。瓦当部は断面四角形の周縁をめぐらす。3葉の中心花より左右に2本の支葉が派生する。平瓦部凹凸面はナデて仕上げる。室町時代。

19は均整唐草文軒平瓦である。顎は貼りつけの有段顎である。瓦当部は断面四角形の周縁をめぐらす。3葉の中心花より左右に4本の支葉が派生するが、中心花は天地が逆になる。平瓦部凹凸面はナデて仕上げる。室町時代。

21～23は同型の均整唐草文軒平瓦である。顎は貼りつけの有段顎である。瓦当部は断面四角形の周縁をめぐらす。3葉の中心花より左右に4本の支葉が派生する。平瓦部凹凸面はナデて仕上げる。室町時代。

24は均整唐草文軒平瓦である。顎は張りつけの有段顎である。瓦当部は断面四角形の周縁をめぐらす。平瓦部凹凸面はナデて仕上げる。室町時代。

25・26は同型の波状文軒平瓦である。顎は貼りつけの有段顎である。瓦当部は断面四角形の周縁を有する。3重孤を単位とする波状文を中心より左右に7本配する。平瓦部凹凸面はナデて仕上げる。室町時代。

27～30は巴文軒丸瓦である。同型である。左廻りの三巴文を内区に配し、外区は22個の連珠をめぐらす。周縁は高く、断面が四角形を呈する。丸瓦部凹面に布目痕を残し、凸面は工具によるナデで仕上げる。室町時代。

31・32は巴文軒丸瓦である。同型である。右廻りの三巴文を内区に配し、外区は22個の連珠をめぐらす。周縁は高く、断面が四角形を呈する。丸瓦部凹面に布目痕を残し、凸面は工具によるナデで仕上げる。室町時代。

33～35は巴文軒丸瓦である。同型である。右廻りの三巴文を内区に配し、外区は31個の連珠をめぐらす。周縁は低く、断面が四角形を呈する。丸瓦部凹面に布目痕を残し、凸面は工具によるナデで仕上げる。室町時代。

36は巴文軒丸瓦であるが瓦当の½を欠損する。左廻りの三巴文を内区に配し、外区は連珠をめぐらす。周縁は低く、断面が四角形を呈する。丸瓦部凹面に布目痕を残し、凸面は工具によるナデで仕上げる。室町時代。

37・38は鳥衾である。右廻りの三巴文を内区に配し、外区は連珠をめぐらす。周縁は低く、断面が四角形を呈する。丸瓦部凹面に布目痕を残し、凸面は工具によるナデで仕上げる。室町時代。

39は鯱を表現したと考えられる飾り瓦である。3本の歯が残存しており、上部にヘラ描きによる半円形のうろこが描かれる。側面に長方形を呈する浅い凹みを施す。表面はミガキ、裏面はナデによって仕上げる。C地区の堀3より出土。室町時代。

40は鳥の足を表現したと考えられる飾り瓦である。先端に5本の爪を施しており、足の部分

に羽毛の表現として、小葉状の粘土に線刻を入れ１枚づつ貼り付ける。表面、裏面ともナデによって仕上げる。Ｂ地区の堀２より出土。室町時代。

41～49は鬼瓦である。41・43は角、42は顔、44～46は耳、47～49は部分は不明である。42は目、鼻、歯が表現されており、明瞭な凹凸がある。裏面に布目痕が残っており、表面はミガキによって仕上げる。41・43は表面をミガキ、裏面をナデによって仕上げる。44～49は表面、裏面ともナデによって仕上げる。42はＢ地区の堀２、41・43～49はＣ地区の堀３より出土。室町時代。

50は棟端瓦である。下部は３ケ所で孤を描く。表面は中央部に宝珠を施し、両側に矢羽根状の区画をした中に円形文を配する。裏面には紐掛け用の貫通する孔を２孔穿つ。表面はナデによる仕上げ、裏面は工具によるナデによって仕上げる。Ｃ地区の堀３より出土。室町時代。

51は欠損するが棟端瓦である。下部は孤を描く。表面には台座と考えられる２条の凸帯を貼り付ける。台座の上には剝離痕があり、宝珠が配してあったと考えられる。台座の下に小円孔を１孔穿つ。表面はナデによって仕上げ、裏面はハケメの後、ナデによって仕上げる。Ｃ地区の堀３より出土。室町時代。

52・53は飾り瓦である。部分は不明である。52は棒状を呈し、全面をナデによって仕上げる。53は下部にえぐりを入れる。全面をナデによって仕上げる。Ｃ地区の堀３より出土。室町時代。

54は欠損するが棟端瓦である。下部は孤を描く。表面には円形にめぐらした中に右廻りの三巴文と連珠を施す。連珠は19個を数える。表面、裏面はナデによって仕上げる。Ｃ地区の堀３より出土。室町時代。

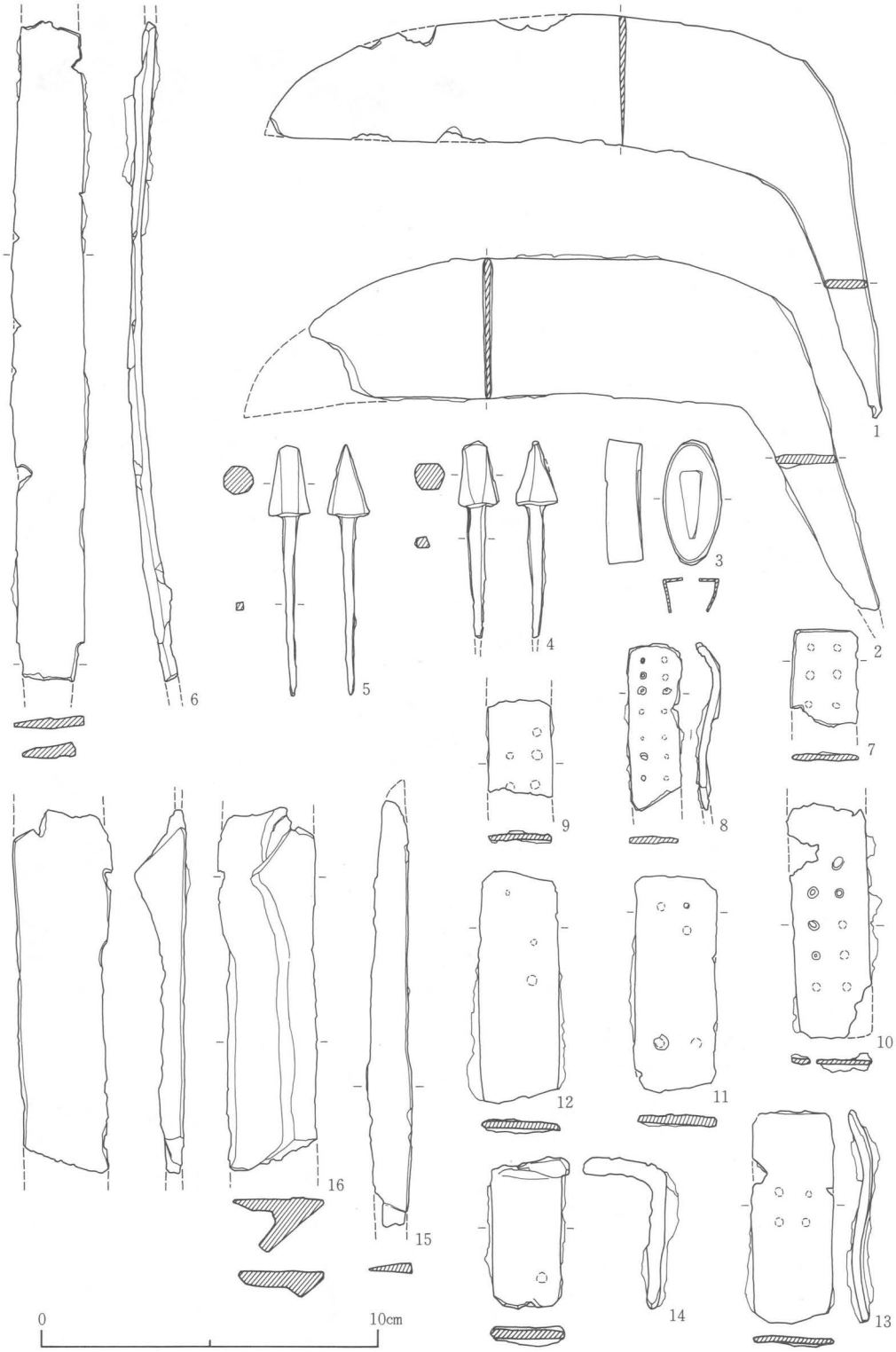
３．金属器（第52～54図）

金属器は鎌、鯉口、鏃、刀、小札、刀子、皿、飾り金具、飾り釘、釘、用途不明品などが出土した。中でも釘の出土量が圧倒的に多い。金属器はＡ地区の塼立建物周辺とＢ地区の堀２より多く出土した。

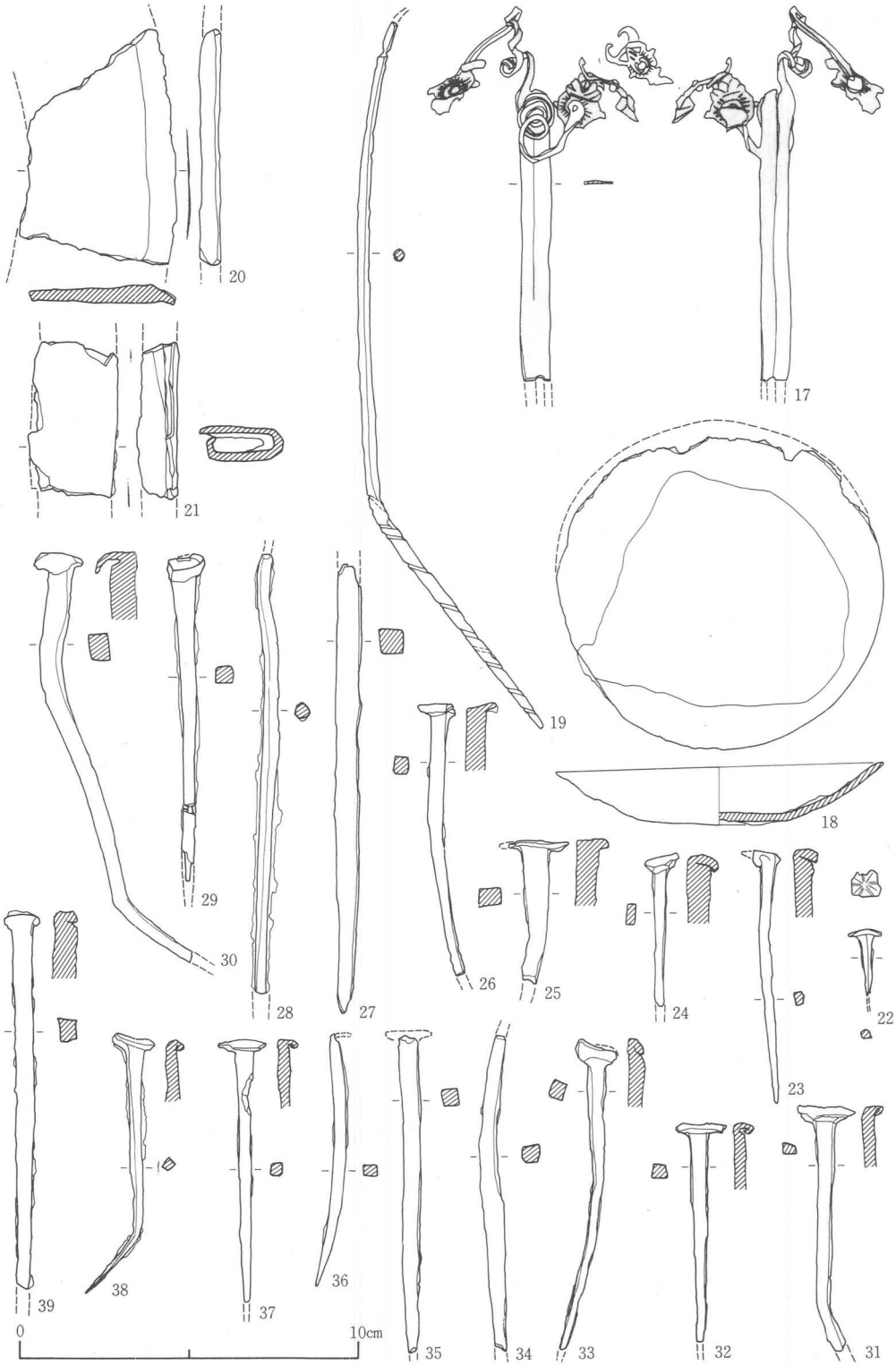
１・２は鎌である。刃部が幅広であり、基部端にいくにしたがい幅が狭くなり、弯曲する。基部端はＬ字形に伸びる。刃部は背部で最も厚く、刃先で薄くなる。横断面が三角形を呈する。基部は横断面が長方形を呈する。材は鉄である。Ｂ地区の堀２より出土。

３は鯉口である。刀の柄端部にはめ込む金具である。楕円形を呈する。筒状の胴部と蓋を別別につくり、胴部に蓋をはめ込むようにして継ぐ。蓋には三角形を呈する切り込みが中央にあり、刀の基部を挿入するためのものである。右側面は土圧によってやや変形する。材は銅である。Ｂ地区の堀２より出土。

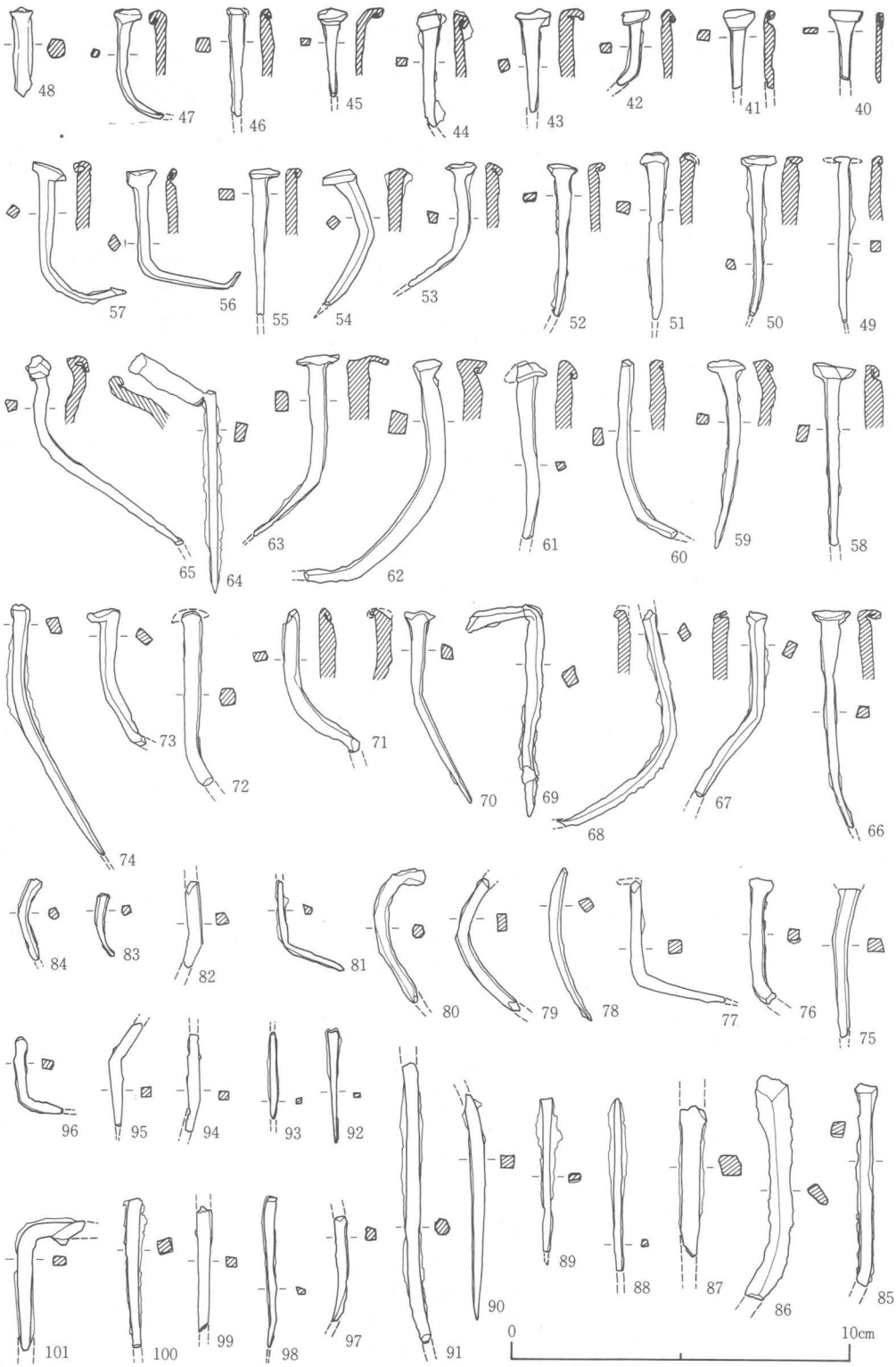
４・５は鏃である。先端部は円錐形に近いが、相対する２面を平担にする。他の面は丸い。先端部に対して基部は長くつくられており、基部端にいくにしたがい細くなる。横断面が方形を呈する。材は鉄である。Ｂ地区の堀２より出土。



第52図　金属器実測図


20
21
17
19
18
29
30
28
27
26
25
24
23
22
39
38
37
36
35
34
33
32
31
0
10cm

第53図　金属器実測図


48
47
46
45
44
43
42
41
40
57
56
55
54
53
52
51
50
49
65
64
63
62
61
60
59
58
74
73
72
71
70
69
68
67
66
84
83
82
81
80
79
78
77
76
75
96
95
94
93
92
101
100
99
98
97
91
90
89
88
87
86
85
0
10cm

第54図　金属器実測図

第８表　鉄釘計測値

番号	全長 (cm)	伸展長 (cm)	伸展体長 (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	先端部	頭部	出土地点
23	7.4	7.4	7.0	0.41	0.30	4.2	○	○	Ｂ地区　堀２
24	4.5	4.5	4.1	0.42	0.70	4.4	×	○	〃
25	4.2	4.2	4.0	0.80	0.60	7.6	×	○	〃
26	8.1	8.2	7.9	0.54	0.51	8.0	×	○	〃
27	13.3	13.3	13.3	0.74	0.77	21.2	○	×	Ａ地区　整地層２
28	13.0	13.0	13.0	0.52	0.50	10.1	×	×	Ｂ地区　堀２
29	9.7	9.7	9.0	0.63	0.56	10.7	×	○	Ｃ地区　整地層１
30	12.4	13.4	12.7	0.74	0.68	29.2	×	○	Ｂ地区　堀２
31	7.3	7.5	7.1	0.53	0.42	6.1	×	○	〃
32	6.5	6.5	6.2	0.53	0.36	3.7	×	○	〃
33	9.2	9.3	8.8	0.52	0.51	4.6	×	○	〃
34	9.3	9.3	9.3	0.64	0.54	11.8	×	×	〃
35	9.4	9.4	9.4	0.52	0.40	10.9	×	△	〃
36	7.4	7.5	7.4	0.48	0.46	3.0	○	△	〃
37	7.7	7.7	6.7	0.28	0.22	3.8	×	○	〃
38	7.8	8.3	7.6	0.52	0.31	4.1	○	○	〃
39	11.0	11.0	10.5	0.64	0.74	15.6	×	○	〃
40	2.1	2.1	1.8	0.41	0.20	0.7	×	○	〃
41	2.4	2.4	2.1	0.50	0.36	0.8	×	○	〃
42	2.2	2.3	2.0	0.44	0.33	0.9	×	○	〃
43	3.1	3.1	2.8	0.46	0.44	1.6	×	○	〃
44	3.5	3.5	3.3	0.43	0.32	1.4	×	○	〃
45	2.7	3.1	2.7	0.40	0.24	0.5	×	○	〃
46	3.3	3.3	3.3	0.43	0.38	1.6	×	○	〃
47	3.3	3.7	3.5	0.34	0.30	1.0	×	○	〃
48	2.7	2.7	2.7	0.54	0.54	1.4	×	×	〃
49	5.0	5.0	4.8	0.42	3.40	2.7	×	△	〃
50	4.7	4.7	4.5	0.52	0.52	2.6	×	○	〃
51	5.0	5.0	4.7	0.54	0.36	3.6	×	△	〃
52	4.6	4.7	4.5	0.42	0.40	1.3	×	○	〃
53	3.9	4.5	4.1	0.46	0.34	1.7	×	○	〃
54	3.9	4.6	4.2	0.47	0.43	2.4	×	○	〃
55	4.3	4.3	4.0	0.46	0.32	2.0	×	○	〃
56	4.1	6.1	5.7	0.41	0.31	2.3	○	○	〃
57	4.5	5.8	5.4	0.50	0.42	2.6	○	○	〃
58	5.4	5.4	5.0	0.40	0.52	3.6	×	○	〃
59	5.5	5.6	5.2	0.40	0.25	2.0	○	○	〃
60	5.4	5.9	5.7	0.50	0.42	4.1	×	△	〃
61	5.2	5.2	4.8	0.51	0.48	3.9	×	○	〃
62	7.3	8.5	8.3	0.82	0.60	10.1	×	○	〃
63	5.7	6.4	6.1	0.66	0.46	6.5	×	○	〃

第8表　続き

番号	全長 (cm)	伸展長 (cm)	伸展体長 (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	先端部	頭部	出土地点
64	1.5	8.4	8.4	0.50	0.50	4.1	○	○	B地区　堀2
65	7.0	7.7	7.3	0.50	0.40	3.4	×	○	〃
66	6.5	6.5	6.3	0.52	0.34	3.7	×	○	〃
67	5.6	6.0	5.8	0.60	0.50	3.6	×	△	〃
68	6.9	8.0	8.0	0.40	0.40	3.6	×	×	〃
69	6.4	8.1	7.7	0.72	0.46	5.0	○	×	〃
70	5.9	6.0	5.7	0.34	0.43	2.7	○	△	〃
71	4.6	5.1	4.9	0.40	0.52	2.7	×	△	〃
72	5.1	5.4	5.2	0.53	0.43	4.4	×	△	〃
73	4.1	4.2	4.0	0.50	0.32	3.5	×	○	〃
74	7.6	7.9	7.7	0.70	0.57	5.0	×	△	〃
75	4.4	4.4	4.3	0.50	0.40	2.4	×	×	〃
76	3.6	3.9	3.6	0.47	0.46	2.3	×	△	〃
77	4.4	5.6	5.3	0.52	0.45	3.2	×	×	〃
78	4.6	4.6	4.6	0.33	0.30	1.4	○	×	〃
79	4.0	4.5	4.5	0.50	0.31	2.4	×	×	〃
80	4.0	4.9	4.9	0.53	0.50	1.6	×	×	〃
81	3.3	3.8	3.8	0.23	0.21	0.4	○	×	〃
82	2.5	2.5	2.5	0.50	0.50	0.6	×	×	〃
83	1.9	1.9	1.9	0.28	0.24	0.4	○	×	〃
84	2.4	2.4	2.4	0.34	0.36	0.5	×	×	〃
85	6.0	6.0	5.8	0.53	0.55	4.6	×	×	〃
86	6.6	6.7	6.7	0.74	0.60	8.8	×	×	〃
87	4.5	4.5	4.5	0.72	0.62	4.2	×	×	A地区　整地層2
88	5.1	5.1	5.1	0.64	0.50	1.4	×	×	B地区　堀2
89	4.6	4.6	4.6	0.70	0.62	1.4	×	×	〃
90	6.7	6.7	6.7	0.48	0.43	2.9	○	×	〃
91	8.4	8.6	8.6	0.60	0.60	7.7	×	×	〃
92	3.4	3.4	3.4	0.41	0.32	0.5	○	×	〃
93	2.5	2.5	2.5	0.25	0.25	0.4	×	×	〃
94	3.0	3.0	3.0	0.48	0.40	0.7	×	×	〃
95	3.1	3.1	2.7	0.35	0.31	1.0	×	×	〃
96	2.5	3.1	3.1	0.34	0.31	0.7	×	×	〃
97	3.2	3.2	3.2	0.36	0.35	1.0	×	×	〃
98	4.5	4.5	4.5	0.40	0.32	1.0	×	×	〃
99	3.7	3.7	3.7	0.48	0.36	1.3	×	×	〃
100	4.4	4.4	4.4	0.60	0.58	2.5	×	×	〃
101	4.1	5.3	4.7	0.40	0.40	3.1	×	×	〃

※ 先端部・頭部　○完存　×欠失　△頭部巻き込み部欠失

6は刀である。刃先と基部を欠損する。土圧によってやや弯曲する。刃部は背で最も厚く、刃部に向かって両面より薄くする。横断面が三角形を呈する。刃部と基部の境には段がつく。材は鉄である。A地区の塼立建物周辺より出土。

7～14は小札である。長方形ないしは台形を呈する板に皮綴ぢの小孔を穿つ。小孔は長辺にそって2列に等間隔に並ぶ。7は下部を欠損する。小孔は6孔認められるが錆のため未貫通。8は土圧によってS字形に変形する。下部を欠損する。小孔は14孔認められるが錆のため8孔は未貫通。6孔が貫通。他の小札より幅が狭く、小孔の間隔も短い。9は上下部を欠損する。小孔は5孔認められるが、いずれも錆のため未貫通。10は上部と下部の一部を欠損する。小孔は9孔認められるが5孔は錆のため未貫通。4孔は貫通。11は全形の残るものである。小孔は5孔認められるが3孔は錆のため未貫通。2孔は貫通。12は全形の残るものである。小孔は3孔認められるが、いずれも未貫通。13は土圧によってS字形に変形する。側縁の一部を欠損する。小孔は4孔認められるが、いずれも未貫通。14は土圧によってL字形に変形する。小孔は1孔認められるが未貫通。全体的に錆ぶくれが著しい。材は鉄である。A地区の塼立建物周辺より出土。

15は刀子である。基部と刃先を欠損する。背で最も厚く、刃部に向かって両面より薄くする。横断面が三角形を呈する。材は鉄である。B地区の堀2より出土。

16は用途不明の金属器である。上部と下部を欠損する。長方形を呈する板の一側縁をくの字形に内側へ折り曲げる。上部は折れ曲げた幅が広い。鋤先ないしは鍬先の可能性がある。材は鉄である。B地区の堀2より出土。

17は用途不明の金属器であるが、飾り金具と考えられる。土圧によって変形する。基部の欠損部は半円形のえぐりがあり、本来は下部が二又に分かれていたものと思われる。基部は薄い板状を呈し、上部で二又に分かれる。本来の形は螺施状に伸びていた。二又に分かれた先端部の一端に1ケ所、他の1端に2ケ所の花文様の金具をつける。1ケ所の花文様の中心には淡青色のガラス玉を入れる。花文様の金具は鋲で止める。全面に金箔を施す。材は銅である。B地区の堀2より出土。

18は皿である。口縁部の約⅓を欠損する。やや上げ底を呈する底部より、体部が外上方へ立ち上がり口縁部に至る。口縁端部は丸く終る。全体的に錆ぶくれが著しい。材は鉄である。B地区の堀2より出土。

19は用途不明の金属器である。細長い棒状を呈し、両端を細く尖がらせる。土圧によってくの字形に変形しているが、本来は直線的であったと考えられる。基部の約⅓には螺施状に溝を切り込む。材は鉄である。B地区の堀2より出土。

20は用途不明の金属器である。両端を欠損する。側縁が孤を描く。横断面は長方形を呈する。材は鉄である。B地区の堀2より出土。

21は用途不明の金属器である。横断面が楕円形を呈し、中空である。斧の基部の可能性がある。材は鉄である。A地区の整地層2より出土。

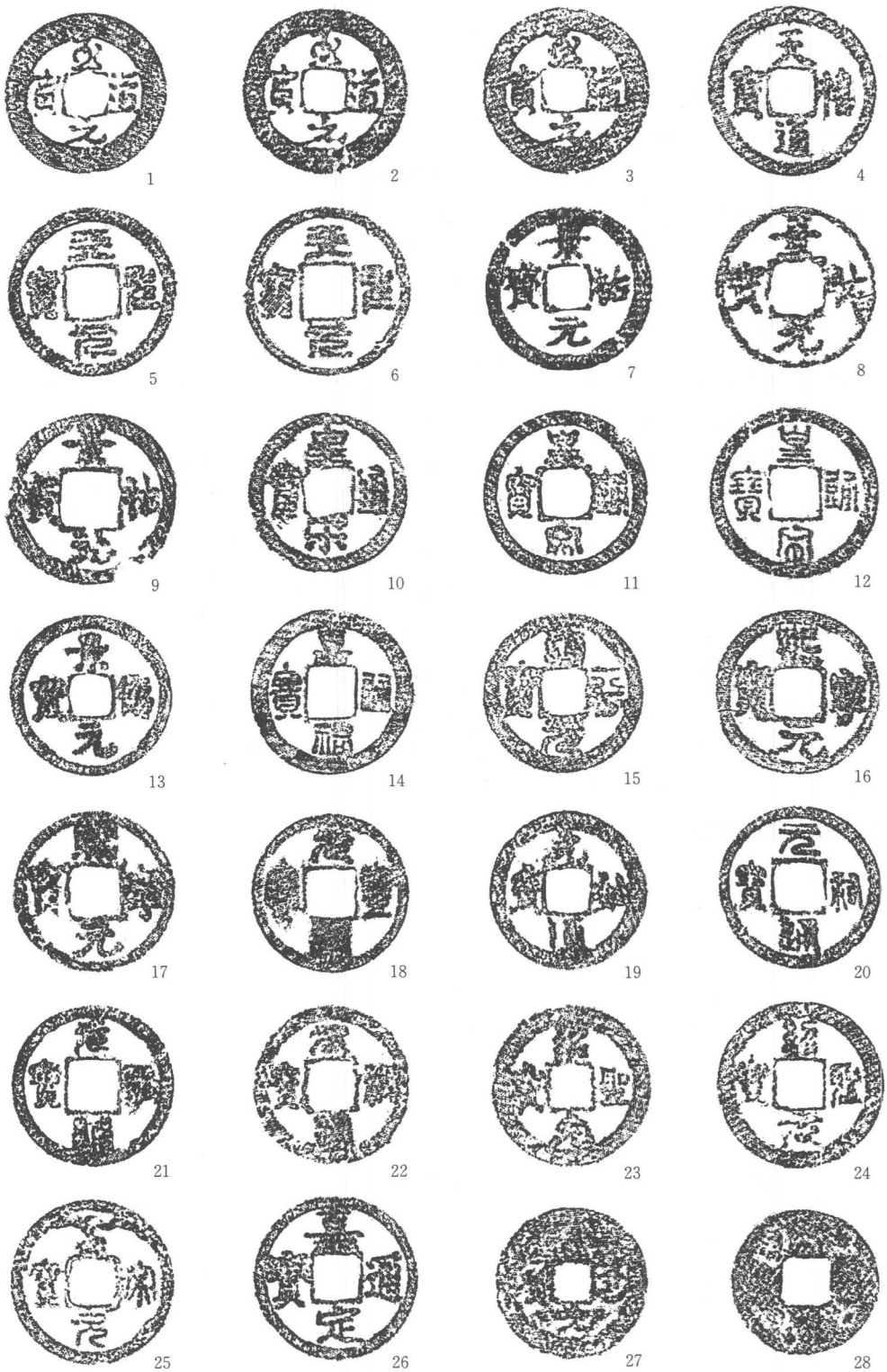
22は飾り釘である。他の釘に比して短い。頭部は腐食のためやや変形する。中心より放射状に線刻を入れており、花を表現しているものと思われる。頭部には金箔を施す。材は鉄である。B地区の堀2より出土。

23～101は釘である。長さが15cm前後の大形のものから、5cm前後の小形のものがある。前者は瓦釘と考えられる。頭部は逆L字形を呈し、横断面が長方形ないしは方形を呈する。釘の全長、幅、厚さ、重量、出土地点などについては第8表に記した。

4．銭貨（第55図）

若江遺跡では19種類、57点の銭貨がすでに報告されている[22]。今回の調査でも多量の銭貨が出土しており、14種類、29点を数える。文字の判読ができないもの3点が含まれており、1点は未掲載である。出土した銭貨は至道元宝、天禧通宝、天聖元宝、景祐元宝、皇宋通宝、景徳元宝、嘉祐通宝、治平元宝、熙寧元宝、元豊通宝、元祐通宝、紹聖元宝、聖宋元宝、嘉定通宝である。嘉定通宝のみが南宋銭であり、他は北宋銭である。今回の調査で若江遺跡より新たにみつかった種類は至道元宝、景徳元宝、治平元宝、嘉定通宝の4種類である。若江遺跡出土の銭貨は報告されているものを含めて23種類となる。銭貨はA地区の塼立建物周辺とB地区の堀2より出土した。A地区では塼立建物の南東部に集中しており、15・16・19・20は4枚が張りついた状態で出土した。出土状況からみて、本来はさしに通してあったものが、後世の攪乱を受けて周辺に散乱したものと思われる。B地区では堀2のJ層より出土した。大部分は二次焼成を受けており、黒色に変化する。

各銭貨の種類、初鋳年、径、重さ、出土地点など詳細については第9表に記した。



第55図　銭貨拓影（実大）

第9表　銭貨一覧表

番号	銭　種	初　銭　年（西暦）		外径(mm)	郭丸(mm)	厚さ(mm)	重さ(g)	出　土　地　点
1	至道元宝	至道元年（995年）	北宋	24.0	6.4	1.1	2.8	A地区 塼列外側
2	至道元宝	〃	〃	24.2	5.8	1.1	2.5	〃
3	至道元宝	〃	〃	24.3	5.8	1.0	2.9	〃
4	天禧通宝	天禧年間(1017年)	北宋	25.0	6.0	1.4	2.6	A地区 整地層2
5	天聖元宝	天聖元年(1023年)	北宋	25.0	7.0	1.1	2.7	A地区 塼列外側
6	天聖元宝	〃	〃	24.5	7.0	1.0	3.1	〃
7	景祐元宝	景祐元年(1034年)	北宋	24.0	6.0	0.7	1.8	A地区 整地層2
8	景祐元宝	〃	〃	24.0	7.0	1.3	3.2	〃
9	景祐元宝	〃	〃	25.0	8.0	1.2	3.7	B地区 堀2
10	皇宋通宝	宝元2年(1039年)	北宋	24.1	6.2	1.2	3.3	A地区 塼列外側
11	皇宋通宝	〃	〃	24.2	7.0	1.0	3.0	〃
12	皇宋通宝	〃	〃	25.3	6.3	1.4	2.4	A地区 整地層2
13	景徳元宝	景徳元年(1044年)	北宋	23.6	6.0	1.2	2.8	A地区 塼列外側
14	嘉祐通宝	嘉祐元年(1056年)	北宋	24.0	7.1	1.2	3.1	A地区 整地層2
15	治平元宝	治平元年(1064年)	北宋	23.6	6.0	1.3	3.5	A地区 塼列内側
16	熈寧元宝	熈寧元年(1068年)	北宋	24.4	6.5	1.0	2.7	〃
17	熈寧元宝	〃	〃	23.6	6.6	1.5	3.4	B地区 堀2
18	元豊通宝	元豊元年(1078年)	北宋	23.0	6.5	1.1	3.4	〃
19	元祐通宝	元祐元年(1086年)	北宋	23.6	6.0	1.8	4.0	A地区 塼列内側
20	元祐通宝	〃	〃	24.1	6.2	1.3	2.7	〃
21	元祐通宝	〃	〃	24.0	7.0	1.2	2.8	A地区 塼列外側
22	元祐通宝	〃	〃	23.5	6.3	1.3	2.2	B地区 堀2
23	紹聖元宝	紹聖元年(1094年)	北宋	23.7	5.4	1.4	3.2	〃
24	紹聖元宝	〃	〃	24.4	6.8	1.4	3.1	〃
25	聖宋元宝	建中靖国元年(1101年)	北宋	24.0	6.2	1.6	3.5	A地区 塼列外側
26	嘉定通宝	嘉定元年(1208年)	南宋	24.4	6.1	1.1	2.6	A地区 塼列内側
27	不　明			22.1	5.0	1.4	2.4	A地区 整地層2
28	不　明			21.2	6.6	0.7	1.5	B地区 堀2

5．土製品（第56・57図）

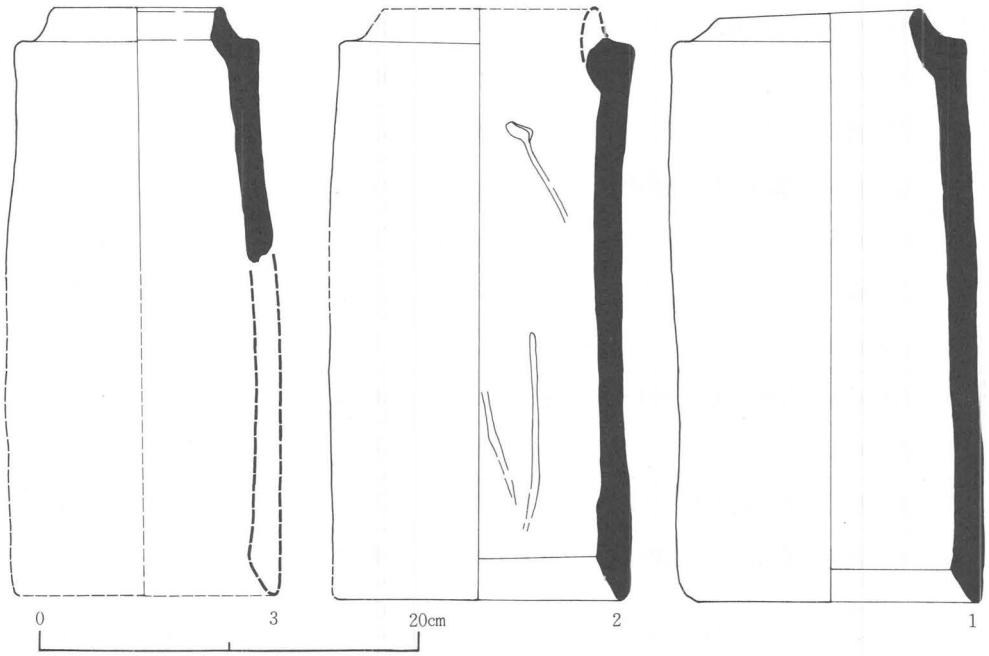
土製品は土馬、鬼瓦状土製品、土管、円板状土製品が出土した。土馬は土師質であり、他はすべて瓦質である。

土馬は４・５の２点がある。４は胴部を欠損しており、頭部のみが残る。ヘラによる線刻で目、鼻、口と顔に手綱をつけた状態を表現する。全体的にやや扁平であり、ナデ調整で仕上げる。５は頭部と脚部を欠損しており、胴部のみが残る。脚部の剝離した痕跡が胴部下の４ケ所に認められる。全体をハケメ調整した後、ナデ調整で仕上げる。４・５ともＢ地区の整地層１より出土。

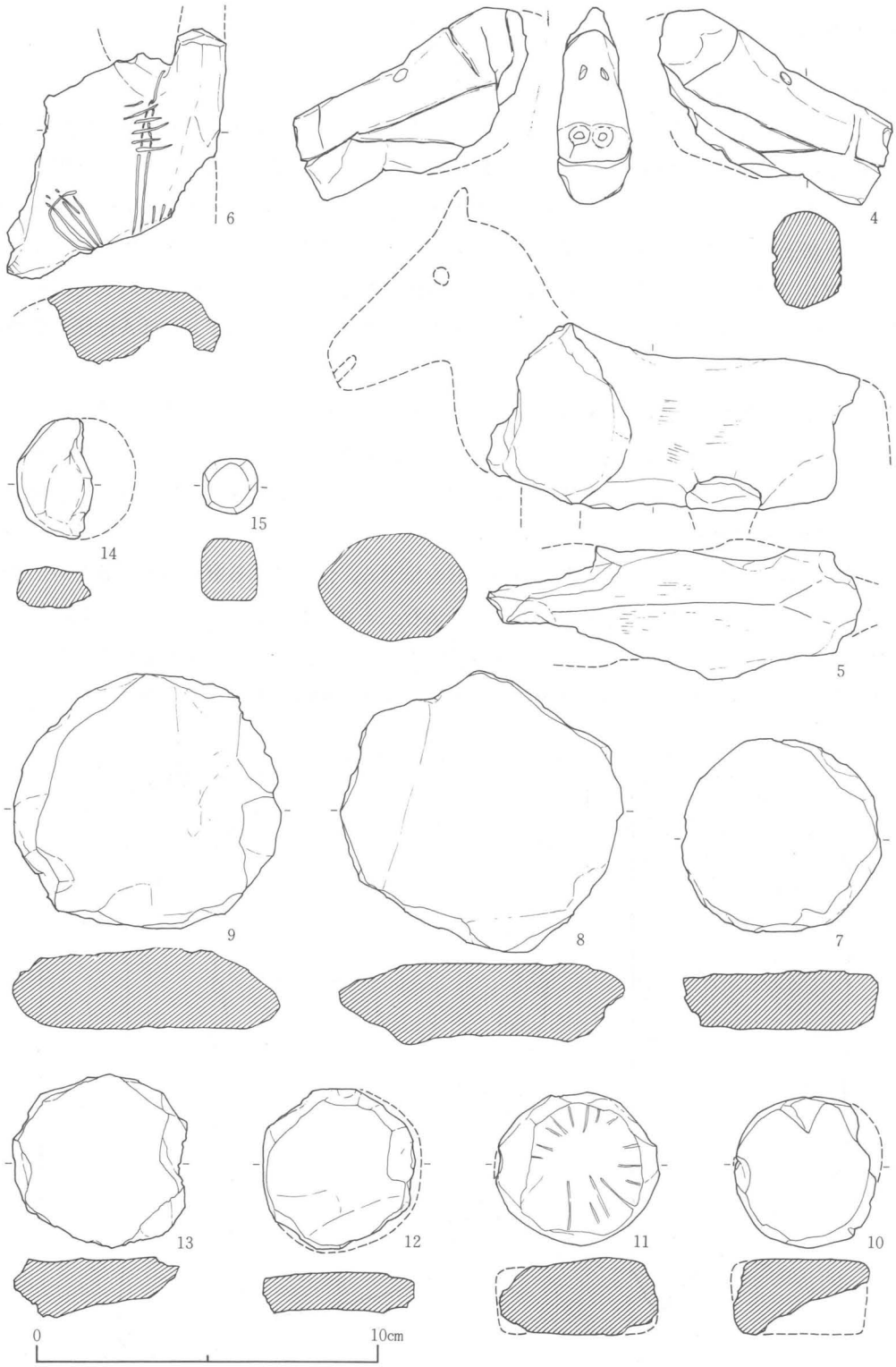
６は鬼瓦状土製品である。１ケ所が鬼の角状に伸びる。ヘラによる線刻が施されているが、破片のため何を表現しているかは不明である。全体をナデ調整で仕上げる。Ｂ地区の整地層１より出土。

１～３は土管である。細長い筒状を呈しており、端部の一端が内弯した後、上方へ外反する。他の一端は内側を斜めに面取りする。端部内外面は横ナデ、外面はヘラミガキ、内面はヘラケズリの後、ナデ調整する。内面に布目痕が一部残る。Ｂ地区の井戸４より出土。

７～15は円板状土製品である。瓦を円形に打ち欠いた後、円周部を研磨する。径は大小があり、大きいものは８の8.3cm、小さいものは15の1.6cmである。重さは８が152g、15が４gを測る。７・９・13～15はＢ地区の整地層１、８は土坑４より出土。11はＣ地区の堀３、12は整地層１より出土。10はＤ地区の自然流路内より出土。



第56図　土製品実測図



第57図　土製品実測図

6．石製品（第58～60図）

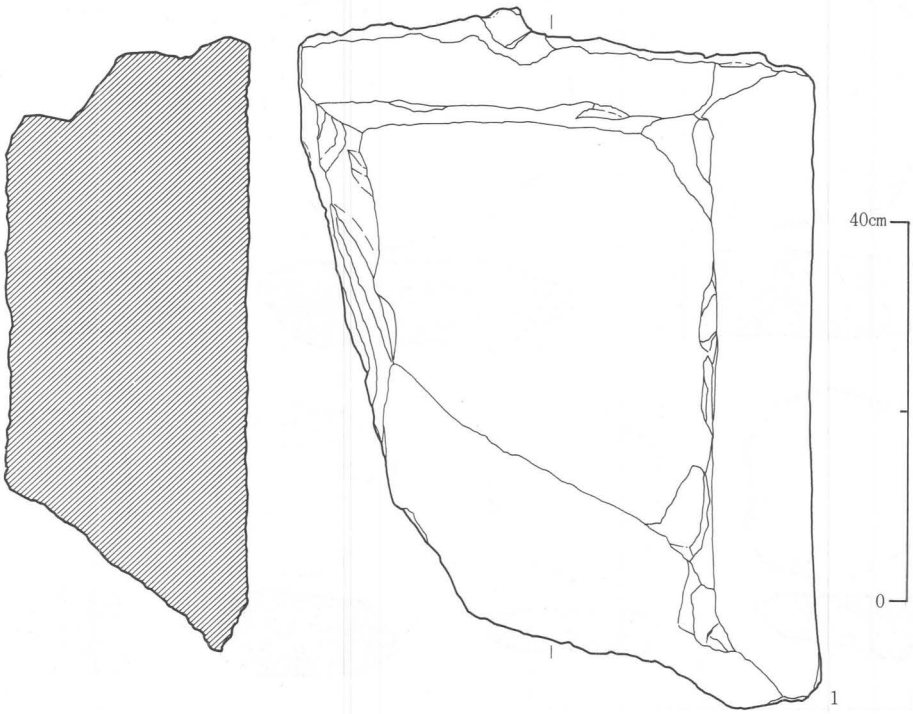
石製品は台座、石臼、硯、砥石が出土した。

1は台座である。本来は長方形を呈していたと考えられるが、下部を斜めに削り取る。上面は下面より幅が狭い。縁の約10cmほどを斜めに削り、段をつくる。C地区の堀3より出土。

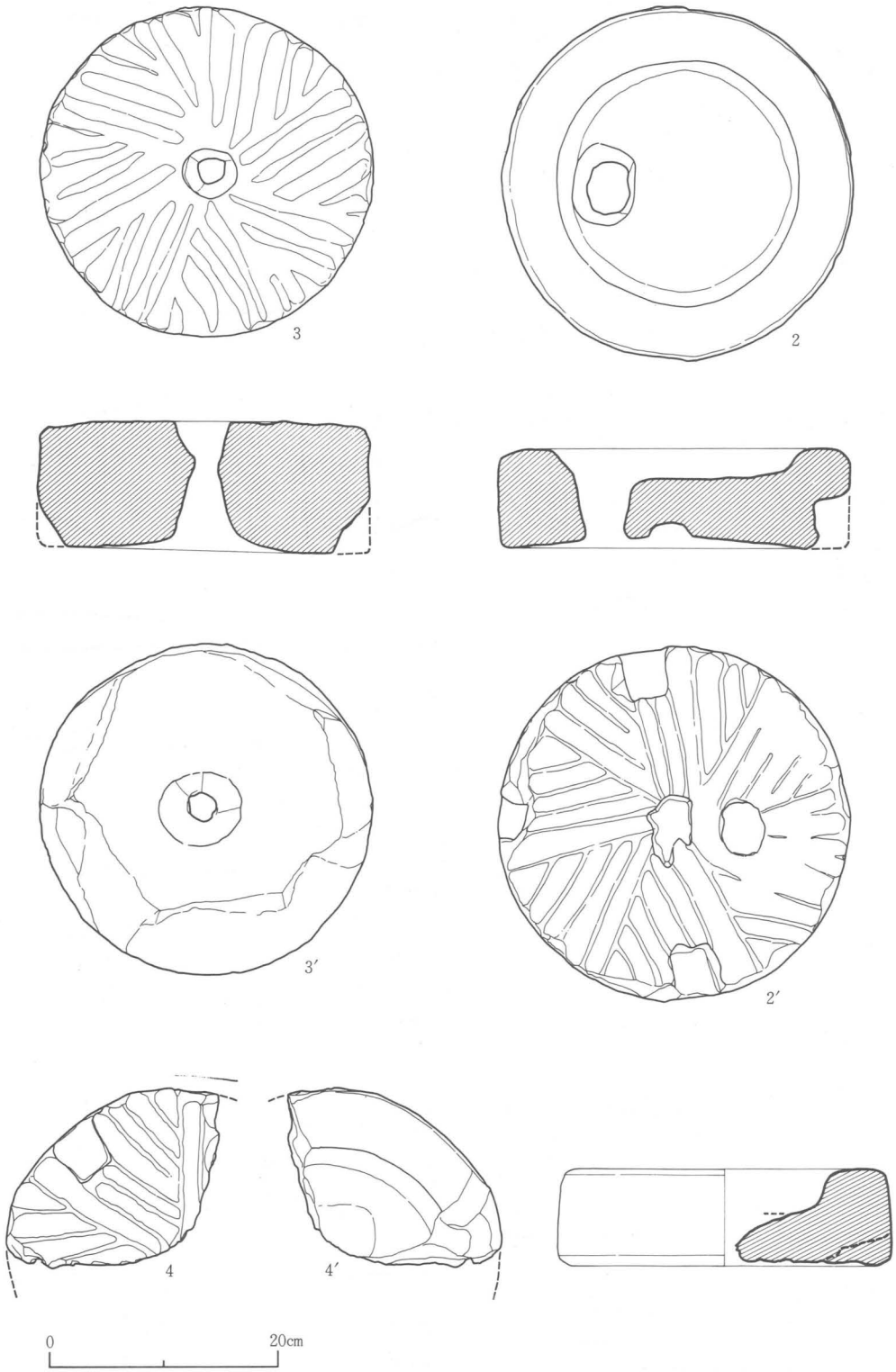
2～4は石臼である。2・3は上部、4は下部である。2は上面を皿状にえぐり、中央よりやや円周部よりに円形の入れ口を穿つ。円周部の3ケ所に柄穴を穿つ。裏面の中央には軸受けの孔を穿ち、放射状の切り込みを入れる。3も同様である。4は中央に軸受けの孔を穿ち、放射状の切り込みを入れる。2はB地区の落ち込み1、3はC地区の堀3、4はA地区の整地層2より出土。

5・6は長方形を呈する硯である。5・6とも陸部を欠損する。5は全体的に薄く作られている。縁には金箔が部分的に残っており、本来は外面全体にあったと考えられる。B地区の堀2より出土。6は海部が深く、全体的に厚く作られている。陸部と海部の境には2条の線刻がある。B地区の整地層1より出土。

7～16は砥石である。大部分のものが長方形を呈する。使用による磨り減りが著しい。7は横断面がV字形を呈する溝を長軸の中央に切り込む。表裏両面に認められる。8～16の中には刃物の当り痕が残るものが多い。7・8はB地区の落ち込み1、10・13は整地層1、12は井戸2より出土。9・11はD地区の自然流路より出土。16はA地区の整地層2より出土。



第58図　石製品実測図



第59図　石製品実測図

第60図　石製品実測図

7．木製品（第61図）

今回の調査で出土した木製品中で図化したものは工具・食膳具・祭祀具・用途不明木製品がある。図化しなかった木製品は杭・板材・角材などであるが量は少ない。工具は木槌、食膳具は箸・漆木椀・曲物の底・桶の側板・桶の底板、祭祀具は斉串がある。出土数は少ないが、食膳具の占める割合が高くなっている。木製品が出土した地区はＢ～Ｄ地区であり、Ｂ地区は堀2・井戸１、Ｃ地区は堀３、Ｄ地区は自然流路から出土したが、Ｃ地区の堀３からの出土が圧倒的に多い。以下、各製品について説明を記すが、挿図の横断面に描かれた孤は、木の年輪を模式的に表わしており、木取りを示す。また、平面図の粗い点々は焼けた痕跡、密な点々は材に塗料が残っている痕跡を表わしている。材は広葉樹、針葉樹を識別しているが、同定したものではなく、著者の肉眼観察によるものである。

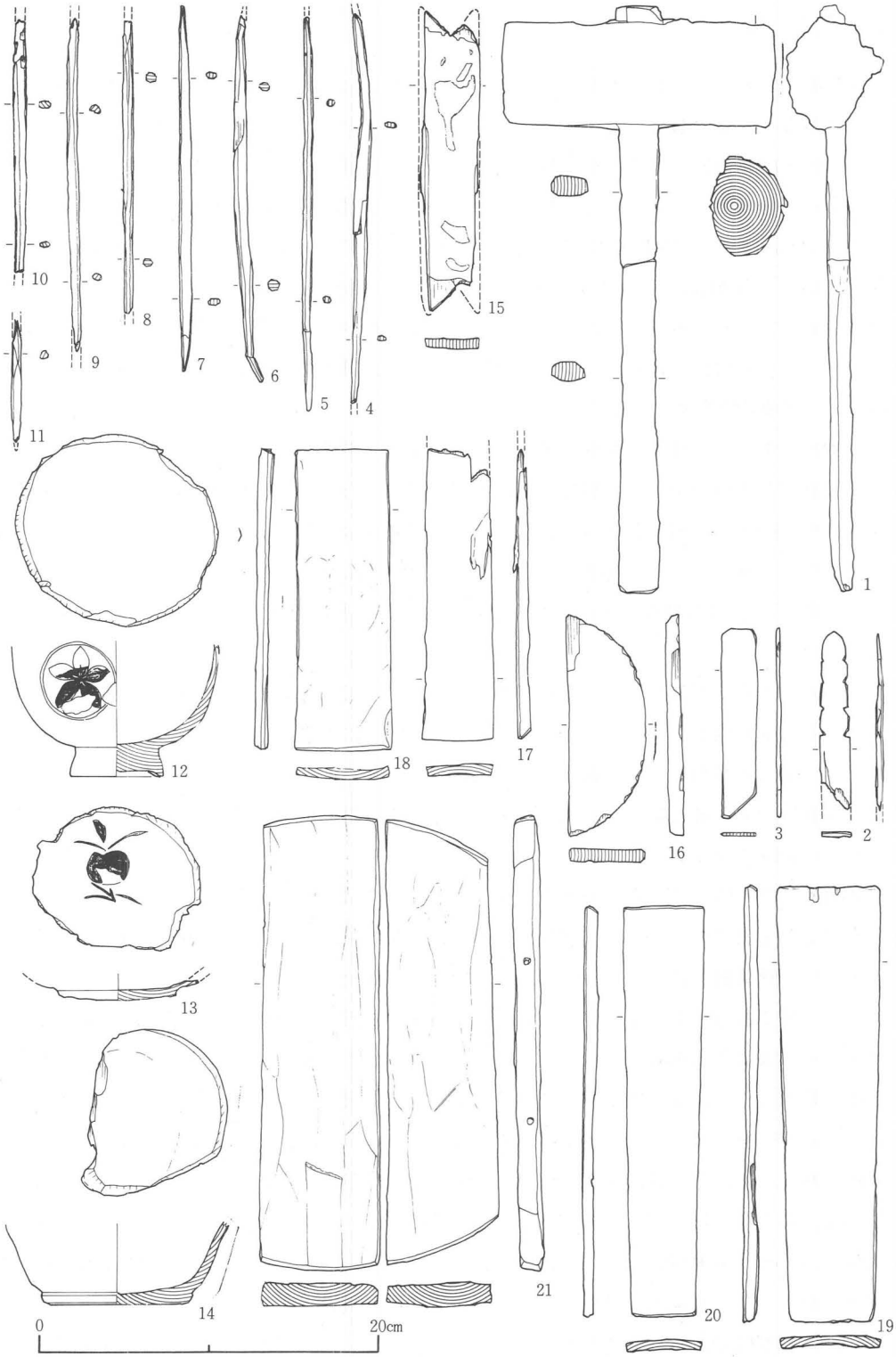
１は木槌である。全体的に腐食が著しく、加工痕は不明瞭である。槌部と柄部からなっており、平面形がＴ字形を呈する。槌部と柄部を別々につくっており、槌部に長方形を呈する柄穴を穿ち、柄を挿入する組み合せの木槌である。柄は槌部より約１cm外側に出る。また、握部にいくにしたがい扁平になる。槌部は全長16.0cm、径6.0cm、柄は全長24.8cm、長径2.2cm、短径1.2cmを測る。槌部は芯持材、柄部は割り材を使用する。材は針葉樹と考えられる。Ｃ地区の堀３より出土。

２は斉串である。下部は欠損するので形状は不明である。薄い板状を呈する小口をやや丸く尖がった形に削り出し、両側縁の相対する４ケ所の位置にＶ字形のえぐりを入れる。入れられたえぐりによって平面形が二段目が方形、三段目が台形、四段目が楕円形に近い形につくられる。残存長10.2cm、最大幅1.7cm、最大厚0.4cmを測る。板目材を使用する。材は針葉樹と考えられる。Ｃ地区の堀３より出土。

３は用途不明木製品である。板状を呈する小口の一端は角を削り取り、丸く形づくっている。他の小口は刀先状に斜めに削る。全長11.2cm、最大幅2.0cm、最大厚0.2cmを測る。柾目材を使用する。材は針葉樹と考えられる。Ｃ地区の堀３より出土。

４～11は箸である。全形を知り得る資料は７のみである。他の資料は両端か、一端の先端部を欠損する。箸は全体を細い棒状に削っており、削り痕が明瞭に残るものが多い。箸の中央付近で径が最も太く、両端に向かってやや細くなる。横断面は多角形ないしは長方形を呈する。全長は20cm前後を測る。材はすべて針葉樹と考えられ、割り材を使用する。４は先端部に焼けた痕跡が残る。４は残存長23.0cm、最大径0.8cm、５は残存長23.2cm、最大径0.7cm、６は残存長21.6cm、最大径0.7cm、７は全長21.5cm、最大径0.7cm、８は残存長17.3cm、最大径0.6cm、９は残存長16.7cm、最大径0.7cm、10は残存長14.9cm、最大径0.7cm、11は残存長7.2cm、最大径0.6cmを測る。７はＢ地区の井戸１、６はＤ地区の自然流路、他はＣ地区の堀３より出土。

12～14は漆器椀である。12は高台がやや上げ底を呈し、八の字形に開く。底部は体部壁より厚くつくられている。体部は球形に近い形状を呈し、上半でやや内弯する。口縁部は欠損して



第61図　木製品実測図

おり、形状は不明である。体部全体に赤い漆を塗っているが、体部内外面とも剝離が著しい。体部外面には円形に線を書き、円内に５弁の花を黒漆で描く。文様は外面の均等な位置に３ケ所、配する。文様は完存するものはなく、３ケ所とも一部が剝離する。底径5.9cm、残存高7.6cmを測る。材は針葉樹と考えられる。Ｄ地区の自然流路より出土。13は平底の底い高台から、現状では体部が外方へ大きく開いているが、これは土圧によって変形したためと考えられる。体部の大部分は欠損する。体部内外面の漆はすべて剝離しており、内面の見込みに赤漆で描かれた文様だけが残る。文様は不明である。底径6.8cm、残存高1.1cmを測る。材は針葉樹と考えられる。Ｂ地区の堀２より出土。14は漆器椀であるが腐食が著しく、漆がすべて剝離し素地だけが残る。上げ底気味の平底を呈する高台より体部がやや外反する。底径8.4cm、残存高4.8cmを測る。材は針葉樹と考えられる。Ｂ地区の落ち込み１より出土。

15は食膳具の部材と考えられる木製品である。長方形を呈する板材の両小口にＶ字形を呈する切り込みを入れるが部分的に欠損する。表裏面には黒漆を塗っており、部分的に残る。残存長17.7cm、残存幅3.3cm、最大厚0.7cmを測る。柾目材を使用する。材は針葉樹と考えられる。Ｄ地区の自然流路より出土。

16は曲物の底である。本来は円形を呈していたと考えられるが、約⅔を欠損する。全体的に腐食が著しく、加工痕は不明瞭である。残存長13.0cm、残存幅4.4cm、最大厚0.8cmを測る。柾目材を使用する。材は針葉樹と考えられる。Ｄ地区の自然流路より出土。

17～20は桶の側版である。平面形が長方形ないしはやや台形を呈する。横断面は弯曲しており、ゆるいＵ字形を呈する。両小口の幅がほぼ同長の17・18と長短のある19・20がある。加工痕はすべて明瞭であり、工具の当り痕を残すものが多い。17は残存長17.1cm、最大幅3.9cm、最大厚0.7cm、18は全長17.8cm、最大幅5.6cm、最大厚0.6cm、19は残存長25.6cm、最大幅6.1cm、最大厚0.6cm、20は全長24.1cm、最大幅4.7cm、最大厚0.6cmを測る。柾目材を使用する。材はすべて針葉樹と考えられる。Ｃ地区の堀３より出土。

21は桶の底である。本来は５枚の板を組み合せて円形の底としていたと考えられるが、残存するものは中央部の２枚のみである。２枚の両側縁には径５mmを測る円形の目釘穴を上下２ケずつ穿っている。目釘穴には木釘が残る。本来は木釘によって２枚が接続していたと考えられる。全体的に加工痕が明瞭であり、幅2.3cmの工具当り痕が残る。全長26.7cm、最大幅13.5cm、最大厚1.5cmを測る。柾目材を使用する。材は針葉樹と考えられる。Ｃ地区の堀３より出土。

Ⅴ．まとめ

若江遺跡は今回の調査で第27次を数える。府道大阪東大阪線拡幅工事に伴う調査は継続的に実施されており、若江遺跡の性格も明確になりつつある。また、周辺でも調査が実施されており、範囲も明らかになってきている。今回の調査では中世の集落遺構と考えられる掘立柱建物、井戸、溝、土坑や若江城関連遺構と考えられる堀、塼立建物や整地層を検出した。以下、遺構・遺物について要点を列記してまとめにかえておきたい。

1．遺構について

今回の調査では若江城関連の遺構が多く検出された。若江城を構築する際に整地がなされており、整地層をＡ～Ｃ地区で検出した。整地は大きく分けて２回あり、整地層１が１回目、整地層２が２回目におこなわれたと考えられる。整地層１は堀１と堀３の間でおこなわれており、東に向かって厚くなる。また、整地層１は古墳～奈良時代の遺物包含層を持ってきており、多量の同時期の遺物を含む。若江寺の遺構が確認できない理由の原因とも考えられる。整地層１は第25次調査の際にも検出されており、16世紀中葉と考えられている。整地層２は堀１より東に広がっており、整地層１以後の時期におこなわれたものと考えられる。若江城に関連する整地は中核があった地点と考えられる場所が周辺より高くなっており、周辺の低地を整地し、拡張していっている。今回の調査地ではＣ地区からＡ地区に向かって整地がおこなわれていったことが明らかになった。

若江城の堀と考えられる大溝を３本検出し、東より堀１、堀２、堀３がある。堀１は現在まで確認されている東西方向の堀の北肩にあたる。今回、検出した場所では北東に向きを変えている。堀２は南北方向に伸びるものであり、幅12m、深さ1.6mを測る。東西の肩は３段で落ちる。堀内は埋土と堆積層に分層でき、埋土のＪ層は焼けた粘土塊、金属器を含む炭層である。多量の焼けた鉄釘が出土していることから、若江城の建物が焼け落ちたものを廃棄したと考えられる。また、西側部で３本の杭を検出しており、逆茂木と考えられる。第20次調査で検出した東西方向に伸びる堀の北肩でも逆茂木と考えられる杭が多量に検出されている。東西方向に伸びる堀は今回、検出した堀の南に位置し、両堀は続くものと考えられる。堀３は南北方向に伸びるものであり、幅10m以上、深さ2.9mを測る。東肩から約７ｍの範囲に多量の瓦、壁下地、礎石が検出された。瓦は完形品になるものが多く、若江城の建物を取り壊した時に瓦、壁下地、礎石の順番に捨てたものと考えられる。第25次調査でも同じ状況で検出されており、両堀が続くと考えられる。

第10表　礎石石材一覧表

	石　　材
1	黒雲母花崗岩
2	片麻状花崗岩
3	黒雲母片麻岩
4	片麻状花崗岩
5	石英閃緑岩
6	角閃石斑糲岩

堀内に捨てられた礎石と考えられる石は1辺が約50～70cm大のものである。第10表に材質を記したが、すべて生駒山地で産出するものである。

塼立建物は塼を2段以上、立て並べた建物の基壇と考えられる遺構である。高屋城[23]などに類例があり、倉庫の基壇と考えられている。

2．遺物について

今回の調査では古墳～奈良時代と中世の遺物が出土した。中世の遺物は多量の土器、瓦、石製品、鉄製品、土製品、木製品などがある。若江城関連の資料は堀及び塼立建物より出土した。城を思わせるものは小札、刀、鯉口、鏃などの武器があげられる。また、金箔を張った釘、飾り金具、硯などもみつかっており、城で使われていたものと考えられる。堀3より出土した瓦は若江城を廃絶する際のものと考えられる。瓦は完形品が多い。丸瓦、平瓦が大部分であるが軒丸瓦、軒平瓦、飾り瓦などもある。軒丸瓦はすべて巴文であるが4型式、軒平瓦は5型式が認められる。

今回の調査では若江城に関連する遺構、遺物が多く出土した。今後、若江城の中心部が調査されれば、さらに大きな成果が得られるであろう。今後の調査に期待したい。

注

(1) 荻田昭次・桑原正明「布施周辺の孝古遺物」『河内文化』第8号　1962年

(2) 下村晴文『若江寺跡・若江城跡』　東大阪市教育委員会　1975年

(3) 新田洋・勝田邦夫『若江城跡　北鳥池遺跡調査報告』　東大阪市遺跡保護調査会　1975年

(4) 勝田邦夫・阿部嗣治『若江遺跡発掘調査報告書Ⅰ』　遺構編　東大阪市遺跡保護調査会　1982年
同上　『若江遺跡発掘調査報告書Ⅰ』　遺物編　財団法人東大阪市文化財協会　1983年

(5) 注(4)と同文献

(6) 注(4)と同文献

(7) 注(4)と同文献

(8) 吉村博恵『若江遺跡第25次発掘調査報告』　財団法人東大阪市文化財協会　1987年

(9) 勝田邦夫・松田順一郎「若江遺跡・山賀遺跡発掘調査概報」『東大阪市遺跡保護調査会発掘調査概報集』1980年度　東大阪市遺跡保護調査会　1980年

(10) 荻田昭次・北野保『西岩田遺跡』　中央南幹線内西岩田瓜生堂遺跡調査会　1971年

(11) 古墳時代の掘立柱建物は芝ケ丘・神並・鬼虎川・鬼塚・西の口遺跡などで検出されている。
中西克宏「東大阪市域における古墳時代の掘立柱建物」『東大阪市文化財協会ニュース』Vol. 1, No3 財団法人東大阪市文化財協会　1986年

(12) 上野利明『馬場遺跡・鬼塚遺跡・出雲井古墳群発掘調査概要』　東大阪市教育委員会　1984年
上野利明・中西克宏「出雲井7号墳発掘調査」『東大阪市埋蔵文化財発掘調査概要』―1985年度―　東大阪市教育委員会　1986年

⑬ 東大阪市教育委員会『山畑古墳群Ⅰ』 1973年
⑭ 大阪府教育委員会『河内寺跡調査概報』 1968年
東大阪市教育委員会『河内寺跡』 1973年
東大阪市教育委員会『河内寺跡Ⅱ』 1974年
原田修 「河内寺跡の調査」『東大阪市文化財協会ニュース』Vol. 2, No 1 財団法人東大阪市文化財協会 1986年
⑮ 下村晴文『法通寺』 財団法人東大阪市文化財協会 1985年
⑯ 藤井直正・都出比呂志「原始・古代の枚岡」『枚岡市史』第1巻 枚岡市教育委員会 1966年
⑰ 東大阪市遺跡保護調査会「若江遺跡内設置の国土座標基準杭」『調査会ニュース』No 16 1980年
⑱ 武庫川女子大学薬学部安田博幸・井村由美氏に分析していただいたが、漆喰を認められなかった。
注(8)と同文献
⑲ 注(4)と同文献
⑳ 注(4)と同文献
㉑ 才原金弘「東大阪市内出土の製塩土器」『東大阪市遺跡保護調査会年報』1979年度 東大阪市遺跡保護調査会 1980年
同上 「東大阪市内出土の製塩土器Ⅱ」『紀要Ⅰ』 財団法人東大阪市文化財協会 1985年
㉒ 注(4)と同文献
下村晴文・上野利明『半堂遺跡・若江遺跡発掘調査概報』 東大阪市教育委員会 1982年
㉓ 大阪府教育委員会『高屋城址発掘調査概要・Ⅶ』 1981年

観　察　表

凡　例

器種	器形	番号	法　量（cm）	備　考
瓦器	椀A ↓ 型式番号	○ ↓ 土器番号	○口14.2→口径 ○高 5.2→器高 ○底 5.6→底径 ○径38.6→径高指数 径高指数＝器高÷口径×100 （復）→復元値 （残）→残存値 （平）→平均値	○精緻、黒色砂粒→胎土 ---------- ○----------→色調

（挿図・図版は共通の番号）

A地区

博立建物（第23図）

器種	器形	番号	法量（cm）	形態の特徴	技法の特徴	備考
土師器	小皿 B_1	1～25	○口 8.7(平) ○高 1.7(平)	○丸底にちかい平底の底部より口縁部が外上方へ伸びる。希に尖がり気味に近い底の25もある。 ○口縁端部は丸く終るものとやや尖がりぎみに丸く終るものがある。	○口縁部内外面は横ナデ。 ○見込みは14がハケメ、他はナデ。 ○底部外面はナデ、指押え。	○精緻。微粒の石英、長石を含む。 ○ 6～8、11、14、18、21、23は褐色系。他は白色系。
	小皿 B_2	26～29	○口 7.9(平) ○高 1.8(平)	○丸底にちかい底部より口縁部が外反する。 ○口縁端部は尖がり気味に丸く終るが、29のようにAタイプにみられるような、内側へ肥厚気味のものもある。	○口縁部内外面は横ナデ。 ○見込みはナデ。 ○底部外面は指押え。	○精緻。微粒の砂粒を含む。 ○26～28は褐色系。29は白色系。

器種	器形	番号	法量（cm）	形態の特徴	技法の特徴	備考
土師器	小皿 B_5	30〜33	○口 5.7(平) ○高 1.1(平)	○平底の底部より口縁部が短く外上方へ伸びる。口縁部と体部の境に稜があり、やや肥厚する。 ○口縁端部は丸く終る。	○口縁部外面は横ナデ。 ○見込みは31がナデ、他は荒いハケメ(3本/1cm)。 ○底部外面は指押え。	○精緻。微粒の砂粒を含む。 ○31は白色系。他は褐色系。
	小皿 B_5-a	34	○口 7.7(復) ○高 0.9(残)	○形態はB_5と同様であるが、底部がやや上げ底を呈する。	○口縁部内外面は横ナデ。 ○見込みはナデ。 ○底部外面はナデ。	○粗。微粒の雲母、クサリ礫を含む。 ○褐色系。
	小皿 C_1	35〜39	○口 8.6(平) ○高 1.7(平)	○平底の底部より体部が大きく逆ハの字形に開く。口縁部と体部の境がやや肥厚する。 ○口縁端部は丸く終る。	○口縁部内外面は横ナデ。 ○見込みはナデ。 ○底部外面は指押え。	○精緻。微粒の砂粒を含む。 ○36は褐色系。他は白色系。
	中皿 C_1	40〜42	○口11.2(平) ○高 2.0(平)	○平底の底部より体部が逆ハの字形に開く。内面の底部と体部の境に横ナデによる稜が残る。 ○口縁端部は丸く終る。	○口縁部内外面は横ナデ。 ○見込みはナデ。 ○底部外面は指押え。	○精緻。微粒の砂粒を含む。 ○白色系。
	中皿 C_2	43〜46	○口11.3(平) ○高 2.0(平)	○平底の底部より体部が逆ハの字形に開く。口縁部が外反する。 ○口縁端部は尖がり気味に丸く終る。	○口縁部内外面は横ナデ。 ○見込みはナデ。 ○底部外面は指押え。	○精緻。微粒の砂粒を含む。 ○43は白色系。他は褐色系。
	中皿 B_1	47〜51	○口11.2(平) ○高 1.8(平)	○丸底に近い平底より口縁部が外上方へ伸びる。 ○口縁端部は丸く終る。	○口縁部内外面は横ナデ。 ○見込みはナデ。 ○底部外面は指押え。	○精緻。微粒の砂粒を含む。 ○48は褐色系。他は白色系。
	中皿 B_2	52	○口10.3(復) ○高 1.2(残)	○平底の底部より口縁部がゆるく外反する。 ○口縁端部は内側へやや肥厚する。	○口縁部内外面は横ナデ。 ○見込みはナデ。 ○底部外面は指押え。	○精緻。微粒の石英、長石を含む。 ○褐色系。
	大皿 B_1	53	○口13.4(復) ○高 1.6(残)	○丸底に近い平底より口縁部が内弯気味に上方へ伸びる。 ○口縁端部は尖がり気味に終る。	○口縁部内外面は横ナデ。 ○見込みと底部は不明。	○精緻。1mm大の石英、雲母を含む。 ○褐色系。

器種	器形	番号	法量（cm）	形態の特徴	技法の特徴	備考
陶磁器	瀬戸焼・水滴	54	○口 2.2 ○高 1.7 ○底 2.9	○やや扁球形を呈する体部。平底の底部より体部が外方へ伸びた後、内傾する。口縁部は直立気味に上方へ伸びる。 ○口縁端部は丸く終る。 ○体部上半に注ぎ口と把手がつく。	○内外面はロクロナデ。 ○底部は糸切り。	○精緻。1mm大の石英を含む。 ○素地　白灰色。釉　茶褐色。部分的に暗褐色あり。
	瀬戸焼・合子	55	○口 5.0 ○高 2.7 ○底 2.8	○平底の底部より体部が算盤玉形を呈する。口縁部は内傾する。 ○口縁端部は丸く終る。	○内外面はロクロナデ。 ○底部は糸切り。	○精緻。砂粒をほとんど含まない。 ○素地　灰白色。釉　紫褐色。
輸入磁器	染付・台付皿	56	○口 9.1 ○高 2.2 ○底 5.3	○わずかに内弯しながら立つ体部から口縁部が短く外反する。 ○口縁端部は内側へ肥厚する。 ○高台の断面は逆三角形を呈し、削り出し。	○内外面はロクロナデ。 ○内面は見込みに菊のような花を描き、3重の線を外側に描く。外面は草のような絵が全面にめぐる。 ○絵に濃淡あり。	○精緻。砂粒を含まない。 ○素地　白灰色。釉　淡青色。
瓦器	摺鉢G	57	○口23.0(復) ○高 3.7(残)	○体部が逆ハの字形に開き口縁部が上方へ伸びる。 ○口縁端部は面をもつ。	○口縁部内外面は横ナデ。 ○体部外面はヘラケズリ。内面は横方向のハケメ。 ○おろし目は4本残る。	○粗。1mm大の石英を含む。 ○淡灰色。
	摺鉢F	58	○口28.3(復) ○高 8.5(残)	○やや内弯しながら上方へ伸びる体部より口縁部はゆるく外反する。 ○口縁端部は内傾して面をもつ。	○口縁部内外面は横ナデ。 ○体部外面は縦方向のハケメの後、口縁部付近を横方向のハケメ。 ○体部内面は風化のため不明。	○粗。微粒のクサリ礫、石英、黒色砂粒を含む。 ○暗灰色。
陶磁器	備前焼・摺鉢D	59	○口29.7(復) ○高 9.8(残)	○逆ハの字形に上方へ広がる体部より口縁部が内傾する。 ○口縁端部は上方に長く拡張し、2条の凹線を施す。 ○片口部が残る。	○内外面はロクロナデ。 ○体部内面に7条のおろし目をX状に施す。	○精緻。1～2mmの石英、長石、黒色砂粒を含む。 ○紫褐色。
土師器	羽釜F	60	○口23.0(復) ○高 5.0(残)	○口縁部は内傾する。 ○口縁端部は面をもつ。 ○鍔は短く上方へ向き、端面が面をもつ。 ○口縁部に3条の段をもつ。	○口縁部内外面は横ナデ。 ○体部外面はヘラケズリ。内面は斜めから横方向のハケメ。	○粗。1～2mmの石英、長石を含む。 ○乳白茶色。

B地区

堀2（第24・25図）

器種	器形	番号	法量（cm）	形態の特徴	技法の特徴	備考
土師器	小皿 B_1	61～63	○口 7.6(平) ○高 1.8(平)	○丸底の底部より口縁部が内傾しながら上方へ伸びる。 ○口縁端部は丸く終る。62はやや内側へ肥厚する。	○口縁部内外面は横ナデ。63は内面を横方向のハケメ。 ○見込みはナデ。 ○底部外面はナデ。	○精緻。微粒の雲母、クサリ礫を含む。 ○褐色系。
	小皿 B_2	64・65	○口 9.3(平) ○高 1.2(平)	○やや丸底に近い平底より口縁部が外反する。 ○口縁端部は丸く終る。	○口縁部内外面は横ナデ。 ○見込みはナデ。 ○底部外面はナデ。	○粗。微粒の砂粒を含む。 ○褐色系。
	小皿 B_3	66・67	○口 8.3(平) ○高 1.3(平)	○丸底に近い平底より口縁部が内弯する。 ○口縁端部は内側へ肥厚する。	○口縁部内外面は横ナデ。 ○見込みはナデ。 ○底部外面は指押え。	○精緻。微粒の雲母、クサリ礫を含む。 ○褐色系。
	小皿 C_1	68～75	○口 9.0(平) ○高 1.8(平)	○平底の底部より体部が逆ハの字形に開く。口縁部がやや厚いものが多い。内面の底部と体部の境に横ナデによる稜が残る。 ○口縁端部は尖がり気味と丸く終るものがある。	○口縁部内外面は横ナデ。 ○見込みはナデ。 ○底部外面は指押え。	○精緻。微粒の砂粒を含む。 ○68・70は褐色系。他は白色系。
	小皿 C_1-a	76～81	○口 8.4(平) ○高 1.8(平)	○形態はC_1と同様であるが、底部が上げ底を呈する。いわゆるヘソ皿である。	○調整法はC_1と同様。	○精緻。微粒の砂粒を含む。 ○77・78は褐色系。他は白色系。
	小皿 C_2	82～85	○口 9.1(平) ○高 1.7(平)	○平底の底部より体部が逆ハの字形に開く。口縁部が外反する。口縁下部がやや外側に肥厚する。内面の底部と体部の境に横ナデによる稜が残る。 ○口縁端部は丸く終る。	○口縁部内外面は横ナデ。 ○見込みはナデ。 ○底部外面は指押え。	○精緻。82は粗。微粒の砂粒を含む。 ○82は褐色系。他は白色系。
	小皿 C_2-a	86	○口 7.9 ○高 1.8	○形態はC_2と同様であるが、底部が上げ底を呈する。いわゆるヘソ皿である。	○調整法はC_2と同様。	○精緻。1mm大の黒色砂粒を含む。 ○白色系。

器種	器形	番号	法量（cm）	形態の特徴	技法の特徴	備考
土師器	小皿 C_3	87・88	○口 8.9(平) ○高 2.1(平)	○平底の底部より体部が逆ハの字形に外反した後、口縁部が内弯する。 ○口縁端部は内側へ肥厚する。	○口縁部内外面は横ナデ。 ○見込みはナデ。 ○底部外面はナデ。	○精緻。微粒の砂粒を含む。 ○白色系。
	中皿 C_1	89～91	○口10.9(平) ○高 2.1(平)	○平底の底部より体部が逆ハの字形に開く。 ○口縁端部は丸く終る。	○口縁部内外面は横ナデ。 ○見込みはナデ。 ○底部外面はナデ、指押え。	○精緻。微粒の砂粒を含む。 ○89は褐色系。他は白色系。
	中皿 C_2	92・93	○口12.0(平) ○高 2.3(平)	○平底の底部より体部が逆ハの字形に開く。口縁部が外反する。内面の底部と体部の境に横ナデによる稜が残る。 ○口縁端部は丸く終る。	○口縁部内外面は横ナデ。 ○見込みはナデ。 ○底部外面はナデ、指押え。	○精緻。微粒の砂粒を含む。 ○白色系。
	大皿 B_1	94	○口14.6 ○高 2.4	○平底の底部より口縁部が内傾しながら上方へ伸びる。 ○口縁端部は丸く終る。	○口縁部内外面は横ナデ。 ○見込みはナデ。 ○底部外面はナデ。	○精緻。微粒の石英、長石を含む。 ○白色系。
	大皿 C_1	95～103	○口13.7(平) ○高 2.2(平)	○平底の底部より体部が逆ハの字形に開く。口縁部の下で外側へ肥厚するものが多い。 ○口縁端部は尖がり気味か丸く終る。	○口縁部内外面は横ナデ。 ○見込みはナデ。 ○底部外面はナデ、指押え。	○精緻。微粒の砂粒を含む。 ○白色系。
	大皿 C_3	104・105	○口13.9(平) ○高 2.2(平)	○平底の底部より体部が逆ハの字形に外反した後、口縁部が内弯する。 ○口縁端部は内側へ肥厚する。	○口縁部内外面は横ナデ。 ○見込みはナデ。 ○底部外面はナデ。	○精緻。微粒の砂粒を含む。 ○白色系。
陶磁器	備前焼・摺鉢B	106	○口27.8(復) ○高 4.9(残)	○口縁部と体部の一部が残る。逆ハの字形に伸びる体部より口縁部を上方へ長く拡張する。 ○口縁端部は丸く終る。	○内外面はロクロナデ。 ○体部内面におろし目。3本残る。	○精緻。1～3mmの石英を含む。 ○紫褐色。
	備前焼・摺鉢C	107	○口27.8(復) ○高 5.6(残)	○形態は106と同様であるが、口縁部に幅広の凹線を3条施す。	○口縁部内外面と体部内面はロクロナデ。 ○体部外面はナデ。	○精緻。1～3mmの黒色砂粒、石英を含む。 ○紫灰色。

器種	器形	番号	法量（cm）	形態の特徴	技法の特徴	備考
須恵器	揑鉢D	108	○口28.7(復) ○高 4.7(残)	○逆ハの字形に開く体部より口縁部が内傾する。 ○口縁端部は面をもつ。 ○東播系。	○口縁部内外面は横ナデ。 ○体部内外面は横ナデ。	○精緻。1～3mmの石英、黒色砂粒を含む。 ○淡青灰色。
瓦器	揑鉢H	109	○口27.2(復) ○高 9.1(残)	○逆ハの字形に開く体部より口縁部が内弯する。 ○口縁端部は丸く終る。	○口縁部内外面は横ナデ。 ○体部外面はナデ。 ○体部内面は横ナデの後、ヘラミガキ。	○精緻。1～3mmの石英、長石、雲母を含む。 ○黒灰色。
	摺鉢F	110	○口28.9(復) ○高 6.1(残)	○逆ハの字形に開く体部より口縁部がわずかに外反する。 ○口縁端部は内傾し面をもつ。	○口縁部内外面は横ナデ。 ○体部外面はナデの後、横方向のハケメを1条施す。 ○体部内面は磨滅のため不明。	○精緻。1～2mmの石英、長石、雲母を含む。 ○灰色。
		111	○口30.4 ○高13.6 ○底10.6	○平底の底部より体部が逆ハの字形に開き、口縁部がやや内弯する。 ○口縁端部は内傾し面をもつ。	○口縁部内外面は横ナデ。 ○体部外面は縦方向のハケメの後、口縁部付近は横方向のハケメを1条施す。 ○体部内面はナデ。 ○体部内面に7本を数えるおろし目を放射状に施す。	○精緻。1～2mmの石英、長石を含む。 ○黒灰色。
陶磁器	備前焼・壺	112	○口 9.8(復) ○高 8.8(残)	○球形の体部より口縁部が短く外反する。 ○口縁端部は外下方へやや肥厚する。	○内外面はロクロナデ。 ○体部内面に粘土紐の継ぎ目が残る。	○精緻。1～2mmの白色、黒色砂粒を含む。 ○暗灰褐色。
瓦器	香炉	113	○口17.2(復) ○高12.8(残) ○底12.9(復)	○平底の底部より体部がやや外開きの筒状を呈する。口縁部は強く外反する。 ○口縁端部は尖がり気味に終る。 ○底部に短い脚を3ケ所施す。 ○口縁端部は波状を呈する。	○口縁部内外面は横ナデ。 ○体部内面上半は横ナデ。下半はナデ。 ○体部外面はヘラミガキ。 ○体部外面はスタンプ文様を施す。菱形文を上下に、中に花の文様を施した後、4条のヘラ描き凹線を施し、文様を画する。	○精緻。1～2mmの黒色、白色砂粒を含む。 ○黒灰色。
		114	○口 9.9(復) ○高 4.0(残)	○体部が球形を呈し、口縁部が短く外反する。 ○口縁端部は丸く終る。 ○口縁端部は波状を呈する。	○口縁部内外面は横ナデ。 ○体部内面はナデ。粘土紐の継ぎ目が残る。 ○体部外面に2条のヘラ描き凹線を施し、中に菊花状のスタンプ文様を施す。	○精緻。微粒の石英、長石を含む。 ○黒灰色。

器種	器形	番号	法量（cm）	形態の特徴	技法の特徴	備考
瓦器	香炉	115	○口10.5(復) ○高 5.3 ○底 8.6(復)	○平底の底部より体部が筒状を呈する。口縁部が強く外反する。 ○口縁端部は丸く終る。 ○底部の3ケ所に短い脚を施す。	○口縁部外面は横ナデ。内面は横ナデの後、ヘラミガキ。 ○体部外面はヘラミガキ。 ○体部内面は横ナデ。 ○体部外面に菱形のスタンプ文様を施す。	○精緻。0.5～2mmの長石、雲母を含む。 ○赤褐色（二次焼成を受けて変色。）
		116	○口 9.2 ○高 5.1(残) ○底 7.7	○平底の底部より体部が筒状を呈する。口縁部が外上方へ外反する。 ○口縁端部は丸く終る。 ○底部の3ケ所に短い脚を施す。	○口縁部外面は横ナデ。内面は横ナデの後、ヘラミガキ。 ○体部内面は下半をナデ。上半を横ナデ。 ○体部外面はヘラミガキ。 ○体部外面に梅花状のスタンプ文様を施す。	○精緻。微粒の砂粒を含む。 ○暗黒灰色。
	火舎	117・117′	○口23.4(復) ○高22.2(復) ○底21.7(復)	○平底の底部より体部がやや外上方へ伸びる。口縁部も直立して終る。 ○口縁端部は面をもつ。 ○底部に短い脚を施すが1脚だけ残存。	○口縁部内面は横ナデ。外面はヘラミガキ。 ○体部内面は横ナデ。外面はヘラミガキ。	○精緻。微粒の長石を含む。 ○灰白色。
	盤	118	○口28.9(復) ○高 3.9(残) ○底27.8(復)	○平底の底部より体部が内弯ぎみに伸びる。 ○口縁端部は尖がる。	○口縁部と体部は横ナデ。	○精緻。微粒の長石を含む。 ○黒灰色。
	火舎	119	○口―― ○高――	○体部外方へ開き、口縁部は内側へ直角に曲がる。 ○口縁端部は面をもつ。 ○形状は方形か長方形を呈する。	○口縁部内外面はヘラミガキ。 ○体部外面はヘラミガキ。内面は横ナデ。 ○体部上半に凸帯を2条施し、凸帯間に波状を呈するスタンプ文様を施す。	○精緻。微粒の黒色砂粒を含む。 ○黒灰色。
	羽釜Ⅰ	120	○口29.5(復) ○高 5.6(残)	○口縁部は上方へ伸びる。 ○口縁端部はやや丸く面をもつ。 ○鍔は上方へ伸びており、端面が凹む。 ○口縁部はゆるい2条の段をもつ。	○口縁部内外面は横ナデ。 ○体部外面はヘラケズリ。内面はナデ。	○精緻。1～3mmの石英、長石を含む。 ○灰褐色。

器種	器形	番号	法量（cm）	形態の特徴	技法の特徴	備考
瓦器	羽釜I	121	○口16.2(復) ○高 5.0(残)	○直立気味の体部より口縁部がやや内傾する。 ○口縁端部はやや面をもつ。 ○鍔は上方へ短く伸び、端面が面をもつ。 ○口縁部に2条の段をもつ。 ○口縁部に小孔を1孔穿つ。	○口縁部内外面は横ナデ。 ○体部外面は多量の煤が付着している為、調整法は不明。 ○体部内面は横方向のハケメ。	○精緻。微粒の黒色砂粒を含む。 ○黒灰色。
	羽釜H	122	○口20.0(復) ○高 8.7(残)	○外方へ広がる体部より口縁部が内弯した後、外折する。 ○口縁端部は凹む。 ○鍔は上方へ伸び、端面がやや凹む。 ○口縁部に4条の段をもつ。	○口縁部内外面は横ナデ。 ○体部外面はヘラケズリ。内面は横ナデ。	○精緻。1～3mmの黒色砂粒、石英を含む。 ○灰褐色。
	羽釜J	123	○口24.6 ○高 9.8(残)	○外方へ伸びる体部より口縁部が内弯する。 ○口縁端部は丸く終る。 ○鍔はほぼ水平に伸び、端面が面をもつ。	○口縁部内外面は横ナデ。 ○体部外面はナデ。部分的に指頭圧痕が残る。内面は横から斜め方向のハケメの後、ナデ。 ○口縁部には3条のヘラ描き沈線を施す。	○精緻。0.5～1mmの石英、黒色砂粒を含む。 ○黒灰色。
輸入磁器	青磁・椀	124	○高 3.7(残) ○底 4.6	○厚い平底の底部より体部が内弯する。 ○高台は高く、断面が台形を呈する。	○高台まで施釉。 ○底部外面はヘラケズリ。 ○見込みはヘラ描きによる不明瞭な花状の図柄。 ○体部外面はヘラ描きによる蓮弁文。	○精緻。砂粒を含まない。 ○素地　灰青色。 釉　暗緑青色。

井戸2（第26図）

器種	器形	番号	法量（cm）	形態の特徴	技法の特徴	備考
土師器	小皿A	125・126	○口 9.4(平) ○高 1.9(平)	○平底に近い丸底の底部より体部がやや内弯し、口縁部が外反する。 ○口縁端部を内側へ巻き込む。	○口縁部内外面は横ナデ。 ○見込みはナデ。 ○底部外面は指押え。	○精緻。微粒の石英、長石、雲母を含む。 ○白色系。
	小皿B_2	127・128	○口 8.6(平) ○高 1.3(平)	○平底に近い丸底の底部より口縁部が下へ外反する。 ○口縁端部は丸く終る。	○口縁部内外面は横ナデ。 ○見込みはナデ。 ○底部外面は指押え。	○精緻。砂粒をほとんど含まない。 ○褐色系。

器種	器形	番号	法量（cm）	形態の特徴	技法の特徴	備考
土師器	大皿 B_1	129〜131	○口14.8(平) ○高 2.9(平)	○丸底の底部より体部が内弯する。口縁部は外上方へ伸びる。口縁部と体部の境が凹むものもある。 ○口縁部は尖がるものと丸く終るものがある。	○口縁部は横ナデ。 ○見込みはナデ。 ○底部外面は指押え。	○精緻。微粒の雲母、クサリ礫を含む。 ○褐色系。
	大皿 B_2	132〜135	○口15.4(平) ○高 2.7(平)	○平底の底部より体部が内弯する。口縁端部が外反する。 ○口縁端部は尖がるものと丸く終るものがある。	○口縁部は横ナデ。 ○見込みはナデ。 ○底部外面は指押え。	○精緻。微粒の雲母、クサリ礫を含む。 ○褐色系。
瓦器	椀 C	136	○口15.3 ○高 5.9 ○底 5.5 ○径38.6	○平底の底部より体部が内弯しながら立ち上がる。口縁部がやや外反する。 ○口縁端部は尖がり気味に終る。 ○高台は高く、ほぼ垂直に伸びる。断面は三角形を呈する。	○口縁部内外面は横ナデの後、ヘラミガキ。 ○体部外面は3分割のヘラミガキ。 ○体部内面はヘラミガキ。 ○見込みは斜格子の暗文。 ○体部内外面に二次焼成による鱗状の剝離痕。	○精緻。微粒の長石を含む。 ○黒灰色。
		137	○口15.4 ○高 6.0 ○底 6.0 ○径39.0	○平底の底部より体部が内弯しながら立ち上がる。口縁部は強く外反する。口縁部で器壁が最も薄い。 ○口縁端部は尖がり気味であり、内側で浅い沈線。 ○高台は高く、ハの字形に開く。断面が台形を呈する。	○口縁部内外面は横ナデの後、ヘラミガキ。 ○体部外面は4分割のヘラミガキ。 ○体部内面はヘラミガキ。 ○見込みは平行線の暗文。 ○体部内面には多量の炭化物が付着。 ○体部外面は二次焼成による鱗状の剝離痕。	○精緻。砂粒をほとんど含まない。 ○黒灰色。
		138	○口16.5 ○高 6.3 ○底 5.3 ○径38.2	○平底の底部より体部が外上方へ伸びる。口縁部はゆるく外反する。 ○口縁端部は尖がり気味に内傾する。 ○高台は見込み部が丸くつくられているので高低差がほとんどない。短い高台であり、断面が台形を呈する。	○口縁部内外面は横ナデの後、ヘラミガキ。 ○体部外面は指押えの後、4分割のヘラミガキ。 ○体部内面はヘラミガキ。 ○見込みは不定方向の暗文。	○精緻。微粒の砂粒を含む。 ○黒灰色。

器種	器形	番号	法量（cm）	形態の特徴	技法の特徴	備考
瓦器	椀C	139	○口15.5(復) ○高 5.3 ○底 5.9 ○径34.2	○平底の底部より体部が外上方へ立ち上がる。口縁部がゆるく外反する。 ○口縁端部は尖がり気味に終る。 ○高台はやや低く、ハの字形に開く。断面が台形を呈する。	○口縁部は横ナデ。 ○体部外面は指押えの後、ヘラミガキ（破片のため分割数不明。） ○体部内面はヘラミガキ。 ○見込みは不字方向の暗文。	○精緻。砂粒をほとんど含まない。 ○黒灰色。
土師器	羽釜A	140	○口25.2(復) ○高10.4(残)	○体部は内弯しながら立ち上がり、口縁部が外反する。 ○口縁端部は内傾し、巻き込む。 ○鍔はほぼ水平に伸び、端面が丸く終る。	○口縁部内外面は横ナデ。 ○体部内外面はナデ。	○精緻。微粒の長石、石英、雲母を含む。 ○灰白茶色。
		141	○口24.7(復) ○高 9.8(残)	○形態は140とほぼ同様であるが、口縁部が下方へ肥厚する。	○調整は140と同様。	○精緻。微粒の長石、石英、雲母を含む。 ○乳白灰色。

井戸１（第27図）

器種	器形	番号	法量（cm）	形態の特徴	技法の特徴	備考
瓦器	椀L	142	○口12.0(復) ○高 3.2 ○径26.7	○丸底の底部より体部が内弯して立ち上がり、口縁部が外反する。 ○口縁端部は丸く終る。 ○高台はなし。	○口縁部内外面は横ナデ。 ○体部外面は指押え。 ○体部内面はナデの後、渦巻状の暗文。 ○見込みは平行線の暗文。	○精緻。微粒の石英、長石を含む。 ○黒灰色。
		143	○口11.6 ○高 3.1 ○径26.7	○丸底の底部より体部が浅い皿状を呈する。口縁部は外反した後、内弯する。 ○口縁端部は丸く終る。 ○高台はなし。	○口縁部内外面は横ナデ。 ○体部内外面は指押え。 ○体部内面はナデの後、4重の渦巻状の暗文。 ○炭素の付着が悪い。	○精緻。1～2mmの石英、長石を含む。 ○暗灰色～黒灰色。
		144	○口11.9 ○高 3.0 ○径25.2	○丸底の底部より体部が浅い皿状を呈する。口縁部はやや内弯する。 ○口縁端部は丸く終る。 ○高台はなし。	○口縁部内外面は横ナデ。 ○体部外面は指押え。 ○体部内面は横ナデの後、6重の渦巻状の暗文。 ○見込みはナデ。	○精緻。微粒の砂粒を含む。 ○黒灰色。

器種	器形	番号	法量（cm）	形態の特徴	技法の特徴	備考
瓦器	椀	145	○口12.0 ○高 3.0 ○径25.0	○丸底の底部より体部が浅い皿状を呈する。口縁部はゆるく外反する。 ○口縁端部は丸く終る。 ○高台はなし。	○口縁部内外面は横ナデ。 ○体部外面は指押え。 ○体部内面は横ナデの後、3重の渦巻状の暗文。 ○炭素の付着が悪い。	○精緻。1mm前後の石英、長石を含む。 ○青灰白色。
		146	○口11.7 ○高 2.9 ○径24.8	○丸底の底部より体部が浅い皿状を呈する。口縁部はゆるく外反する。 ○口縁端部は丸く終る。 ○高台はなし。	○口縁部内外面は横ナデ。 ○体部外面は指押え。 ○体部内面は横ナデの後、6重の渦巻状の暗文。	○精緻。微粒の砂粒を含む。 ○青黒灰色。
	L	147〜151	○口10.8(平) ○高 2.7(平)	○丸底の底部より体部が浅い皿状を呈する。口縁部はゆるく外反する。 ○口縁端部は丸く終る。 ○高台はなし。	○口縁部内外面は横ナデ。 ○体部外面は指押え。 ○体部内面は横ナデかナデの後、2〜4重の渦巻状の暗文。 ○151は炭素の付着が悪い。	○精緻。微粒の砂粒を含む。 ○147〜150は黒灰色。151は灰色。
	鉢	152	○口25.6(復) ○高 7.6(残)	○丸底の底部より体部が内弯しながら立ち上がる。口縁部がゆるく外反する。 ○口縁端部は面をもち、沈線を施す。	○口縁部内外面は横ナデ。 ○体部外面はナデ。 ○体部内面は横ナデの後、渦巻状の暗文。	○精緻。1〜2mmの石英、長石を含む。 ○黒灰色。
土師器	小皿 B_1	153〜156	○口 8.1(平) ○高 1.2(平)	○平底の底部より口縁部が外上方へ伸びる。 ○口縁端部は尖がり気味のものと丸く終るものがある。	○口縁部内外面は横ナデ。 ○見込みはナデ。 ○底部外面は指押え、ナデ。	○153・154は精緻。他は粗。微粒の雲母、石英、クサリ礫を含む。 ○褐色系。
	中皿 B_2	157	○口10.5 ○高 2.8	○丸底に近い平底の底部より口縁部が内弯する。 ○口縁端部は内側へ肥厚する。	○口縁部内外面は横ナデ。 ○見込みはナデ。 ○底部外面は指押え。	○粗。微粒の雲母、クサリ礫を含む。 ○褐色系。
	大皿 B_3	158	○口12.4(復) ○高 1.4	○形態は157と同様であるが、器高が低い。	○調整法は157と同様。	○粗。微粒の石英、クサリ礫を含む。 ○褐色系。

土坑２（第28図）

器種	器形	番号	法量（cm）	形態の特徴	技法の特徴	備考
須恵器	蓋	159	○口14.5(復) ○高 3.8(残)	○わずかに丸味をもつ天井部より稜を残して、口縁部がわずかに外反する。 ○口縁端部は面をもつ。	○口縁部内外面は横ナデ。 ○天井部外面は口縁部の近くを横ナデ、上をヘラケズリ。 ○天井部内面を横ナデ。	○精緻。砂粒を含まない。 ○青黒灰色。
	杯	160	○口11.3(復) ○高 2.5(残)	○受部は外上方へ伸び、尖がり気味に終る。口縁部は内傾する。 ○口縁端部は丸く終る。	○口縁部内外面は横ナデ。 ○受部は横ナデ。	○精緻。微粒の石英、長石を含む。 ○青灰色。
	杯	161	○口10.2(復) ○高 3.3(残)	○体部は浅く外方へ立ち上がり、受部はやや上方へ拡張する。口縁部は短く外反する。 ○口縁端部は尖がり気味に終る。	○口縁部内外面、体部内面、受部は横ナデ。 ○体部外面の上は横ナデ、下はヘラケズリ。	○精緻。砂粒をほとんど含まない。 ○青黒灰色。
	高杯	162	○高 2.1(残) ○底11.0(復)	○脚部のみ残存。ハの字形に開く脚部の２ケ所に稜を残す。 ○脚部端面はやや凹む。	○脚部内外面は横ナデ。	○精緻。砂粒をほとんど含まない。 ○青灰色。
	平瓶	163	○口 7.0 ○高 9.8	○丸底に近い平底の底部より体部が外上方へ立ち上がり、肩部で内傾する。口縁部は外上方へ広がり、端部付近でやや外反する。 ○口縁部は丸く終る。	○口縁部内外面と体部内外面は横ナデ。 ○底部外面はヘラケズリ。	○精緻。0.5～1mmの石英、長石を含む。 ○青灰色。
	坩	164	○口 6.5 ○高 8.5	○平底の底部より体部が長く外上方へ立ち上がり、肩部で強く内傾する。口縁部は短く上方へ伸びる。 ○口縁端部は尖がる。	○口縁部内外面と体部内外面は横ナデ。 ○底部外面はヘラケズリ。 ○体部には自然釉がかかる。	○精緻。微粒の石英、長石を含む。 ○赤茶灰色。
土師器	甕	165	○口24.5(復) ○高 4.5(残)	○張りの少ない体部より口縁部が大きく外反する。 ○口縁端部は上方へ肥厚する。	○口縁部内外面は横ナデ。 ○体部外面は縦方向のハケメ。 ○体部内面はヘラケズリ。	○精緻。微粒の雲母、クサリ礫を含む。 ○赤褐色。
	杯	166	○口14.6(復) ○高 4.0(残)	○体部は内傾しながら立ち上がり、口縁部がゆるく外反する。 ○口縁端部は内側へ面をもつ。	○口縁部内外面は横ナデ。 ○体部外面は指押え。 ○体部内面は横ナデ。 ○体部内面には放射状の暗文。	○粗。微粒の石英、長石、クサリ礫を含む。 ○淡橙褐色。

器種	器形	番号	法量（cm）	形態の特徴	技法の特徴	備考
土師器	高杯	167	○高 6.6(残) ○底 8.3	○裾部の立ち上がりはゆるく、柱状部は上方へ向かって細くなる。 ○裾端部はやや面をもつ。	○柱状部内外面と裾部外面はナデ。 ○裾部内面は横方向のハケメ。	○粗。微粒の石英、長石、クサリ礫を含む。 ○橙褐色。

土坑３（第28図）

器種	器形	番号	法量（cm）	形態の特徴	技法の特徴	備考
須恵器	杯	168	○口 9.0(復) ○高 2.3(残)	○浅い皿状を呈する体部より受部がほぼ水平に伸びる。口縁部は短く上方へ立ち上がる。 ○口縁端部は丸く終る。	○内外面は横ナデ。	○精緻。微粒の黒色砂粒を含む。 ○青灰白色。
土師器	小皿 B_1-a	169	○口 8.4(復) ○高 1.2	○上げ底の底部より口縁部が上方へ伸びる。 ○口縁端部はやや面をもつ。	○口縁部内外面は横ナデ。 ○見込みはナデ。	○精緻。微粒の雲母、クサリ礫を含む。 ○褐色系。
輸入磁器	青磁・椀	170	○口12.5(復) ○高 2.9(残)	○体部が外上方へ立ち上がり、口縁部がやや外反する。 ○口縁端部は丸く終る。	○内外面はロクロナデ。	○精緻。砂粒を含まない。 ○素地　灰白色。 釉　淡緑灰色。

土坑４（第28図）

器種	器形	番号	法量（cm）	形態の特徴	技法の特徴	備考
須恵器	蓋	171	○口10.0 ○高 3.6	○やや丸い天井部より口縁部が外方へ広がる。 ○口縁端部は丸く終る。	○口縁部内外面は横ナデ。 ○天井部外面の⅔はヘラケズリ、他は横ナデ。 ○天井部内面はナデ。	○精緻。１～５mmの砂粒を含む。 ○暗青灰色。
土師器	小皿 A	172	○口 9.7 ○高 1.2	○丸底の底部より体部が内弯し、口縁部が外反した後、内弯する。口縁部と体部の境が凹む。 ○口縁端部は内側へ巻き込む。	○風化のため調整法は不明。	○粗。微粒の雲母、黒色砂粒を含む。 ○褐色系。

器種	器形	番号	法量（cm）	形態の特徴	技法の特徴	備考
土師器	小皿 B_1	173	○口 8.4(復) ○高 1.4	○丸底の底部より口縁部が折れ曲がるように外上方へ伸びる。 ○口縁端部は丸く終る。	○風化のため調整法は不明。	○粗。微粒の石英、長石を含む。 ○褐色系。
	小皿 B_2	174	○口 9.7 ○高 1.9	○平底に近い丸底の底部より口縁部がゆるく外反する。 ○口縁端部は丸く終る。	○風化のため調整法は不明。	○粗。微粒の石英、クサリ礫を含む。 ○褐色系。

土坑1（第28図）

器種	器形	番号	法量（cm）	形態の特徴	技法の特徴	備考
土師器	小皿 C_1	175	○口 8.9(復) ○高 1.4	○平底の底部より体部が逆ハの字形に開く。内面の底部と体部の境は横ナデによる稜が残る。 ○口縁端部は尖がる。	○口縁部内外面は横ナデ。 ○見込みはナデ。 ○底部外面は指押え。	○精緻。微粒の砂粒を含む。 ○白色系。

ピット31（第28図）

器種	器形	番号	法量（cm）	形態の特徴	技法の特徴	備考
土師器	小皿 B_1	176	○口10.0 ○高 1.5	○平底の底部より体部が外上方へ伸びる。 ○口縁端部は丸く終る。	○口縁部内外面は横ナデ。 ○見込みはナデ。 ○底部外面はナデ。	○精緻。微粒の雲母、クサリ礫を含む。 ○褐色系。

C地区

土坑7（第29図）

器種	器形	番号	法量（cm）	形態の特徴	技法の特徴	備考
瓦器	椀 I	177	○口15.4(復) ○高 4.3 ○底 3.5(復) ○径27.9	○平底の底部より体部がゆるく外上方へ立ち上がる。口縁部は2段に外反する。 ○口縁端部は丸く終る。 ○高台は低く、断面が台形を呈する。	○口縁部内外は横ナデ。 ○体部外面は指押え。 ○体部内面はナデの後、粗いヘラミガキ。 ○見込みは連結輪状の暗文。	○粗。微粒の石英、黒色砂粒を含む。 ○黒灰色。
土師器	中皿 B_5	178	○口12.0(復) ○高 1.8	○平底の底部より口縁部がゆるく外反する。体部と口縁部の境は明瞭な稜があり、器壁が厚い。 ○口縁端部は丸く終る。	○風化のため調整法は不明。	○粗。微粒の雲母、石英、長石を含む。 ○褐色系。
	大皿 B_1	179	○口13.6 ○高 1.9	○口縁部は外上方へ伸びる。 ○口縁端部はつまみ上げ気味に上方へ尖がる。	○口縁部内外面は横ナデ。	○精緻。微粒の雲母、クサリ礫を含む。 ○褐色系。
	大皿 B_4	180	○口13.6(復) ○高 2.4	○平底の底部より体部が内弯しながら立ち上がる。口縁部は外上方へ伸びる。口縁部と体部の境に明瞭な段があり、稜がつく。 ○口縁端部は上方へ伸び、尖がり気味に終る。	○二次焼成を受けており調整法は不明。	○粗。微粒の石英、長石、雲母を含む。 ○褐色系。

ピット43（第29図）

器種	器形	番号	法量（cm）	形態の特徴	技法の特徴	備考
土師器	大皿 B_1	181	○口12.4(復) ○高 1.6	○平底の底部より体部が内弯気味に立ち上がり、口縁部が上方へ伸びる。 ○口縁端部は丸く終る。	○口縁部内外面は横ナデ。 ○見込みはナデ。 ○底部外面は指押え。	○粗。微粒の石英、長石、雲母を含む。 ○褐色系。

ピット46（第29図）

器種	器形	番号	法量（cm）	形態の特徴	技法の特徴	備考
土師器	小皿 B_3	182	○口 9.0(復) ○高 1.4	○丸底に近い平底より口縁部が内弯する。 ○口縁端部は丸く終る。	○口縁部内外面は横ナデ。 ○見込みはナデ。 ○底部外面は指押え。	○精緻。微粒の雲母、長石、石英を含む。 ○褐色系。

ピット45（第29図）

器種	器形	番号	法量（cm）	形態の特徴	技法の特徴	備考
土師器	中皿 B_1	183	○口10.2(復) ○高 1.3	○平底の底部より口縁部が上方へ伸びる。口縁部は強く折れ曲がる。 ○口縁端部は丸く終る。	○風化のため調整法は不明。	○粗。微粒の雲母、クサリ礫を含む。 ○褐色系。
輸入磁器	白磁・椀	184	○口15.6(復) ○高 3.6(残)	○内弯しながら外上方へ立ち上がる体部から口縁部へとつづく。 ○口縁部は玉縁状を呈する。 ○底部を欠く。	○口縁部内外面と体部内面はロクロナデ。 ○体部外面はロクロケズリ。 ○外面の体部上位まで施釉。	○精緻。砂粒を含まない。 ○素地　灰白色。 釉　灰白色。

ピット48（第29図）

器種	器形	番号	法量（cm）	形態の特徴	技法の特徴	備考
瓦器	皿	185	○口 9.2(復) ○高 1.5	○丸底に近い平底の底部より口縁部がゆるく外反する。 ○口縁端部は丸く終る。	○口縁部内外面は横ナデ。 ○体部内面は横ナデの後、粗いヘラミガキ。 ○見込みはナデの後、平行線の暗文。 ○体部外面は指押え。	○精緻。微粒の砂粒を含む。 ○黒灰色。
	椀 I	186	○口14.4(復) ○高 3.7(残)	○外上方へ伸びる体部より口縁部がゆるく外反する。 ○口縁端部は丸く終る。	○口縁部外面は横ナデ。 ○口縁部から体部の内面は横ナデの後、粗いヘラミガキ。 ○体部外面は指押え。 ○炭素の付着が悪い。	○精緻。微粒の砂粒を含む。 ○暗灰色。

土坑８（第29図）

器種	器形	番号	法量（cm）	形態の特徴	技法の特徴	備考
瓦器	椀 I	187	○口13.3(復) ○高 3.6 ○底 4.1(復) ○径27.1	○平底の底部より体部がゆるく立ち上がる。口縁部はゆるく外反する。 ○口縁端部は丸く終る。 ○高台は低く、断面が三角形を呈する。	○口縁部内外面は横ナデ。 ○体部内面はナデの後、粗いヘラミガキ。 ○体部外面は指押え。 ○見込みは平行線の暗文。	○精緻。微粒の石英、長石を含む。 ○黒灰色。
輸入磁器	白磁・椀	188	○高 2.3(残) ○底 5.5(復)	○底部のみ残存。 ○やや凹み底の底部より、体部が内弯気味に立ち上がる。	○外面はロクロケズリ。 ○内面はロクロナデ。 ○内面のみ施釉。	○精緻。砂粒を含まない。 ○素地　灰白色。 釉　暗灰白色。
		189	○高 1.4(残) ○底 5.4(復)	○底部のみ残存。 ○断面が台形を呈する高台がハの字形に開く。	○外面はロクロケズリ。 ○内面はロクロナデ。 ○底面以外は施釉。	○精緻。砂粒を含まない。 ○素地　灰白色。 釉　暗灰白色。
土師器	大皿 B_1	190	○口14.8(復) ○高 2.1(残)	○内弯気味の体部より口縁部が外上方へ伸びる。 ○口縁端部は丸く終る。	○風化のため調整法は不明。	○粗。微粒のクサリ礫を含む。 ○褐色系。
	小皿 B_1	191	○口 8.2 ○高 1.2	○平底の底部より口縁部が外上方へ立ち上がる。 ○口縁端部はわずかに面をもつ。	○口縁部内外面は横ナデ。 ○見込みはナデ。 ○底部外面は指押え。	○精緻。微粒の雲母、クサリ礫を含む。 ○褐色系。
	小皿 B_4	192・193	○口 8.8(平) ○高 1.7(平)	○丸底に近い平底の底部より、体部が内弯気味に立ち上がる。口縁部と体部の境に明瞭な段がつく。192は口縁部が外反、193は内弯する。 ○口縁端部は丸く終る。	○口縁部内外面は横ナデ。 ○見込みはナデ。 ○底部外面は指押え。 ○193は風化のため調整法は不明。	○192は精緻、193は粗。微粒の雲母、クサリ礫を含む。 ○褐色系。

ピット54（第29図）

器種	器形	番号	法量（cm）	形態の特徴	技法の特徴	備考
土師器	小皿 B_5	194	○口 8.0 ○高 1.1	○平底の底部より口縁部が外上方へ伸びる。口縁部と底部の境に段がつく。 ○口縁端部は尖がる。	○口縁部内外面は横ナデ。 ○見込みはナデ。 ○底部外面はナデ。	○精緻。1～3mmの石英、長石、クサリ礫を含む。 ○褐色系。

器種	器形	番号	法量（cm）	形態の特徴	技法の特徴	備考
瓦器	椀 L	195	○口11.0(復) ○高 2.3(残)	○浅い皿状を呈する体部より口縁部がゆるく外反する。 ○口縁端部は丸く終る。	○口縁部内外面は横ナデ。 ○体部外面は指押え。 ○体部内面はナデの後、2重の渦巻状の暗文。	○精緻。微粒の砂粒を含む。 ○黒灰色。
	椀 J	196	○口11.9(復) ○高 2.5(残)	○口縁部が外上方へ伸びる。	○口縁部内外面は横ナデ。 ○体部内面はナデの後、切れ切れの渦巻状の暗文。5重残る。 ○体部外面は指押え。 ○炭素の付着が悪い。	○精緻。微粒の砂粒を含む。 ○淡灰色。

ピット49（第29図）

器種	器形	番号	法量（cm）	形態の特徴	技法の特徴	備考
輸入磁器	白磁・皿	197	○口10.0(復) ○高 1.1(残)	○口縁部が逆ハの字形に開く。 ○口縁端部は内傾し面をもつ。	○内外面はロクロナデ。 ○口縁端部以外は施釉。	○精緻。砂粒を含まない。 ○素地　灰白色。 釉　淡灰白色。
		198	○高 1.0(残) ○底 3.6(復)	○平底の底部である。	○外面はロクロケズリ。 ○内面はロクロナデ。 ○内面に施釉。	○精緻。砂粒を含まない。 ○素地　淡灰青色。 釉　暗灰白色。

ピット64（第29図）

器種	器形	番号	法量（cm）	形態の特徴	技法の特徴	備考
瓦器	椀 J	199	○口12.1(復) ○高 2.8 ○底 3.3(復) ○径23.1	○平底の底部より体部がゆるく立ち上がり、浅い皿状を呈する。口縁部はゆるく外反する。 ○口縁端部は丸く終る。 ○高台は低く、断面が半円形を呈し、途中で切れている。	○口縁部内外面は横ナデ。 ○体部外面は指押え。 ○体部内面はナデの後、3重の渦巻状の暗文。 ○炭素の付着が悪い。	○精緻。1～2mmの石英、長石、黒色砂粒を含む。 ○淡灰色。

ピット70（第29図）

器種	器形	番号	法量（cm）	形態の特徴	技法の特徴	備考
瓦器	椀 I	200	○口15.7(復) ○高 3.6(残)	○体部はゆるく外上方へ立ち上がり、口縁部が外反する。 ○口縁端部は丸く終る。	○口縁部内外面は横ナデ。 ○体部外面は指押え。 ○体部内面はナデの後、ヘラミガキ。 ○炭素の付着が悪い。	○精緻。微粒の石英、長石を含む。 ○暗灰色。

土坑12（第29図）

器種	器形	番号	法量（cm）	形態の特徴	技法の特徴	備考
土師器	小皿 B_1	201・202	○口 8.6(平) ○高 1.7(平)	○やや尖がり気味の底部(土器がいびつなためか)より口縁部が外上方へ伸びる。 ○口縁端部はやや尖がり気味に終る。	○口縁部内外面は横ナデ。 ○見込みはナデ。 ○底部外面は指押え。	○精緻。微粒の砂粒を含む。 ○201は白色系。202は褐色系。
	小皿 B_2	203	○口 7.5(復) ○高 1.7	○平底の底部より体部が長く外上方へ立ち上がる。口縁部はゆるく外反する。 ○口縁端部は丸く終る。	○風化のため調整法は不明。	○粗。1～3mmの石英、雲母、クサリ礫を含む。 ○白色系。

土坑11（第29図）

器種	器形	番号	法量（cm）	形態の特徴	技法の特徴	備考
土師器	小皿 B_4	204	○口 7.6(復) ○高 1.4	○平底の底部より体部が内弯気味に立ち上がる。口縁部と体部の境に明瞭な段がつく。口縁部は内弯気味に伸びる。 ○口縁端部はやや内側へ肥厚する。	○風化のため調整法は不明。	○粗。微粒の雲母を含む。 ○褐色系。
	大皿 B_4	205	○口12.3(復) ○高 2.1	○形態は204と同様であるが口縁部が外反する。	○口縁部内外面は横ナデ。 ○見込みはナデ。 ○底部外面は指押え。	○精緻。1mm大のクサリ礫を含む。 ○褐色系。

井戸３（第29図）

器種	器形	番号	法量（cm）	形態の特徴	技法の特徴	備考
黒色土器	椀	206	○口14.5(復) ○高 5.4 ○底 7.6(復) ○径37.2	○平底の底部より体部が内弯気味に立ち上がる。口縁部が上方へ伸びながら、ゆるく外反する。 ○口縁端部は内傾し、端面に浅い沈線を施す。 ○高台は高く、ハの字形に下方へ伸びる。端面は丸く終る。	○口縁部内外面は横ナデ。 ○体部内外面はヘラミガキ。	○精緻。１～２mmの石英、長石、雲母を含む。 ○内面と口縁部外面は黒色。体部外面は乳白灰色。
瓦器	椀 G	207	○口16.2(復) ○高 4.1(残)	○ゆるく外上方へ立ち上がる体部より、口縁部が外反する。 ○口縁端部は尖がり気味に終る。	○口縁部内外面は横ナデ。 ○体部外面は指押えの後、粗い切れ切れのヘラミガキ。 ○体部内面は密なヘラミガキ。 ○見込みは平行線の暗文。	○精緻。1mm大の石英を含む。 ○暗灰色。
		208	○口15.7(復) ○高 3.5(残)	○やや急な立ち上がりの体部より口縁部がわずかに外反する。 ○口縁端部は丸く終る。	○口縁部内外面は横ナデの後、ヘラミガキ。 ○体部外面は指押えの後、やや粗いヘラミガキ。 ○体部内面は密なヘラミガキ。	○精緻。微粒の砂粒を含む。 ○暗灰色。
	椀 H	209	○口15.4(復) ○高 3.6(残)	○やや浅い体部より口縁部がゆるく外反する。 ○口縁端部は丸く終る。	○口縁部内外面は横ナデ。 ○体部外面は指押え。 ○体部内面は粗いヘラミガキ。 ○見込みは平行線の暗文。	○精緻。微粒の砂粒を含む。 ○黒灰色。
	椀 G	210	○高 1.2(残) ○底 4.6	○底部のみ残存。 ○高台はやや低く、断面が三角形ないしは台形を呈する。	○体部外面は指押え。 ○見込みは密な斜格子の暗文。	○精緻。微粒の砂粒を含む。 ○黒灰色。

ピット56（第29図）

器種	器形	番号	法量（cm）	形態の特徴	技法の特徴	備考
土師器	小皿 B_1	211～214	○口 7.9(平) ○高 1.4(平)	○平底ないしは丸底に近い平底の底部より口縁部が外上方へ伸びる。 ○口縁端部は尖がるものと丸く終るものがある。	○口縁部内外面は横ナデ。 ○見込みはナデ。 ○体部外面は指押え、ナデ。	○精緻。微粒の雲母、クサリ礫を含む。 ○褐色系。

器種	器形	番号	法量（cm）	形態の特徴	技法の特徴	備考
土師器	中皿 B_4	215～226	○口10.4(平) ○高 2.2(平)	○平底ないしは丸底に近い平底の底部より体部が内弯気味に立ち上がる。体部と口縁部の境に明瞭な段がつく。口縁部は外反するものと内弯気味に立ち上がるものがある。 ○口縁端部は内側へやや肥厚するものが多い。	○口縁部内外面は横ナデ。 ○見込みはナデ。 ○体部外面は指押え、ナデ。	○精緻。微粒の雲母、クサリ礫を含む。 ○褐色系。

堀3（第30図）

器種	器形	番号	法量（cm）	形態の特徴	技法の特徴	備考
土師器	小皿 B_1	227	○口 8.4(復) ○高 1.6(残)	○丸底に近い平底の底部より口縁部が内弯気味に上方へ伸びる。 ○口縁端部は丸く終る。	○風化のため調整法は不明。	○粗。微粒の雲母、クサリ礫を含む。 ○褐色系。
	小皿 C_1	228～230	○口 8.3(平) ○高 1.7(平)	○平底の底部より体部が逆ハの字形に開く。口縁部の下で外側に肥厚する。230は内面の体部と底部の境に横ナデによる稜が残る。 ○口縁部は尖がり気味に終る。	○口縁部内外面は横ナデ。 ○見込みはナデ。 ○底部外面は指押え。	○精緻。1～2mmの石英、長石を含む。 ○白色系。
	小皿 C_1-a	231・232	○口 7.4(平) ○高 1.5(平)	○形態はC_1と同様であるが、底部が上げ底を呈する。	○調整法はC_1と同様である。	○精緻。微粒の砂粒を含む。 ○白色系。
	中皿 C_1	233～235	○口11.5(平) ○高 1.9(平)	○口縁部が外上方へ伸びる。 ○口縁端部は尖がり気味に終る。	○口縁部内外面は横ナデ。 ○見込みはナデ。 ○底部外面は指押え、ナデ。	○精緻。微粒の砂粒を含む。 ○233は褐色系。他は白色系。
	大皿 C_1	236・237	○口12.5(平) ○高 2.0(平)	○平底の底部より口縁部が逆ハの字形に外上方へ開く。内面の体部と底部の境には横ナデによる明瞭な稜がある。 ○口縁端部は尖がり気味のものと丸く終るものがある。	○口縁部内外面は横ナデ。 ○見込みはナデ。 ○底部外面は指押え、ナデ。	○精緻。微粒の砂粒を含む。 ○白色系。

器種	器形	番号	法量（cm）	形態の特徴	技法の特徴	備考
輸入磁器	白磁・椀	238	○高 2.3(残) ○底 5.9(復)	○底部のみ残存。 ○高台は高く、垂直に伸びる。断面が三角形を呈する。	○外面はロクロケズリ。 ○内面はロクロナデ。 ○内面のみ施釉。	○精緻。砂粒を含まない。 ○素地　灰白色。釉　暗灰白色。
土師器	羽釜E	239	○口13.3(復) ○高 6.9(残)	○体部は大きく内傾し、口縁部が上方へ長く立ち上がる。 ○口縁端部はやや丸く面をもつ。 ○鍔は下方へ伸びており、端面が凹む。	○口縁部内外面は横ナデ。 ○体部外面は横ナデ。 ○体部内面は多量の炭化物が付着しており、調整法は不明。	○精緻。1～4mmの石英、長石、クサリ礫を含む。 ○茶灰色。
瓦器	羽釜I	240	○口22.5(復) ○高 6.2(残)	○口縁部は内傾して立ち上がる。 ○口縁端部は面をもつ。 ○鍔は水平に伸び、端面はやや丸い。 ○口縁部に3条の段をもつ。	○口縁部は横ナデ。 ○体部外面はヘラケズリ。 ○体部内面は横方向のハケメの後、ナデ。	○精緻。1～3mmの石英、長石を含む。 ○暗灰色。
	甕	241	○口30.6(復) ○高 3.8(残)	○張りの大きい体部より口縁部が外側へ巻き込むように外反する。 ○口縁端部は丸く終る。	○口縁部は横ナデ。 ○体部外面はタタキ。 ○体部内面はハケメ。	○粗。1～2mmの石英、長石を含む。 ○淡黒灰色。
		242	○口30.4(復) ○高 6.2(残)	○形態は241と同様であるが、口縁部の巻き込みが大きい。	○調整法は241と同様。	○精緻。1～2mmの石英、長石を含む。 ○淡黒灰色。
	火舎	243	○口20.6(復) ○高 9.0(残)	○体部は丸く外上方へ立ち上がり、口縁部が水平に内傾する。 ○口縁端部は丸く終る。	○口縁部内面は横ナデ。外面は横ナデの後、ヘラミガキ。 ○体部外面はヘラミガキ。 ○体部内面はハケメの後、ナデ。	○精緻。微粒の石英、クサリ礫を含む。 ○黒色。
陶磁器	備前焼・摺鉢B	244	○口32.5(復) ○高 6.1(残)	○体部は大きく外上方へ伸び、口縁部を上方へ拡張する。下方へはやや肥厚して拡張する。 ○口縁端部は丸く終る。	○内外面はロクロナデ。 ○体部内面には7条のおろし目。	○精緻。微粒の黒色砂粒を含む。 ○紫灰色。

D地区

土器溜り（第30・31図）

器種	器形	番号	法量（cm）	形態の特徴	技法の特徴	備考
瓦器	皿	245	○口 7.5 ○高 1.9	○丸底に近い平底の底部より、口縁部がゆるく外反する。 ○口縁端部は丸く終る。	○口縁部内外面は横ナデ。 ○見込みはナデ。 ○底部外面は指押え。 ○炭素の付着が悪い。	○精緻。微粒の砂粒を含む。 ○暗灰色。
		246	○口 8.0(復) ○高 1.2	○平底の底部より口縁部がゆるく外反する。 ○口縁端部は丸く終る。	○風化のため調整法は不明。 ○炭素の付着が悪い。	○粗。1～3mmの石英、長石を含む。 ○灰白色。
		247	○口 8.4(復) ○高 1.4	○やや上げ底の底部より口縁部が外反する。 ○口縁端部は丸く終る。	○口縁部内外面は横ナデ。 ○見込みはナデ。 ○底部外面は指押え。	○精緻。微粒の石英を含む。 ○黒灰色。
		248	○口 9.4(復) ○高 1.0	○丸底に近い平底の底部より口縁部が強く外反する。 ○口縁端部は丸く終る。	○口縁部内外面は横ナデ。 ○見込みはナデ。 ○底部外面は指押え。	○精緻。微粒の砂粒を含む。 ○黒灰色。
土師器	小皿 B_1	249～262	○口 8.1(平) ○高 1.3(平)	○平底ないしは丸底に近い平底の底部より口縁部が外上方へ立ち上がる。 ○口縁端部は丸く終るものが多いが尖がり気味のものもある。	○口縁部内外面は横ナデ。 ○見込みはナデ。 ○底部外面はナデ、指押え。 ○風化のため調整法が不明なものが多い。	○粗なものが多い。砂粒を含む。 ○褐色系。
	小皿 B_1-a	263～267	○口 8.0(平) ○高 1.2(平)	○形態はB_1と同様であるが底部が上げ底を呈する。	○調整はB_1と同様である。	○褐色系。
	小皿 B_2	268	○口 8.2 ○高 1.3	○平底の底部より体部が内弯気味に立ち上がり、口縁部が外反する。 ○口縁端部は丸く終る。	○風化のため調整法は不明。	○粗。1～3mmの石英、長石、クサリ礫を含む。 ○褐色系。
	小皿 B_3	269～271	○口 8.2(平) ○高 1.5(平)	○丸底に近い平底の底部より口縁部が内弯する。 ○口縁端部は内側へやや肥厚する。	○風化のため調整法は不明。	○粗。微粒の砂粒を含む。 ○褐色系。
	小皿 B_4	272～277	○口 8.2(平) ○高 1.3(平)	○平底の底部より体部が内弯気味に立ち上がる。体部と口縁部の境に明瞭な段がつく。口縁部はやや外反する。 ○口縁端部は丸く終る。	○口縁部内外面は横ナデ。 ○見込みはナデ。 ○底部外面はナデ、指押え。 ○風化のため調整法は不明なものが多い。	○粗なものが多い。微粒の砂粒を含む。 ○褐色系。

器種	器形	番号	法量（cm）	形態の特徴	技法の特徴	備考
土師器	小皿 B_4-a	278・279	○口 8.2(平) ○高 1.2(平)	○形態はB_4と同様であるが、底部が上げ底を呈する。	○調整はB_4と同様。	○粗。微粒の砂粒を含む。 ○褐色系。
	中皿 B_1	280・281	○口11.5(平) ○高 2.2(平)	○丸底に近い平底の底部より口縁部が外上方へ伸びる。 ○口縁端部は丸く終る。	○口縁部内外面は横ナデ。 ○見込みはナデ。 ○底部外面は指押え。	○粗。微粒の雲母、クサリ礫を含む。 ○褐色系。
	中皿 B_3	282	○口11.6(復) ○高 1.6(残)	○丸底に近い平底の底部より口縁部が内弯する。 ○口縁端部は丸く終る。	○口縁部内外面は横ナデ。 ○見込みはナデ。 ○底部外面は指押え。	○粗。1mm大の石英、クサリ礫を含む。 ○褐色系。
	中皿 B_3-a	283	○口10.7(復) ○高 1.4	○形態は282と同様で、底部が上げ底を呈する。	○風化のため調整法は不明。	○282と同様。
	中皿 B_4	284	○口10.7(復) ○高 2.0	○平底の底部より体部が内弯しながら立ち上がる。体部と口縁部の境に明瞭な段がつく。口縁部は外上方へ立ち上がる。 ○口縁端部は尖がり気味に終る。	○風化のため調整法は不明。	○粗。微粒の石英、クサリ礫を含む。 ○褐色系。
	中皿 B_4-a	285	○口11.4(復) ○高 1.8	○形態は284と同様で、底部が上げ底を呈する。	○風化のため調整法は不明。	○284と同様。
	大皿 B_1	286～288	○口12.5(平) ○高 2.0(平)	○平底の底部より口縁部が外上方へ伸びる。 ○口縁端部は尖がり気味のものと丸く終るものがある。	○風化のため調整法は不明。	○粗。1～2mmの石英、クサリ礫を含む。 ○褐色系。
	大皿 B_2	289	○口12.1(復) ○高 2.2	○丸底に近い平底の底部より口縁部が外反する。 ○口縁端部は尖がり気味に終る。	○風化のため調整法は不明。	○粗。微粒の石英、クサリ礫を含む。 ○褐色系。
	大皿 B_3-a	290	○口12.4(復) ○高 2.0	○上げ底を呈する底部より口縁部が内弯する。 ○口縁端部はやや内側へ肥厚する。	○風化のため調整法は不明。	○粗。微粒の石英、クサリ礫を含む。 ○褐色系。
	大皿 B_4	291・292	○口12.3(平) ○高 1.9(平)	○平底の底部より体部が内弯気味に立ち上がる。体部と口縁部の境に明瞭な段がつく。口縁部は291が外上方、292が内弯気味に伸びる。 ○口縁端部は尖がり気味に終る。	○風化のため調整法は不明。	○粗。微粒の石英、クサリ礫を含む。 ○褐色系。

器種	器形	番号	法量（cm）	形態の特徴	技法の特徴	備考
瓦器	羽釜K	293	○口12.7(復) ○高 8.9	○体部が球形を呈し、口縁部が内傾する。 ○口縁端部はやや面をもつ。 ○体部外面には棒状の脚がつく。1脚のみ残存。 ○鍔は外上方へ短く伸びる。	○風化のため調整法は不明瞭であるが、体部内面に一部ハケメが残る。	○粗。微粒の石英、長石を含む。 ○暗灰色。
土師器	羽釜C	294	○口25.4(復) ○高 5.2(残)	○内弯する体部より口縁部がくの字形に外折する。 ○口縁端部は尖がり気味に終る。 ○鍔はやや下方へ伸び、端面が丸く終る。	○風化のため調整法は不明瞭であるが体部内面にハケメが残る。	○粗。1～3mmの石英、長石、黒色砂粒を含む。 ○淡橙灰色。
		295	○口23.6(復) ○高 5.9(残)	○球形を呈する体部より口縁部がくの字形に外折する。 ○口縁端部は尖がり気味に終る。 ○鍔は水平に伸び、端面が丸く終る。	○風化のため調整法は不明。	○粗。1～4mmの石英、長石、黒色砂粒を含む。 ○暗灰白色。
瓦器	羽釜J	296	○口22.0(復) ○高 9.2(残)	○上方へ立ち上がる体部より口縁部がやや内弯する。 ○口縁端部は面をもつ。 ○鍔は水平に伸び、端面が丸く終る。	○口縁部外面は横ナデ。 ○体部外面はナデ。 ○口縁部から体部の内面は横、斜め方向のハケメ。	○精緻。1～3mmの石英、長石を含む。 ○黒灰色。
須恵器	捏鉢D	297	○口27.2(復) ○高 9.1(残)	○逆ハの字形に大きく開く体部より口縁部が上方へ立ち上がる。 ○口縁端部は面をもつ。	○口縁部内外面と体部内外面の上半は横ナデ。 ○体部外面の下半はナデ。 ○体部内面の下半は風化のため調整法は不明。	○粗。1～3mmの石英、黒色砂粒を含む。 ○灰白色。
瓦器	椀I	298	○口15.1(復) ○高 4.6 ○底 4.0 ○径30.5	○平底の底部より体部が内弯しながら立ち上がる。口縁部はゆるく外反する。 ○口縁端部は丸く終る。 ○高台は低く、断面が三角形を呈する。	○口縁部内外面は横ナデ。 ○体部外面は指押え。 ○体部内面はナデの後、粗いヘラミガキ。 ○見込みは連結輪状の暗文。 ○炭素の付着が悪い。	○粗。8mm大の小礫を含む。 ○暗灰白～白灰色。
		299	○口14.1(復) ○高 3.4 ○底 3.4(復) ○径24.1	○平底の底部より体部が外方へ大きく開き、皿状を呈する。口縁部はゆるく外反する。 ○口縁端部は丸く終る。 ○高台は低く、断面が半円形～三角形を呈する。	○口縁部内外面は横ナデ。 ○体部外面は指押え。 ○体部内面は横ナデの後、粗いヘラミガキ。 ○見込みはナデの後、平行線の暗文。 ○炭素の付着が悪い。	○粗。1～2mmの石英、長石を含む。 ○暗灰白～白灰色。

器種	器形	番号	法量（cm）	形態の特徴	技法の特徴	備考
瓦器	椀 I	300	○口14.1(復) ○高 3.4 ○底 3.2(復) ○径24.3	○形態は 299 と同様であるが、口縁部が外反しない。	○調整法は299と同様。 ○炭素の付着が悪い。	○粗。1～2mmの石英、長石、黒色砂粒を含む。 ○暗灰色～橙白色。
		301	○口14.1 ○高 3.7 ○底 4.4 ○径26.2	○形態は 299 と同様。	○調整法は299と同様。	○精緻。微粒の砂粒を含む。 ○黒灰色。
		302	○口15.0(復) ○高 3.3 ○底 4.6(復) ○径22.0	○形態は 299 と同様であるが、口縁部と体部の境に横ナデによる段がつく。 ○高台の粘土紐が部分的に切れる。	○調整法は299と同様。	○精緻。1mm大の石英、長石を含む。 ○黒灰色。
		303	○口12.9 ○高 3.5 ○底 3.5 ○径27.1	○平底の底部より体部が内弯気味に立ち上がる。口縁部はやや内弯する。 ○口縁端部は丸く終る。 ○高台は低く、痕跡程度である。断面はコの字形を呈する。	○口縁部内外面は横ナデ。 ○体部外面は指押え。 ○体部内面は横ナデの後、粗いヘラミガキ。 ○見込みはナデの後、平行線の暗文。 ○炭素の付着が悪い。	○粗。微粒の石英、長石を含む。 ○黒灰色～灰白色。
		304	○口15.0(復) ○高 4.0 ○底 3.3(復) ○径26.7	○形態は299と同様である。	○調整法は 299 と同様である。	○粗。砂粒をほとんど含まない。 ○暗灰色。
	椀 J	305	○口13.8(復) ○高 3.7 ○底 3.7(復) ○径26.8	○丸底に近い平底の底部より体部が大きく開く。浅い皿状を呈する。口縁部はゆるく外反する。 ○口縁端部は丸く終る。 ○高台は低く、断面形が台形～三角形を呈する。粘土紐が 2 ケ所で切れる。	○口縁部内外面は横ナデ。 ○見込みはナデ。 ○体部外面は指押え。 ○体部内面は横ナデの後、5 重の渦巻状の暗文。	○精緻。微粒の石英、長石を含む。 ○淡黒灰色。
		306	○口13.1 ○高 3.3 ○底 3.0 ○径25.2	○形態は305と同様。 ○高台の粘土紐は½だけつく。	○調整法は305と同様。 ○渦巻状の暗文は 7 重認められる。 ○炭素の付着が悪い。	○精緻。1～3mmの石英、長石を含む。 ○灰白色。
		307	○口12.2(復) ○高 3.4 ○底 2.3 ○径27.9	○形態は305と同様。 ○高台の粘土紐は½だけつく。	○調整法は305と同様。 ○渦巻状の暗文は 3 重認められる。	○精緻。微粒の砂粒を含む。 ○黒灰色～灰白色。

器種	器形	番号	法量（cm）	形態の特徴	技法の特徴	備考
瓦器	椀 J	308	○口14.3(復) ○高 3.2 ○底 3.3(復) ○径22.4	○形態は305と同様。	○調整法は305と同様。 ○渦巻状の暗文は切れ切れであり、4重認められる。 ○炭素の付着が悪い。	○粗。1～2mmの石英、長石を含む。 ○暗灰色～灰色。
		309	○口13.4 ○高 3.1 ○底 3.3(復) ○径23.1	○形態は305と同様。	○調整法は305と同様。 ○渦巻状の暗文は5重認められる。	○精緻。微粒の石英、長石を含む。 ○暗灰色～灰白色。
		310	○口12.8(復) ○高 2.6(残)	○形態は305と同様。 ○底部を欠損。	○調整法は305と同様。 ○渦巻状の暗文は6重認められる。	○精緻。微粒の石英、長石を含む。 ○黒灰色。
		311	○口14.0(復) ○高 2.8(残)	○形態は305と同様。 ○底部を欠損。	○調整法は305と同様。 ○渦巻状の暗文は切れ切れであり、4重認められる。	○精緻。微粒の砂粒を含む。 ○黒灰色。
		312	○口12.7(復) ○高 2.7(残)	○形態は305と同様。 ○底部を欠損。	○調整法は305と同様。 ○渦巻状の暗文は切れ切れであり、5重認められる。	○精緻。砂粒をほとんど含まない。 ○黒灰色。
		313	○口13.9(復) ○高 3.0 ○底 2.4(復) ○径21.6	○形態は305と同様。	○調整法は305と同様。 ○渦巻状の暗文は2重認められる。	○精緻。1mm大の石英、長石を含む。 ○黒灰色。
		314	○口13.9(復) ○高 2.8(残)	○形態は305と同様。	○調整法は305と同様。 ○渦巻状の暗文は4重認められる。	○精緻。微粒の砂粒を含む。 ○黒灰色。
		315	○口12.8(復) ○高 2.7(残)	○形態は305と同様。 ○底部を欠損。	○調整法は305と同様。 ○渦巻状の暗文は切れ切れであり、4重認められる。 ○炭素の付着が悪い。	○精緻。微粒の石英、長石を含む。 ○暗灰色～灰白色。
	椀 I	316	○口12.8(復) ○高 3.2(残)	○底部を欠損。 ○体部は外上方へ立ち上がり、口縁部がゆるく外反する。皿状を呈する。 ○口縁端部は丸く終る。	○口縁部内外面は横ナデ。 ○体部外面は指押え。 ○体部内面はナデの後、ヘラミガキ。 ○見込みはジグザグ状の暗文。	○精緻。微粒の石英、長石を含む。 ○黒灰色。
	椀 H	317	○口14.5(復) ○高 4.3(残)	○底部を欠損。 ○体部が内弯気味に立ち上がり、口縁部と体部の境に段がつく。口縁部はやや内弯する。 ○口縁端部は丸く終る。	○口縁部内外面は横ナデ。 ○体部外面は指押え。 ○体部内面は横ナデの後、ヘラミガキ。	○精緻。1mm大の砂粒を含む。 ○黒灰色。

器種	器形	番号	法量（cm）	形態の特徴	技法の特徴	備考
瓦器	椀F	318	○口13.1(復) ○高 4.0(残)	○底部を欠損。 ○体部は内弯しながら上方へ立ち上がり、口縁部がゆるく外反する。 ○口縁端部は尖がり気味に終る。	○口縁部内外面は横ナデ。 ○体部外面はナデの後、粗いヘラミガキ。 ○体部内面は横ナデの後、密なヘラミガキ。	○精緻。微粒の砂粒を含む。 ○灰白色。

A地区

整地層2（第33図）

器種	器形	番号	法量（cm）	形態の特徴	技法の特徴	備考
輸入磁器	青磁・椀	319	○口17.8(復) ○高 2.5(残)	○口縁部が大きく外上方へ伸びる。 ○口縁端部は尖がり気味に終る。	○内外面はロクロナデ。 ○内外面に施釉。 ○体部外面はヘラ描きによる蓮弁文。	○精緻。砂粒を含まない。 ○素地　灰白色。 釉　灰緑色。
	白磁・椀	320	○口14.2(復) ○高 2.6(残)	○やや内弯気味に立ち上がる体部から口縁部へとつづく。 ○口縁端部は玉縁状を呈する。	○内外面はロクロナデ。 ○内面と外面の体部上位まで施釉。	○精緻。砂粒を含まない。 ○素地　乳灰色。 釉　灰白色。
	青磁・椀	321	○高 1.4(残) ○底 6.6	○底部のみ残存。 ○高台は幅広で高く、断面が方形を呈する。	○底部外面はロクロケズリ。 ○内面はロクロナデ。 ○内外面は施釉。底部外面はなし。 ○見込みはヘラ描きによる菊花状の絵。	○精緻。砂粒を含まない。 ○素地　淡紫灰色。 釉　淡青緑色。
	白磁・椀	322	○高 3.9(残) ○底 6.1(復)	○底部のみ残存。 ○体部が外上方へ伸びる。 ○高台は低い。外面に1条の沈線を施す。 ○体部内面にも1条の沈線を施す。	○体部内面はロクロナデ。 ○体部外面はハケメ。 ○底部外面はロクロケズリ。 ○内面は施釉。	○精緻。砂粒を含まない。 ○素地　淡白黄色。 釉　暗白黄色。

器種	器形	番号	法量（cm）	形態の特徴	技法の特徴	備考
土師器	大皿 C_1	323～327	○口14.2(平) ○高 2.4(平)	○平底の底部より口縁部が逆ハの字形に大きく開く。口縁部外面が肥厚するものが多い。 ○口縁端部は丸く終るものと尖がり気味に終るものがある。 ○323は内面の底部と体部の境に横ナデによる稜が残る。	○口縁部内外面は横ナデ。 ○体部外面はナデ、指押え。 ○見込みはナデ。	○325は粗。他は精緻。微粒の砂粒を含む。 ○324は褐色系。他は白色系。
	小皿 B_1	328・329	○口 8.7(平) ○高 1.6(平)	○平底の底部より口縁部が外上方へ伸びる。 ○口縁端部は丸く終る。	○口縁部内外面は横ナデ。 ○見込みはナデ。 ○底部外面はナデ。	○精緻。微粒の砂粒を含む。 ○328は白色系。329は褐色系。
	小皿 C_2-a	330	○口 8.0 ○高 1.5	○上げ底の底部より体部がやや内弯する。口縁部はゆるく外反する。内面の底部と体部の境には横ナデによる明瞭な稜が残る。 ○口縁端部は丸く終る。	○口縁部内外面は横ナデ。 ○見込みはナデ。 ○底部外面はナデ。	○精緻。1～5mmの石英、長石、黒色砂粒を含む。 ○白色系。
	小皿 B_2	331・332	○口 9.0(平) ○高 2.4(平)	○丸底に近い平底の底部より、体部がやや内弯する。口縁端部は外反する。 ○口縁端部は331が外側、332が内側へ肥厚する。	○口縁部内外面は横ナデ。 ○見込みはナデ。 ○底部外面はナデ。	○精緻。微粒の雲母、石英を含む。 ○褐色系。
	小皿 B_5	333	○口 5.4(復) ○高 1.0	○平底の底部より、口縁部が短く外方へ伸びる。口縁部と体部の外面に明瞭な稜がつく。 ○口縁端部は尖がる。	○口縁部外面は横ナデ。 ○底部外面はナデ。 ○内面は粗いハケメ（2～3本/1cm）。	○精緻。微粒の石英、長石を含む。 ○褐色系。
	小皿 C_1	334～336	○口 8.3(平) ○高 1.8(平)	○平底の底部より口縁部が逆ハの字形に大きく開く。内面の体部と底部の境には横ナデによる明瞭な稜がつく。 ○口縁端部は丸く終る。	○口縁部内外面は横ナデ。 ○見込みはナデ。 ○底部外面はナデ、指押え。	○精緻。微粒の砂粒を含む。 ○335は白色系。他は褐色系。
	小皿 C_1-a	337	○口 8.8 ○高 1.7	○形態はC_1と同様であるが、底部が上げ底を呈する。	○調整法はC_1と同様。	○精緻。微粒の石英、長石を含む。 ○白色系。

器種	器形	番号	法量（cm）	形態の特徴	技法の特徴	備考
土師器	中皿 B_1	338・339	○口10.2(平) ○高 1.7(平)	○丸底に近い平底の底部より口縁部が外上方へ伸びる。 ○口縁端部は丸く終る。	○口縁部内外面は横ナデ。 ○見込みはナデ。 ○底部外面はナデ。	○精緻。微粒の砂粒を含む。 ○338に白色系。339に褐色系。
	中皿 B_1-a	340	○口10.2(復) ○高 1.6	○形態はB_1と同様であるが、底部が上げ底を呈する。	○調整法はB_1と同様。	○精緻。1mm大の石英、長石、雲母を含む。 ○褐色系。
	中皿 B_2	341・342	○口10.4(平) ○高 1.4(平)	○平底の底部より体部が内弯する。 ○口縁端部は尖がり気味に終る。	○口縁部内外面は横ナデ。 ○見込みはナデ。 ○底部外面はナデ。	○精緻。微粒の砂粒を含む。 ○褐色系。
	中皿 C_1	343・344	○口10.8(平) ○高 1.9(平)	○丸底に近い平底の底部より体部がやや内弯する。口縁部は外反する。 ○口縁端部は丸く終る。	○口縁部内外面は横ナデ。 ○見込みはナデ。 ○底部外面は指押え。	○精緻。1～2mmの石英、長石を含む。 ○褐色系。
	中皿 C_2	345・346	○口11.1(平) ○高 2.4(平)	○口縁部がゆるく外反する。 ○口縁端部は丸く終る。	○口縁部内外面は横ナデ。	○精緻。微粒の雲母、石英を含む。 ○褐色系。
瓦器	摺鉢 G	347	○口27.3(復) ○高 5.6(残)	○体部が逆ハの字形に開き、口縁部につづく。 ○口縁端部は面をもつ。	○口縁部外面は横ナデ。 ○口縁部と体部の内面は横、斜め方向のハケメ。 ○体部外面はヘラケズリ。 ○体部内面に16本を数えるおろし目を施す。	○精緻。1mm大の石英、長石、黒色砂粒を含む。 ○淡黒灰色。
	摺鉢 E	348	○口28.3(復) ○高 8.7(残)	○やや内弯気味に立ち上がる体部より口縁部がゆるく外反する。 ○口縁端部は内側で面をもつ。	○口縁部と体部の内面は横ナデ。 ○口縁部外面は横方向のハケメ。 ○体部外面は縦方向のハケメの後、指押え。 ○体部内面におろし目を施す。2本残存。	○精緻。1mm大の石英、長石を含む。 ○淡黒灰色。

B地区

整地層1（第34～40図）

器種	器形	番号	法量（cm）	形態の特徴	技法の特徴	備考
土師器	製塩土器	349	○口 3.7 ○高 7.6(残)	○底部は欠損するが丸底である。 ○体部が長く上方へ伸び、口縁部が内弯する。 ○口縁端部は丸く終る。	○内外面はナデ。外面は指頭圧痕が残るが、内面は平滑にしあげる。	○精緻。1～2mmの石英、長石を含む。 ○淡褐色。
		350	○口 3.5 ○高 8.3(残)	○丸底を呈する底部より、体部が長く上方へ伸びる。 ○口縁部は内弯する。 ○口縁端部は尖がり気味に終る。	○内外面はナデ。外面は指頭圧痕が顕著に残るが、内面は平滑にしあげる。	○精緻。1～2mmの石英、長石を含む。 ○淡橙灰色。
		351～366	○口 3.7(平) ○高 —	○形態は349・350と同様。	○調整法は349・350と同様。	○精緻。1～2mmの砂粒を含む。 ○灰白色、褐色、赤灰色。
		367～373	○口 3.9(平) ○高 —	○形態は349・350と同様。	○内外面はナデ。外面は指頭圧痕が残る。内面は工具によるナデ。	○精緻。微粒の砂粒を含む。 ○灰白色、褐色、赤灰色。
		374～376	○口 3.7(平) ○高 —	○形態は349・350と同様。	○外面はナデ。指頭圧痕が残る。 ○内面は平滑にしあげており、横、斜め方向のハケメ。	○精緻。微粒の砂粒を含む。 ○灰白色、褐色。
		377・378	○口 — ○高 —	○口縁部を欠損。 ○丸底の底部より体部が上方へ伸びる。	○外面はナデ。指頭圧痕が残る。 ○内面は貝殻による調整。	○精緻。1mm大の石英、長石を含む。 ○赤灰色、赤褐色。
	韓式系土器・甕	379	○口17.2(復) ○高 3.8(残)	○張りのある体部より口縁部が大きく外反する。 ○口縁端部はやや面をもつ。	○口縁部内外面は横ナデ。 ○体部外面は縄蓆文。 ○体部内面はナデ。	○精緻。1～2mmの石英、長石を含む。 ○淡褐色。
	韓式系土器	380・381	○口 — ○高 —	○形態は不明。 ○頸部と体部の破片。	○内面はナデ。 ○外面は縄蓆文。 ○379と同一個体か。	○精緻。1～2mmの石英、長石を含む。 ○淡褐色。

器種	器形	番号	法量（cm）	形態の特徴	技法の特徴	備考
土師器	韓式系土器	382〜386	○口 — ○高 —	○形態は不明。 ○頸部と体部の破片。	○内面はナデ。 ○外面は格子文のタタキ。 ○382は1条の浅い沈線。	○精緻。1〜2mmの石英、長石、雲母を含む。 ○褐色。
	韓式系土器・甑	387・388	○口 — ○高 —	○底部の破片。 ○土器のカーブから丸底と考えられる。 ○387は方形孔が1孔残存。 ○388は中央が円形、周囲が方形孔。3孔が残存。	○内面はハケメの後、ナデ。 ○外面は格子文のタタキ。	○精緻。1〜2mmの石英、長石、角閃石、雲母を含む。 ○暗茶褐色。
	製塩土器	389〜392・395〜399	○口 — ○高 —	○口縁部、体部の破片。 ○口縁端部は丸く終る。 ○形態は不明。 ○器壁が厚い。	○内外面はナデ。	○389は粗。他は精緻。1〜3mmの石英、長石を含む。 ○灰白色、橙褐色。
		393・394・400〜402	○口 — ○高 —	○口縁部、体部の破片。 ○口縁端部は面をもち、内面に凸帯がつく。 ○器壁は薄い。	○外面はナデ。 ○内面は横ナデ。	○精緻。1〜2mmの石英を含む。 ○乳褐色。
		403・404	○口 — ○高 —	○体部の破片。	○体部内面はナデ。 ○体部内面は布目。403は13本/1cm、404は16本/1cm。	○精緻。1〜3mmの石英を含む。 ○橙褐色、乳褐色。
須恵器	杯	405	○口14.4(復) ○高 4.3 ○底 9.3	○平底の底部より体部が内弯気味に外上方へ立ち上がる。口縁部はゆるく外反する。 ○口縁端部は内側へやや肥厚する。 ○高台は下方へ伸び、断面が方形を呈する。	○口縁部と体部の内外面は横ナデ。 ○見込みはナデ。 ○底部外面はヘラケズリ。	○精緻。微粒の石英、黒色砂粒を含む。 ○淡青灰色。
		406	○口14.7(復) ○高 4.2 ○底10.1(復)	○平底の底部より体部が内弯気味に立ち上がり、口縁部が外上方へ伸びる。 ○口縁端部は尖がり気味に終る。 ○高台はハの字形に開き、断面が方形を呈する。	○口縁部と体部の内外面は横ナデ。 ○見込みはナデ。 ○底部外面はヘラケズリ。	○精緻。1mm大の石英を含む。 ○暗青灰色。

器種	器形	番号	法量（cm）	形態の特徴	技法の特徴	備考
須恵器	杯	407	○口15.0(復) ○高 3.7 ○底10.5(復)	○平底の底部より内弯気味に体部が立ち上がった後、やや外反する。口縁部はやや内弯する。 ○口縁端部は尖がり気味に終る。 ○高台は下方へ伸び、端面がやや凹む。断面が方形を呈する。	○口縁部と体部の内外面は横ナデ。 ○見込みはナデ。 ○底部外面はヘラケズリ。	○精緻。1～3mmの石英、黒色砂粒を含む。 ○淡灰色。
		408	○口18.6(復) ○高 4.2 ○底13.6(復)	○平底の底部より体部が内弯気味に立ち上がり、口縁部がゆるく外反する。 ○口縁端部は尖がり気味に終る。 ○高台はハの字形に開き、断面が方形を呈する。	○口縁部と体部の内外面は横ナデ。 ○見込みはナデ。 ○底部外面はヘラケズリ。	○精緻。1～2mmの石英、黒色砂粒を含む。 ○淡灰色。
		409	○口18.5(復) ○高 5.0(残)	○体部が内弯気味に立ち上がり、口縁部が外上方へ伸びる。 ○口縁端部は尖がり気味に終る。	○内外面は横ナデ。	○精緻。1～2mmの石英、黒色砂粒を含む。 ○淡灰色。
		410	○口12.6(復) ○高 3.8	○丸底に近い平底の底部より体部が外上方へ立ち上がる。口縁部はゆるく外反する。 ○口縁端部は尖がり気味に終る。	○口縁部と体部の内外面は横ナデ。 ○見込みはナデ。 ○底部外面はヘラケズリ。	○粗。1～3mmの石英、黒色砂粒を含む。 ○乳白色。
		411	○口 9.5 ○高 3.3	○平底の底部より体部が内弯気味に立ち上がり、口縁部がゆるく外反する。 ○口縁端部は丸く終る。	○口縁部と体部の内外面は横ナデ。 ○見込みはナデ。 ○底部外面はヘラケズリ。	○精緻。1～2mmの石英、黒色砂粒を含む。 ○暗灰色。
		412	○口 9.2 ○高 3.2	○平底の底部より体部が内弯気味に立ち上がり、口縁部がゆるく外反する。 ○口縁端部は内側へやや肥厚する。	○口縁部と体部の内外面は横ナデ。 ○見込みはナデ。 ○底部外面はヘラケズリ。	○精緻。1～2mmの黒色砂粒を含む。 ○淡灰色。
	蓋	413	○口18.0(復) ○高 1.8	○扁平な天井部からわずかに内弯して広がり、口縁部につづく。 ○口縁端部は面をもつ。 ○天井部中央に円形のつまみがつく。	○内外面は横ナデ。	○精緻。1～4mmの石英、黒色砂粒を含む。 ○淡灰色。

器種	器形	番号	法量（cm）	形態の特徴	技法の特徴	備考
須恵器	壺	414	○口 9.6(復) ○高 2.4(残)	○外上方へ伸びる頸部より、口縁部が外反する。 ○口縁端部は面をもつ。	○内外面は横ナデ。	○精緻。微粒の砂粒を含む。 ○暗灰色。
		415	○口 8.0(復) ○高 5.2(残)	○外上方へ開く頸部より口縁部がやや内弯する。口縁部は内側へ肥厚する。 ○口縁端部は丸く終る。	○外面と口縁部内面は横ナデ。 ○頸部内面はヘラケズリ。	○精緻。微粒の石英、黒色砂粒を含む。 ○暗灰色。
		416	○口10.1(復) ○高 7.8(残)	○上部へ伸びる頸部より、口縁部がゆるく外反する。 ○口縁端部は丸く終る。	○内外面は横ナデ。	○精緻。微粒の砂粒を含む。 ○暗青灰色。
	甕	417	○口13.0(復) ○高 3.5(残)	○やや外上方へ伸びる頸部より口縁部が折れ曲る。 ○口縁端部は丸く終る。	○口縁部外面と内面は横ナデ。 ○頸部外面はカキメ。	○精緻。1mm大の石英、黒色砂粒を含む。 ○淡紫灰色。
		418	○口14.1(復) ○高 2.7(残)	○大きく外上方へ伸びる頸部より口縁部が外反する。 ○口縁端部は上方へやや拡張し、つまみ上げ気味に終る。端面が凹む。 ○頸部に明瞭な凸帯を施す。	○内外面は横ナデ。 ○頸部外面には原体数9本の櫛描波状文を施す。2帯認められる。	○精緻。微粒の石英、黒色砂粒を含む。 ○淡灰色。
	甕	419	○口10.7(復) ○高 3.7(残)	○細い筒状を呈する頸部より口縁部が外上方へ大きく開き、さらに角度を変えて上方へ立ち上がる。 ○口縁端部は丸く終る。	○内外面は横ナデ。	○精緻。1～2mmの石英を含む。 ○青灰色。
	杯	420	○口 9.1(復) ○高 2.5(残)	○体部は浅く外上方へ立ち上がり、受部が水平に伸びる。口縁部は短く、内傾しながら外反する。 ○口縁端部は尖がり気味に終る。	○内外面は横ナデ。	○精緻。微粒の石英を含む。 ○青灰色。
	高杯	421	○高 4.3(残) ○底 8.9(復)	○短脚1段透しの高杯脚部である。 ○脚部はハの字形を呈し、端部のやや上に幅広の凸帯を施す。 ○脚端部はつまみ上げ気味であり、やや尖がる。 ○脚部にはすかしを入れる。	○脚端部外面と内面は横ナデ。 ○脚部外面はカキメ。	○精緻。微粒の石英を含む。 ○淡黒灰色。

器種	器形	番号	法量（cm）	形態の特徴	技法の特徴	備考
須恵器	高杯	422	○高 3.9(残) ○底 6.0(復)	○脚部のみ残存。 ○脚部はハの字形を呈し、端部が強く外反し、端面が外上方を向く。 ○脚端部は尖がり気味に終る。	○内外面は横ナデ。	○精緻。1mm大の石英を含む。 ○暗青灰色。
	鉢	423	○高 7.5(残) ○底 8.0	○円板状を呈する厚い底部。 ○体部は底部の内側より上方へ外反しながら立ち上がる。	○内外面は横ナデ。 ○底部外面はヘラケズリ。	○精緻。1mm大の石英、黒色砂粒を含む。 ○淡灰色。
土師器	甕	424	○口35.3(復) ○高 6.2(残)	○張りの少ない体部より口縁部が大きく外反する。 ○口縁端部は巻き込み気味に内側へ肥厚する。	○口縁部外面は横ナデ。 ○口縁部内面は横ナデの後、横方向のハケメ。 ○体部内面はヘラケズリ。 ○体部外面は縦方向のハケメ。	○精緻。1mm大の石英、長石、クサリ礫を含む。 ○淡白褐色。
		425	○口18.7(復) ○高 5.8(残)	○張りの少ない体部より口縁部が外折する。 ○口縁端部は面をもち、上端をやや拡張する。	○口縁部外面は横ナデ。 ○口縁部内面は横ナデの後、横方向のハケメ。 ○体部内面は横方向のハケメの後、ナデ。 ○体部外面は縦方向のハケメ。	○精緻。微粒の石英、長石を含む。 ○灰褐色。
		426	○口17.2(復) ○高 9.5(残)	○体部が球形を呈し、口縁部が大きく外反する。 ○口縁端部は上方へ肥厚する。	○口縁部内外面は横ナデ。 ○体部内外面はナデ。	○粗。微粒の石英を含む。 ○淡黄褐色。
		427	○口13.8(復) ○高 8.4(残)	○球形の体部より口縁部が大きく外反する。体部と口縁部の境は横ナデによる稜がある。 ○口縁端部は面をもつ。	○口縁部内外面は横ナデ。 ○体部内面は横方向のハケメの後、ナデ。 ○体部外面はナデ。	○粗。1～3mmの石英、長石を含む。 ○赤褐色。
		428	○口17.8(復) ○高 4.8(残)	○体部が内弯しながら立ち上がり、口縁部が大きく外反する。体部と口縁部の境に横ナデによる稜がある。 ○口縁端部は外方へやや肥厚しながら面をもつ。	○口縁部内外面は横ナデ。 ○体部内外面はナデ。	○精緻。1～2mm大の石英、長石を含む。 ○茶褐色。

器種	器形	番号	法量（cm）	形態の特徴	技法の特徴	備考
土師器	甕	429	○口19.7(復) ○高 6.1(残)	○体部が内弯しながら立ち上がり、口縁部が大きく外反する。体部と口縁部の境に横ナデによる稜がある。 ○口縁端部は外方へやや肥厚しながら面をもつ。	○口縁部内外面は横ナデ。 ○体部内面は横方向のハケメの後、ナデ。 ○体部外面はナデ。部分的にハケメ。	○精緻。1～5mmの石英、長石、黒色砂粒を含む。 ○暗灰褐色。
		430	○口20.5(復) ○高10.0(残)	○球形の体部より口縁部が大きく外反する。体部と口縁部の境は横ナデによる稜が残る。 ○口縁端部は外方へやや肥厚しながら面をもつ。	○口縁部内外面は横ナデ。 ○体部内面は横方向のハケメの後、ナデ。 ○体部外面はナデ。	○精緻。1～2mmの石英、長石を含む。 ○暗灰色。
	高杯	431	○口16.7 ○高10.0 ○底 9.6	○杯部は浅い皿状を呈し、外面に稜がある。口縁部は内弯気味に外上方へ伸びる。 ○口縁端部は丸く終る。 ○脚部は柱状部が下へいくにしたがい径が大きくなる。 ○裾部は外方へ大きく開く。端面のつくりは粗雑であり、凹凸が著しい。	○杯部内外面は横ナデ。 ○脚部外面はナデ。内面は柱状部にしぼり痕が残る。裾部は指押え。指頭圧痕が顕著に残る。 ○杯部内面には放射状の暗文。	○精緻。1～2mmの石英、長石、雲母、クサリ礫を含む。 ○淡褐色。
	蓋	432	○口18.3(復) ○高 0.6(残)	○天井部はほとんど立ち上がらない。 ○口縁端部は面をもち、内側へ肥厚する。	○外面はヘラミガキ。内面は横ナデ。	○精緻。微粒の石英、長石を含む。 ○淡乳褐色。
	羽釜	433	○口24.8(復) ○高 7.2(残)	○口縁部がゆるく外上方へ伸びる。 ○口縁端部は丸く終り、内側へ肥厚する。 ○鍔は水平に伸び、端面が丸く終る。	○口縁部外面は縦方向のハケメの後、横ナデ。内面は横方向のハケメの後、横ナデ。	○精緻。1～3mmの石英、長石、クサリ礫を含む。 ○茶褐色。
		434	○口26.0(復) ○高 6.7(残)	○口縁部は大きく外反する。 ○口縁端部は丸く終る。 ○鍔は水平に伸びており、端面が丸く終る。	○風化のため調整法は不明。	○粗。1～3mmの石英、長石、角閃石、雲母を含む。 ○淡茶褐色。

器種	器形	番号	法量（cm）	形態の特徴	技法の特徴	備考
土師器	鉢	435	○口31.5(復) ○高 4.5(残)	○体部が内弯気味に立ち上がり、口縁部がゆるく外反する。 ○口縁端部は外側へ肥厚する。	○口縁部外面と内面は横ナデ。 ○体部外面はヘラミガキ。 ○内面に放射状の暗文。	○精緻。微粒の石英、長石を含む。 ○淡褐色。
		436	○口24.8(復) ○高 5.9	○体部が内弯して立ち上がり、口縁部がゆるく外反する。 ○口縁端部は面をもち、中央がやや凹む。	○口縁部内外面は横ナデ。 ○体部外面はナデ。 ○体部内面は風化のため調整法は不明。	○精緻。1～2mmの石英、長石、雲母を含む。 ○灰褐色。
		437	○口19.8(復) ○高 3.5(残)	○外上方へ伸びる体部より口縁部がゆるく外反する。 ○口縁端部は巻き込むように内側へ肥厚する。	○口縁部内外面は横ナデ。 ○体部は風化のため調整法は不明。	○精緻。1～2mmの石英、長石、クサリ礫を含む。 ○淡褐色。
		438	○口19.4(復) ○高 4.6(残)	○体部は外上方へ伸び、さらに角度を変えて立ち上がる。口縁部はゆるく外反する。 ○口縁端部は内側へ肥厚する。	○風化のため調整法は不明。	○粗。微粒の石英、長石を含む。 ○淡褐色。
	杯	439	○口15.9(復) ○高 4.0 ○底11.3(復)	○平底の底部より体部が内弯気味に立ち上がる。口縁部がゆるく外反する。 ○口縁端部は巻き込むように内側へ肥厚する。 ○高台はハの字形に開き、断面が台形を呈する。	○風化のため調整法は不明。	○粗。微粒の石英、長石、クサリ礫を含む。 ○乳茶色。
		440	○口16.6(復) ○高 3.2(残)	○体部が内弯気味に伸び、口縁部が外上方へ立ち上がる。 ○口縁端部は内側へやや肥厚し、沈線をもつ。	○風化のため調整法は不明。	○精緻。微粒の石英、長石を含む。 ○淡赤褐色。
		441	○口13.9(復) ○高 3.1(残)	○体部は外上方へ立ち上がり、口縁部がゆるく外反する。 ○口縁端部は内傾して面をもち、中央に浅い沈線をもつ。	○口縁部外面は横ナデ。 ○体部外面は指押え。 ○内面は風化のため調整法は不明。	○精緻。微粒の石英、長石を含む。 ○淡灰褐色。

器種	器形	番号	法量（cm）	形態の特徴	技法の特徴	備考
土師器	杯	442	○口12.1(復) ○高 2.5(残)	○平底の底部より体部が外上方へ立ち上がり、口縁部がわずかに外反する。 ○口縁端部は内傾し、中央に浅い沈線をもつ。	○風化のため調整法は不明。	○粗。微粒の石英、長石、クサリ礫を含む。 ○赤褐色。
		443	○口13.6(復) ○高 3.7	○丸底に近い平底の底部より口縁部が内弯気味に立ち上がる。口縁部はゆるく外反する。 ○口縁端部は外側へ肥厚する。	○風化のため調整法は不明。	○粗。1mm大の石英、長石、雲母、クサリ礫を含む。 ○暗褐色。
		444	○口16.5(復) ○高 3.9(残)	○体部は外上方へ立ち上がり、口縁部がゆるく外反する。 ○口縁端部は丸く終る。	○風化のため調整法は不明。	○精緻。微粒の石英、長石、雲母を含む。 ○淡灰褐色。
		445	○口14.0(復) ○高 3.7(残)	○平底の底部より体部が外上方へ立ち上がり口縁部に至る。 ○口縁端部は尖がり気味に終る。	○内面と口縁部外面は横ナデ。 ○体部外面はナデ。	○粗。微粒の石英、長石を含む。 ○淡灰褐色。
		446	○口14.5(復) ○高 3.5	○丸底に近い平底の底部より体部が内弯気味に立ち上がる。口縁部は外反する。 ○口縁端部はやや丸く終る。	○口縁端部外面は横ナデ。 ○体部外面は指押え。 ○内面は風化のため調整法は不明。	○粗。1～3mmの石英、長石を含む。 ○灰褐色。
		447	○口11.9(復) ○高 3.5(残)	○体部が内弯気味に立ち上がり、口縁部が外反する。 ○口縁端部は尖がり気味に終る。	○口縁部外面は横ナデ。 ○体部外面は指押え。 ○内面は風化のため調整法は不明。	○粗。1～2mmの石英、長石、クサリ礫を含む。 ○淡褐色。
		448	○口 7.0 ○高 2.7	○平底の底部より体部が内弯気味に立ち上がり口縁部に至る。 ○口縁端部は丸く終る。	○内面と口縁部外面は横ナデ。 ○体部外面はナデ。	○精緻。微粒の石英、長石、雲母を含む。 ○淡灰褐色。
		449	○口10.3 ○高 2.7	○丸底に近い平底の底部より体部が内弯気味に立ち上がる。口縁部はわずかに外反する。 ○口縁端部は尖がり気味に終り、内側に浅い沈線をもつ。	○内面と口縁部外面は横ナデ。 ○体部外面はナデ。 ○内面に放射状の暗文。	○精緻。微粒の石英、長石、クサリ礫を含む。 ○茶褐色。

器種	器形	番号	法量（cm）	形態の特徴	技法の特徴	備考
土師器	皿	450	○口13.8(復) ○高 1.7(残)	○丸底に近い平底の底部より体部が外上方へ伸びる。口縁部はゆるく外反する。 ○口縁端部は内傾して面をもつ。	○風化のため調整法は不明。	○粗。微粒の石英、長石、クサリ礫を含む。 ○淡灰褐色。
		451	○口14.3(復) ○高 1.9	○平底の底部より口縁部がゆるく外反する。 ○口縁端部は内側へわずかに肥厚する。	○風化のため調整法は不明。	○粗。1～3mmの石英、長石、クサリ礫を含む。 ○赤褐色。
		452	○口16.4(復) ○高 2.5	○平底の底部より口縁部がゆるく外反する。 ○口縁端部は内傾して面をもつ。	○口縁部内外面は横ナデ。 ○見込みはナデ。 ○底部外面は指押え。	○精緻。1mm大の石英、長石、雲母を含む。 ○暗茶褐色。
		453	○口15.2(復) ○高 2.2(残)	○やや上げ底を呈する平底の底部より口縁部が内弯気味に立ち上がる。 ○口縁端部は内側へやや肥厚する。	○口縁部内外面は横ナデ。 ○見込みはナデ。 ○体部外面は部分的なヘラケズリ。 ○底部外面は指押え。	○粗。微粒の石英、長石、雲母、クサリ礫を含む。 ○淡灰褐色。
		454	○口18.4(復) ○高 2.0	○平底の底部より口縁部が外上方へ立ち上がる。 ○口縁端部は内傾し、丸く終る。	○口縁部外面は横ナデ。 ○底部外面は指押え。 ○内面は風化のため調整法は不明。	○粗。微粒の石英、長石を含む。 ○茶褐色。
		455	○口18.5(復) ○高 2.1	○平底の底部より口縁部が強く外反する。外面の底部と口縁部境には稜をもつ。 ○口縁端部は巻き込むように内側へ肥厚する。	○口縁部内外面は横ナデ。 ○見込みはナデ。 ○底部外面は指押え。	○精緻。微粒の石英、長石を含む。 ○赤褐色。
		456	○口23.5(復) ○高 2.1(残)	○体部が外上方へ立ち上がり口縁部に至る。 ○口縁端部は丸く内側へ肥厚する。	○風化のため調整法は不明。	○精緻。微粒の石英、長石、クサリ礫を含む。 ○淡赤褐色。
		457	○口23.8(復) ○高 3.2	○丸底に近い平底の底部より体部が外上方へ立ち上がり口縁部に至る。 ○口縁端部は内側へ肥厚する。	○風化のため調整法は不明。	○精緻。微粒の石英、長石、クサリ礫を含む。 ○淡乳褐色。

器種	器形	番号	法量（cm）	形態の特徴	技法の特徴	備考
土師器	皿	458	○口25.4(復) ○高 3.5(残)	○体部が外上方へ立ち上がり口縁部がゆるく外反する。 ○口縁端部は外側へやや肥厚する。	○風化のため調整法は不明。	○粗。微粒の石英、長石を含む。 ○赤褐色。
	羽釜C	459	○口23.6(復) ○高12.1(残)	○球形を呈する体部より口縁部がくの字形に外折する。 ○口縁端部は丸く終る。 ○鍔はやや上方へ伸び、端面が丸く終る。	○口縁部内外面は横ナデ。 ○体部下半の外面はヘラケズリ。 ○体部内面はナデ。	○精緻。1～3mmの石英、長石、クサリ礫を含む。 ○淡橙褐色。
		460	○口21.6(復) ○高 6.2(残)	○鍔を欠損する。 ○内傾する体部より口縁部がくの字形に外折する。 ○口縁端部はやや面をもつ。	○口縁部内外面は横ナデ。 ○体部内面はハケメの後、ナデ。	○精緻。1～3mmの石英、長石を含む。 ○淡褐色。
		461	○口22.3(復) ○高 5.2(残)	○鍔を欠損する。 ○形態は460と同様。	○口縁部内外面は横ナデ。 ○体部内面はナデ。	○精緻。1～3mmの石英、長石を含む。 ○橙褐色。
	羽釜D	462	○口25.0(復) ○高 6.5(残)	○内傾する体部より口縁部が短く外反する。 ○口縁端部は玉縁状に厚く肥厚する。 ○鍔は水平に伸び、端面が丸く終る。	○口縁部内外面は横ナデ。 ○体部内面はナデ。	○精緻。1～3mmの石英、長石、クサリ礫を含む。 ○橙褐色。
		463	○口25.5(復) ○高 5.0(残)	○鍔を欠損する。 ○形態は462と同様。	○調整法は462と同様。	○精緻。1～3mmの石英、長石、クサリ礫を含む。 ○茶褐色。
	羽釜G	464	○口27.8(復) ○高 9.2(残)	○張りの少ない体部より口縁部が内弯する。 ○口縁端部は内傾して面をもつ。 ○鍔はやや外上方へ伸び、端面が面をもち、やや凹む。	○内面と口縁部外面は横ナデ。 ○体部下半の外面はナデ。	○精緻。1～5mmの石英、長石、黒色砂粒を含む。 ○橙褐色。

器種	器形	番号	法量（cm）	形態の特徴	技法の特徴	備考
土師器	羽釜B	465	○口24.0(復) ○高 5.3(残)	○鍔を欠損する。 ○体部が内傾し、口縁部が大きく外反する。口縁部と体部の境の外面には横ナデによる明瞭な段がつく。 ○口縁端部は巻き込むように内側へ肥厚する。	○口縁部内外面は横ナデ。 ○体部内外面はナデ。	○精緻。1～2mmの石英、長石、クサリ礫を含む。 ○橙褐色。
陶磁器	備前焼・摺鉢A	466	○口31.5(復) ○高 6.8(残)	○逆ハの字形に外上方へ伸びる体部より口縁部を内上方へ拡張する。 ○口縁端部は尖がり気味に終る。	○内外面はロクロナデ。 ○体部内面におろし目を施す。5本が残存。	○精緻。1～5mmの石英、長石を含む。 ○紫褐色。
瓦器	椀C	467	○口14.0(復) ○高 4.3(残)	○体部が内弯気味に外上方へ立ち上がり口縁部に至る。 ○口縁端部は尖がり気味に終る。	○外面は分割の密なヘラミガキ。破片のため分割数は不明。 ○内面はやや粗いヘラミガキ。	○精緻。微粒の砂粒を含む。 ○黒色。
	椀D	468	○口17.0(復) ○高 4.4(残)	○体部が内弯気味に外上方へ立ち上がり、口縁部がゆるく外反する。 ○口縁端部は丸く終る。	○外面は指押えの後、粗いヘラミガキ。 ○内面は密なヘラミガキ。	○精緻。微粒の砂粒を含む。 ○灰黒色。
	椀H	469	○口13.7(復) ○高 4.4(残)	○体部は外上方へ立ち上がり口縁部が外反する。 ○口縁端部は丸く終るが、やや外側へ肥厚する。	○口縁部内外面は横ナデ。 ○体部外面は指押え。 ○体部内面なナデの後、ヘラミガキ。 ○炭素の付着が悪い。	○精緻。微粒の石英、長石を含む。 ○灰色。
	椀L	470	○口11.1 ○高 2.8 ○径25.2	○浅い皿状を呈する体部より口縁部がゆるく外反する。 ○口縁端部は丸く終る。 ○底部は丸底に近く、高台は消失する。	○口縁部内外面は横ナデ。 ○体部外面は指押え。 ○体部内面はナデの後、5重の渦巻状の暗文。	○精緻。1～3mmの石英、長石を含む。 ○黒灰色。
	皿	471	○口 9.1 ○高 2.3	○丸底に近い平底の底部より体部が内弯気味に立ち上がる。口縁部は外反する。 ○口縁端部は丸く終る。	○口縁部内外面は横ナデ。 ○体部内面は横ナデの後、ヘラミガキ。 ○見込みはナデの後、斜格子の暗文。 ○底部外面は指押え。	○精緻。微粒の砂粒を含む。 ○暗灰色。

器種	器形	番号	法量（cm）	形態の特徴	技法の特徴	備考
瓦器	皿	472	○口 8.4(復) ○高 1.5	○平底の底部より口縁部が短く外反する。底部と口縁部の境に稜がある。 ○口縁端部は丸く終る。	○口縁部内外面は横ナデ。 ○体部内面はナデの後、ヘラミガキ。 ○見込みはナデの後、格子状の暗文。 ○底部外面は指押え。	○精緻。微粒の砂粒を含む。 ○黒色。
		473	○口 9.0(復) ○高 1.1(残)	○平底の底部より口縁部が強く外反する。 ○口縁端部は丸く終る。	○口縁部内外面は横ナデ。 ○体部内面はナデの後、ヘラミガキ。 ○底部外面は指押え。	○精緻。微粒の石英、長石を含む。 ○黒色。
		474	○口 7.8(復) ○高 1.6(残)	○丸底に近い平底の底部より口縁部がゆるく外反する。 ○口縁端部は丸く終る。	○口縁部内外面は横ナデ。 ○体部内面はナデの後、粗いヘラミガキ。 ○底部外面はナデ。	○精緻。微粒の石英、長石を含む。 ○黒色。
輸入磁器	白磁・椀	475	○口16.2(復) ○高 2.7(残)	○体部が外上方へ立ち上がり口縁部に続く。 ○口縁端部は玉縁状を呈する。	○内外面はロクロナデ。 ○内外面は施釉。	○精緻。砂粒を含まない。 ○素地　乳灰色。 釉　灰白色。
		476	○口14.1(復) ○高 2.6(残)	○形態は475と同様。 ○口縁端部に凹線を施す。	○調整法は475と同様。	○精緻。砂粒を含まない。 ○素地　乳灰色。 釉　灰白色。
		477	○口15.2(復) ○高 1.5(残)	○形態は475と同様。 ○口縁端部の玉縁状の肥厚が小さい。	○調整法は475と同様。	○精緻。砂粒を含まない。 ○素地　乳灰色。 釉　灰白色。
		478	○口15.6(復) ○高 3.4(残)	○やや内弯気味に立ち上がる体部より口縁部が短く外反する。 ○口縁端部は丸く終る。	○内外面はロクロナデ。 ○内外面は施釉。	○粗。砂粒は含まない。 ○素地　灰白色。 釉　淡緑灰色。
		479	○口 8.1(復) ○高 1.7(残)	○外上方へ立ち上がる体部より口縁部が上方へ伸びる。 ○口縁端部が面をもつ。	○内外面はロクロナデ。 ○内面と外面の体部上位まで施釉。	○精緻。微粒の黒い砂粒を含む。 ○素地　灰白色。 釉　暗灰白色。
	青磁・椀	480	○高 3.7(残) ○底 5.6(復)	○平底の底部より体部が内弯気味に立ち上がる。 ○高台は下方へ伸び高い。断面が長方形を呈する。	○内外面はロクロナデ。 ○内外面は施釉。底部裏面はなし。	○精緻。砂粒を含まない。 ○素地　乳灰色。 釉　淡緑青色。

器種	器形	番号	法量（cm）	形態の特徴	技法の特徴	備考
輸入磁器	白磁・椀	481	○高 2.3(残) ○底 5.0(復)	○平底の底部より体部が外上方に立ち上がる。 ○高台は逆ハの字形に開く。断面が方形を呈する。	○内外面はロクロナデ。 ○内面と外面の底部近くまで施釉。	○精緻。微粒の黒い砂粒を含む。 ○素地　灰白色。釉　淡黄灰色。
	青磁・合子	482	○口 4.5(復) ○高 2.1 ○底 3.6(復)	○やや上げ底気味の平底の底部より体部が内弯して立ち上がる。体部と口縁部の境には受部を施し、外方へ短く伸びる。口縁部はやや内傾する。 ○口縁端部は尖がる。	○内面と口縁部外面はロクロナデ。 ○体部外面の中位と体部内面下半から見込みは施釉。他はなし。 ○外面には縦方向の楕円形の線刻を施し文様とする。	○精緻。砂粒を含まない。 ○素地　灰白色。釉　淡青色。
瓦器	皿	483	○口 8.2 ○高 1.4	○丸底に近い平底の底部より口縁部が短く外反する。 ○口縁端部は丸く終る。	○口縁部内外面は横ナデ。 ○見込みはナデ。 ○底部外面は指押え。	○精緻。微粒の砂粒を含む。 ○黒灰色。
		484	○口 7.0(復) ○高 0.9	○平底の底部より口縁部がゆるく外反する。 ○口縁端部は丸く終る。	○口縁部内外面は横ナデ。 ○見込みはナデ。 ○底部外面は指押え。 ○炭素の付着が悪い。	○精緻。微粒の石英、長石を含む。 ○灰白色。
土師器	小皿A	485〜490	○口 9.1(平) ○高 1.4(平)	○平底に近い丸底の底部より体部がやや内弯する。口縁部は外反する。 ○口縁端部を内側へ巻き込む。	○口縁部内外面は横ナデ。 ○見込みはナデ。 ○底部外面はナデ、指押え。	○精緻。砂粒をほとんど含まない。 ○485・488は褐色系。他は白色系。
	小皿B_1	491〜496	○口 9.6(平) ○高 1.7(平)	○丸底に近い平底の底部より体部が内弯する。口縁部は外上方へ伸びる。 ○口縁端部は丸く終るものと尖がり気味のものがある。	○口縁部内外面は横ナデ。 ○見込みはナデ。 ○底部外面はナデ、指押え。	○粗なものが多い。 ○石英、長石、クサリ礫を含むものが多い。 ○褐色系。
	小皿B_2	497	○口10.0 ○高 2.0	○丸底に近い平底の底部より体部が内弯する。口縁部がゆるく外反する。 ○口縁端部は尖がり気味に終る。	○口縁部内外面は横ナデ。 ○見込みはナデ。 ○底部外面は指押え。	○精緻。1〜2㎜の石英、長石を含む。 ○褐色系。
	小皿B_3	498・499	○口 8.6(平) ○高 1.3(平)	○丸底に近い平底の底部より口縁部が内弯する。 ○口縁端部が内側へ肥厚する。	○口縁部内外面は横ナデ。 ○見込みはナデ。 ○底部外面はナデ。	○精緻。微粒の石英、クサリ礫、雲母を含む。 ○褐色系。

器種	器形	番号	法量（cm）	形態の特徴	技法の特徴	備考
土師器	小皿 B_4	500～502	○口 8.6(平) ○高 1.5(平)	○平底の底部より体部が内弯気味に立ち上がる。口縁部と体部の境に明瞭な段がつく。口縁部はやや内弯する。 ○口縁端部は丸く終る。	○口縁部内外面は横ナデ。 ○見込みはナデ。 ○底部外面はナデ。	○精緻。微粒の石英、クサリ礫、雲母を含む。 ○褐色系。
	小皿 C_1	503	○口 7.4(復) ○高 1.7(残)	○体部が逆ハの字形に開き、口縁部へと続く。 ○口縁端部は尖がり気味に終る。	○口縁部内外面は横ナデ。 ○体部外面はナデ。	○精緻。微粒の石英、長石を含む。 ○白色系。
	小皿 C_1-a	504	○口 8.4 ○高 1.7	○形態は 503 と同様であるが、底部が上げ底を呈する。	○調整法は503と同様。	○精緻。微粒の石英、クサリ礫、雲母を含む。 ○褐色系。
	中皿 B_1	505～507	○口11.0(平) ○高 2.1(平)	○平底の底部より体部が内弯する。口縁部は外上方へ伸びる。 ○口縁端部は丸く終る。	○口縁部内外面は横ナデ。 ○見込みはナデ。 ○底部外面はナデ、指押え。	○精緻。石英、クサリ礫、雲母を含むものが多い。 ○505は白色系。他は褐色系。
	中皿 B_2	508・509	○口10.3(平) ○高 2.1(平)	○平底の底部より体部が内弯気味に立ち上がる。口縁部は外反する。 ○口縁端部は内側へ肥厚する。	○口縁部内外面は横ナデ。 ○見込みはナデ。 ○底部外面は指押え。	○精緻。微粒の砂粒を含む。 ○508 は白色系。509 は褐色系。
	中皿 B_3	510・511	○口10.9(平) ○高 1.9(平)	○平底の底部より口縁部が内弯する。 ○口縁端部は内側へ肥厚する。	○口縁部内外面は横ナデ。 ○見込みはナデ。 ○底部外面はナデ。	○精緻。微粒の石英、クサリ礫を含む。 ○褐色系。
	中皿 B_4	512～515	○口11.0(平) ○高 2.4(平)	○平底の底部より体部が内弯気味に立ち上がる。口縁部と体部の境に明瞭な段がつく。口縁部は外上方へ伸びる。 ○口縁端部はやや内側へ肥厚する。	○口縁部内外面は横ナデ。 ○見込みはナデ。 ○底部外面はナデ、指押え。	○精緻。石英、長石、クサリ礫を含むものが多い。 ○褐色系。
	中皿 B_4-a	516	○口10.2 ○高 2.4	○形態は 512 と同様であるが、底部が上げ底を呈する。	○調整法は512と同様。	○精緻。微粒の石英、クサリ礫を含む。 ○褐色系。

器種	器形	番号	法量（cm）	形態の特徴	技法の特徴	備考
土師器	中皿 C_1	517	○口10.2(復) ○高 1.7(残)	○体部が逆ハの字形に開き、口縁部へと続く。 ○口縁端部は丸く終る。	○口縁部内外面は横ナデ。 ○体部外面はナデ。	○精緻。微粒の石英、長石、クサリ礫を含む。 ○褐色系。
	中皿 C_2	518	○口10.6(復) ○高 1.6(残)	○平底の底部より体部が逆ハの字形に開く。口縁部が外反する。 ○口縁端部は丸く終る。	○口縁部内外面は横ナデ。 ○見込みはナデ。 ○底部外面は指押え。	○精緻。微粒の石英、長石を含む。 ○白色系。
	大皿 B_1	519～523	○口14.0(平) ○高 2.7(平)	○平底の底部より口縁部が外上方へ立ち上がる。 ○口縁端部は尖がり気味のものと丸く終るものがある。	○口縁部内外面は横ナデ。 ○見込みはナデ。 ○底部外面はナデ、指押え。	○精緻。石英、長石、クサリ礫を含むものが多い。 ○519・522は褐色系。他は白色系。
	大皿 B_1-a	524	○口14.5(復) ○高 1.9	○形態は 519 と同様であるが、底部が上げ底を呈する。	○調整法は519と同様。	○粗。微粒の石英、長石、クサリ礫を含む。 ○褐色系。
	大皿 B_2	525～527	○口11.6(平) ○高 2.5(平)	○平底の底部より体部が内弯気味に立ち上がる。口縁部が外反する。 ○口縁端部は尖がり気味のものと丸く終るものがある。	○口縁部内外面は横ナデ。 ○見込みはナデ。 ○底部外面はナデ、指押え。	○精緻。石英、長石、クサリ礫を含むものが多い。 ○525 は白色系。他は褐色系。
	大皿 C_1	528～530	○口14.8(平) ○高 2.4(平)	○平底の底部より体部が逆ハの字形に開き、口縁部へと続く。 ○口縁端部は尖がり気味に終る。	○口縁部内外面は横ナデ。 ○見込みはナデ。 ○底部外面はナデ、指押え。	○精緻。石英、長石を含むものが多い。 ○530 は褐色系。他は白色系。
	大皿 C_2	531	○口17.3(復) ○高 3.5(残)	○体部が逆ハの字形に開き、口縁部がゆるく外反する。 ○口縁端部は丸く終る。	○風化のため調整法は不明。	○粗。1～2mmの石英、長石を含む。 ○白色系。

C地区

整地層1（第41図）

器種	器形	番号	法量（cm）	形態の特徴	技法の特徴	備考
須恵器	杯	532	○口 9.5(復) ○高 3.2(残)	○丸底の底部より体部が内弯する。口縁部はゆるく外反する。 ○口縁端部は丸く終る。	○内外面は横ナデ。	○精緻。砂粒を含まない。 ○淡青灰色。
		533	○口 8.5(復) ○高 4.2(残)	○丸底の底部より口縁部が内弯する。 ○口縁端部は丸く終る。	○内外面は横ナデ。	○精緻。黒色砂粒を含む。 ○淡紫灰色。
	高杯	534	○高 5.1(残) ○底 8.8(復)	○杯部を欠損する。脚部はハの字形に開く。 ○脚端部は内傾し、面をもつ。	○脚部外面の上半はカキメ、下半と内面は横ナデ。 ○脚部の3ケ所に三角形の透し孔を入れる。	○精緻。砂粒を含まない。 ○暗灰色。
土師器	杯	535	○口 9.3(復) ○高 2.9	○丸底の底部より体部が内弯する。口縁部がゆるく外反する。 ○口縁端部は尖がり気味に終る。	○口縁部内外面は横ナデ。 ○見込みはナデ。 ○底部外面はナデ。 ○内面に放射状の暗文。	○精緻。微粒の石英、長石を含む。 ○橙褐色。
		536	○口 9.3(復) ○高 3.6	○丸底の底部より体部が内弯する。口縁部がゆるく外反する。 ○口縁端部は内側へやや肥厚する。	○風化のため調整法は不明。	○粗。微粒の石英、長石、雲母、クサリ礫を含む。 ○橙褐色。
	小皿 B_4	537・538	○口 8.8(平) ○高 1.2(平)	○平底の底部より体部が内弯気味に立ち上がる。体部と口縁部の境に明瞭な段がつく。口縁部は外上方へ伸びる。 ○口縁端部は丸く終る。	○口縁部内外面は横ナデ。 ○見込みはナデ。 ○底部外面はナデ。	○精緻。微粒の石英、長石、雲母を含む。 ○褐色系。
	大皿 C_1	539	○口14.1(復) ○高 2.5(残)	○平底の底部より口縁部が逆ハの字形に開く。 ○口縁端部は丸く終る。	○風化のため調整法は不明。	○粗。微粒の石英、長石を含む。 ○白色系。
輸入磁器	青磁・椀	540	○高 3.8(残) ○底 4.6	○体部は内弯する。 ○高台は高く、内傾する。断面が長方形を呈する。	○内外面はロクロナデ。 ○見込みにヘラ描きによる花の図柄。 ○内外面は施釉。底部裏面はなし。	○精緻。砂粒を含まない。 ○素地　灰白色。 釉　青緑色。

器種	器形	番号	法量（cm）	形態の特徴	技法の特徴	備考
輸入磁器	白磁・椀	541	○高 2.0(残) ○底 5.4(復)	○体部は外上方へ伸びる。 ○高台は低く、下方へ伸びる。断面が台形を呈する。	○内外面はロクロナデ。 ○内面は施釉。	○精緻。砂粒を含まない。 ○素地　灰白色。 釉　淡黄灰色。
瓦器	椀 I	542	○口13.3(復) ○高 3.5(残)	○内弯する体部より口縁部がゆるく外反する。 ○口縁端部は丸く終る。	○口縁部内外面は横ナデ。 ○体部内面は粗いヘラミガキ。 ○見込みは平行線の暗文。 ○体部外面は指押え。 ○炭素の付着が悪い。	○精緻。1mm大の石英を含む。 ○灰色。
	椀（大和型）	543	○口15.3(復) ○高 4.5(残)	○体部が外上方へ伸び、口縁部がゆるく外反する。 ○口縁端部は丸く終り、内側に沈線を施す。	○内面は密なヘラミガキ。 ○外面はナデの後、分割するヘラミガキ。分割数は不明。	○精緻。砂粒をほとんど含まない。 ○黒色。
土師器	羽釜 C	544	○口20.6 ○高 6.0	○体部は内傾し、口縁部がくの字形に外反する。 ○口縁端部は丸く終る。 ○鍔はやや外上方へ伸び、端面は丸く終る。	○口縁部内外面は横ナデ。 ○体部外面はナデ。 ○体部内面は板状工具によるナデ。	○粗。1～2mmの石英、長石、雲母、クサリ礫を含む。 ○茶褐色。

D地区

自然流路（第42～45図）

器種	器形	番号	法量（cm）	形態の特徴	技法の特徴	備考
輸入磁器	青磁・椀	545	○口11.2(復) ○高 2.6(残)	○口縁部が外上方へ伸びる。 ○口縁端部は丸く終る。	○内外面はロクロナデ。 ○内外面に施釉。	○精緻。砂粒を含まない。 ○素地　灰白色。 釉　暗緑色。
		546	○口10.8(復) ○高 5.4(残)	○体部が内弯気味に立ち上がり、口縁部がゆるく外反する。 ○口縁端部は丸く終る。	○内外面はロクロナデ。 ○内外面に施釉。	○精緻。砂粒を含まない。 ○素地　灰白色。 釉　淡青緑色。

器種	器形	番号	法量（cm）	形態の特徴	技法の特徴	備考
輸入磁器	青磁・椀	547	○高 2.4(残) ○底 6.4	○体部は外上方へ伸びる。 ○高台は高く、下方へ伸びる。断面が長方形を呈する。	○内外面はロクロナデ。 ○内外面に施釉。 ○体部外面はヘラ描きによる蓮弁文。 ○見込みはヘラ描きによる花状の図柄。	○精緻。砂粒を含まない。 ○素地　灰白色。 釉　暗緑色。
	白磁・椀	548	○高 1.6(残) ○底 3.9	○体部は外上方へ伸びる。 ○高台は低く、ややハの字形に開く。断面が方形を呈する。	○内外面はロクロナデ。 ○内面と体部外面は施釉。高台はなし。	○精緻。砂粒を含まない。 ○素地　灰白色。 釉　灰白色。
陶磁器	陶器・椀	549	○口12.6(復) ○高 4.7(残)	○外上方へ立ち上がる体部より口縁部へと続く。 ○口縁端部は丸く終る。	○内外面はロクロナデ。 ○内外面に施釉。 ○体部外面にヘラ描きによる蓮弁文。	○精緻。砂粒を含まない。 ○素地　赤褐色。 釉　茶黄色。
	瀬戸焼・椀	550	○高 3.5(残) ○底 4.0	○体部は外上方へ伸びる。 ○高台は低く、ハの字形に開く。断面が方形を呈する。	○内外面はロクロナデ。 ○内面と体部上半に施釉。	○精緻。微粒の砂粒を含む。 ○素地　灰色。 釉　暗緑灰色。
		551	○高 3.4(残) ○底 4.7	○体部が内弯気味に立ち上がる。 ○高台は低く、下方へ伸びる。断面が三角形を呈する。	○内外面はロクロナデ。 ○内外面に施釉。高台はなし。	○精緻。微粒の砂粒を含む。 ○素地　黄灰色。 釉　暗緑灰色。
	陶器・椀	552	○高 4.2(残) ○底 5.3	○体部が内弯気味に立ち上がる。 ○高台は高く、下方へ伸びる。断面が台形を呈する。	○内外面はロクロナデ。 ○内面と体部上半に施釉。	○精緻。微粒の砂粒を含む。 ○素地　淡茶灰色。 釉　紫茶色。
		553	○高 1.4(残) ○底 4.4(復)	○体部が外上方へ伸びる。 ○高台は低く、下方へ伸びる。断面が方形を呈する。	○内外面はロクロナデ。 ○内面に施釉。	○精緻。砂粒を含まない。 ○素地　灰白色。 釉　暗灰白色。
	瀬戸焼・鉢	554	○口10.0(復) ○高 4.5(残)	○丸底を呈する底部より体部が外上方へ伸びた後、内傾する。頸部が上方へ立ち上がり、口縁部が強く外反する。 ○口縁端部は尖がり気味に終る。	○内外面はロクロナデ。 ○口縁部内面と外面の体部中位まで施釉。	○精緻。砂粒を含まない。 ○素地　灰白色。 釉　緑灰色。

器種	器形	番号	法量（cm）	形態の特徴	技法の特徴	備考
瓦器	摺鉢G	555	○口35.2(復) ○高12.1(残)	○体部が逆ハの字形に開き、口縁部に至る。 ○口縁端部は面をもつ。 ○口縁部に片口部が残る。	○口縁部内外面は横ナデ。 ○体部外面はヘラケズリ。 ○体部内面はナデ。 ○体部内面におろし目を施す。28条が認められる。	○精緻。1～2mmの石英、長石を含む。 ○暗灰色。
		556	○口31.3(復) ○高 5.8(残)	○形態は555と同様。	○調整法は555と同様。 ○おろし目は20条が認められる。	○精緻。1～2mmの石英、長石を含む。 ○暗灰色。
		557	○口33.4(復) ○高 5.5(残)	○形態は555と同様。	○口縁部内外面は横ナデ。 ○体部外面はヘラケズリ。 ○体部内面は横、斜め方向のハケメ。 ○体部内面におろし目を施す。21条が認められる。	○粗。1～2mmの石英、長石、黒色砂粒を含む。 ○暗灰色。
		558	○口33.4(復) ○高 5.5(残)	○形態は555と同様。	○調整法は555と同様であるが、内面は風化のため不明。 ○おろし目は11条が認められる。	○粗。1～2mmの石英、長石、黒色砂粒を含む。 ○灰色。
		559	○口30.1(復) ○高 5.5(残)	○形態は555と同様。	○調整法は555と同様であるが、内面は風化のため不明。 ○おろし目は16条が認められる。	○粗。1～2mmの石英、長石、黒色砂粒を含む。 ○暗灰色。
		560	○口30.1(復) ○高 5.6(残)	○形態は555と同様。	○調整法は555と同様であるが、内面は風化のため不明。 ○おろし目は11条が認められる。	○粗。1～3mmの石英、長石、黒色砂粒を含む。 ○黒色。
		561	○口26.1(復) ○高 7.0(残)	○形態は555と同様。	○調整法は557と同様。	○精緻。1～2mmの石英、長石を含む。 ○暗灰色。
		562	○口27.8(復) ○高 7.0(残)	○形態は555と同様。	○調整法は557と同様。 ○おろし目は16条が認められる。	○精緻。1～3mmの石英、長石、黒色砂粒を含む。 ○黒色。

器種	器形	番号	法量（cm）	形態の特徴	技法の特徴	備考
瓦器	摺鉢G	563	○口29.0(復) ○高 5.1(残)	○形態は555と同様。	○調整法は555と同様であるが、内面は風化のため不明。 ○おろし目は21条が認められる。	○粗。1～3mmの石英、長石、黒色砂粒を含む。 ○暗灰色。
	摺鉢E	564	○口30.2(復) ○高 7.5(残)	○体部が逆ハの字形に開き、口縁部が外反する。 ○口縁端部は丸く終る。	○口縁部内外面は横ナデ。 ○体部内外面はナデ。 ○体部内面には10条のおろし目を施す。	○精緻。1～3mmの石英、長石を含む。 ○黒色。
		565	○口27.6(復) ○高 4.9(残)	○形態は564と同様。	○調整法は564と同様。 ○おろし目は4条が認められる。	○精緻。微粒の石英、長石を含む。 ○黒色。
	摺鉢F	566	○口29.5(復) ○高 6.1(残)	○体部が逆ハの字形に開き、口縁部に至る。 ○口縁端部は内傾して面をもつ。	○口縁部内外面は横ナデ。 ○体部内外面はナデ。 ○体部内面には4条のおろし目を施す。	○精緻。1～3mmの石英、長石、黒色砂粒を含む。 ○茶灰色。
陶磁器	陶器・椀	567	○口10.0(復) ○高 7.0 ○底 4.0(復)	○平底の底部より体部が内弯気味に立ち上がり、口縁部に至る。 ○口縁端部は尖がり気味に終る。 ○高台は低く、下方へ伸びる。断面が三角形を呈する。	○内外面はロクロナデ。 ○内外面に施釉。高台の裏面はなし。 ○体部外面に紺色の絵柄。	○精緻。砂粒を含まない。 ○素地　灰白色。 釉　淡青白色。
		568	○口10.9(復) ○高 6.2 ○底 3.5	○平底の底部より体部が外上方へ立ち上がり口縁部に至る。 ○口縁端部は尖がり気味に終る。 ○高台は高く、内傾する。断面が三角形を呈する。	○内外面はロクロナデ。 ○内外面に施釉。 ○体部外面に紺色の絵柄。	○精緻。砂粒を含まない。 ○素地　灰白色。 釉　淡青白色。
		569	○口 9.8(復) ○高 5.8(残)	○体部が内弯気味に立ち上がり口縁部に至る。 ○口縁端部は丸く終る。	○内外面はロクロナデ。 ○内外面に施釉。 ○体部外面に紺色の絵柄。	○精緻。砂粒を含まない。 ○素地　灰白色。 釉　淡青白色。
	美濃焼・皿	570	○口10.4 ○高 2.3 ○底 5.4	○上げ底の底部より体部が外上方へ伸びる。口縁部は外反する。 ○口縁端部は丸く終る。	○内外面はロクロナデ。 ○内外面に施釉。底部の裏面はなし。	○精緻。微粒の砂粒を含む。 ○素地　灰白色。 釉　茶黒色。

器種	器形	番号	法量（cm）	形態の特徴	技法の特徴	備考
陶磁器	陶器・椀	571	○高 4.8(残) ○底 4.3	○体部は内弯気味に立ち上がる。 ○高台は高く、下方へ伸びる。断面が長方形を呈する。	○内外面はロクロナデ。 ○内外面に施釉。	○精緻。砂粒を含まない。 ○素地　灰白色。 釉　淡青白色。
	美濃焼・皿	572	○口 7.9 ○高 2.0 ○底 4.5	○平底の底部より体部が外上方へ伸び口縁部に至る。 ○口縁端部は丸く終る。	○内外面はロクロナデ。 ○内外面に施釉。	○精緻。微粒の砂粒を含む。 ○素地　灰白色。 釉　黄緑色。
瓦器	盤	573	○口22.4(復) ○高 3.5	○平底の底部より体部が上方へ伸び口縁部に至る。 ○口縁端部は丸く終る。	○内外面はヘラミガキ。	○精緻。1～2mmの石英、長石、クサリ礫を含む。 ○黒灰色。
	火舎	574	○口21.0(復) ○高 4.2(残)	○口縁部が上方へ伸びる。 ○口縁端部は面をもつ。	○風化のため調整法は不明。	○粗。微粒の石英、長石を含む。 ○灰色。
陶磁器	備前焼・甕	575	○口19.0(復) ○高 4.2(残)	○口縁部が上方へ伸びる。 ○口縁端部は玉縁状を呈する。	○内外面は横ナデ。	○精緻。微粒の石英、長石を含む。 ○紫褐色。
	備前焼・摺鉢B	576	○口33.6(復) ○高 5.5(残)	○体部が逆ハの字形に開き、口縁部が内傾する。 ○口縁端部は丸く終る。	○内外面は横ナデ。 ○体部内面に7条のおろし目を施す。	○精緻。1～5mmの石英、長石を含む。 ○紫灰色。
瓦器	火舎	577	○口42.0(復) ○高 6.7(残)	○口縁部は上方へ伸びる。 ○口縁端部はやや丸いが面をもつ。	○内外面は横ナデ。	○精緻。微粒の石英、長石を含む。 ○灰色。
		578	○口42.0(復) ○高 6.0(残)	○口縁部は内弯する。 ○口縁端部は面をもつ。	○風化のため調整法は不明。	○粗。微粒の石英、長石、クサリ礫を含む。 ○黒灰色。
	甕	579	○口35.5(復) ○高 6.5(残)	○内傾する体部より口縁部が下方へ外反する。 ○口縁端部は丸く終る。	○口縁部内外面は横ナデ。 ○体部外面は平行のタタキ。 ○体部内面は横方向のハケメ。	○粗。1～3mmの石英、長石、黒色砂粒を含む。 ○赤褐色。
土師器	小皿 B_1	580～583	○口 8.3(平) ○高 1.1(平)	○平底の底部より口縁部が内弯する。 ○口縁端部は尖がり気味と丸く終るものがある。	○口縁部内外面は横ナデ。 ○見込みはナデ。 ○底部外面はナデ、指押え。	○粗。石英、長石、クサリ礫を含むものが多い。 ○褐色系。

器種	器形	番号	法量（cm）	形態の特徴	技法の特徴	備考
土師器	小皿 B_2	584	○口 7.9(復) ○高 1.2	○平底の底部より体部が内弯気味に立ち上がる。口縁部がゆるく外反する。 ○口縁端部は丸く終る。	○口縁部内外面は横ナデ。 ○見込みはナデ。 ○底部外面は指押え。	○精緻。微粒のクサリ礫を含む。 ○褐色系。
	小皿 B_4	585	○口 8.0 ○高 1.3	○平底の底部より体部が内弯気味に立ち上がる。口縁部と体部の境に明瞭な段がつく。口縁部は内弯する。 ○口縁端部は丸く終る。	○口縁部内外面は横ナデ。 ○見込みはナデ。 ○底部外面は指押え。	○粗。微粒の石英、長石、クサリ礫、雲母を含む。 ○褐色系。
	小皿 C_1	586〜588	○口 8.2(平) ○高 1.9(平)	○平底の底部より体部が逆ハの字形に開き口縁部に至る。 ○口縁端部は尖がり気味に終る。	○口縁部内外面は横ナデ。 ○見込みはナデ。 ○底部外面は指押え。	○粗。石英、長石、クサリ礫を含むものが多い。 ○褐色系。
	小皿 C_1-a	589・590	○口 7.9(平) ○高 1.6(平)	○形態は 586 と同様であるが底部が上げ底を呈する。	○調整法は586と同様。	○粗。石英、長石を含む。 ○589は白色系。590は褐色系。
	中皿 B_4	591	○口11.6(復) ○高 1.9	○平底の底部より体部が内弯気味に立ち上がる。口縁部と体部の境に明瞭な段がつく。口縁部は内弯する。 ○口縁端部が内側へ肥厚する。	○風化のため調整法は不明。	○粗。微粒の石英、長石、雲母を含む。 ○褐色系。
	大皿 B_1-a	592	○口12.5(復) ○高 1.4	○上げ底の底部より口縁部が外上方へ伸びる。 ○口縁端部は丸く終る。	○風化のため調整法は不明。	○粗。微粒の石英、長石、雲母を含む。 ○褐色系。
	大皿 C_1	593・594	○口14.2(平) ○高 2.4(平)	○口縁部が逆ハの字形に開く。 ○口縁端部は尖がり気味に終る。	○口縁部内外面は横ナデ。	○精緻。微粒の石英、長石を含む。 ○白色系。
瓦器	皿	595	○口 7.9(復) ○高 1.2	○丸底に近い平底の底部より口縁部が外反する。 ○口縁端部は丸く終る。	○口縁部内外面は横ナデ。 ○見込みはナデ。 ○底部外面は指押え。	○精緻。微粒の石英、長石を含む。 ○黒色。
		596	○口 8.0(復) ○高 1.3	○形態は595と同様。	○口縁部内外面と見込みは横ナデ。 ○底部外面は指押え。	○精緻。砂粒を含まない。 ○黒色。

器種	器形	番号	法量（cm）	形態の特徴	技法の特徴	備考
瓦器	皿	597	○口 8.2(復) ○高 1.7	○形態は595と同様。	○調整法は595と同様。 ○炭素の付着が悪い。	○精緻。微粒の石英、長石を含む。 ○灰色。
		598	○口 7.8(復) ○高 1.2	○形態は595と同様。	○調整法は595と同様。 ○炭素の付着が悪い。	○粗。微粒の石英、長石を含む。 ○灰色。
		599	○口 8.1 ○高 1.4	○形態は595と同様。	○調整法は595と同様。 ○炭素の付着が悪い。	○精緻。微粒の石英、長石を含む。 ○暗灰色。
	ミニチュア羽釜	600	○口 5.7(復) ○高 2.6(残)	○体部が内傾し、口縁部が上方へ立ち上がる。 ○口縁端部は丸く終る。 ○鍔は短く、断面が三角形を呈する。	○内外面は横ナデ。	○精緻。微粒の石英、長石を含む。 ○灰色。
		601	○口 6.5(復) ○高 5.2(残)	○体部は球形を呈し、口縁部が内弯する。 ○口縁端部は面をもち、沈線を施す。 ○鍔は水平に伸び、断面が三角形を呈する。	○口縁部内外面は横ナデ。 ○体部内外面はナデ。	○精緻。微粒の石英、長石を含む。 ○灰白色。
	羽釜F	602	○口27.5(復) ○高 7.9(残)	○口縁部は内傾する。 ○口縁端部は面をもつ。 ○鍔は上方へ伸び、端面が面をもつ。 ○口縁部に3条の段をもつ。	○口縁部内外面は横ナデ。 ○体部外面はヘラケズリ。 ○体部内面は横方向のハケメ。	○精緻。1～2mmの石英、長石を含む。 ○暗灰色。
		603	○口30.4(復) ○高 4.5(残)	○形態は602と同様。 ○口縁部に3条の段をもつ。	○調整法は602と同様。	○精緻。微粒の石英、長石を含む。 ○暗灰色。
		604	○口25.2(復) ○高 6.2(残)	○形態は602と同様。 ○口縁部に3条の段をもつ。	○調整法は602と同様。	○精緻。1～5mmの石英、長石、黒色砂粒を含む。 ○暗灰色。
		605	○口27.9(復) ○高 6.0(残)	○形態は602と同様。 ○口縁部に4条の段をもつ。	○調整法は602と同様。	○精緻。1～5mmの石英、長石を含む。 ○灰色。

器種	器形	番号	法量（cm）	形態の特徴	技法の特徴	備考
瓦器	羽釜F	606	○口25.6(復) ○高 6.0(残)	○形態は602と同様。 ○口縁部に3条の段をもつ。	○調整法は602と同様。	○精緻。1～2mmの石英、長石、黒色砂粒を含む。 ○黒色。
		607	○口23.4(復) ○高 8.0(残)	○形態は602と同様。 ○口縁部に3条の段をもつ。	○調整法は602と同様。	○精緻。1～5mmの石英、長石、黒色砂粒を含む。 ○暗灰色。
		608	○口22.4(復) ○高 3.8(残)	○形態は602と同様。 ○口縁部に3条の段をもつ。 ○口縁部に焼成後、小円孔を穿つ。	○調整法は602と同様。	○粗。1～2mmの石英、長石を含む。 ○暗灰色。
		609	○口21.8(復) ○高 5.1(残)	○形態は602と同様。 ○口縁部に3条の段をもつ。	○風化のため調整法は不明。	○粗。1～5mmの石英、長石、クサリ礫を含む。 ○橙褐色。
		610	○口25.1(復) ○高 5.8(残)	○形態は602と同様。 ○口縁部に3条の段をもつ。	○風化のため調整法は不明。	○粗。1～3mmの石英、長石、黒色砂粒を含む。 ○橙褐色。
		611	○口25.0(復) ○高 4.7(残)	○形態は602と同様。 ○口縁部に3条の段をもつ。	○調整法は602と同様。	○精緻。微粒の石英、長石を含む。 ○暗灰色。
		612	○口19.8(復) ○高 5.1(残)	○形態は602と同様。 ○口縁部に3条の段をもつ。	○調整法は602と同様。	○精緻。1～5mmの石英、長石、黒色砂粒を含む。 ○灰色。
		613	○口21.2(復) ○高 9.5(残)	○形態は602と同様。 ○口縁部に2条の段をもつ。	○口縁部内外面は横ナデ。 ○体部外面はヘラケズリ。 ○体部内面は横方向のハケメの後、ナデ。	○精緻。微粒の石英、長石を含む。 ○灰色。
		614	○口21.8(復) ○高 5.3(残)	○形態は602と同様。 ○口縁部に3条の段をもつ。	○調整法は602と同様。	○精緻。1～3mmの石英、長石、クサリ礫を含む。 ○暗灰色。
		615	○口24.0(復) ○高 6.5(残)	○形態は602と同様。 ○口縁部に2条の段をもつ。	○風化のため調整法は不明。	○粗。微粒の石英、長石を含む。 ○暗灰色。

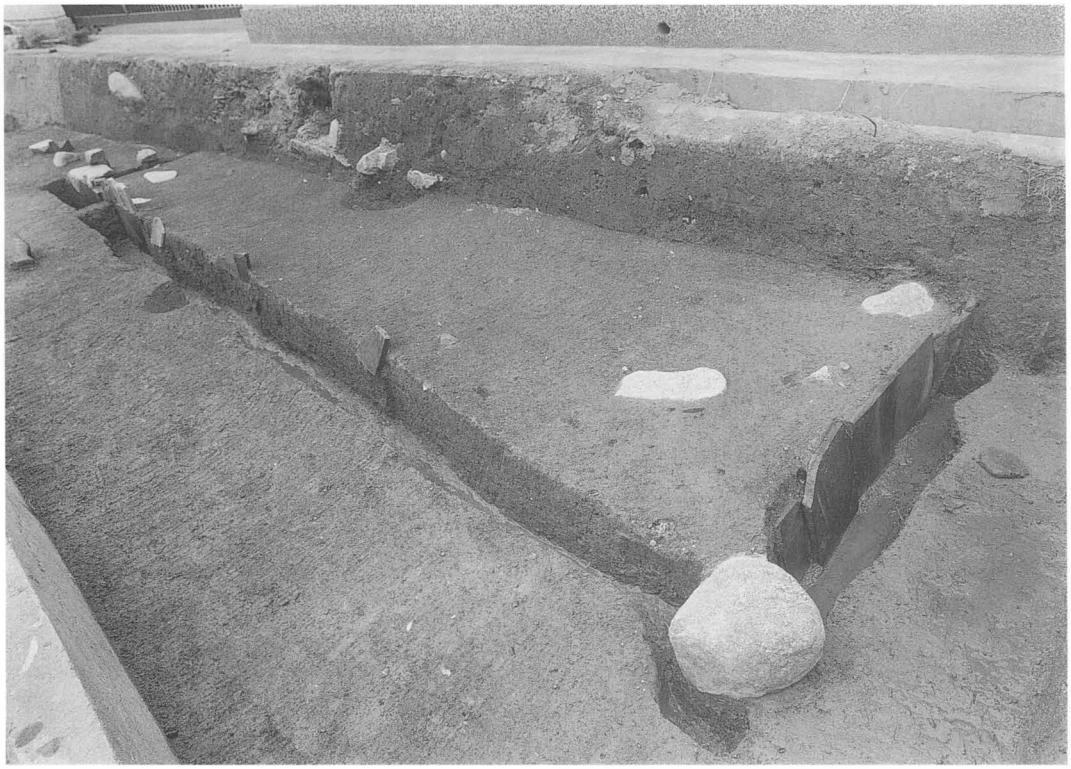
器種	器形	番号	法量（cm）	形態の特徴	技法の特徴	備考
瓦器	羽釜F	616	○口19.6(復) ○高 6.9(残)	○形態は602と同様。 ○口縁部に2条の段をもつ。	○口縁部内外面は横ナデ。 ○体部外面はヘラケズリ。 ○体部内面はナデ。	○精緻。1～3mmの石英、長石を含む。 ○暗灰色。
		617	○口20.4(復) ○高 7.5(残)	○形態は602と同様。 ○口縁部に2条の段をもつ。	○口縁部内外面は横ナデ。 ○体部外面はヘラケズリ。 ○体部内面は横方向のハケメの後、ナデ。	○精緻。1～2mmの石英、長石を含む。 ○暗灰色。
	鍋	618	○口26.0(復) ○高 6.8(残)	○体部が上方へ立ち上がり、口縁部が外反した後、上方へ角度を変える。 ○口縁端部は面をもつ。	○口縁部内外面は横ナデ。 ○体部外面はナデ。 ○体部内面は横方向のハケメ。	○精緻。微粒の石英、長石を含む。 ○暗灰色。
	鉢	619	○口20.4(復) ○高 6.0(残)	○内弯気味に立ち上がる体部より口縁部がゆるく外反する。 ○口縁端部はわずかに面をもつ。	○口縁部内外面と体部内面は横ナデ。 ○体部外面は指押えの後、部分的にハケメ。 ○内面に暗文。	○精緻。微粒の石英、長石を含む。 ○黒色。
	椀F	620	○口16.6(復) ○高 4.5(残)	○内弯気味に立ち上がる体部より口縁部がゆるく外反する。 ○口縁端部は丸く終る。	○口縁部内外面は横ナデ。 ○体部内外面はヘラミガキ。	○精緻。微粒の石英、長石を含む。 ○黒色。
	椀I	621	○口13.2 ○高 3.3 ○底 3.4 ○径25.0	○丸底に近い平底の底部より体部が大きく開く。口縁部はゆるく外反する。 ○口縁端部は丸く終る。 ○高台は低く、断面が三角形を呈する。	○口縁部内外面は横ナデ。 ○体部外面は指押え。 ○体部内面はナデの後、粗いヘラミガキ。 ○見込みは平行線の暗文。	○精緻。微粒の石英、長石を含む。 ○黒色。
		622	○口13.3(復) ○高 4.0 ○底 2.8 ○径30.0	○形態は621と同様。	○調整法は621と同様。 ○炭素の付着が悪い。	○精緻。微粒の石英、長石を含む。 ○灰色。
		623	○口15.4(復) ○高 2.8(残)	○形態は621と同様。	○調整法は621と同様。	○精緻。微粒の石英、長石を含む。 ○黒色。
	椀J	624	○口15.0(復) ○高 4.4 ○底 4.8(復) ○径29.3	○形態は621と同様。	○口縁部内外面は横ナデ。 ○見込みはナデ。 ○体部外面は指押え。 ○体部内面は横ナデの後、8重の渦巻状の暗文。	○精緻。微粒の石英、長石を含む。 ○黒色。

器種	器形	番号	法量（cm）	形態の特徴	技法の特徴	備考
瓦器	椀J	625	○口13.8(復) ○高 3.6 ○底 2.8 ○径26.1	○形態は621と同様。	○調整法は624と同様。 ○渦巻状の暗文は8重認められる。	○精緻。1～2mmの石英、長石を含む。 ○暗灰色。
		626	○口13.6(復) ○高 3.5 ○底 4.0(復) ○径25.7	○形態は621と同様。	○風化のため調整法は不明。	○粗。微粒の石英、長石を含む。 ○黒色。
		627	○口14.0(復) ○高 3.6(残)	○形態は621と同様。	○調整法は624と同様。 ○渦巻状の暗文は6重認められる。 ○炭素の付着が悪い。	○精緻。1～4mmの石英、長石、黒色砂粒を含む。 ○灰色。
		628	○口12.8(復) ○高 3.2(残)	○形態は621と同様。	○調整法は624と同様。 ○渦巻状の暗文は切れ切れであり、7重認められる。	○精緻。微粒の石英、長石を含む。 ○黒色。
		629	○口13.5(復) ○高 3.1(残)	○形態は621と同様。	○調整法は624と同様。 ○渦巻状の暗文は7重認められる。	○精緻。微粒の石英、長石を含む。 ○黒色。

図　　版

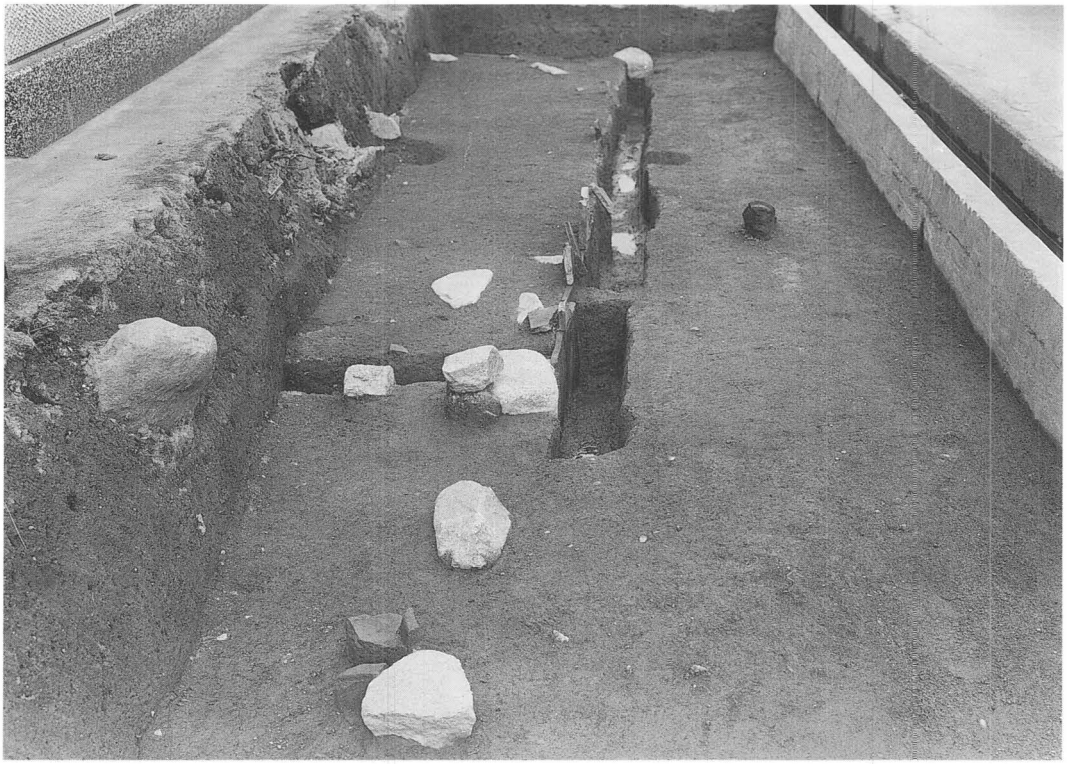
図版1　遺構（A地区）

1．塼立建物全景（西より）

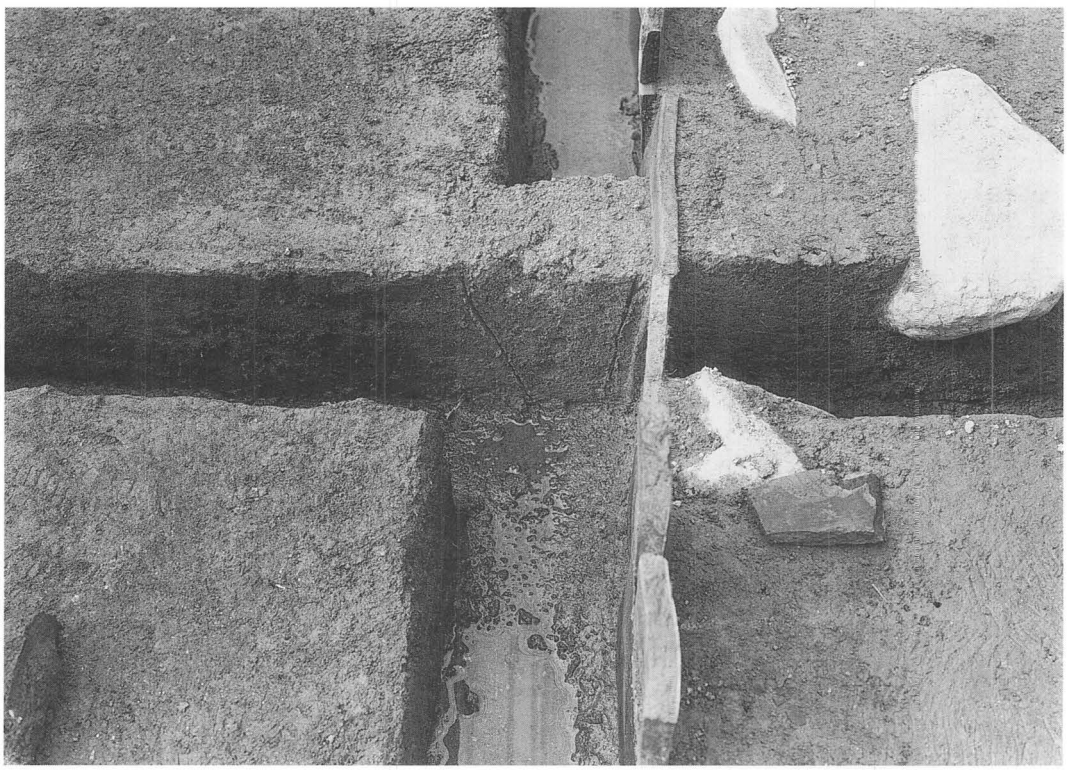


2．塼立建物全景（南東より）

図版2　遺構（A地区）

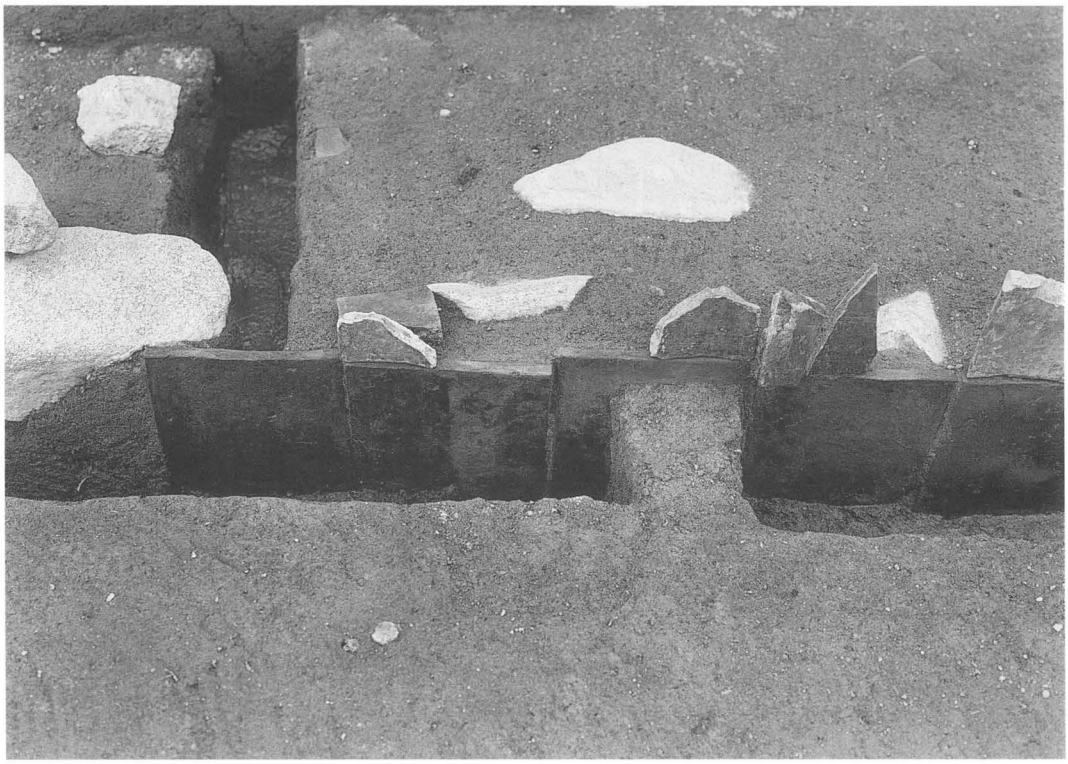


1．塼立建物全景（西より）



2．塼立建物掘り方断面

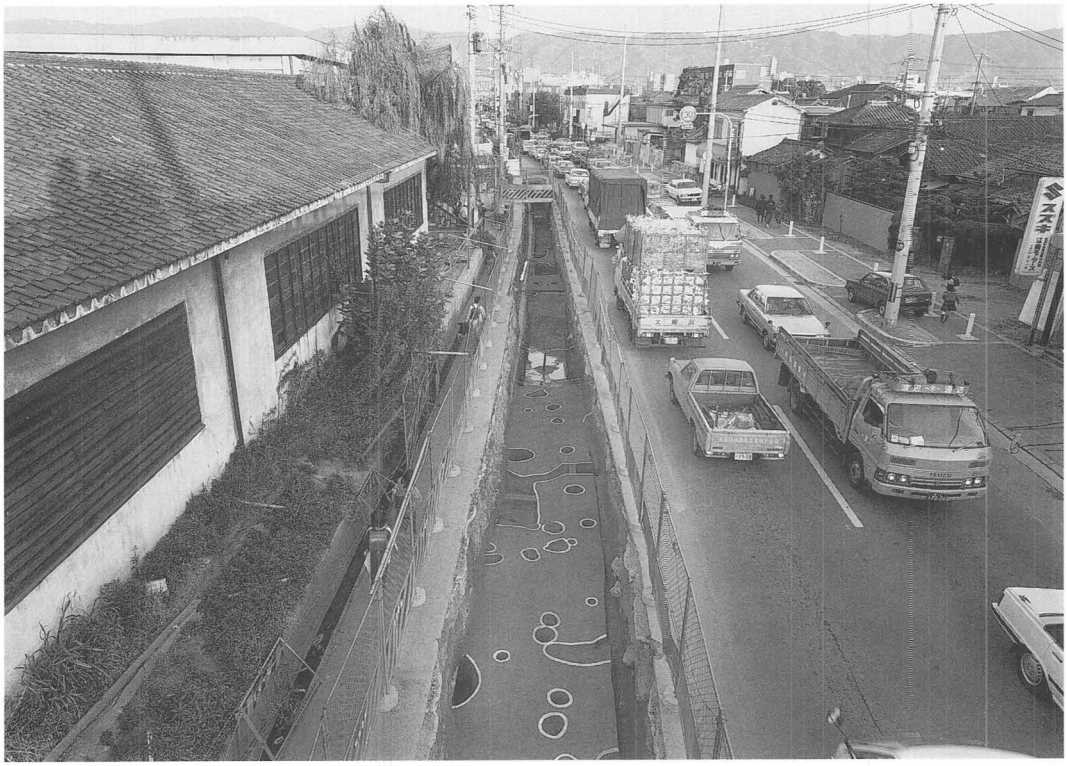
図版3　遺構（A地区）



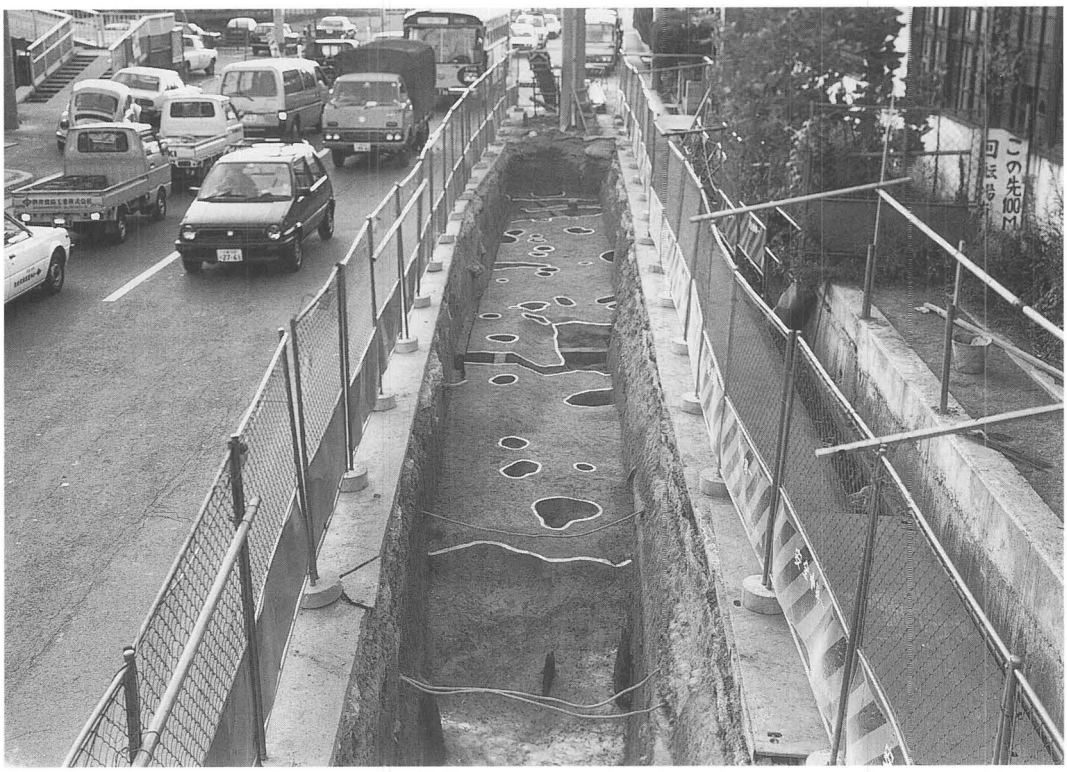
1．南側塼立検出状況

2．東側塼立検出状況

図版4　遺構（B地区）

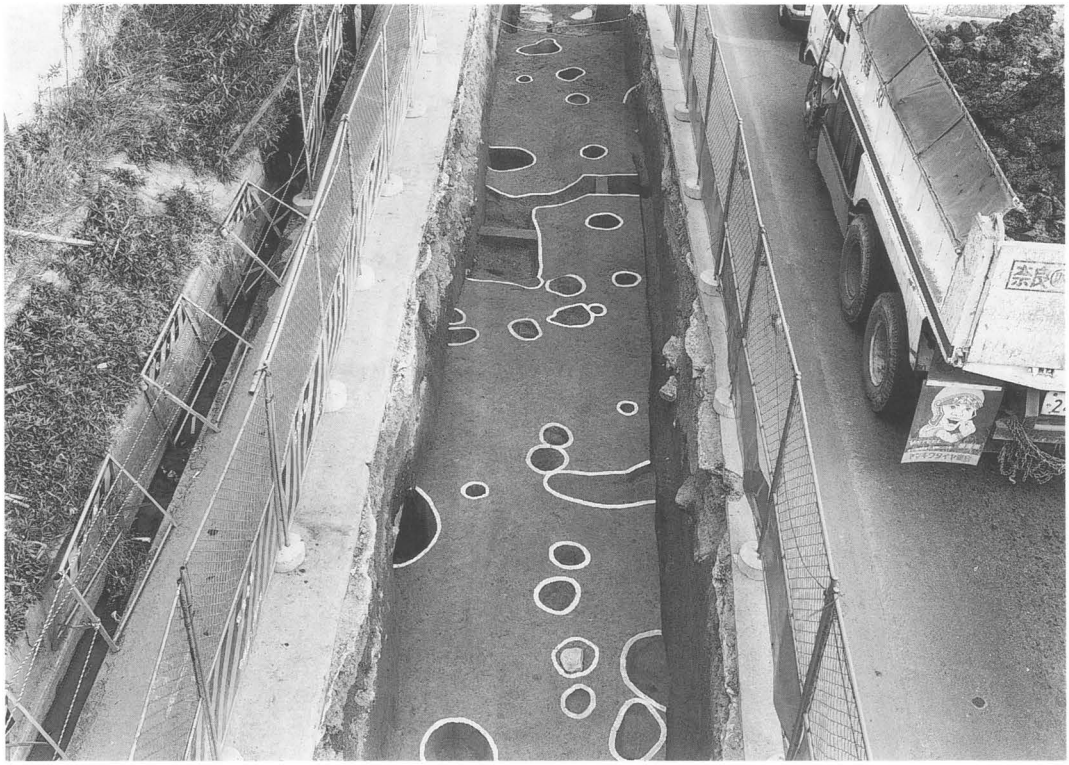


1．遺構全景（西より）

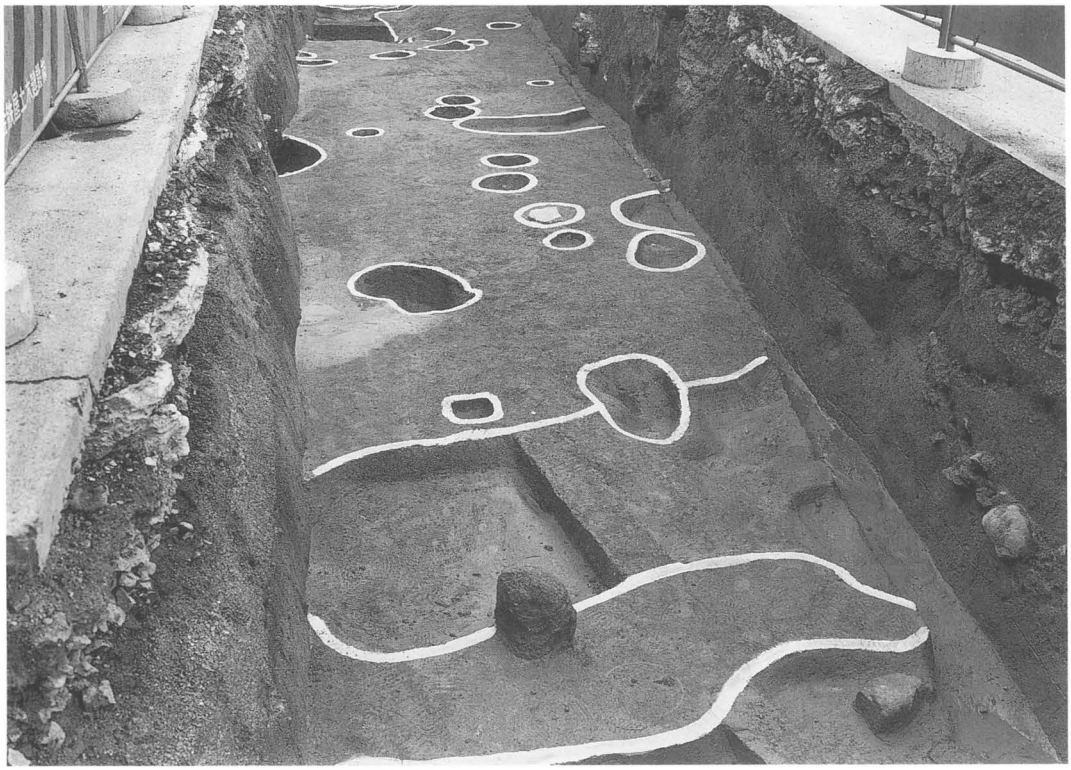


2．遺構全景（東より）

図版5　遺構（B地区）



1．柱穴（西より）



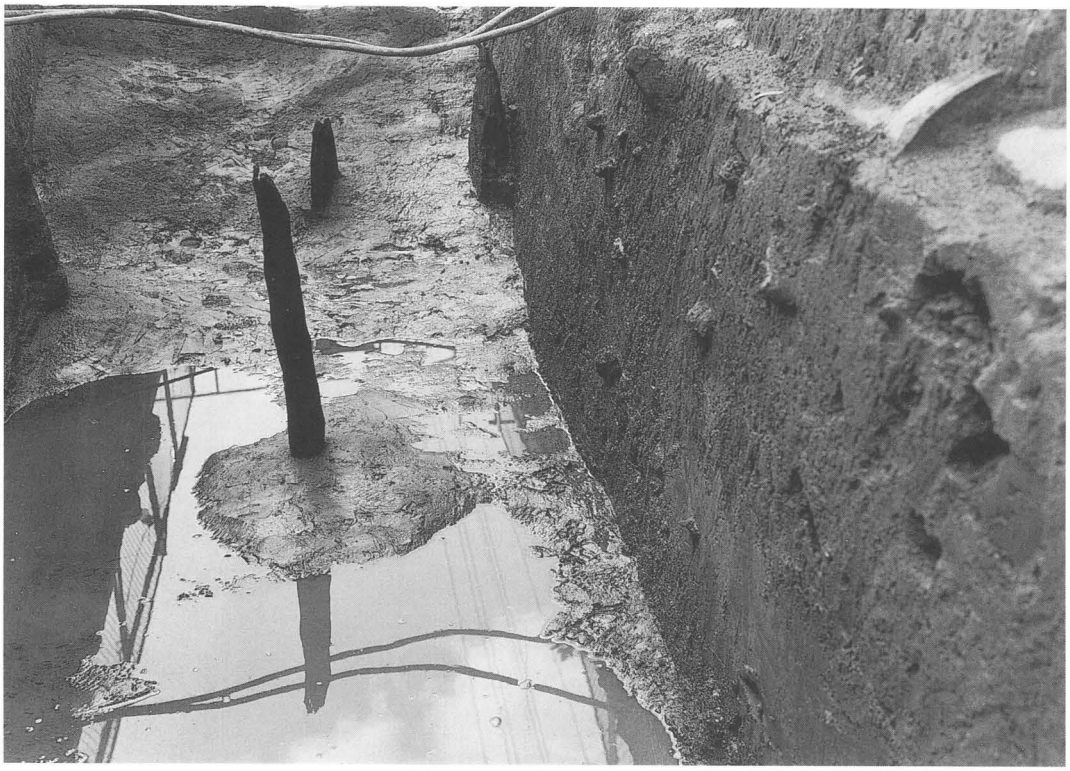
2．柱穴（西より）

図版6　遺構（B地区）

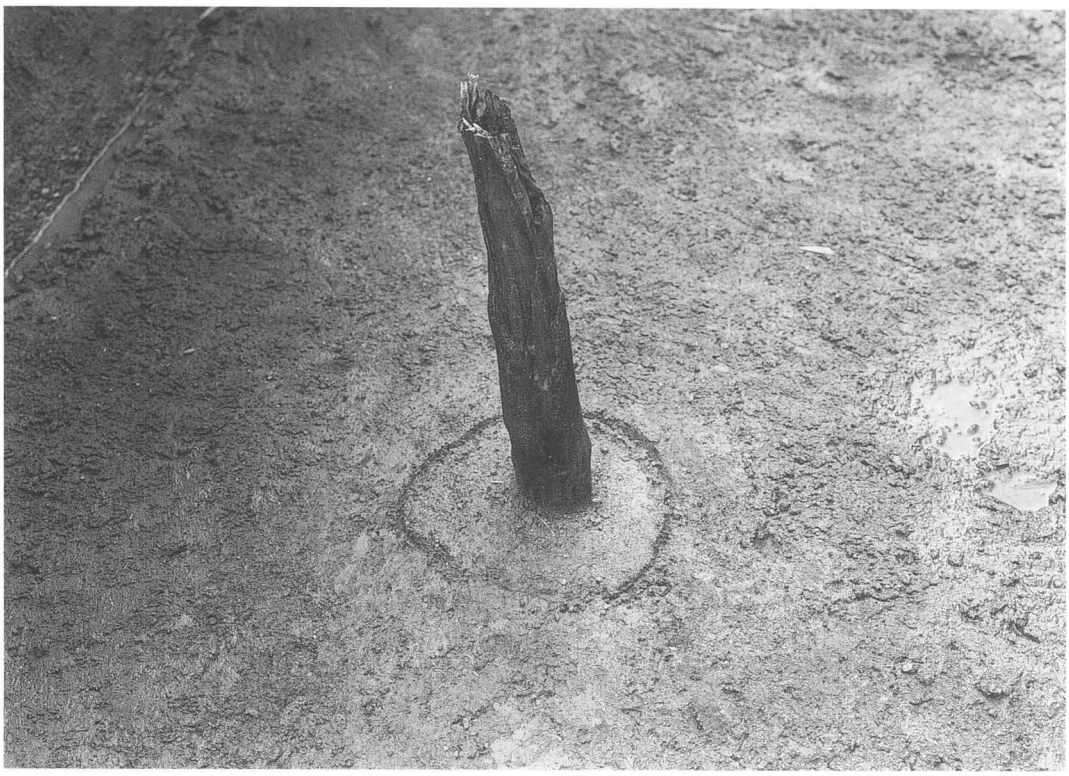
1．堀2（西より）

2．堀2（東より）

図版7　遺構（B地区）

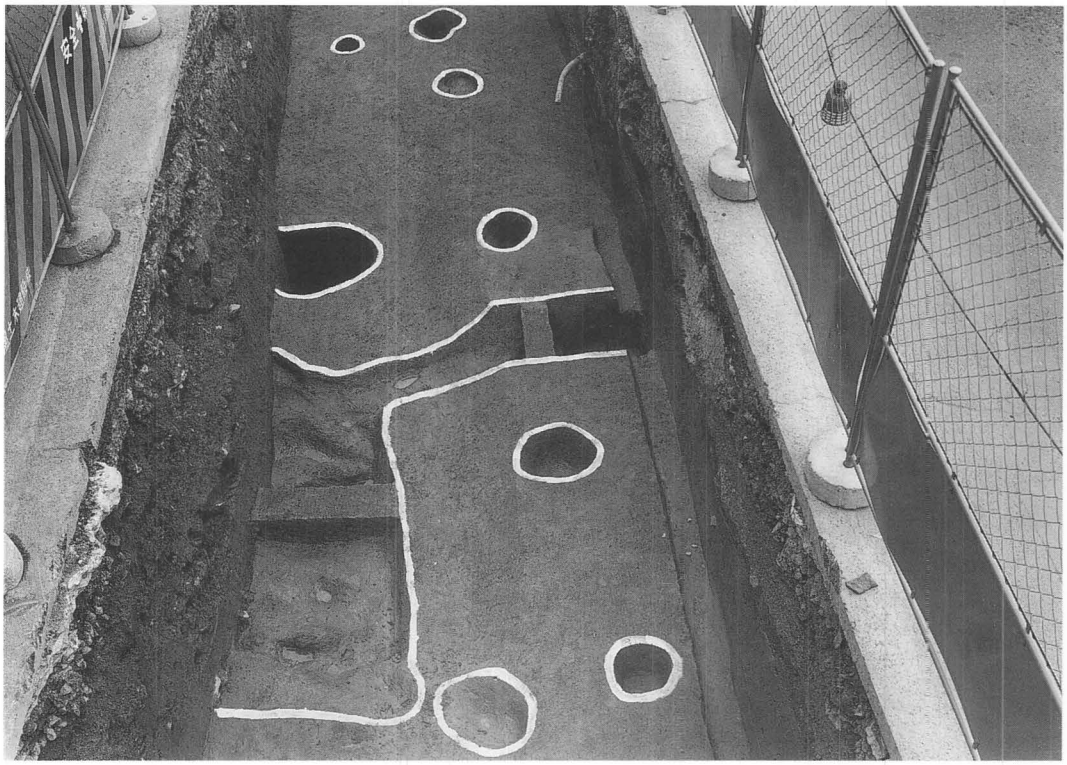


1．堀２内逆茂木検出状況



2．堀２内逆茂木検出状況

図版8　遺構（B地区）

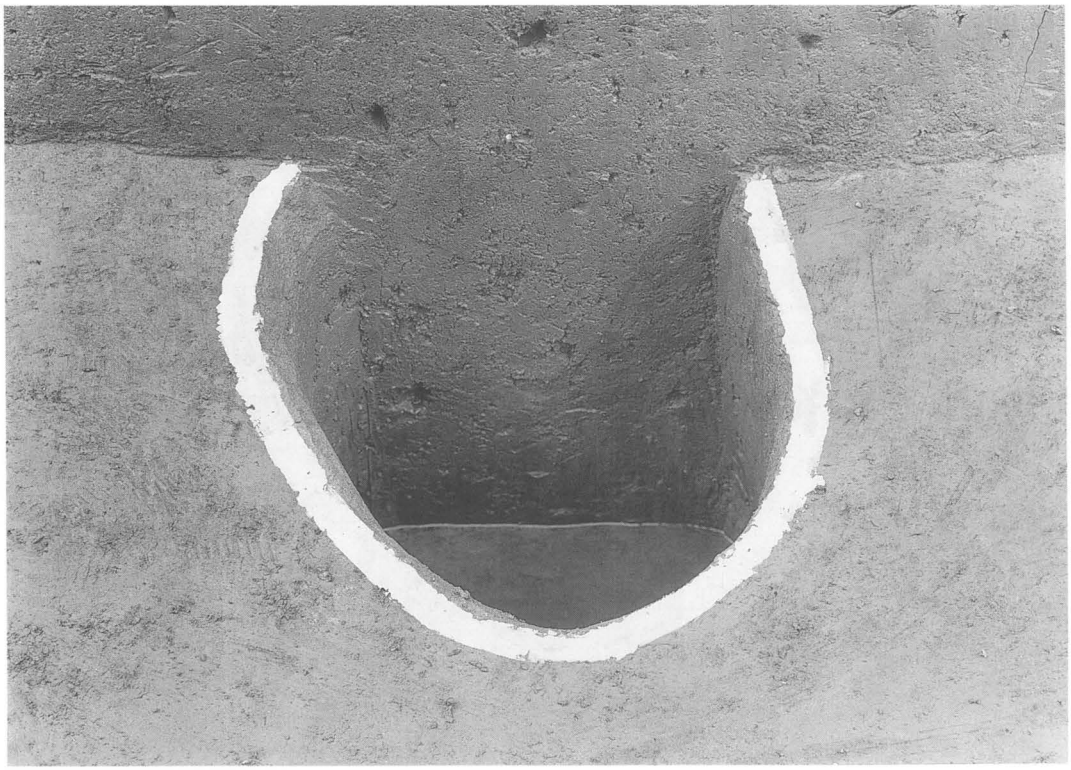


1．土坑3・井戸1（西より）

2．土坑1

図版9　遺構（B地区）

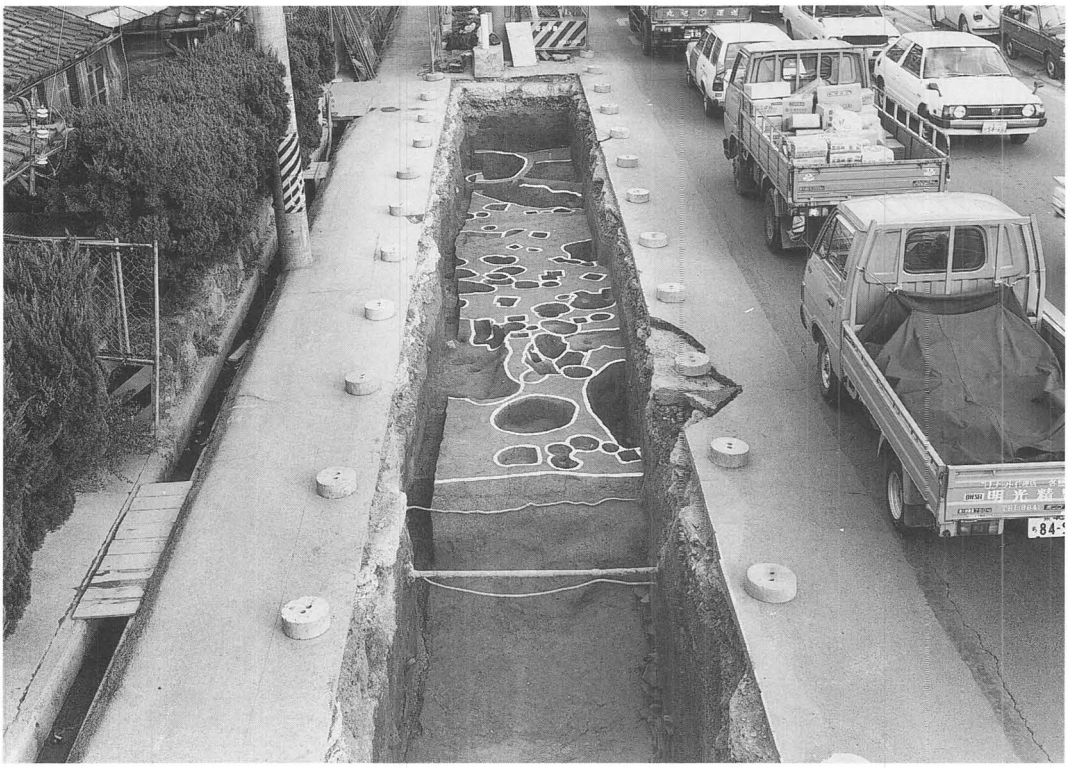
1．土坑2



2．井戸1

図版10　遺構（C地区）

1．遺構全景（東より）



2．遺構全景（西より）

図版11　遺構（C地区）

1．堀３遺物出土状況

2．堀３遺物出土状況

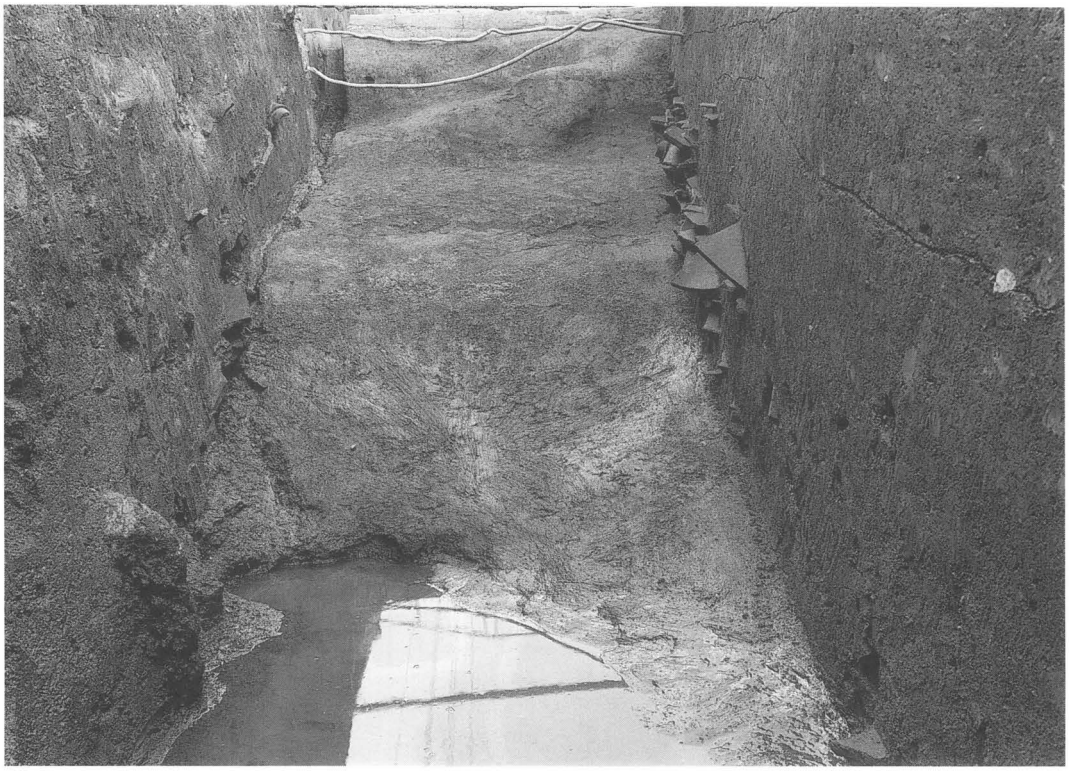
図版12　遺構（C地区）

1．堀３遺物出土状況

2．堀３遺物出土状況

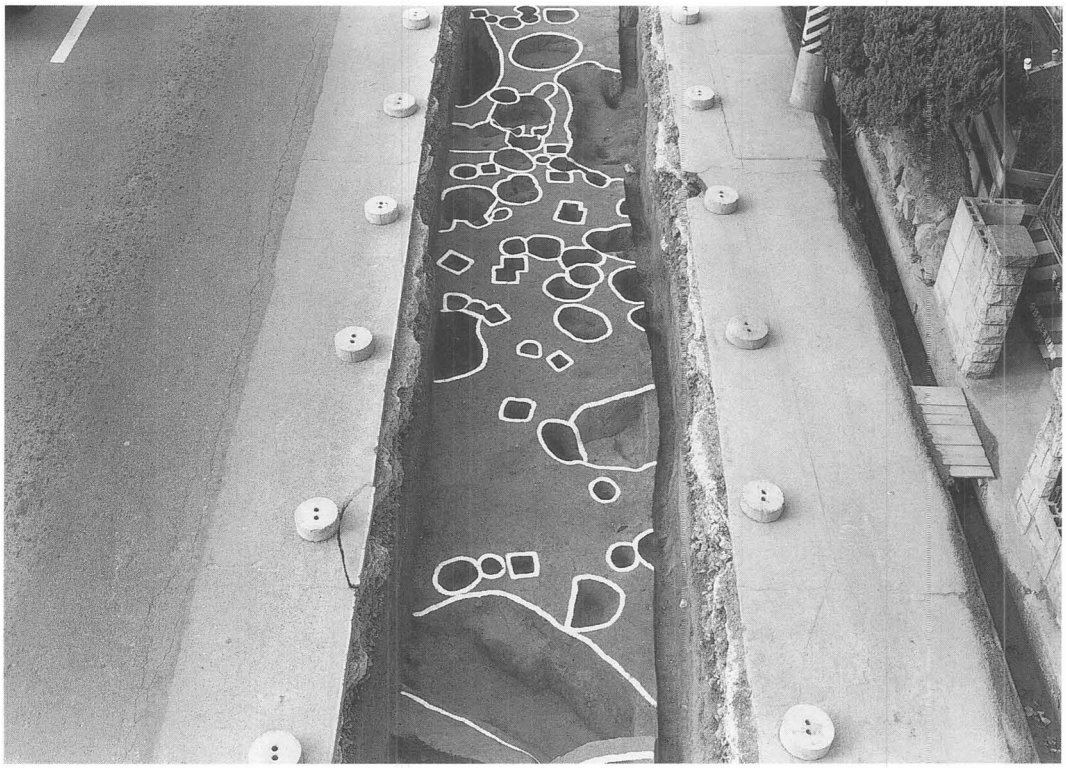
図版13　遺構（C地区）

1．堀3（西より）

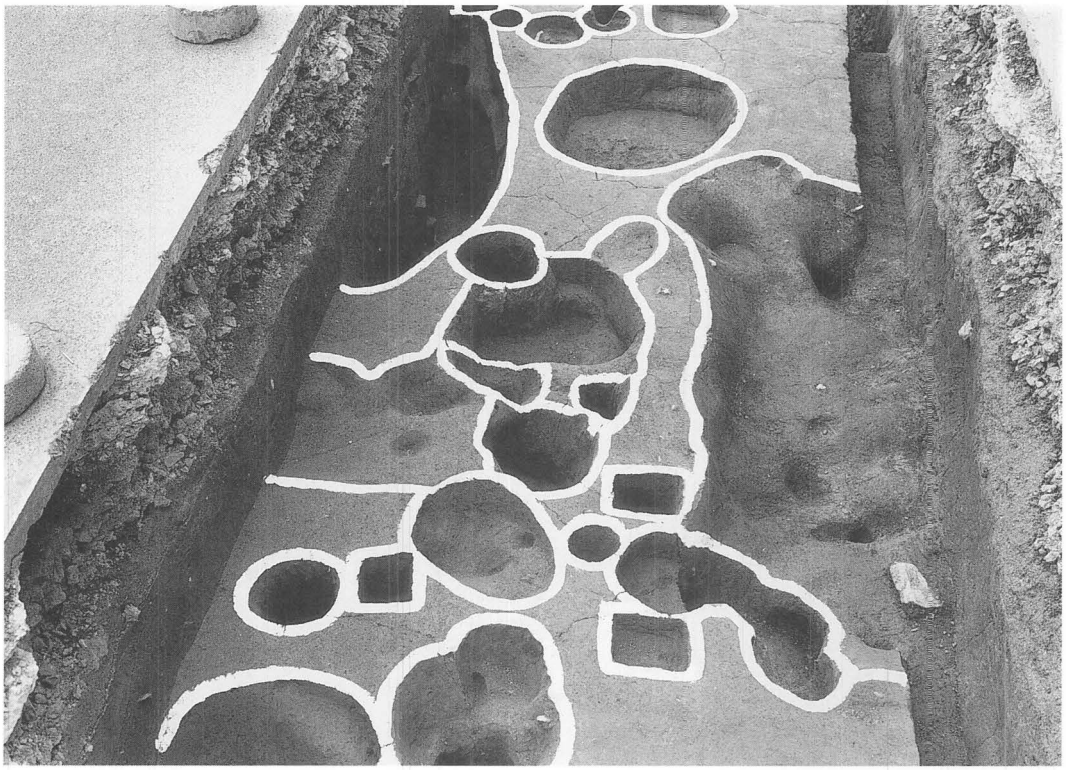


2．堀3（西より）

図版14　遺構（C地区）

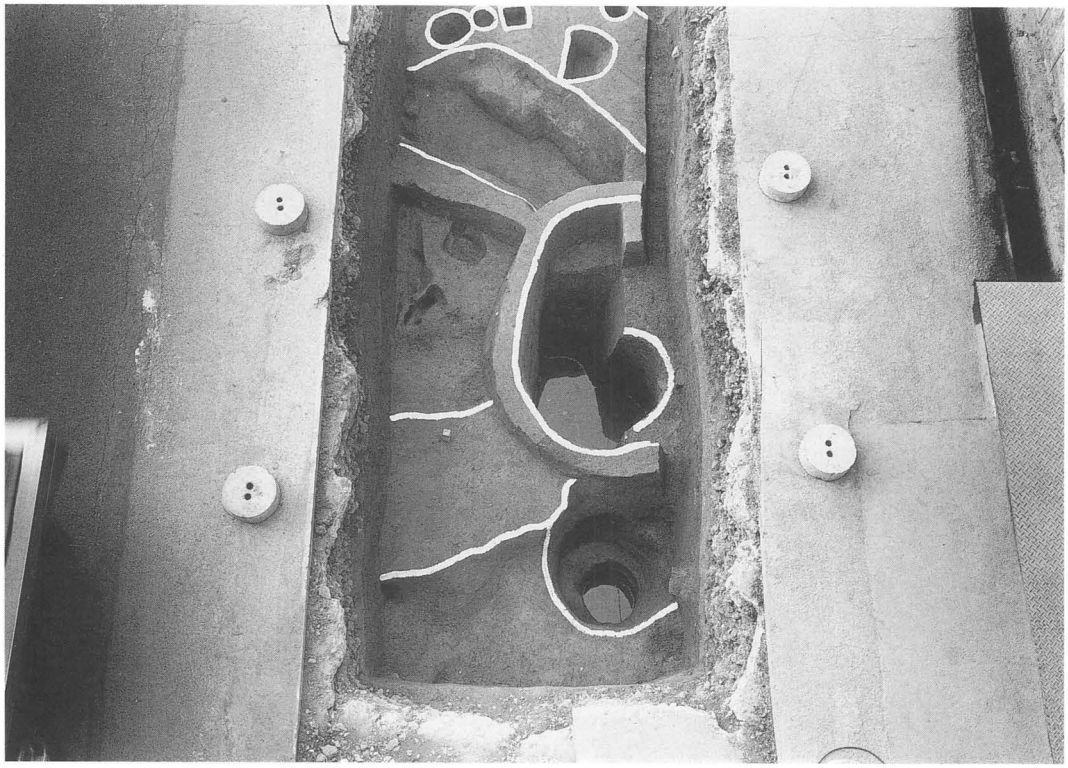


1．柱穴（東より）



2．土坑8・9・10

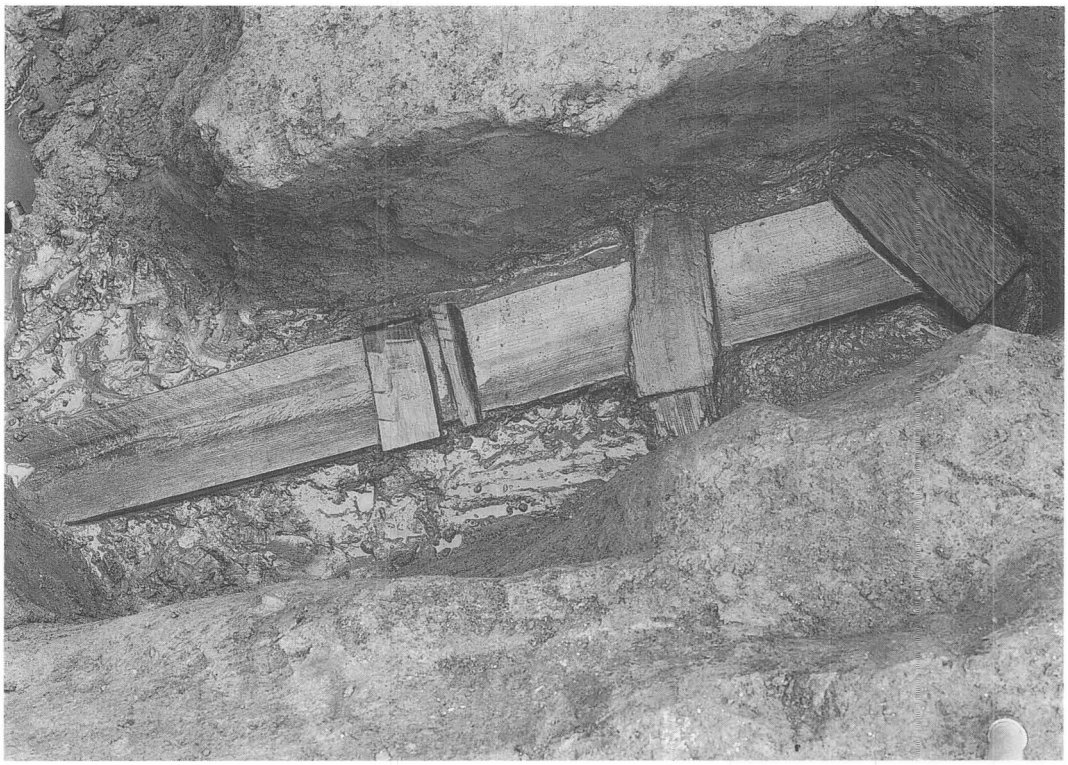
図版15　遺構（C地区）



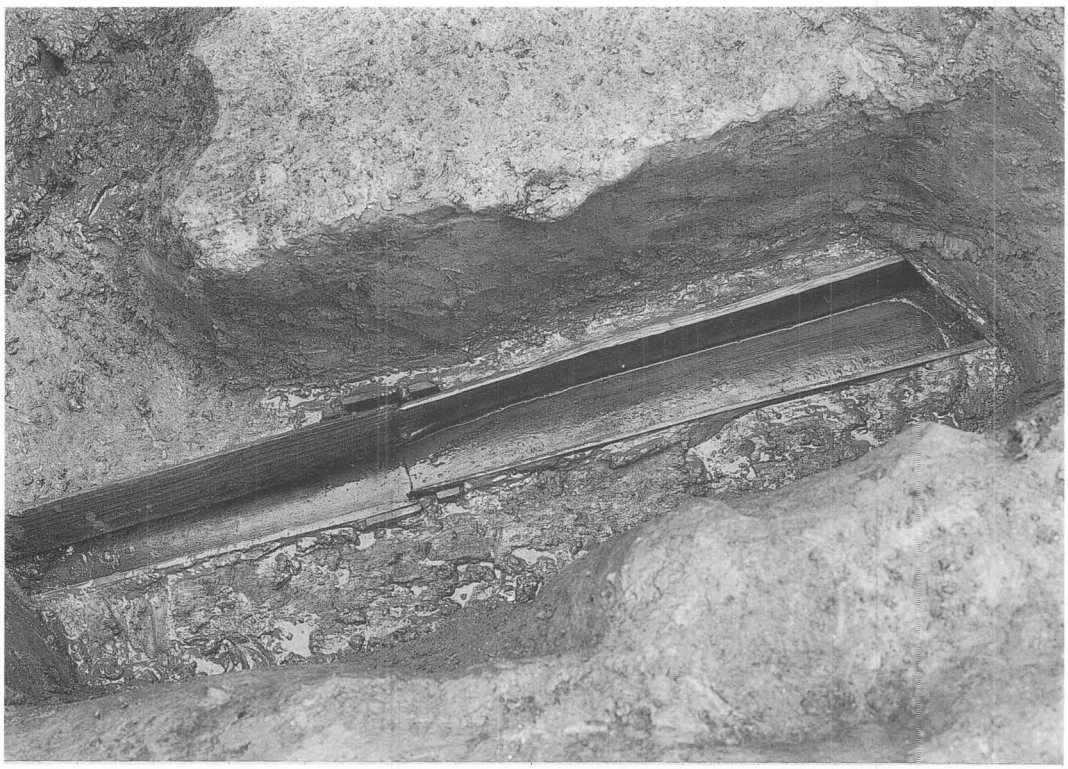
1．井戸３・４、土坑12、溝５

2．溝５上面植物遺体検出状況

図版16　遺構（C地区）



1．溝5内暗渠



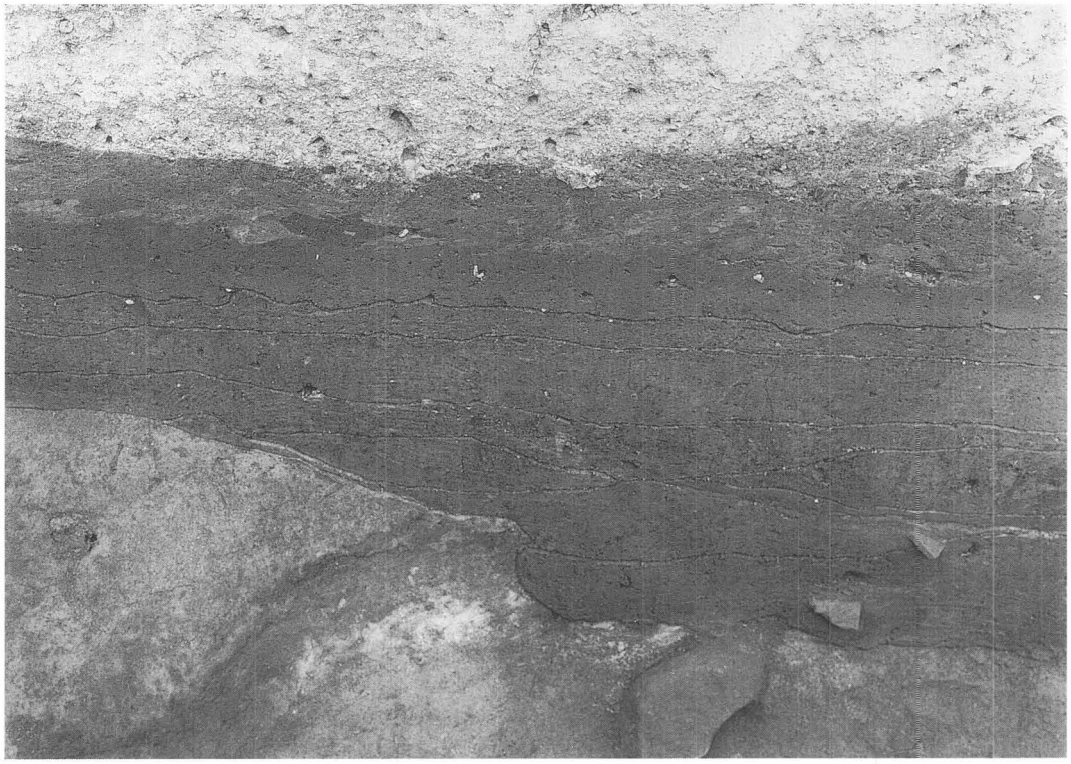
2．溝5内暗渠上蓋除去

図版17　遺構（C地区）

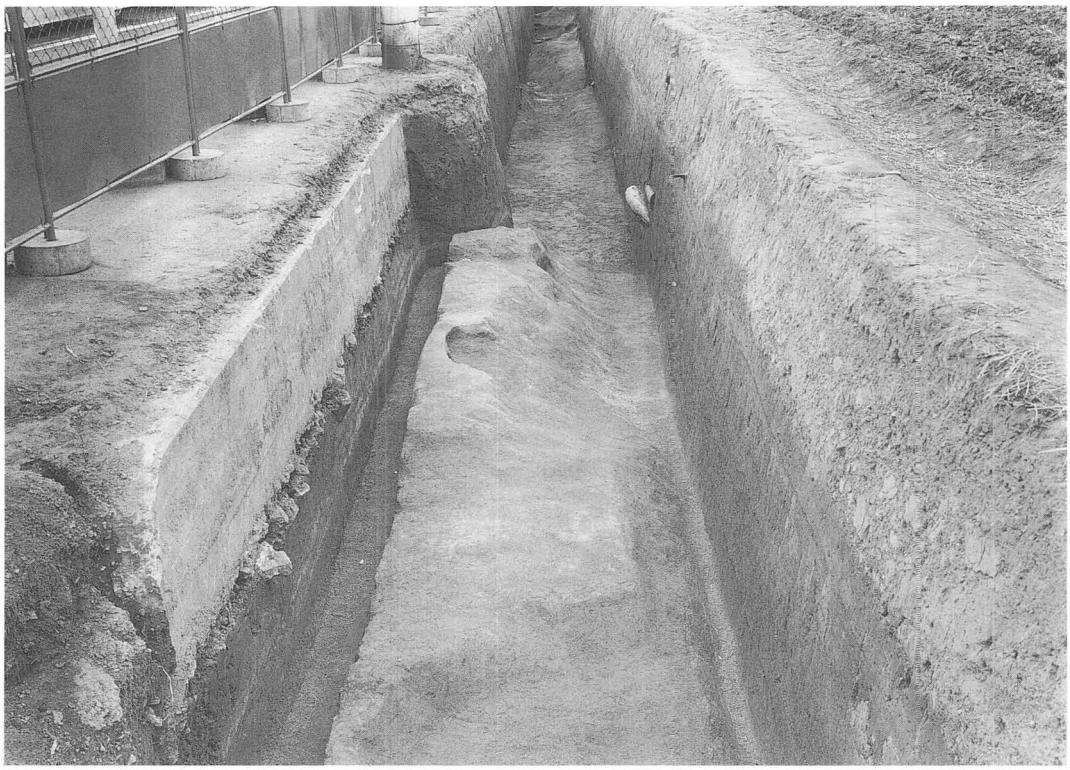
1．井戸4

2．井戸4内土管検出状況

図版18　遺構（D地区）

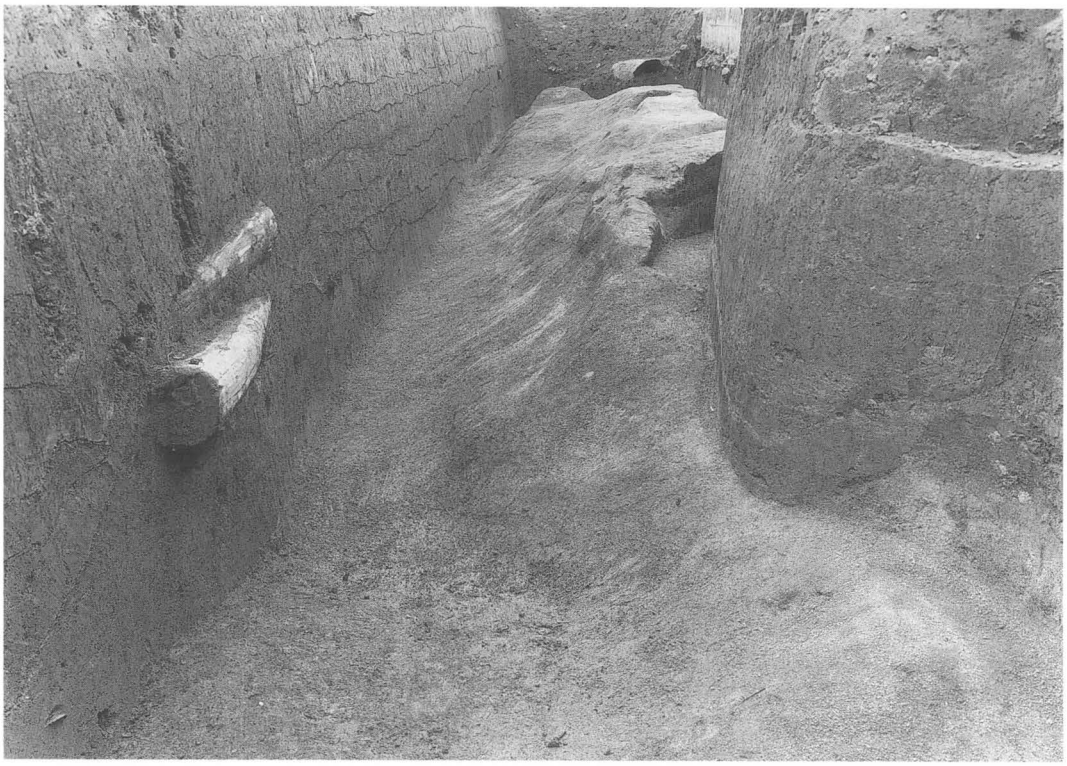


1．断面

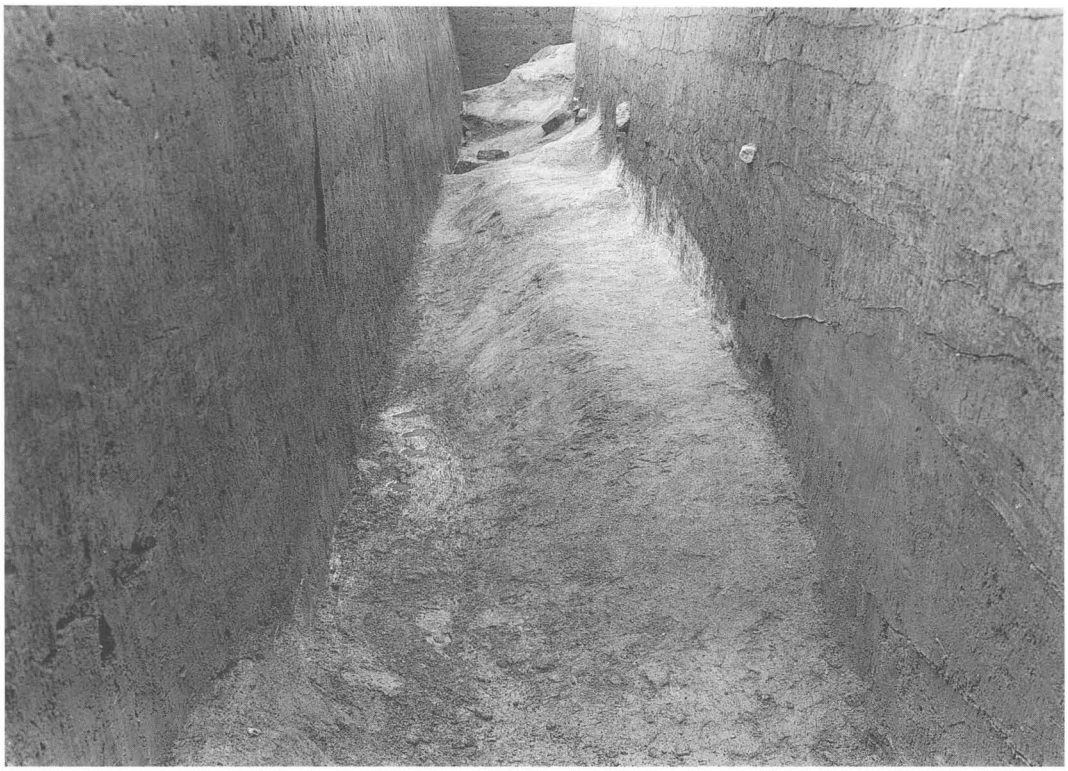


2．自然流路（東より）

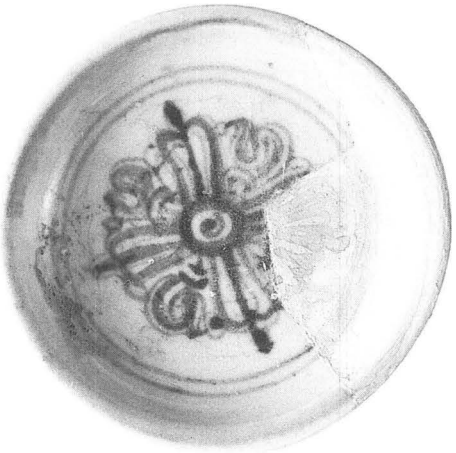
図版19　遺構（D地区）



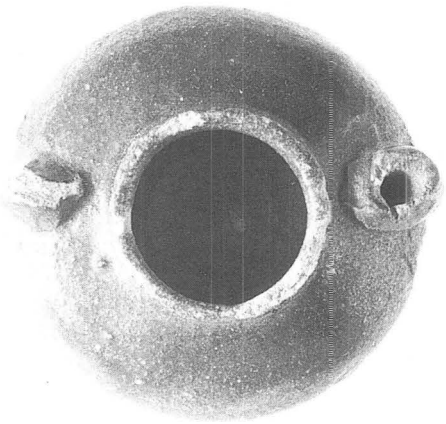
1．自然流路（西より）



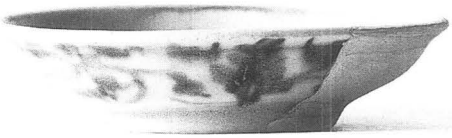
2．自然流路（東より）



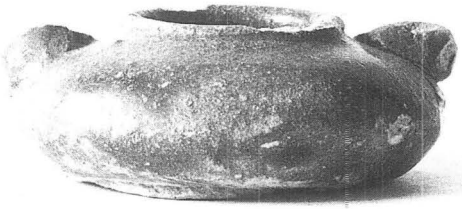
56′



55′

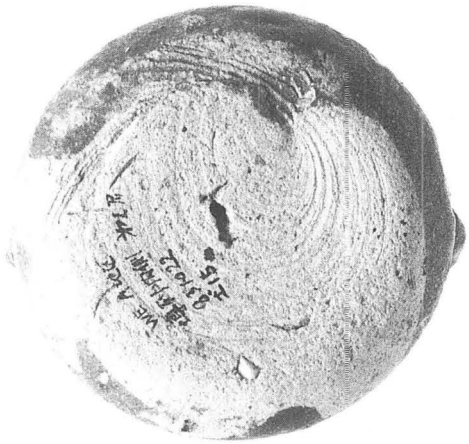


56



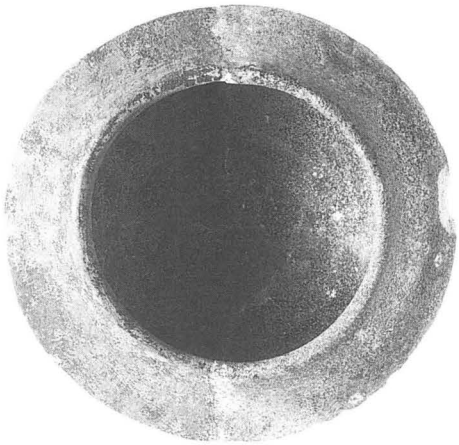
55

56″



55″

塼立建物出土土器　染付、瀬戸焼水滴


54′

54

1

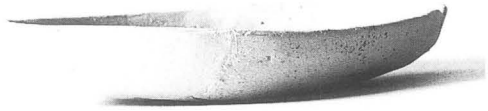
3

7

8

13

14


16

18

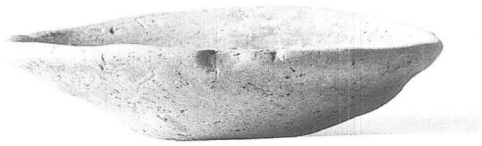
19

20

23

24

塼立建物出土土器　瀬戸焼合子、土師器皿


25

42

30

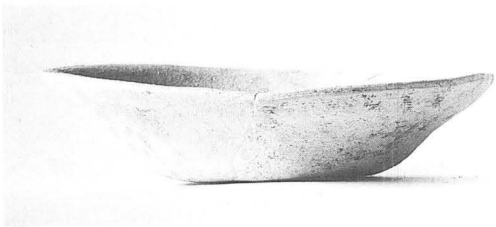
43

32

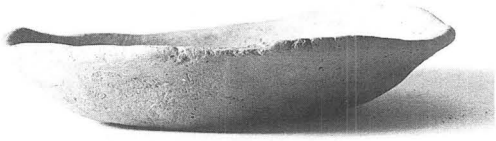
44

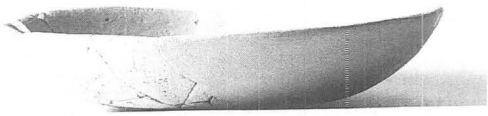
33

45

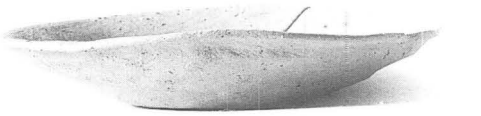

35

46

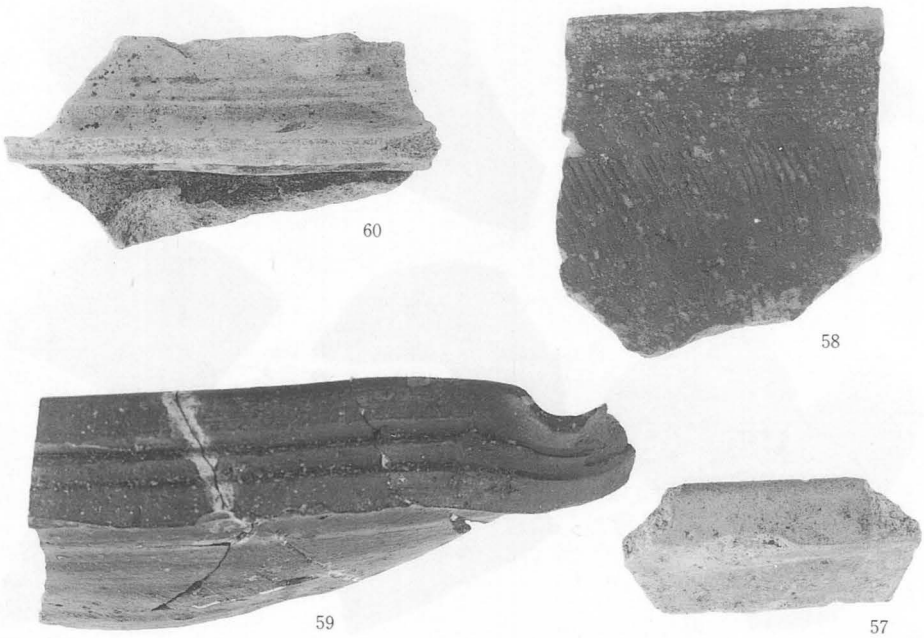

36


50

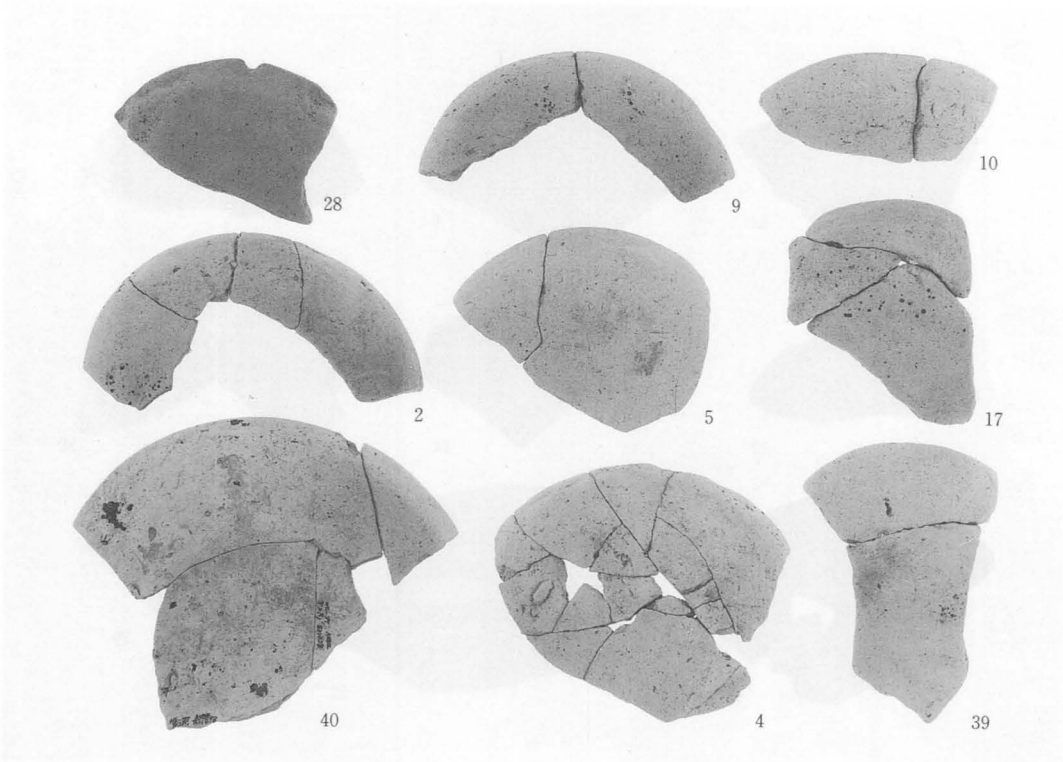
41


51

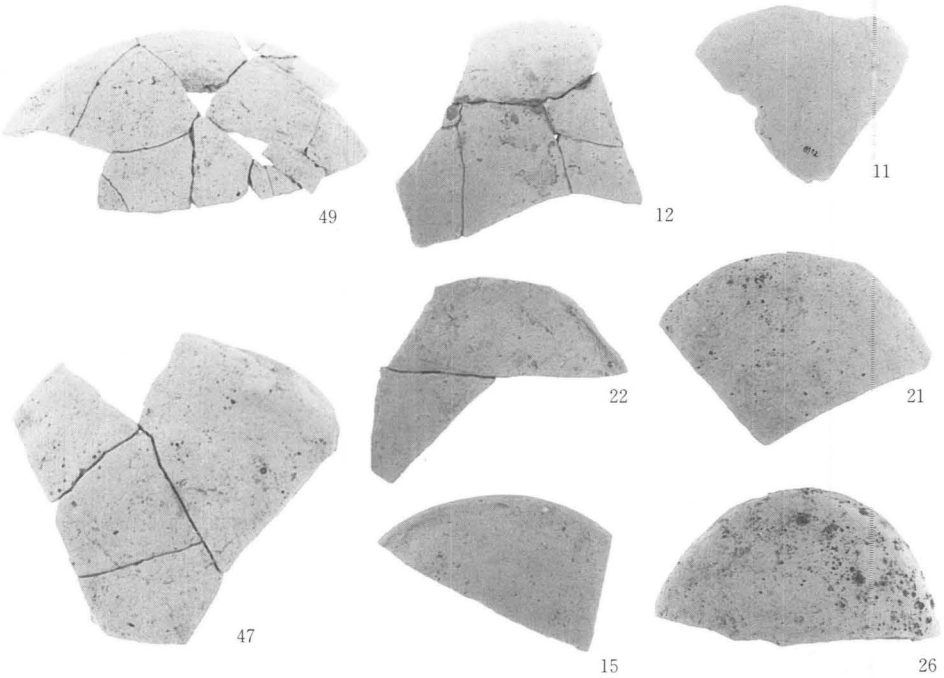
塼立建物出土土器　土師器皿



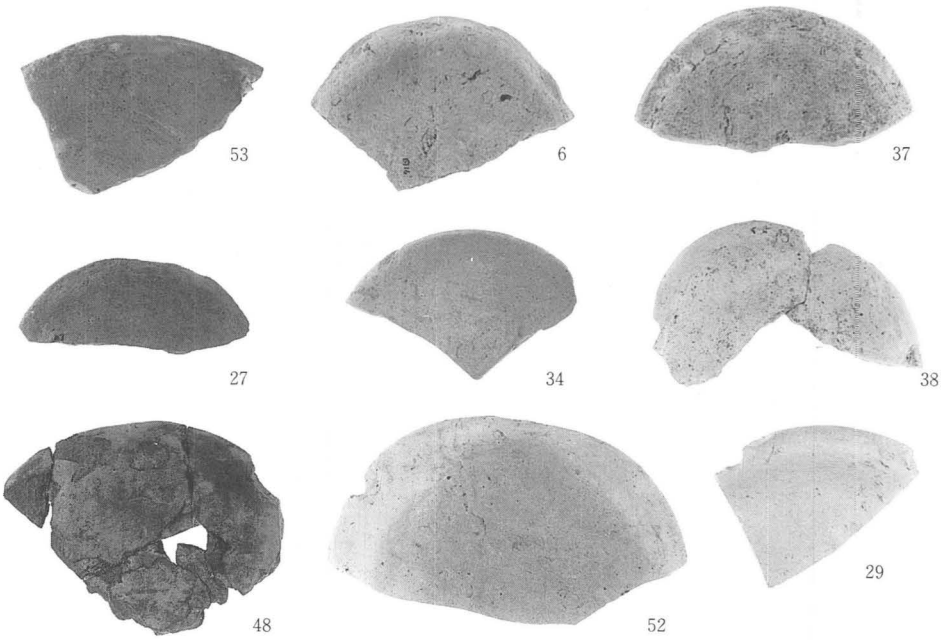
1．塼立建物出土土器　瓦器摺鉢、備前焼摺鉢、土師器羽釜



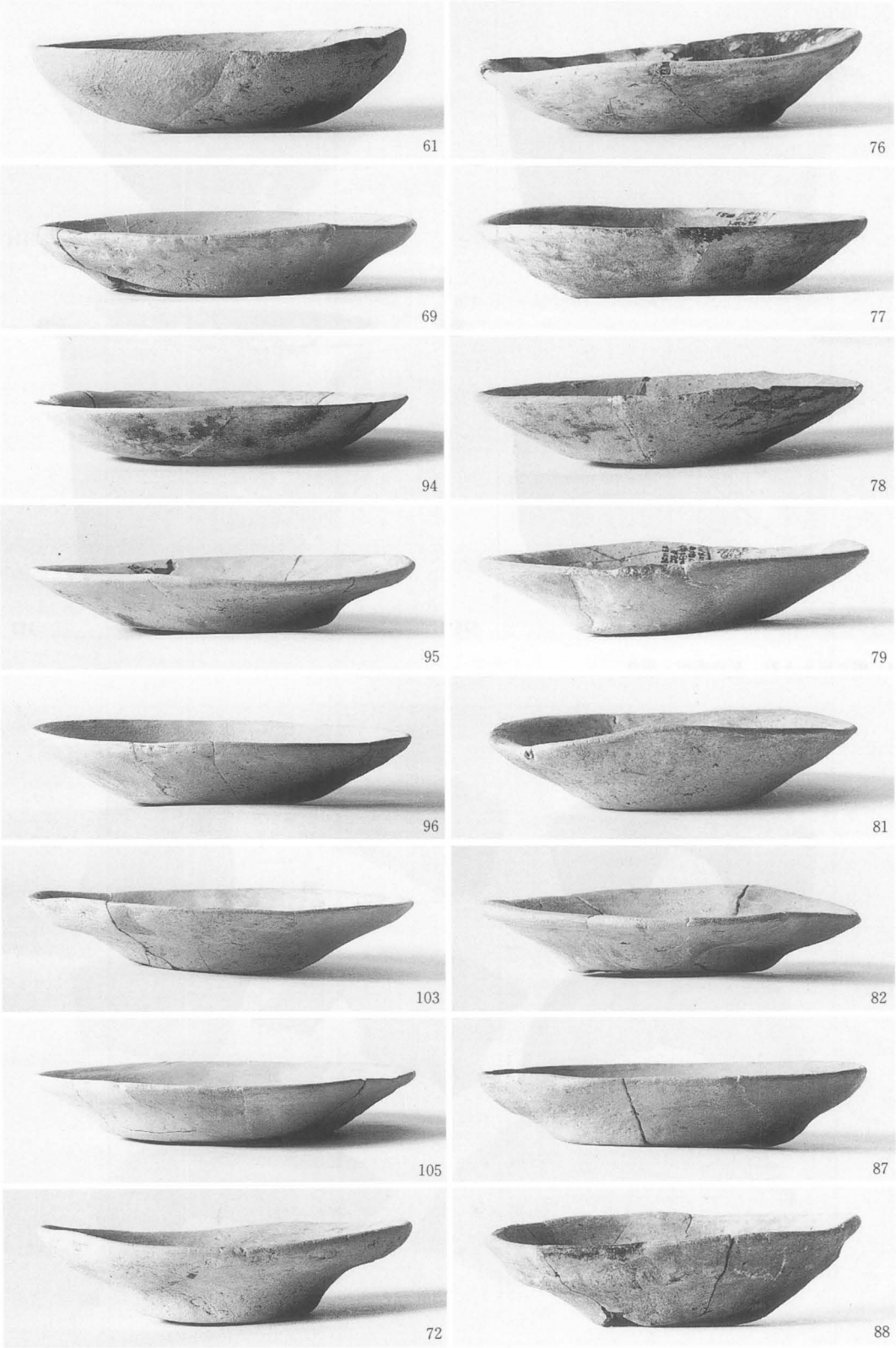
2．塼立建物出土土器　土師器皿



1．塼立建物出土土器　土師器皿

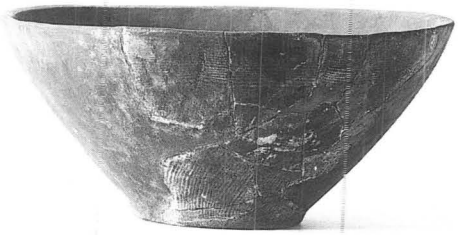


2．塼立建物出土土器　土師器皿



堀２出土土器　土師器皿

116

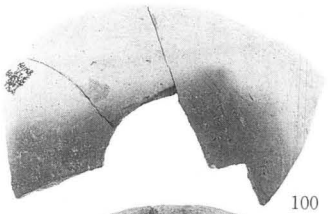


111

115

113

1．堀２出土土器　瓦器香炉・摺鉢



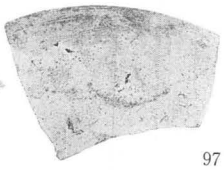
100

98

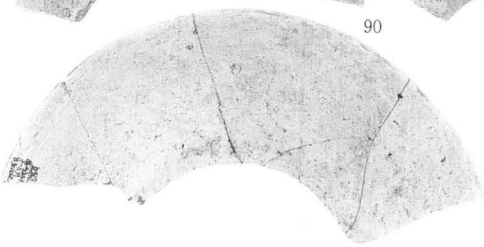
104

90

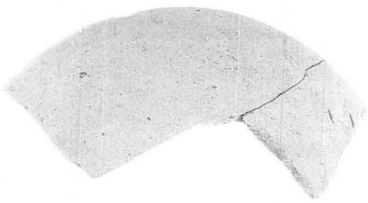
99



97

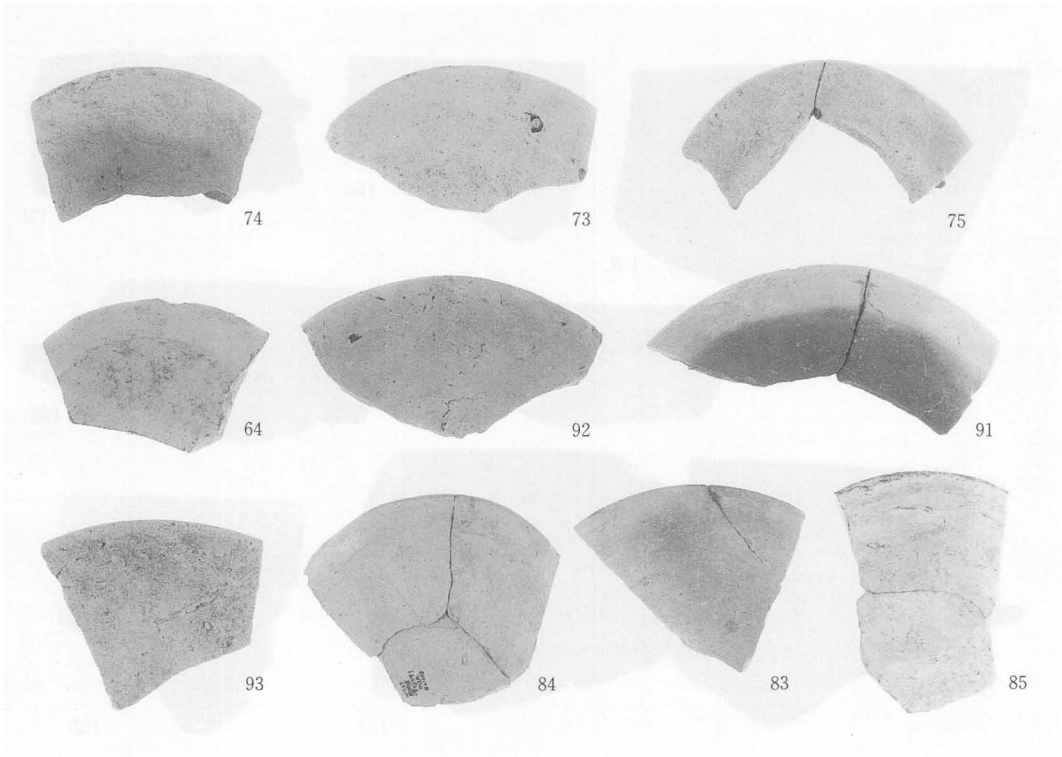


101

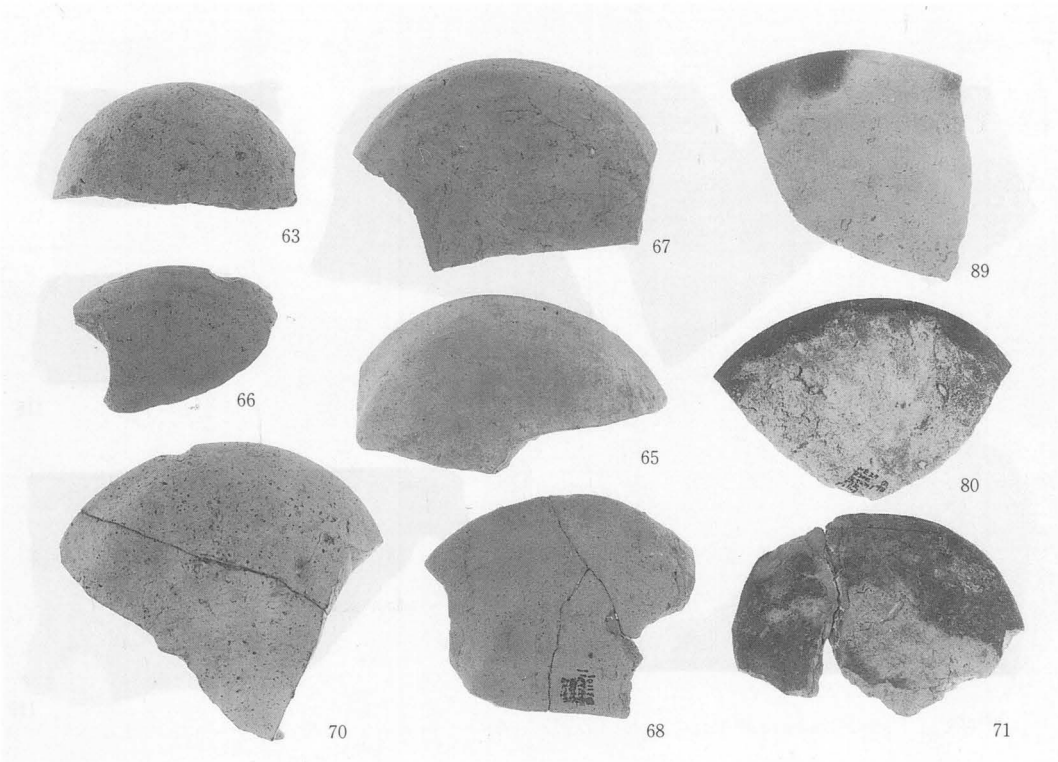


102

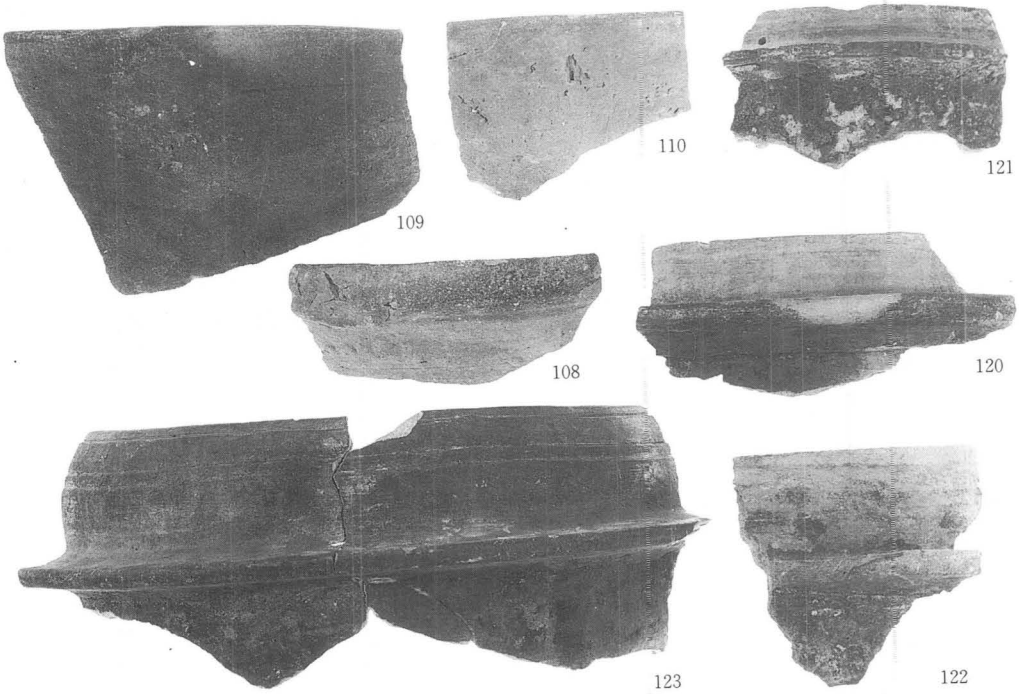
2．堀２出土土器　土師器皿



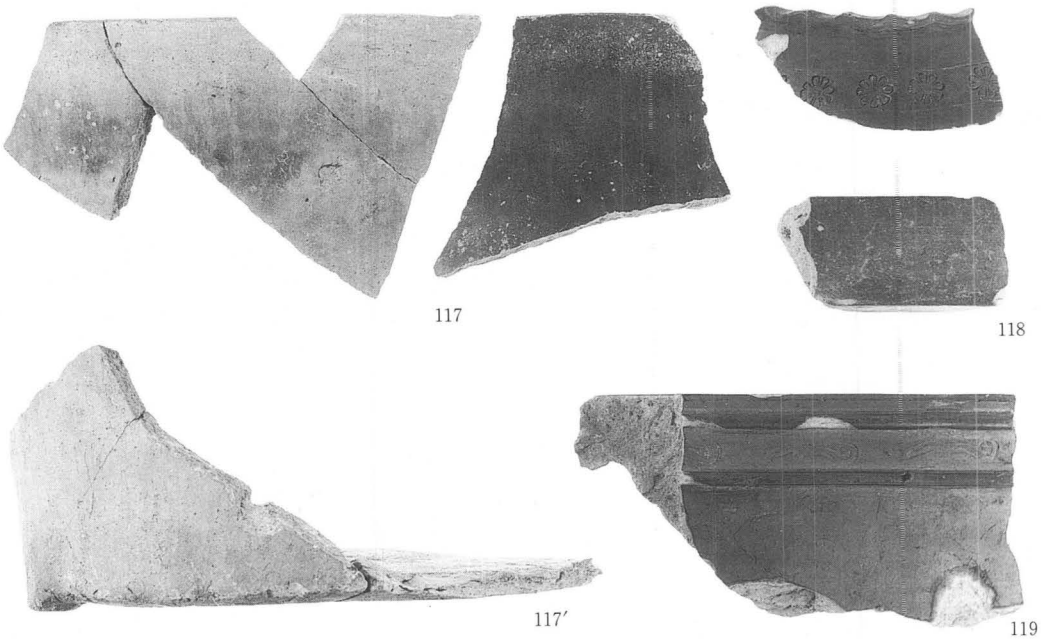
1．堀２出土土器　土師器皿



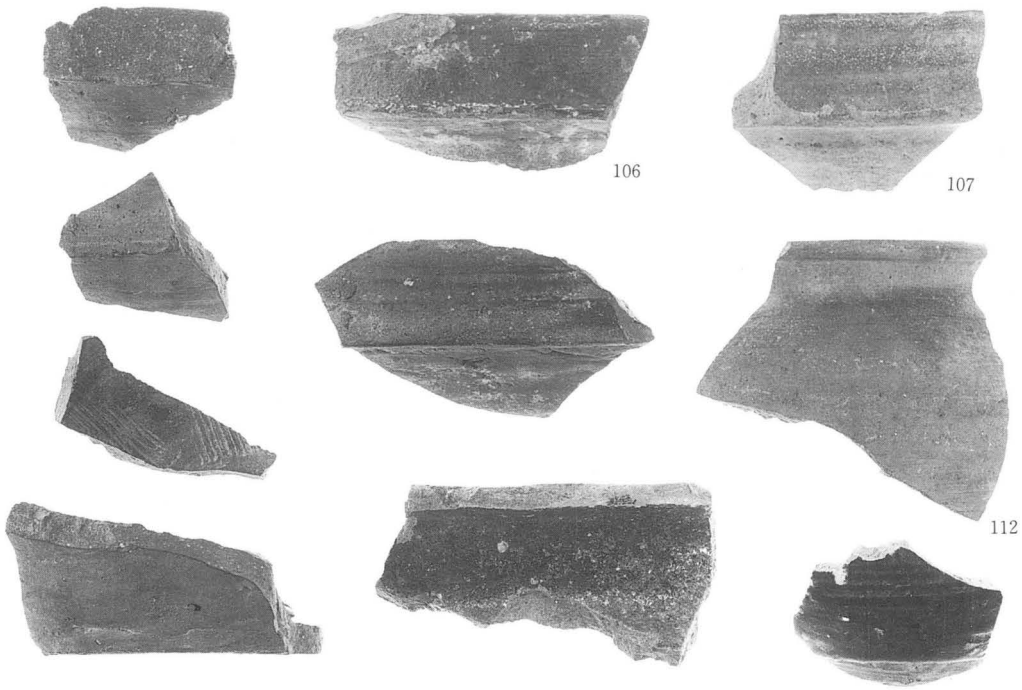
2．堀２出土土器　土師器皿



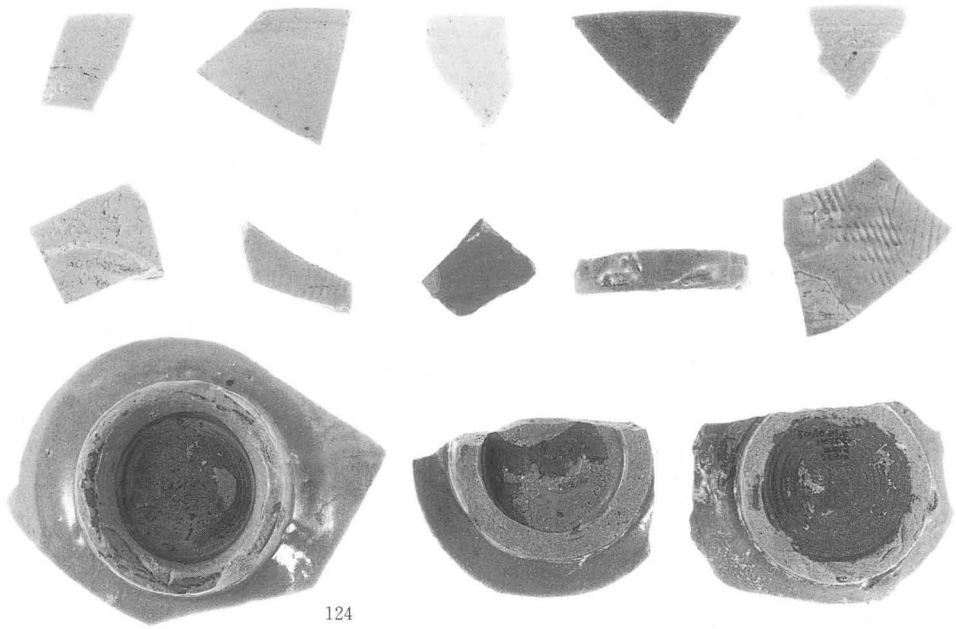
1．堀２出土土器　瓦器羽釜・摺鉢、須恵器捏鉢



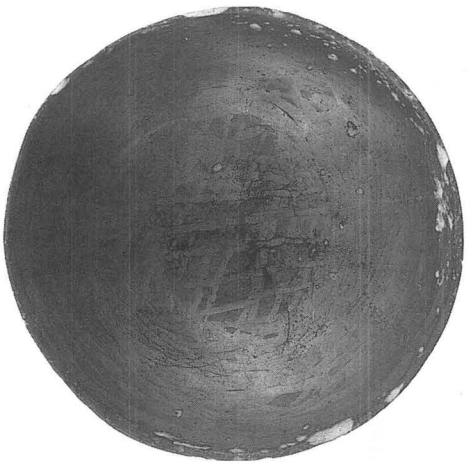
2．堀２出土土器　瓦器香炉・火舎



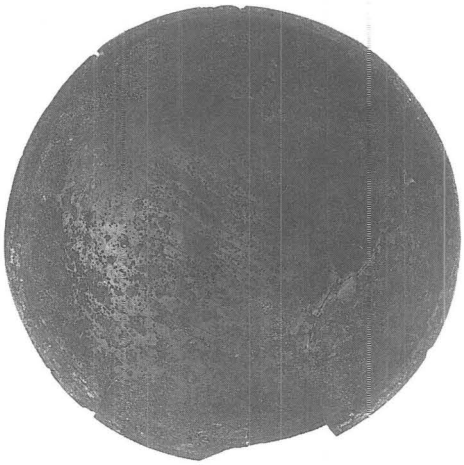
1．堀２出土土器　陶磁器



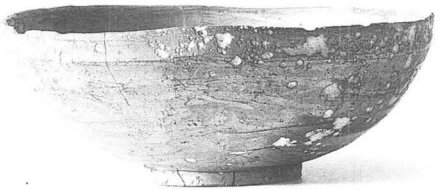
2．堀２出土土器　輸入磁器



136′

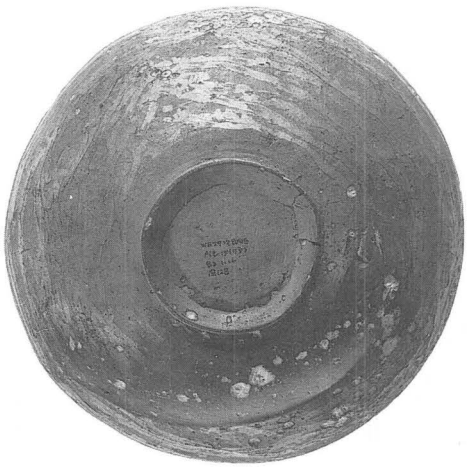


137′



136

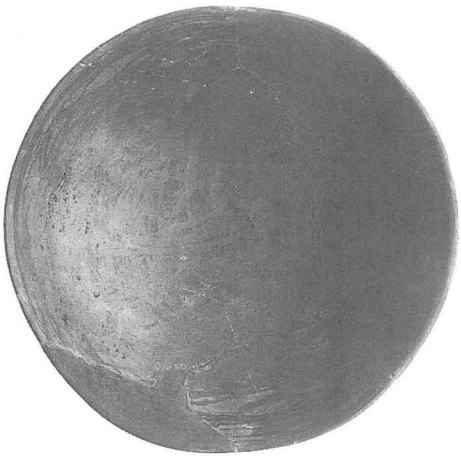
137



136″

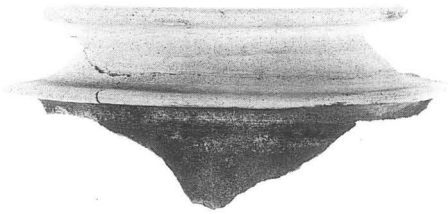
137″

井戸２出土土器　瓦器椀

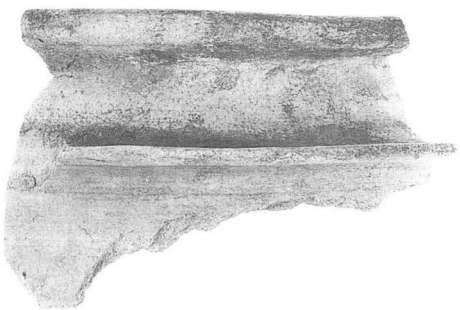


138′

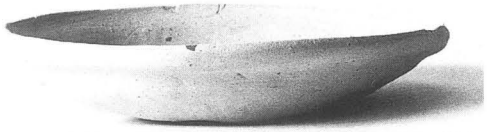
138



140



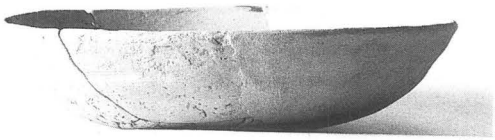
141



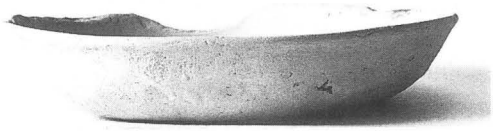
125

126

129



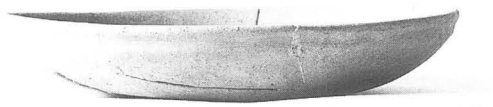
130



132

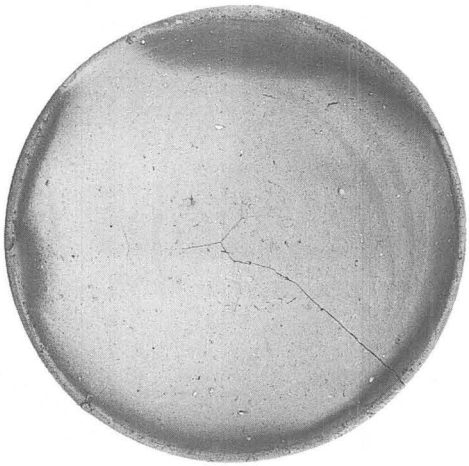
133

134

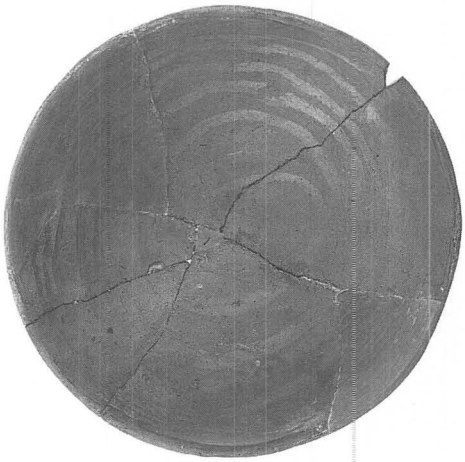


135

井戸２出土土器　瓦器椀、土師器羽釜・皿

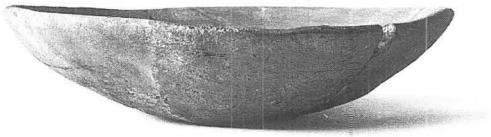


143′



144′

143



144

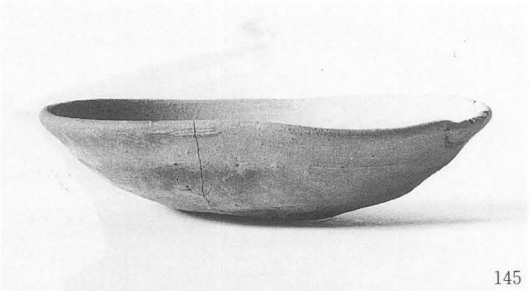
143″

144″

井戸１出土土器　瓦器椀

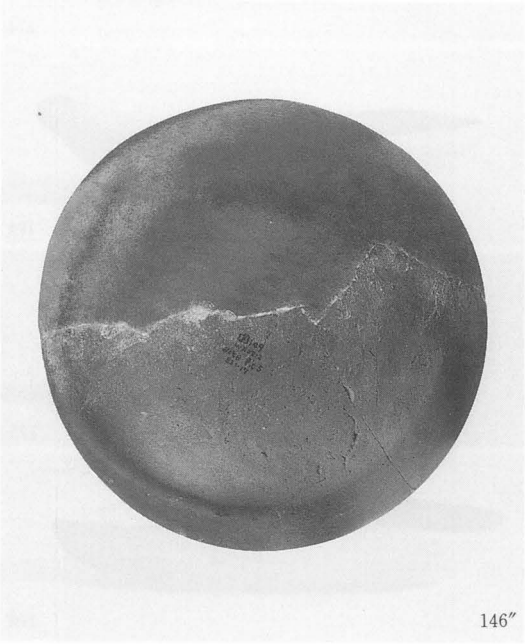
145′

146′


145

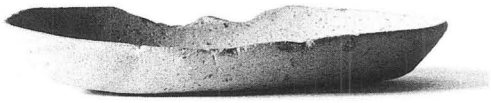
146

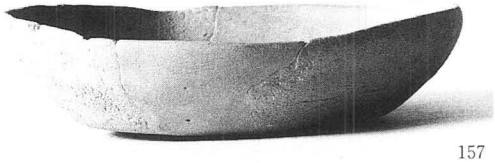
145″


146″

井戸1出土土器　瓦器椀

153

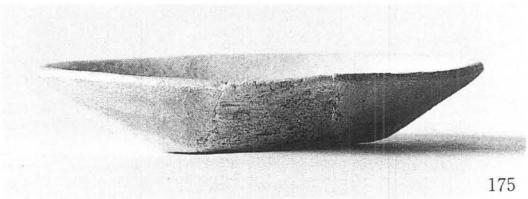

156


157

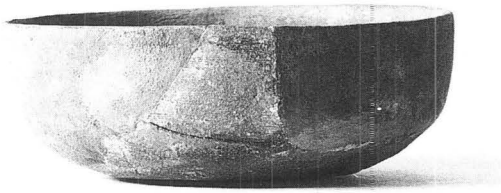
172

173

174


175

176

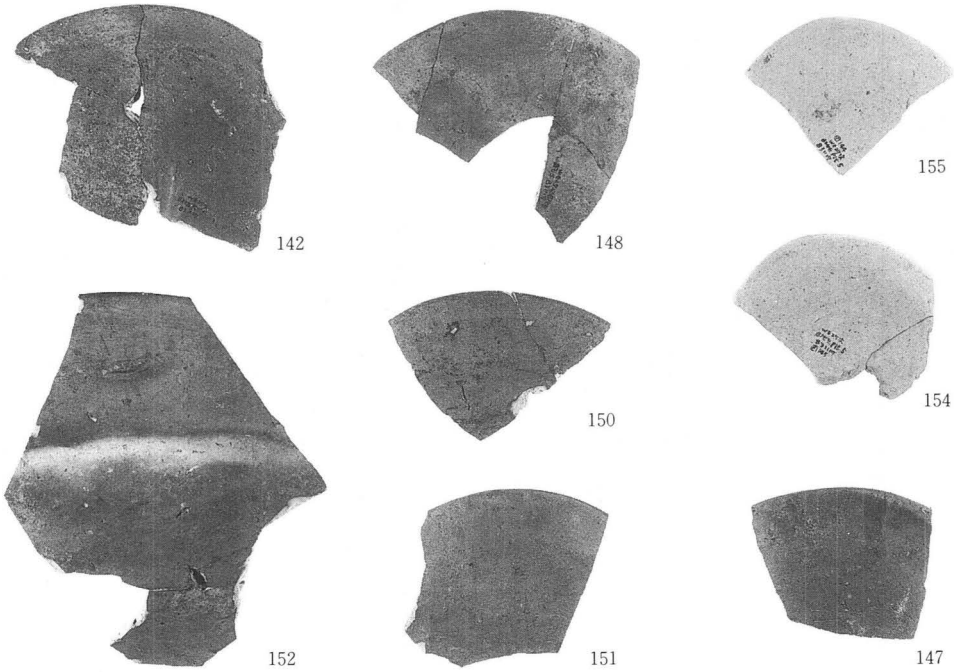

171

164

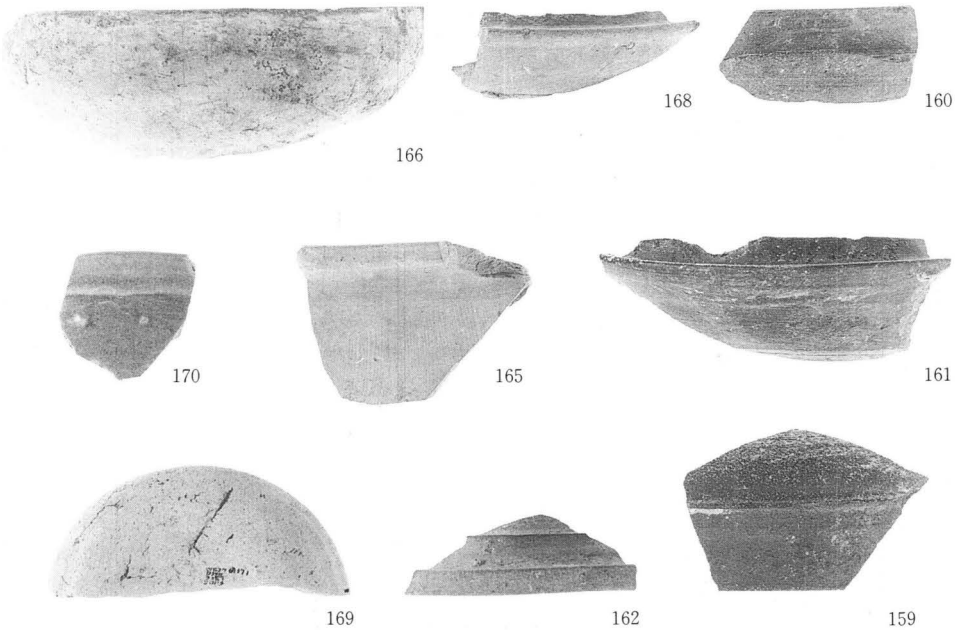
163

167

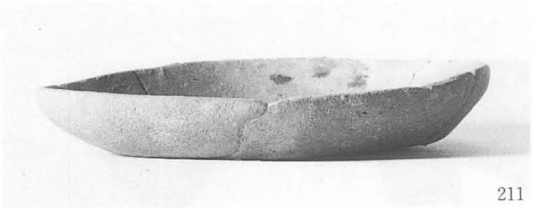
井戸1(153・156・157)、土坑2(163・164)、土坑4(171～176)出土土器　土師器皿・高杯、須恵器杯・壺・平瓶

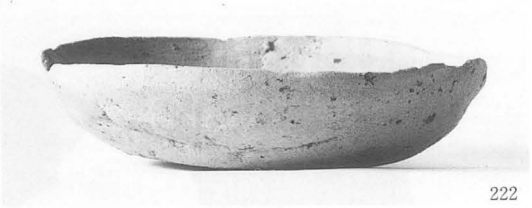


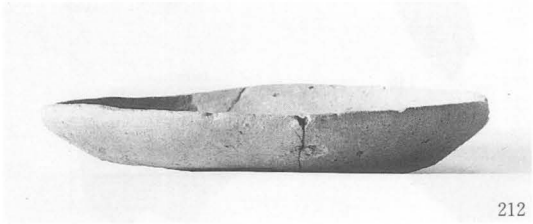
1．井戸１出土土器　瓦器椀・鉢、土師器皿

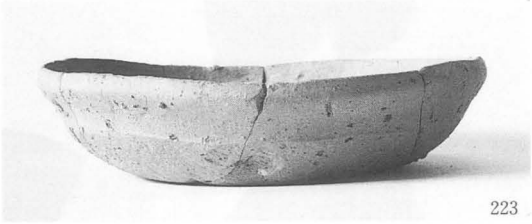


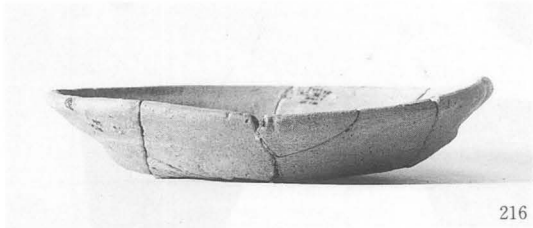
2．土坑2(159～162･165･166)、土坑3(168～170)出土土器　須恵器杯･蓋･高杯、土師器杯･皿･甕、輸入磁器

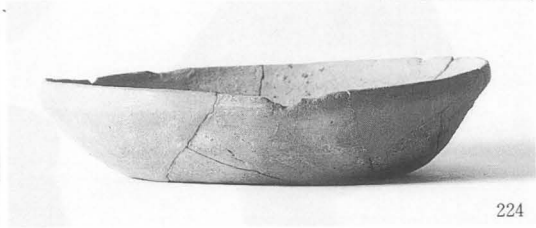

211

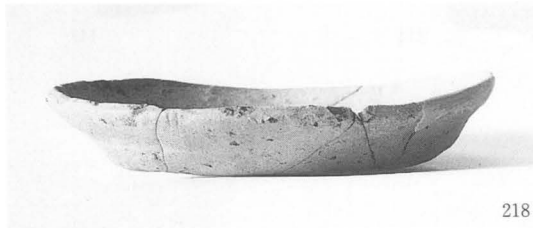

222


212


223


216


224

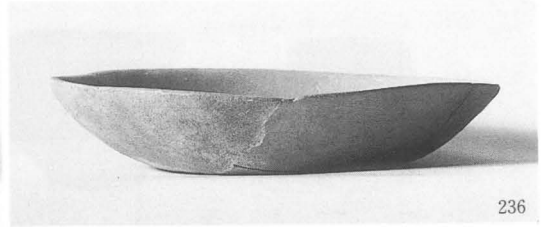

218

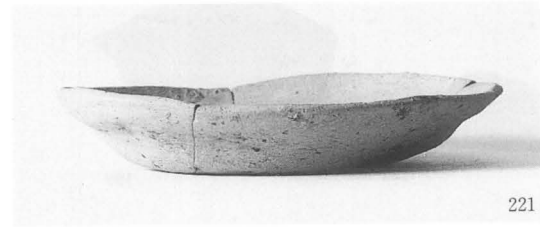
226

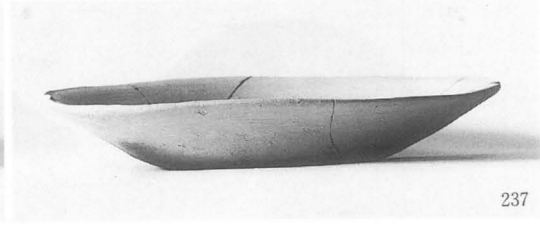
219

230

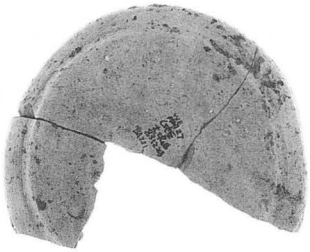
220

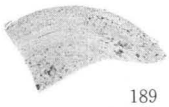

236

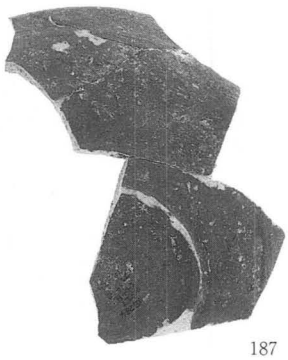

221

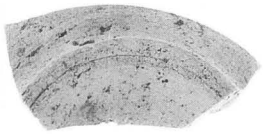

237

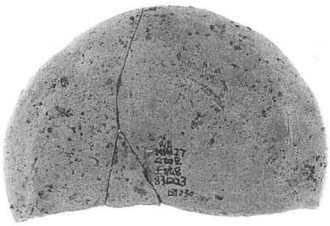
堀3(230・236・237)、ピット56(211・212・216・218～224・226)出土土器　土師器皿


193


189


187


188


191

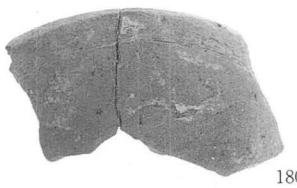
192

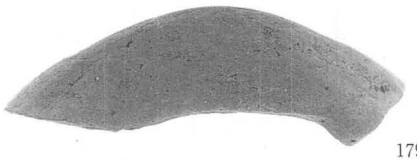
190

1．土坑８出土土器　瓦器椀、土師器皿、輸入磁器

205

204

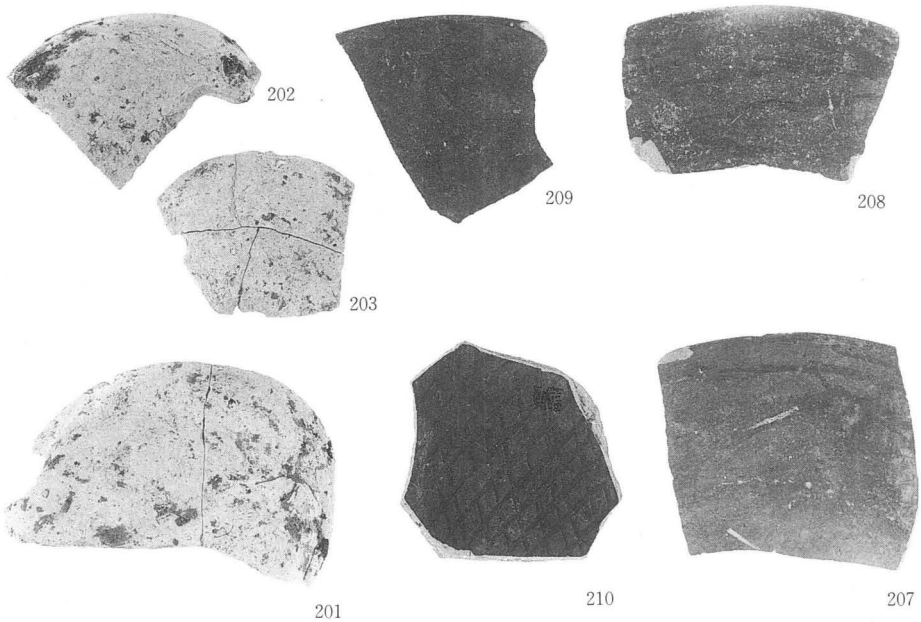

180


179

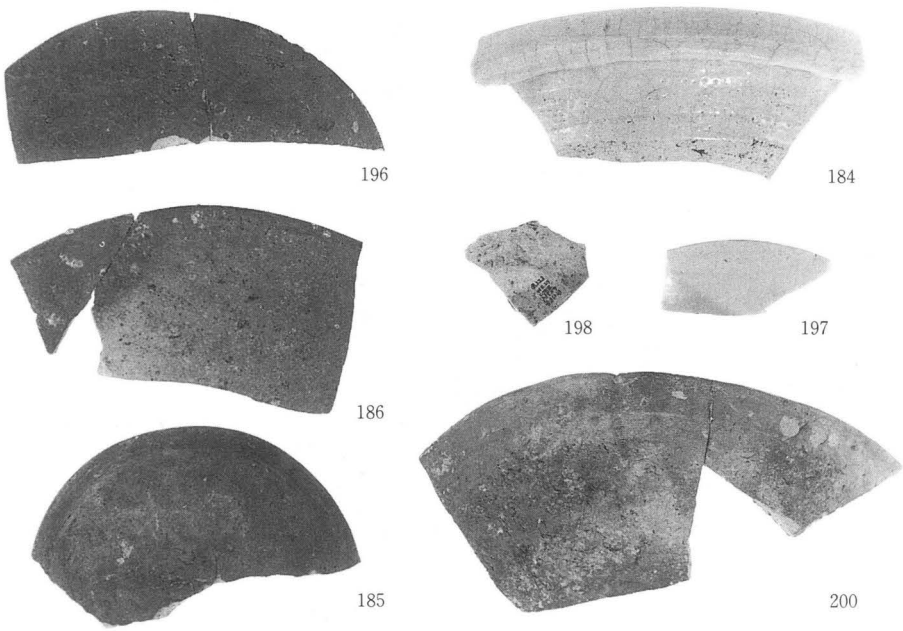
177

178

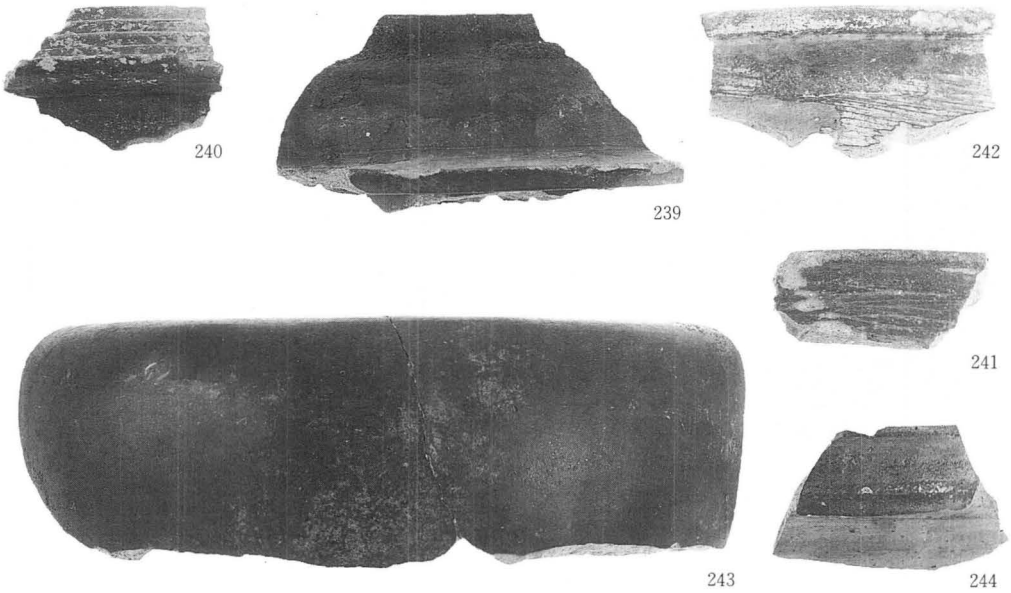
2．土坑7(204･205)、土坑11(177～180)出土土器　瓦器椀、土師器皿



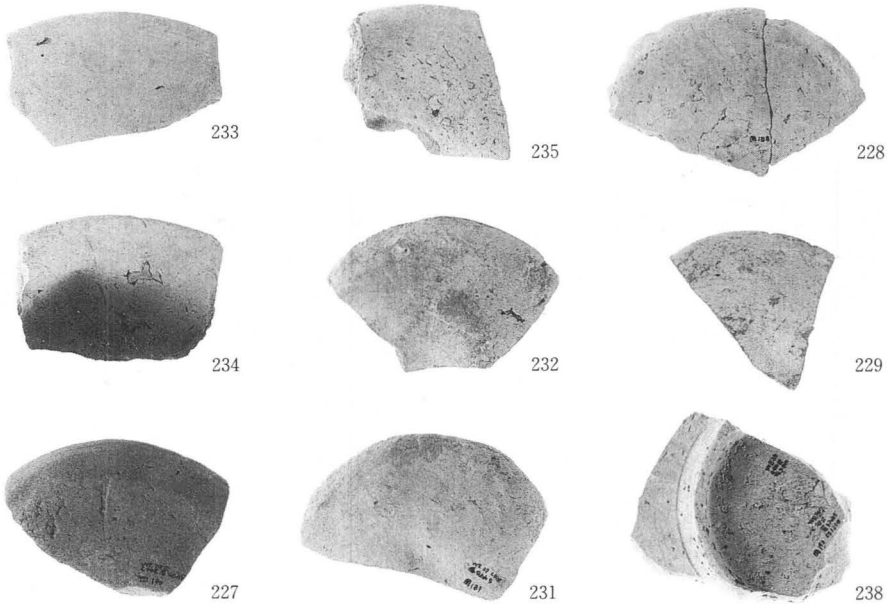
1．土坑12(201～203)、井戸3(207～210)出土土器　瓦器椀、土師器皿



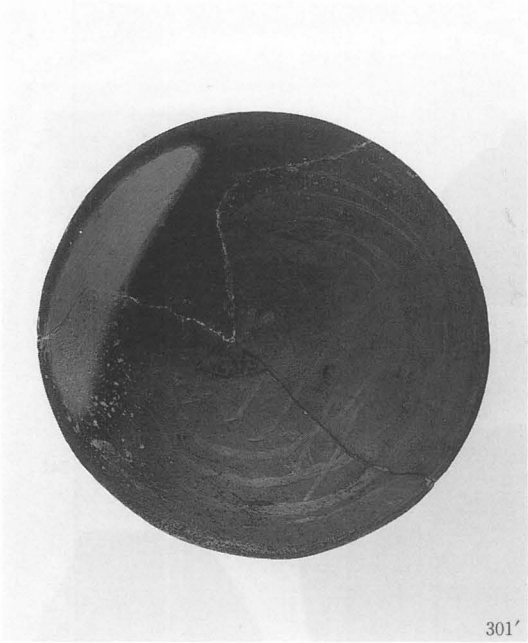
2．ピット45(184)、48(185・186)、54(196)、59(198)、70(200)出土土器　瓦器椀・皿、輸入磁器

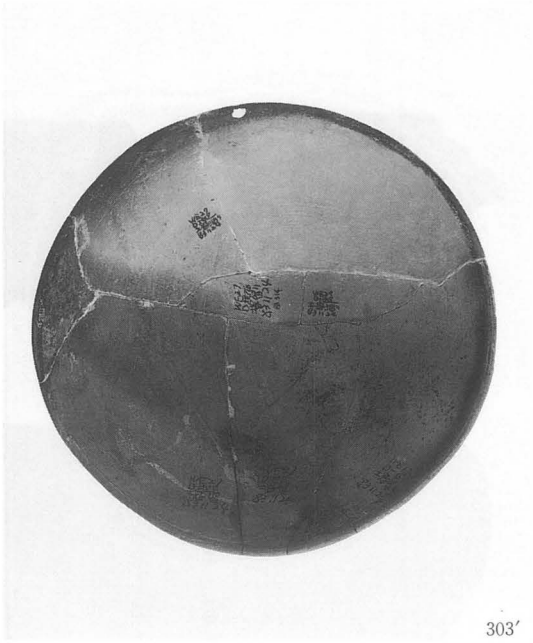


1．堀３出土土器　瓦器甕・火舎・羽釜、土師器羽釜、陶磁器



2．堀３出土土器　土師器皿、輸入磁器


301′


303′

301

303

301″

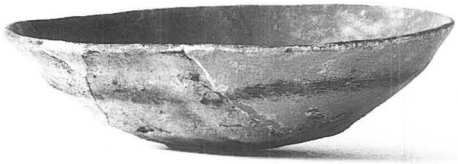
303″

土器溜り出土土器　瓦器椀

299

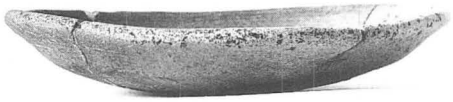
305

306



307

309



264

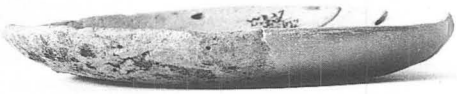
245

246

249

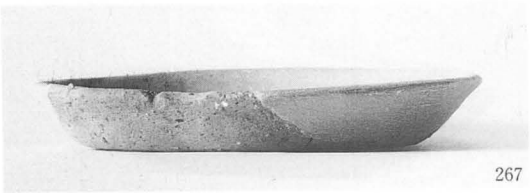
255

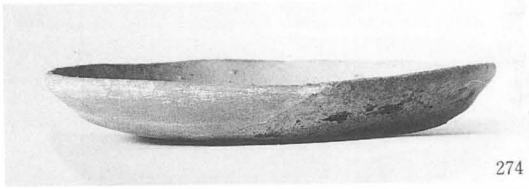
260

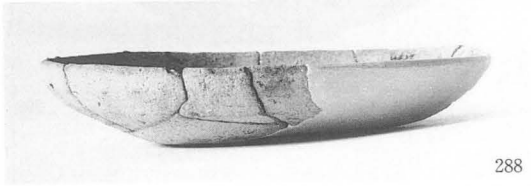


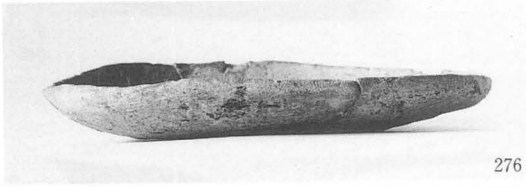
262

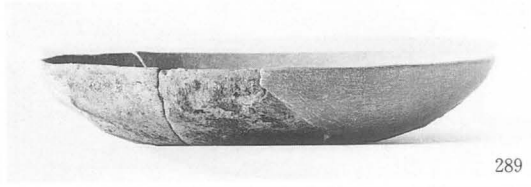
土器溜り出土土器　瓦器椀・皿、土師器皿

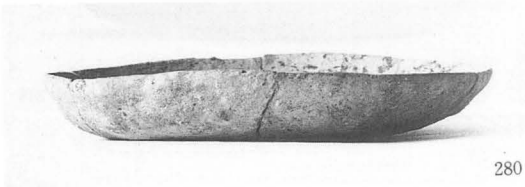




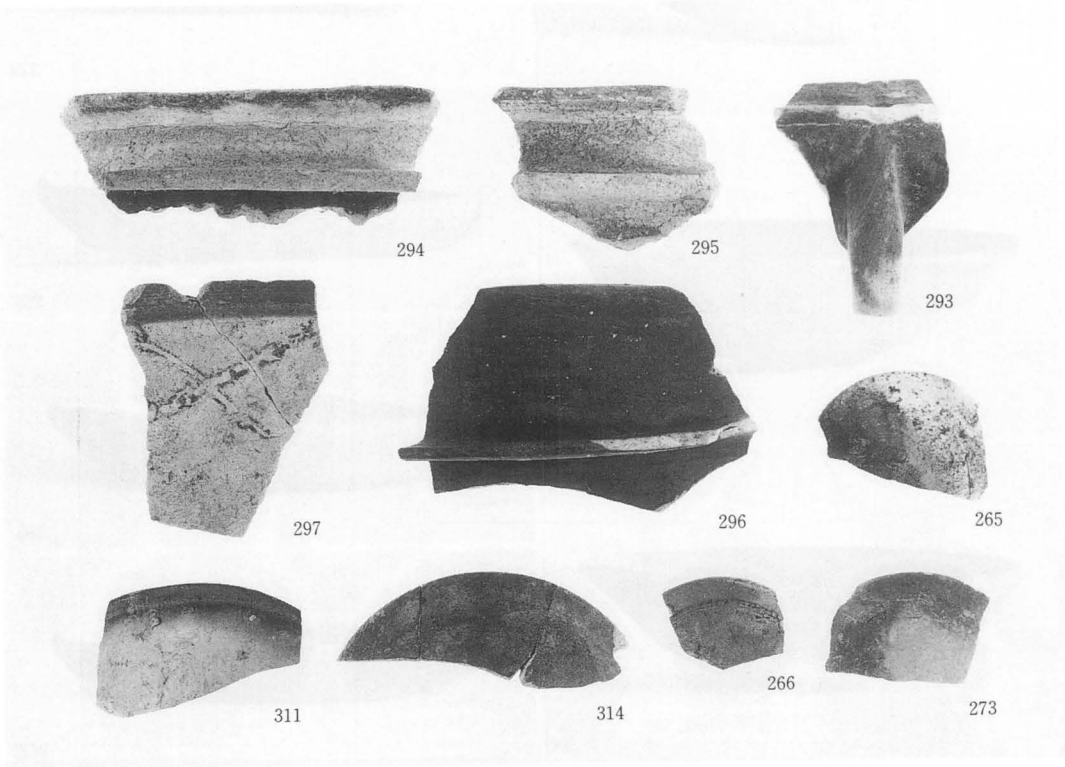




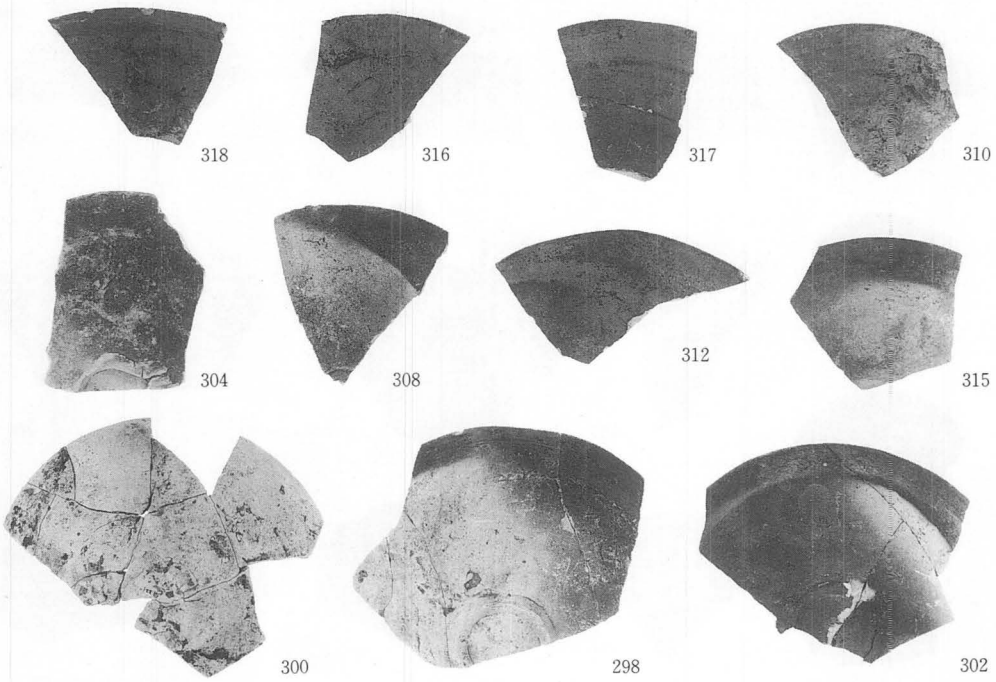




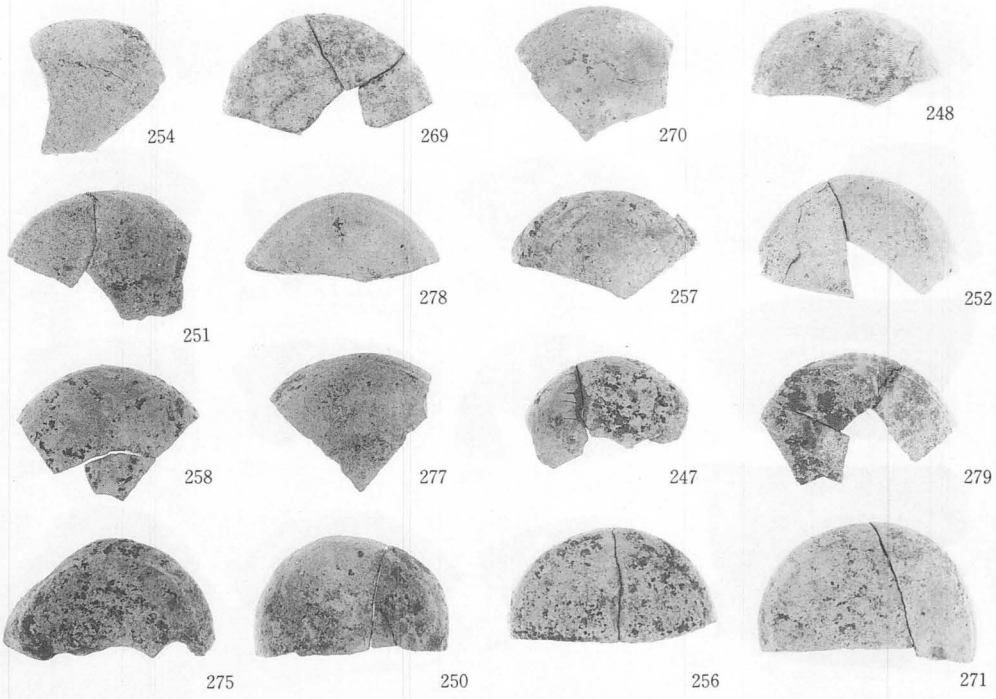
1．土器溜り出土土器　土師器皿



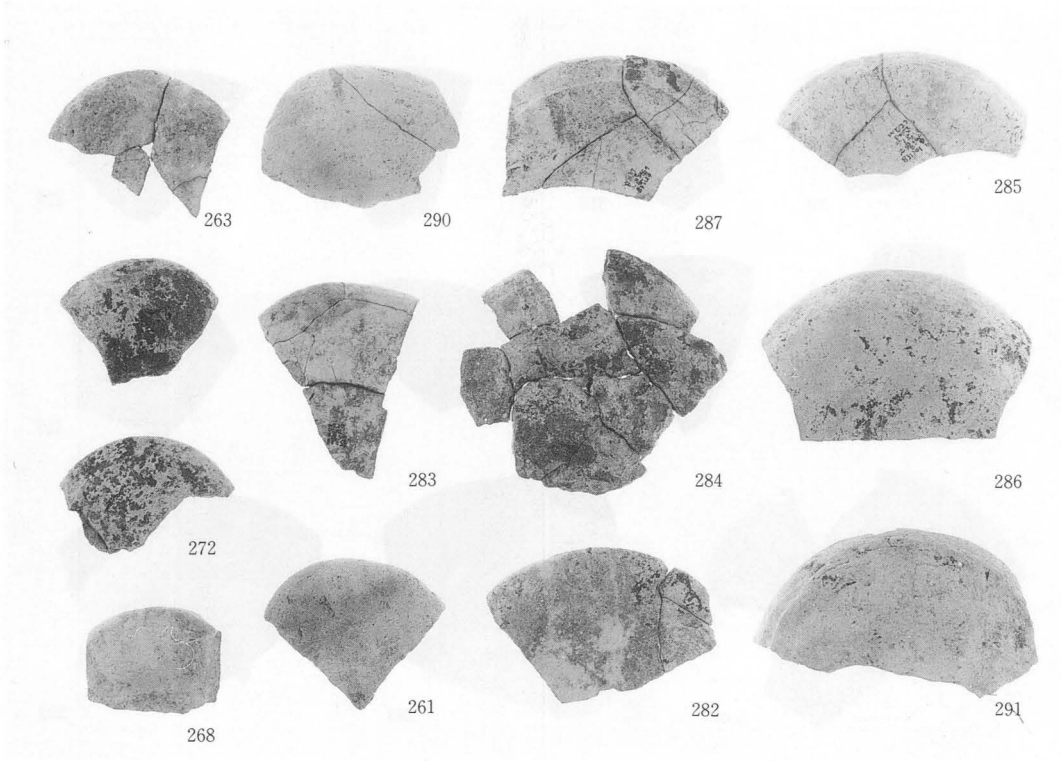
2．土器溜り出土土器　瓦器椀・皿・羽釜、土師器羽釜、須恵器捏鉢



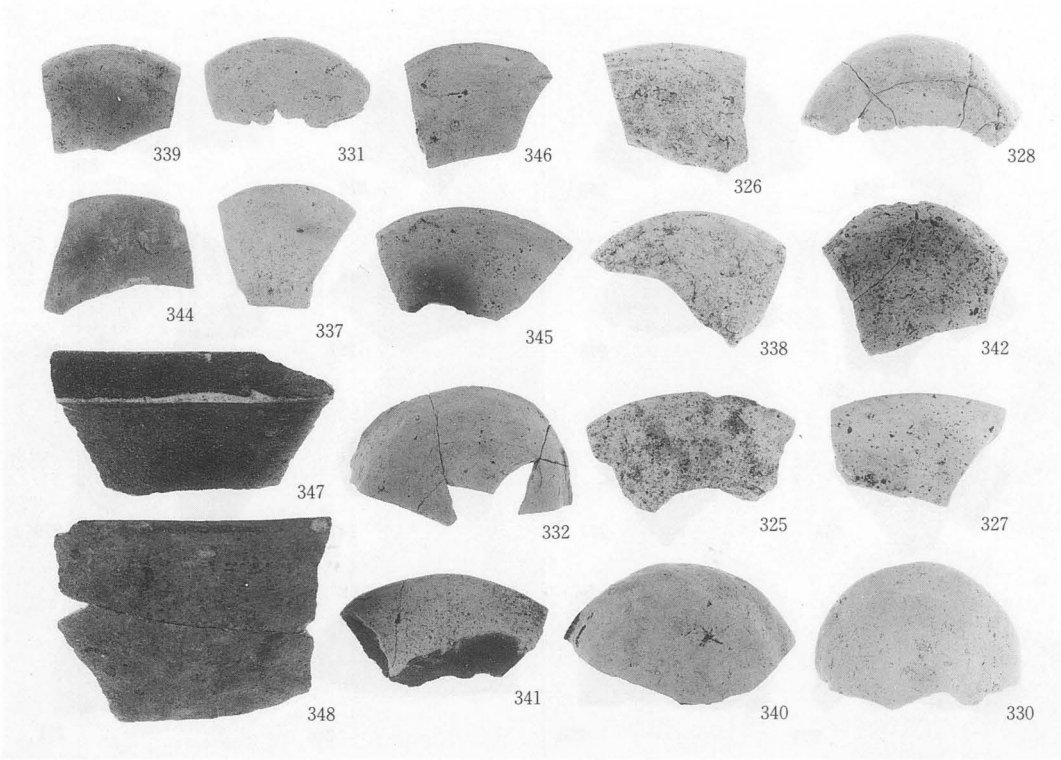
1．土器溜り出土土器　瓦器椀



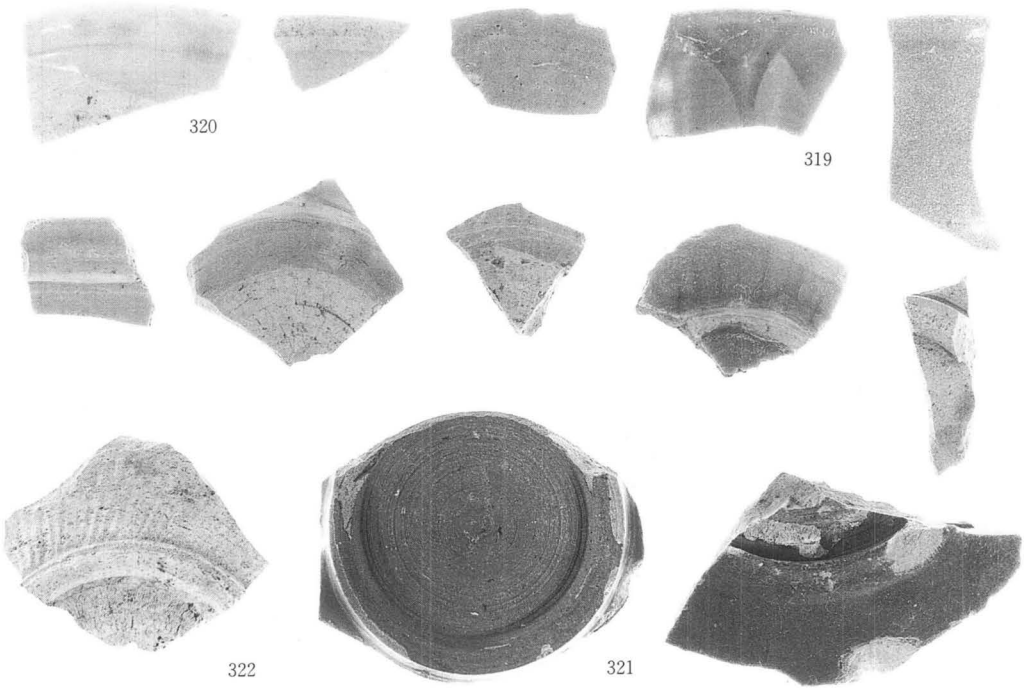
2．土器溜り出土土器　土師器皿



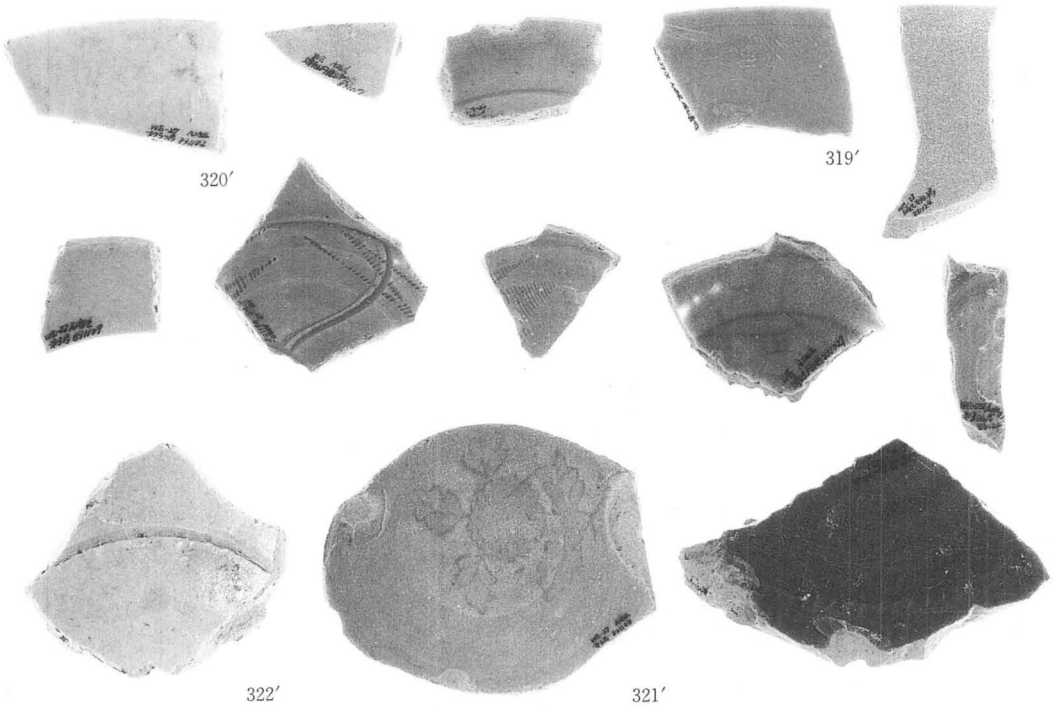
1．土器溜り出土土器　土師器皿



2．整地層２出土土器　瓦器摺鉢、土師器皿

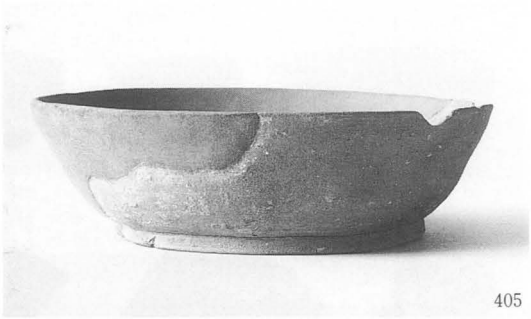


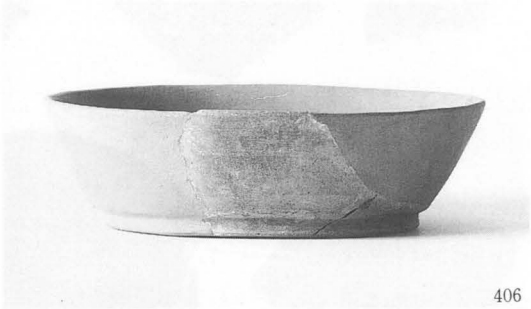
1．整地層２出土土器　輸入磁器(表)

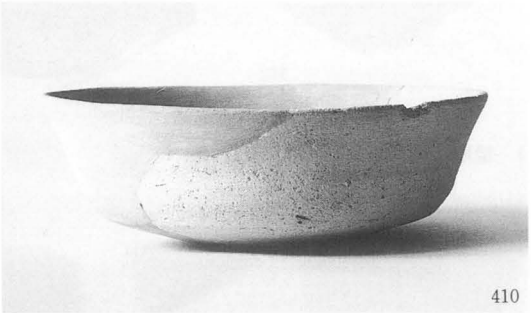


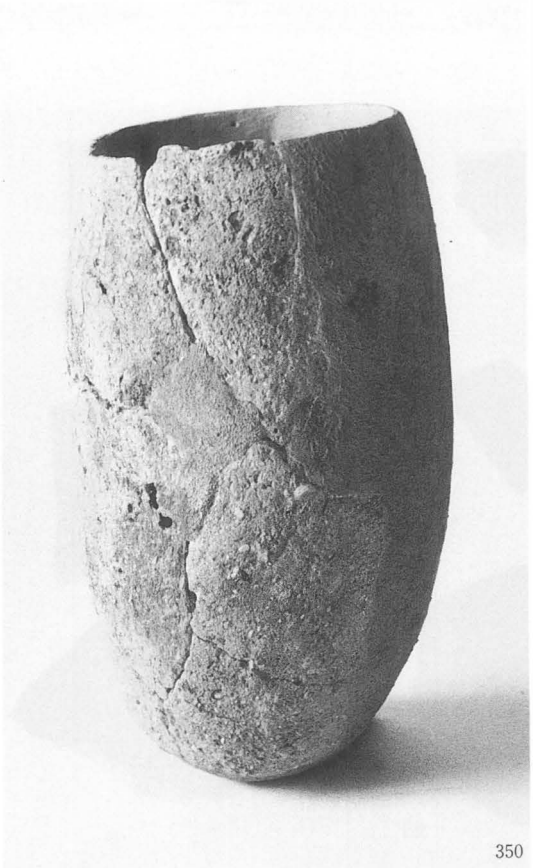
2．整地層２出土土器　輸入磁器(裏)

349

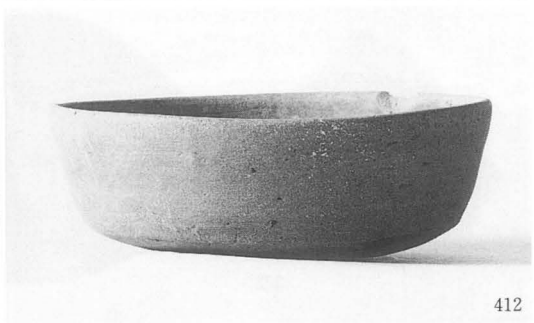

405


406


410

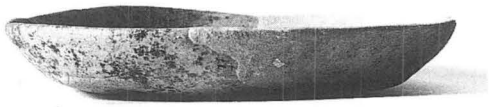

350

411


412

整地層１出土土器　製塩土器、須恵器杯

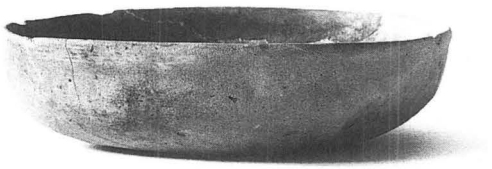
431

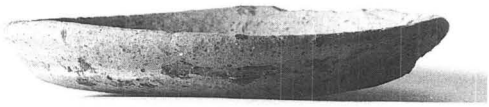

492

495

448

512

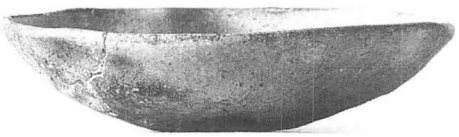

449


501

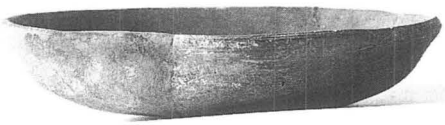
452

496

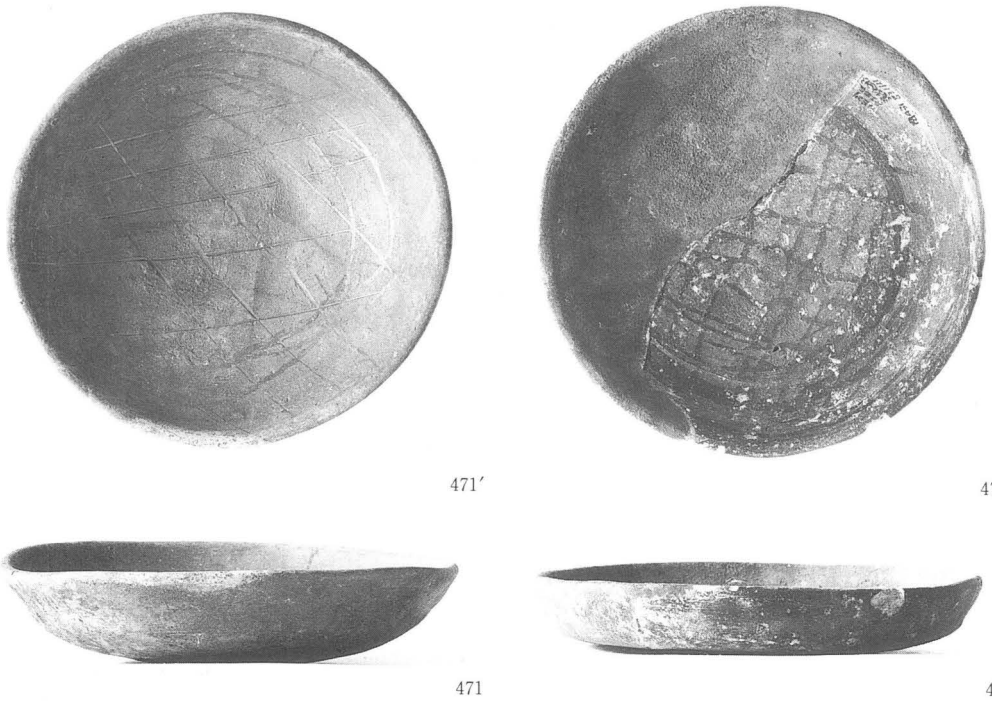
457


470

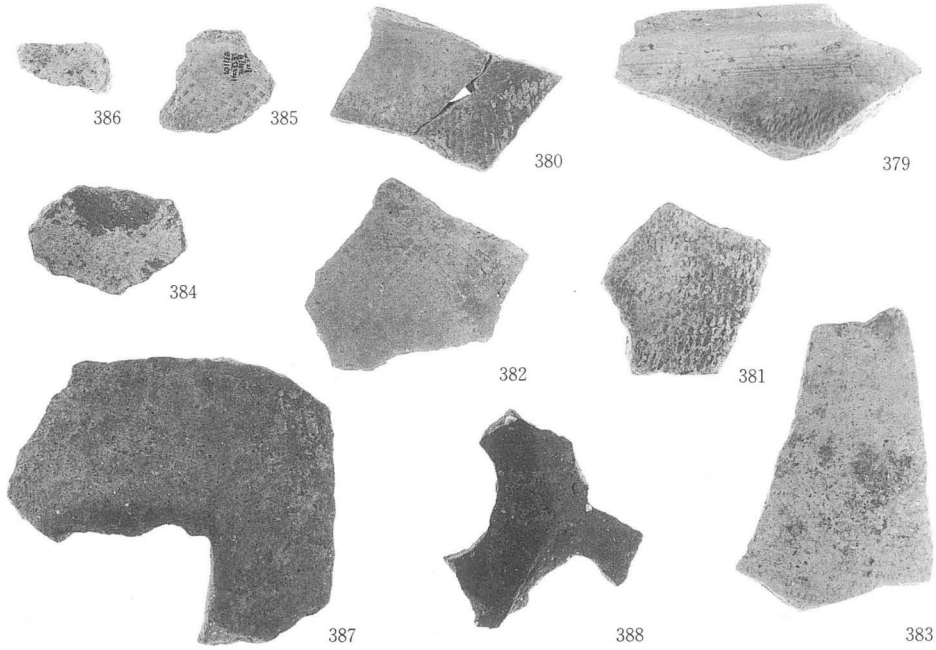
491


474

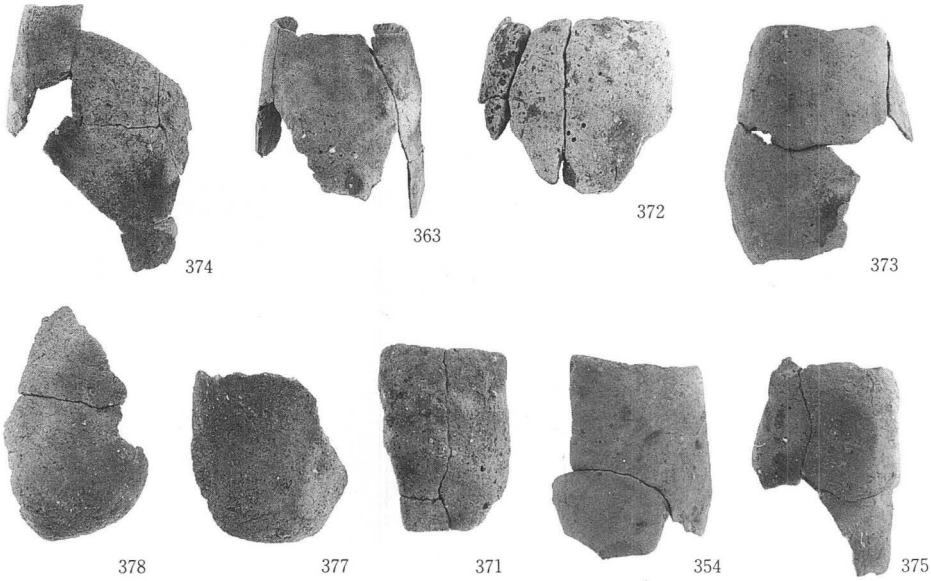
整地層１出土土器　土師器高杯・杯・皿



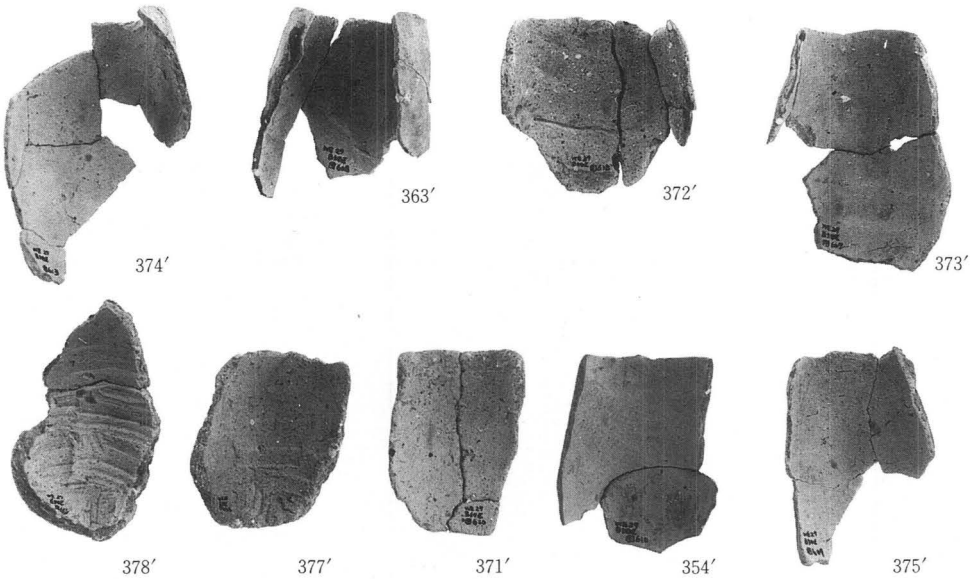
1．整地層１出土土器　瓦器皿



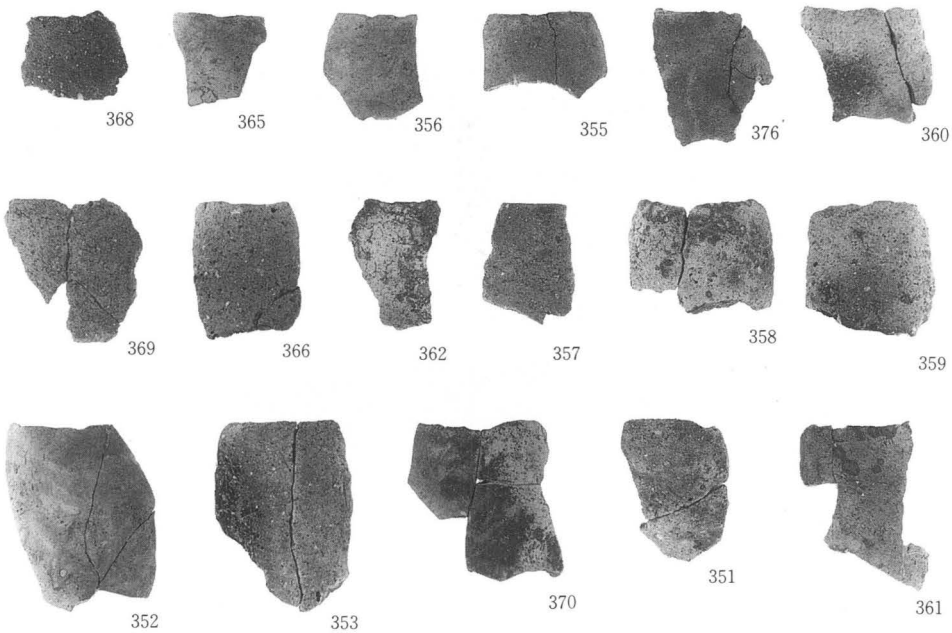
2．整地層１出土土器　韓式系土器



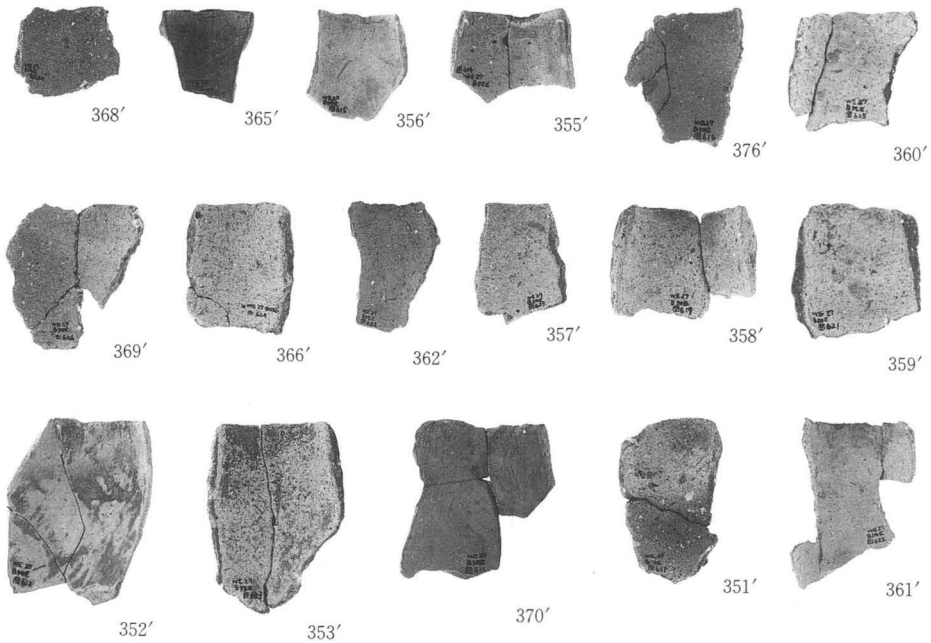
1．整地層１出土土器　製塩土器(表)



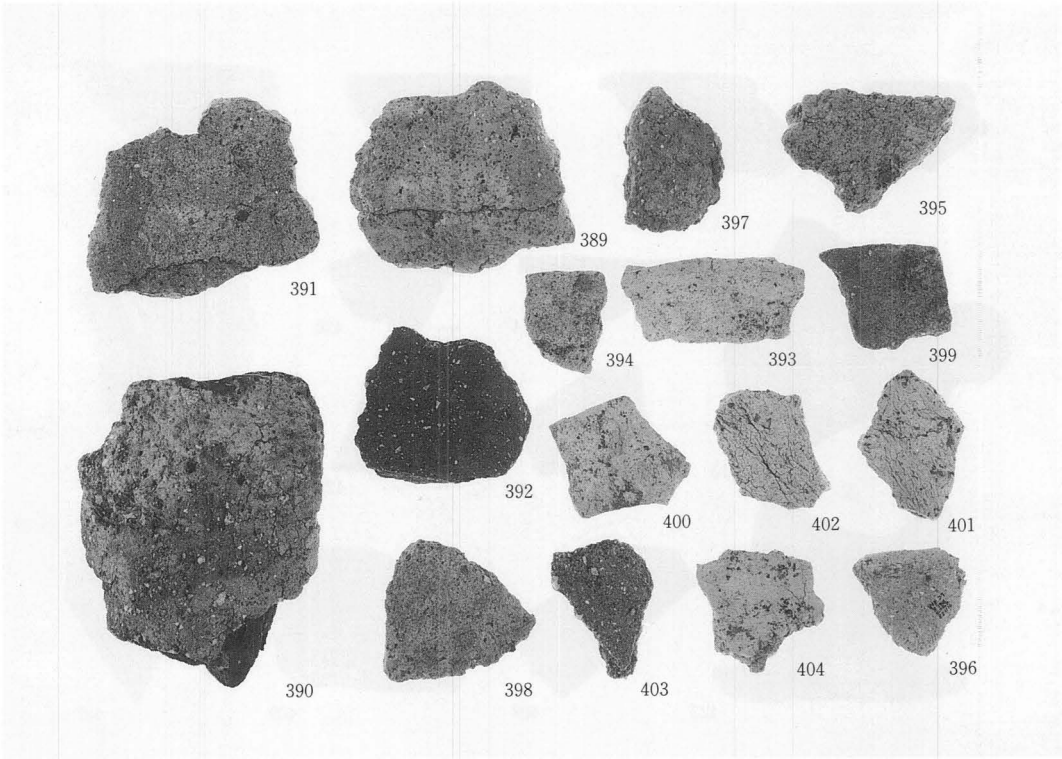
2．整地層１出土土器　製塩土器(裏)



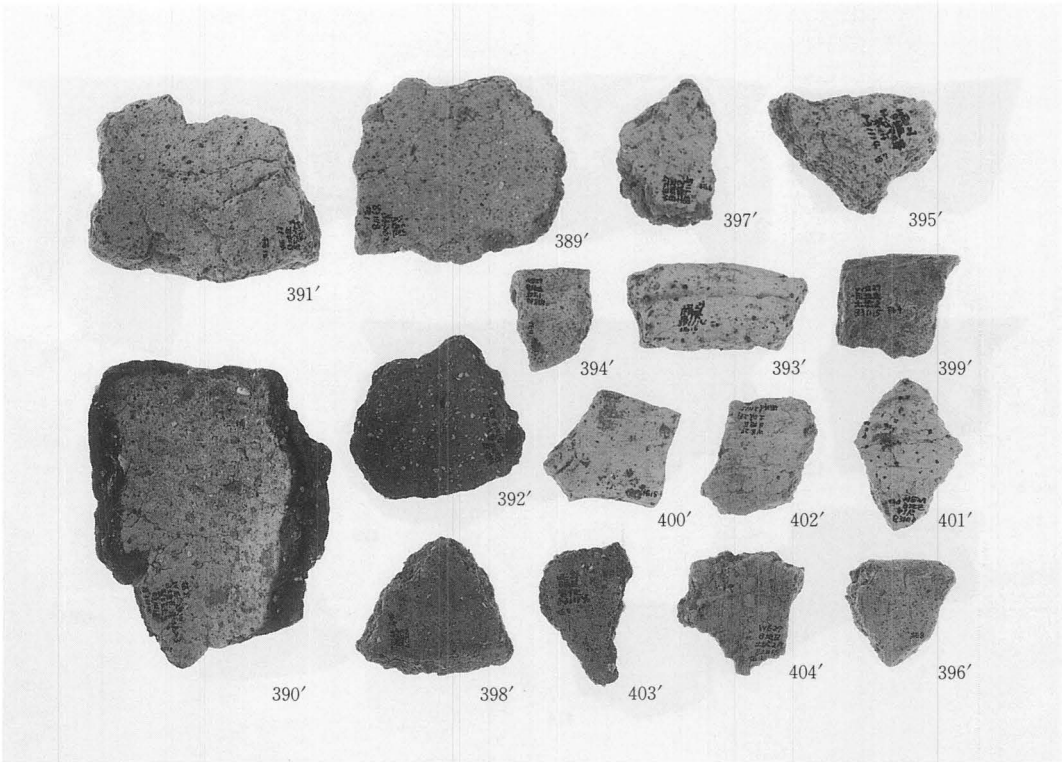
1．整地層１出土土器　製塩土器(表)



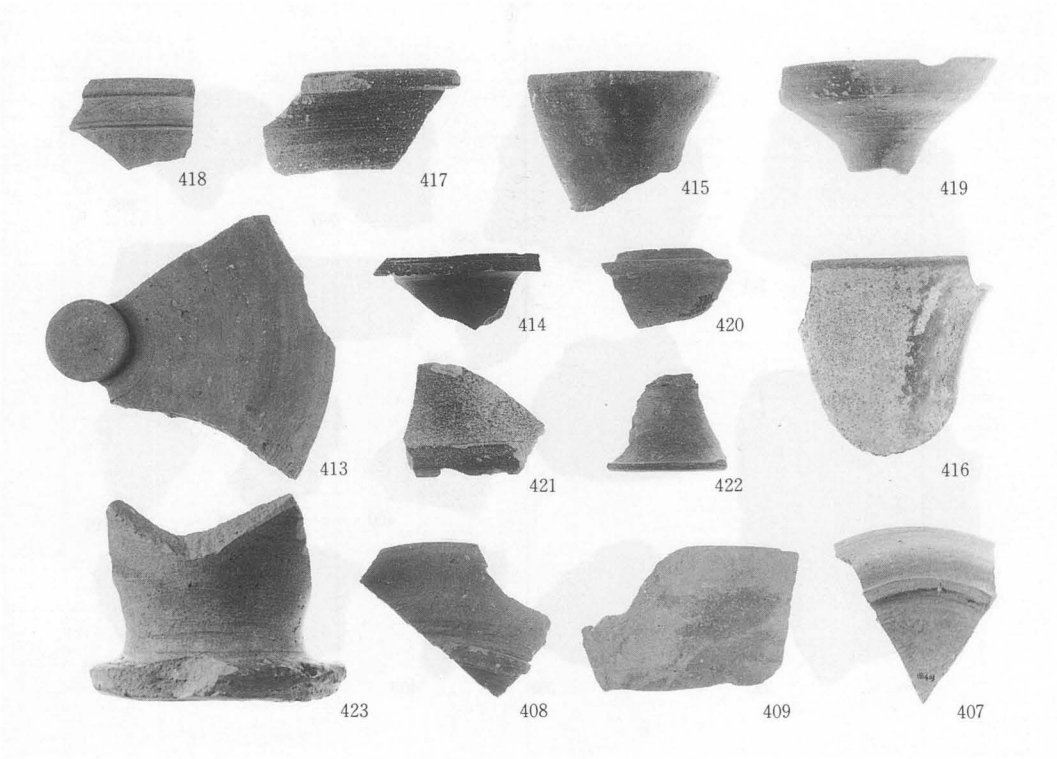
2．整地層１出土土器　製塩土器(裏)



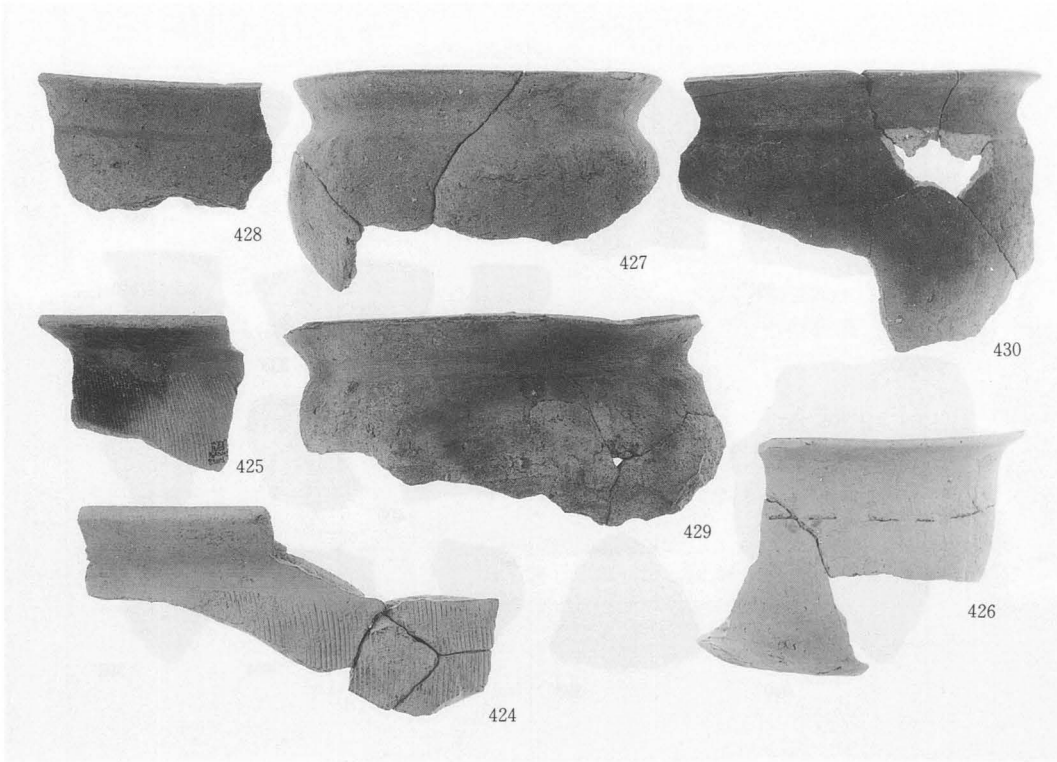
1．整地層１出土土器　製塩土器(表)



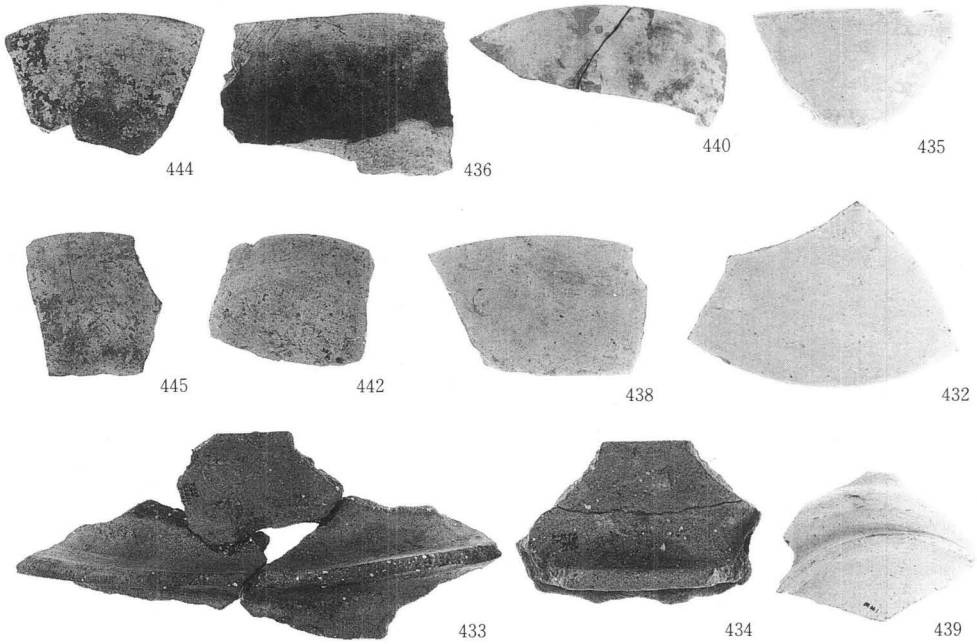
2．整地層１出土土器　製塩土器(裏)



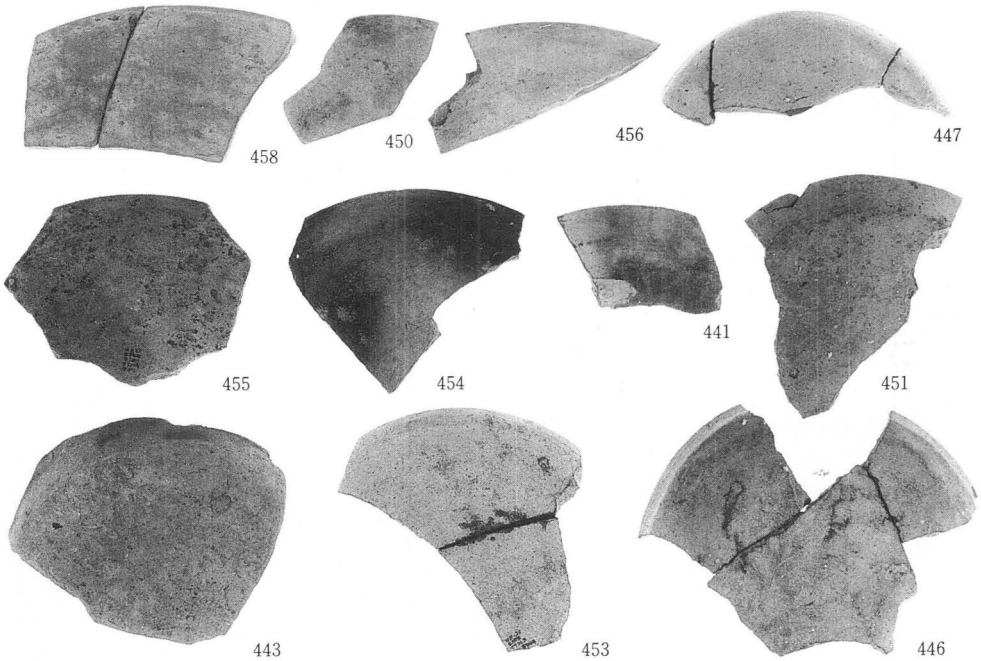
1．整地層１出土土器　須恵器壺・甕・杯・高杯・蓋・鉢・瓿



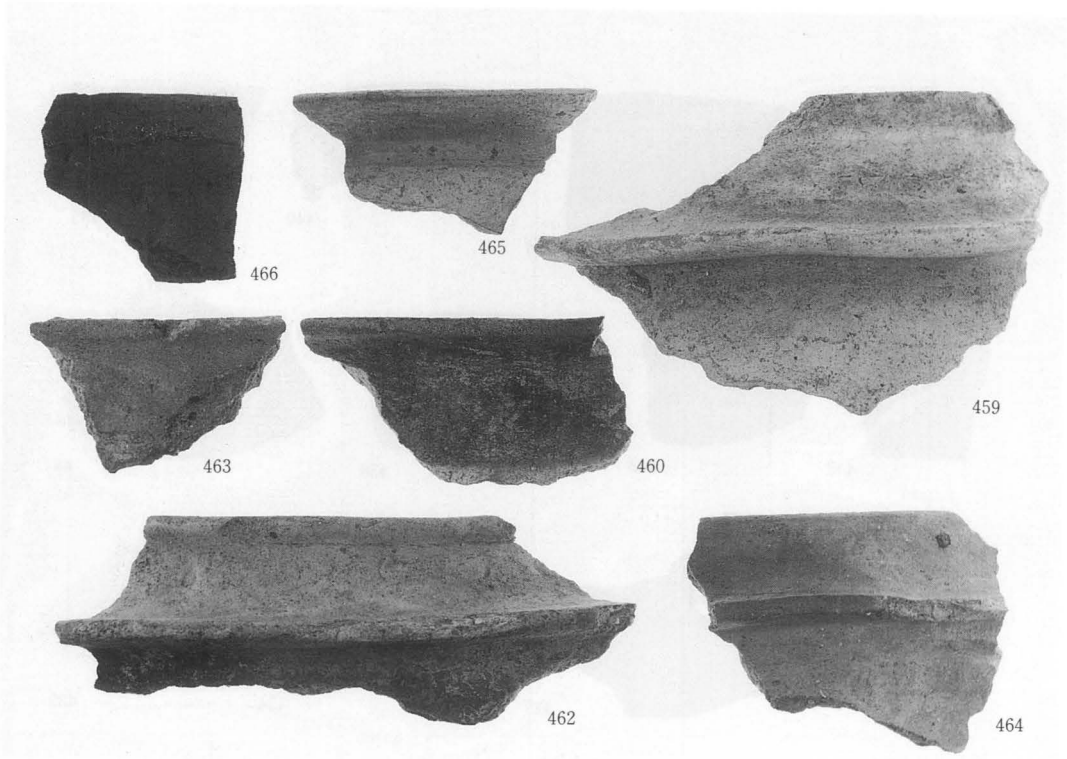
2．整地層１出土土器　土師器甕



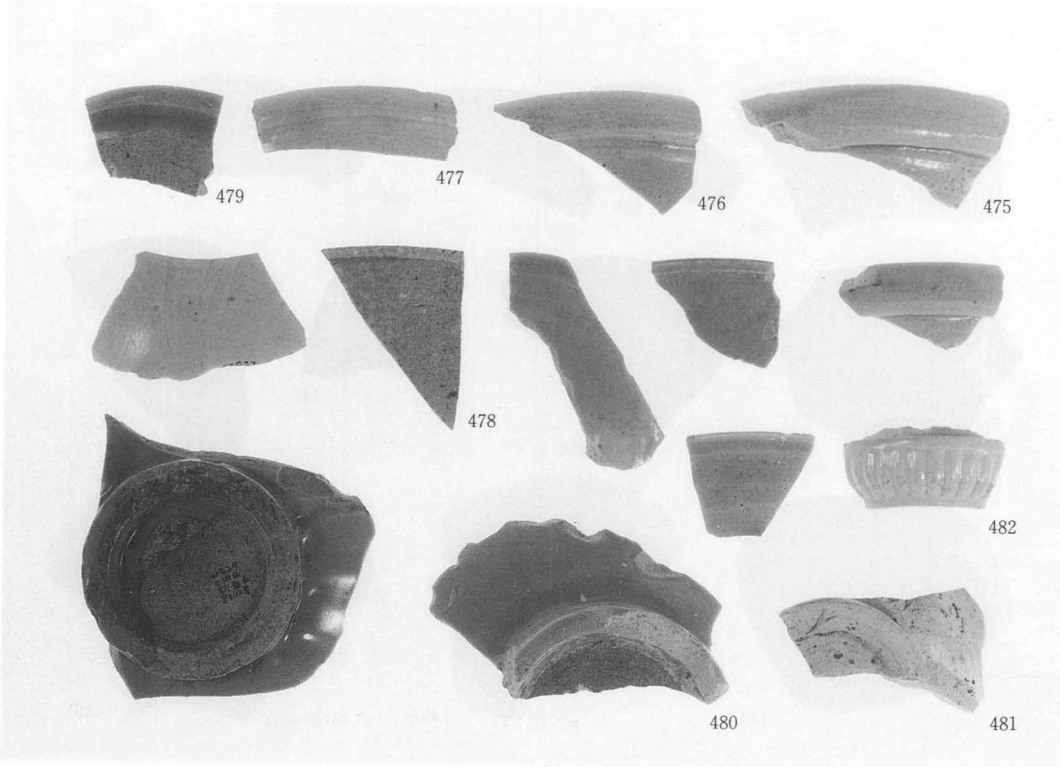
1．整地層１出土土器　土師器杯・蓋・羽釜



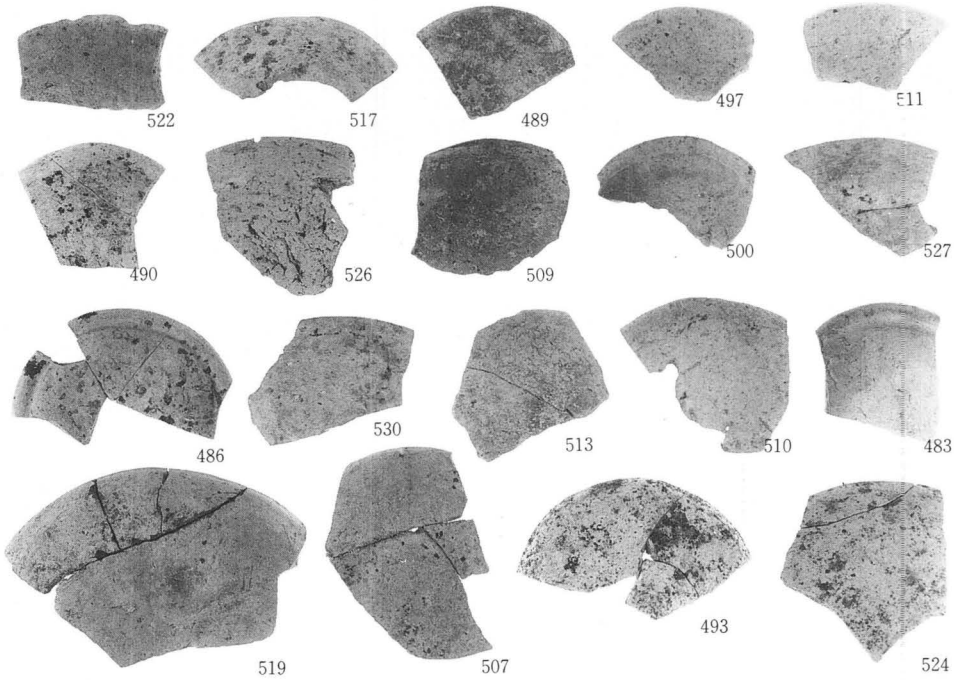
2．整地層１出土土器　土師器杯・皿



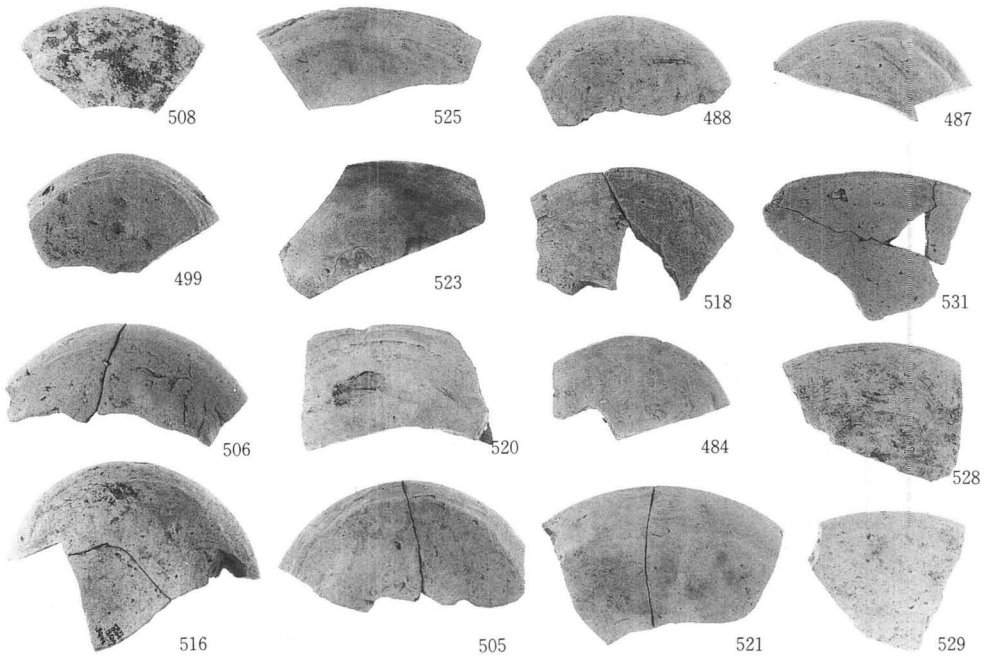
1．整地層１出土土器　土師器羽釜、陶磁器



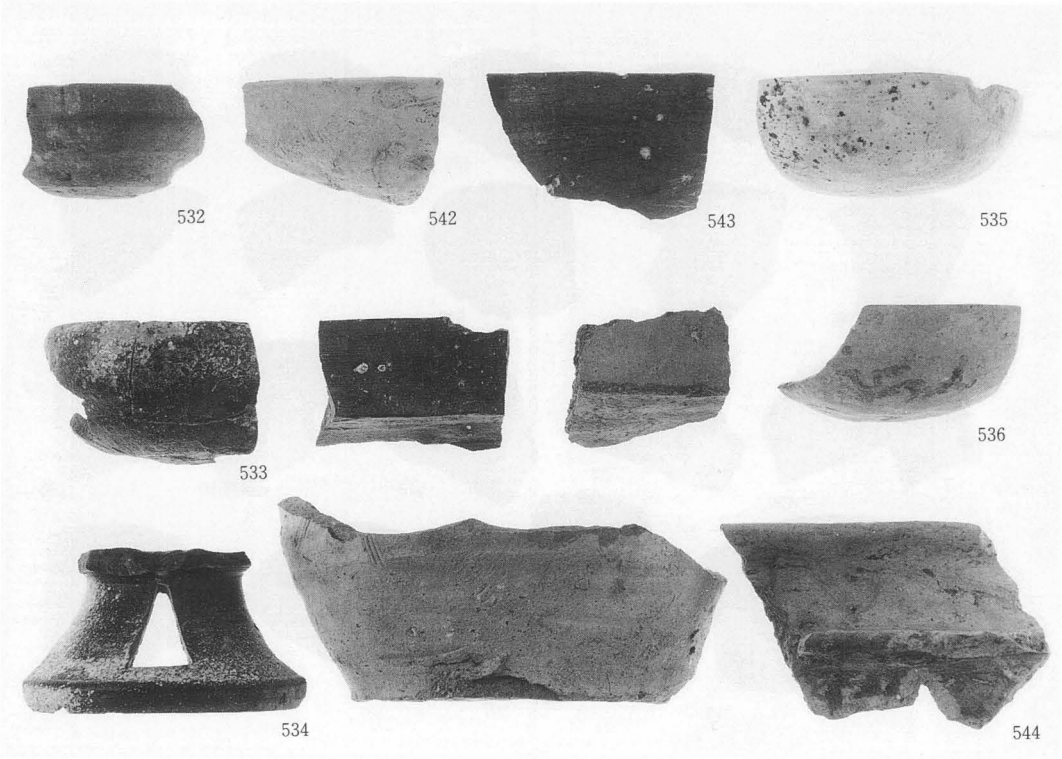
2．整地層１出土土器　輸入磁器



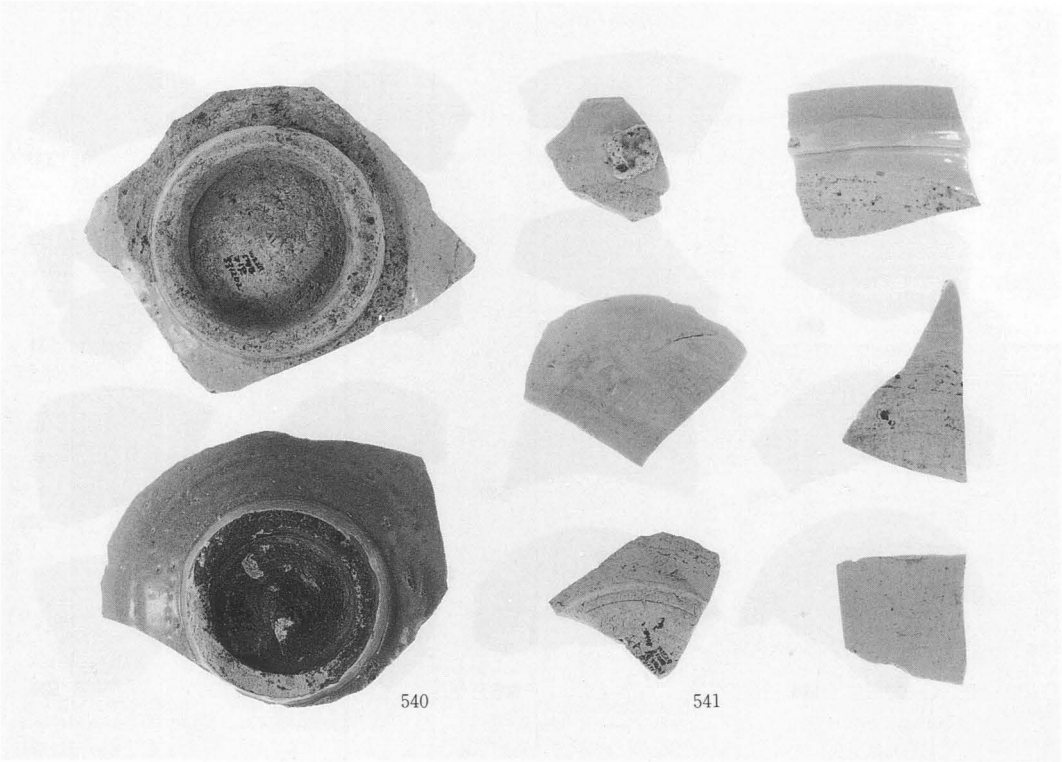
1．整地層１出土土器　土師器皿



2．整地層１出土土器　土師器皿

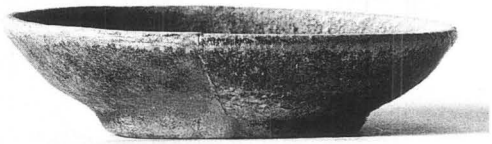


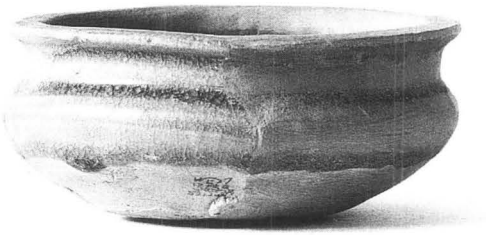
1．整地層１出土土器　須恵器高杯・杯、瓦器椀、土師器杯・羽釜、陶磁器



2．整地層１出土土器　輸入磁器

570


572


554

568

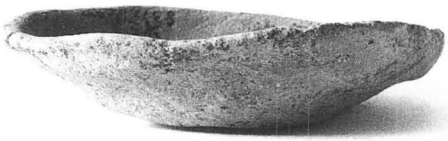
601

580

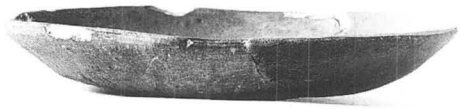
581

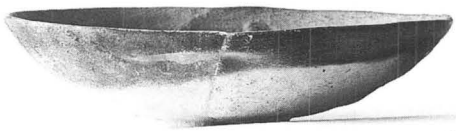
582

586

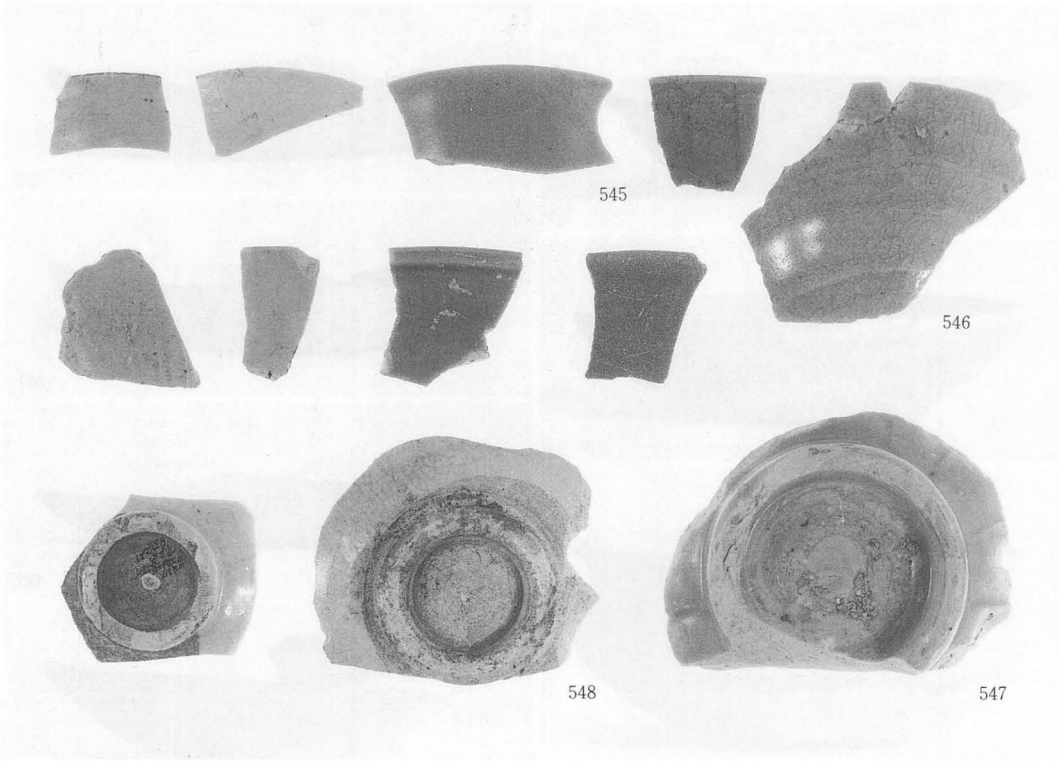

587

590

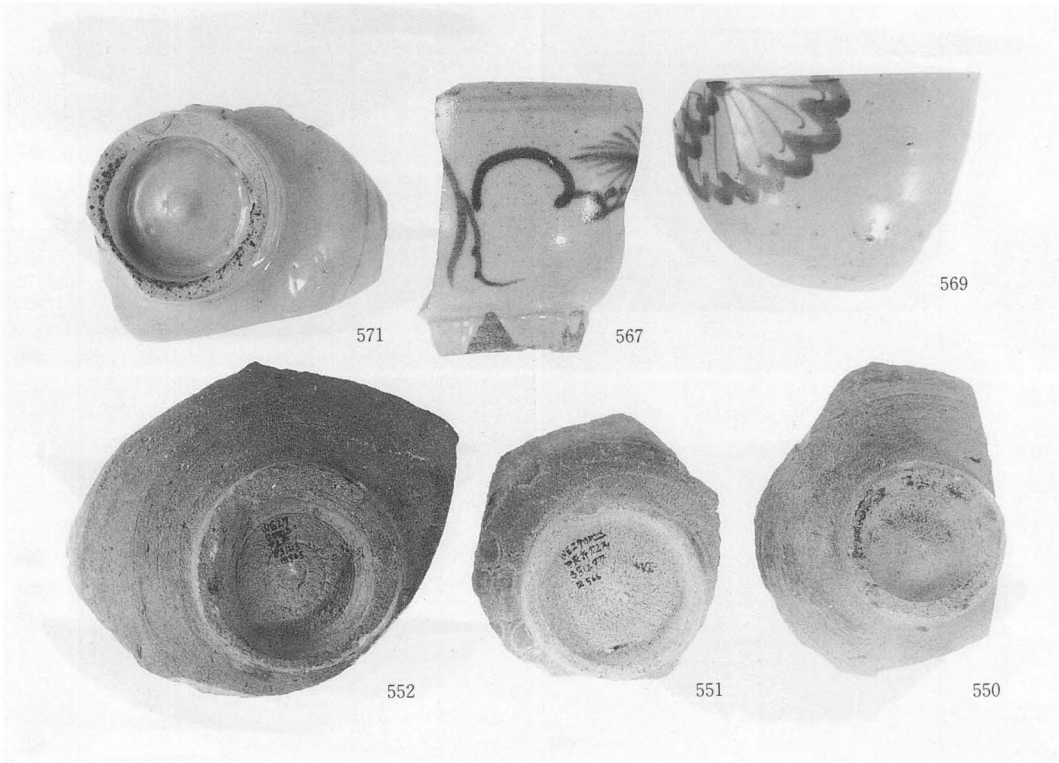

599


621

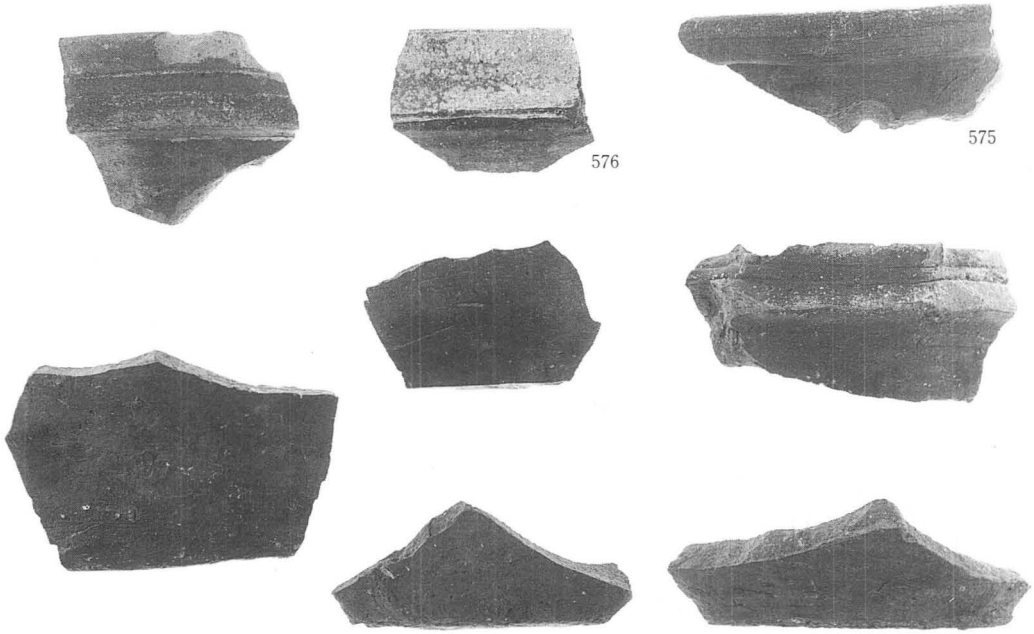
自然流路出土土器　土師器皿、瓦器椀・皿・ミニチュア羽釜、陶磁器



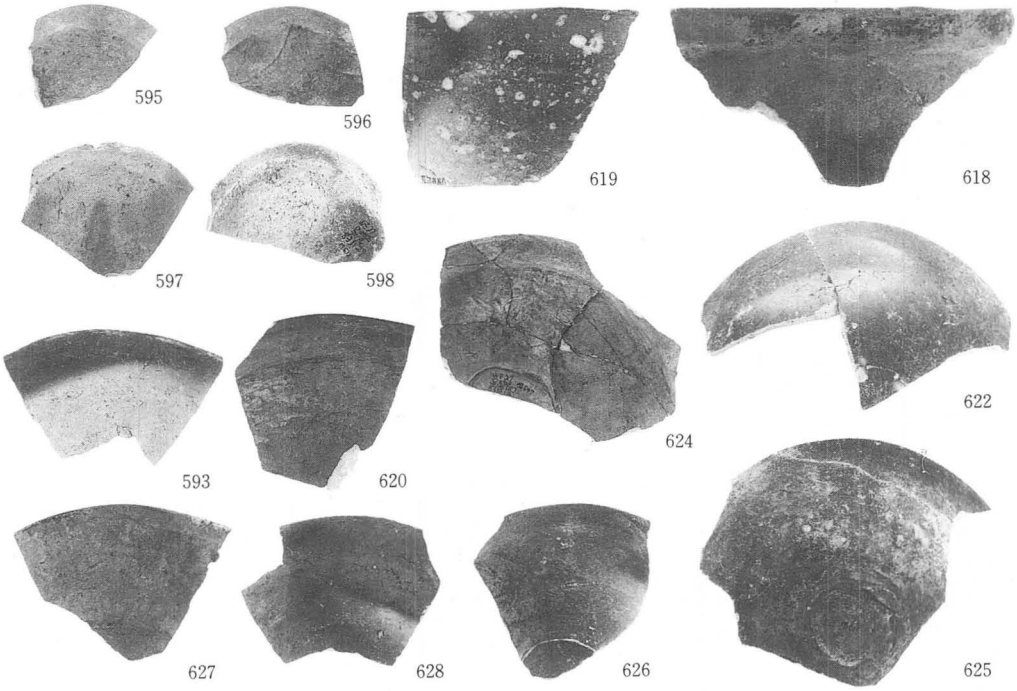
1．自然流路出土土器　輸入磁器



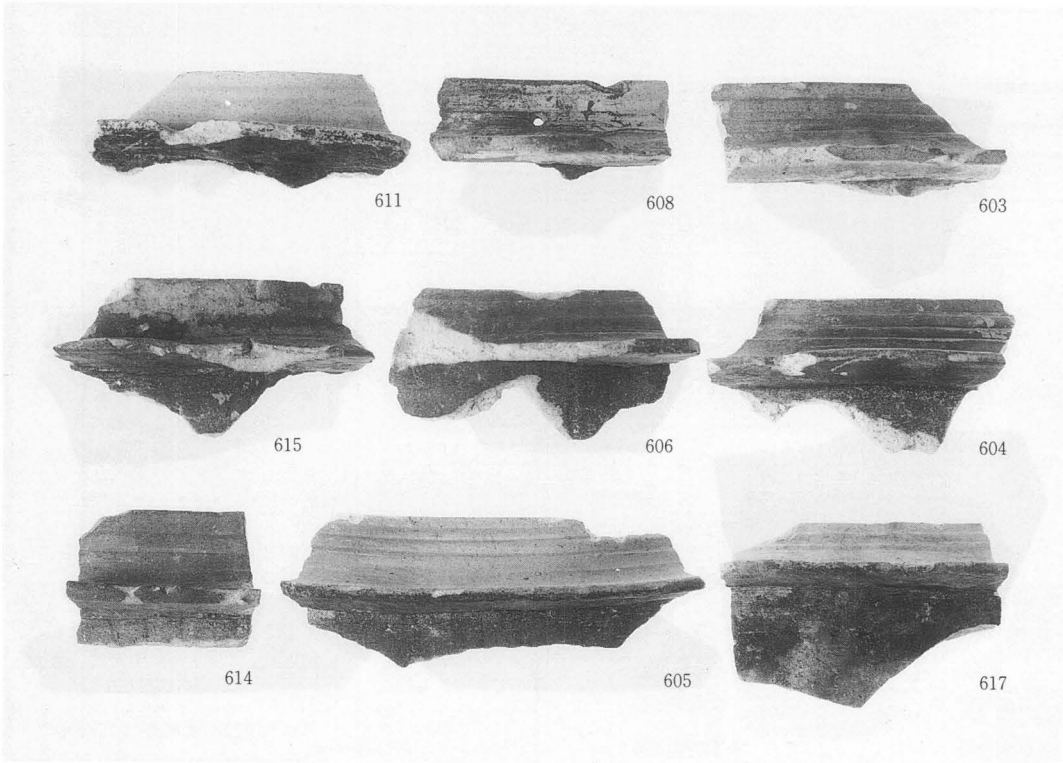
2．自然流路出土土器　陶磁器



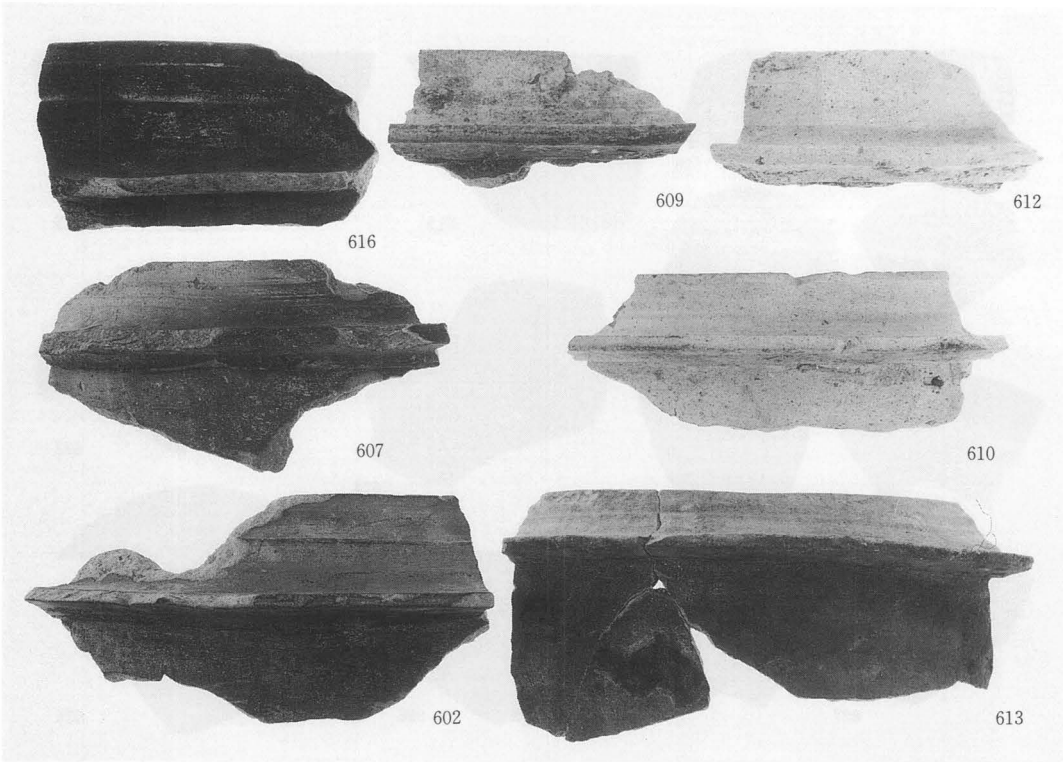
1．自然流路出土土器　陶磁器



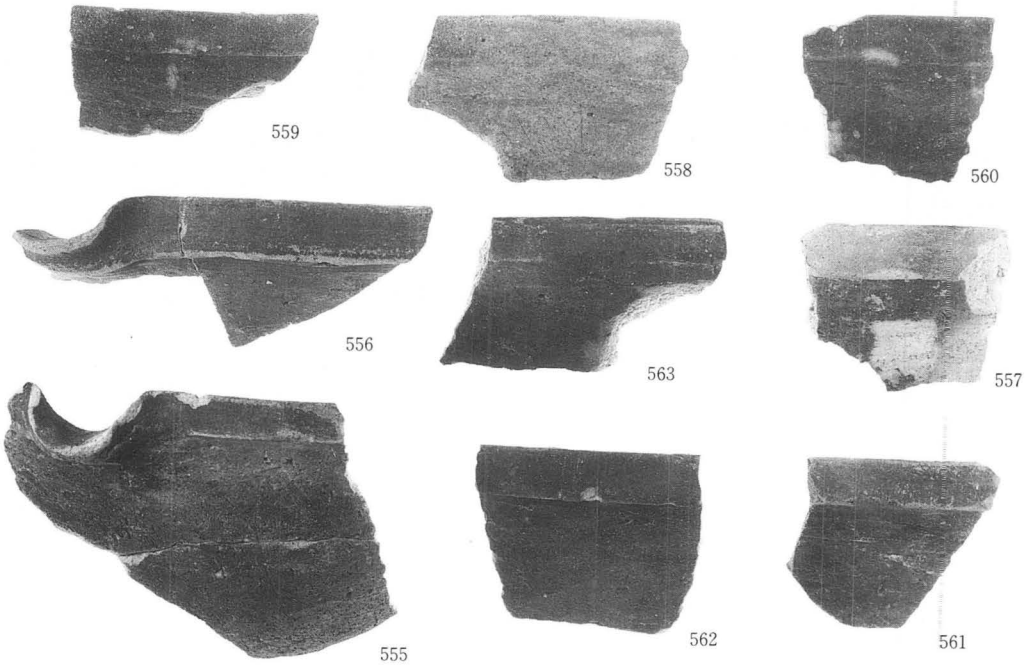
2．自然流路出土土器　瓦器椀・皿・鍋・鉢



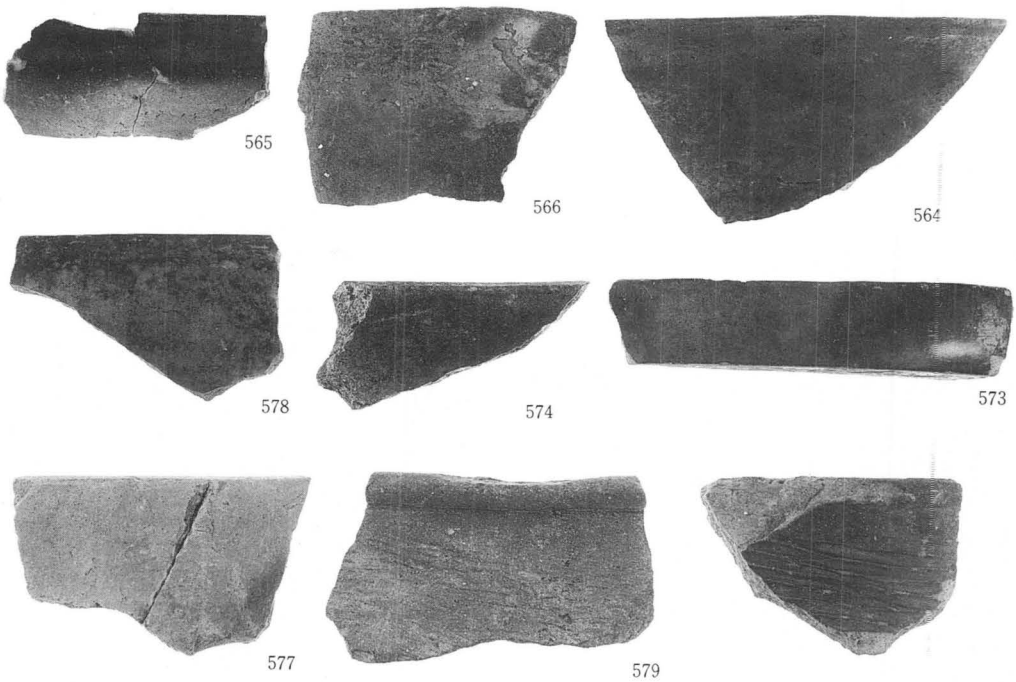
1．自然流路出土土器　瓦器羽釜



2．自然流路出土土器　瓦器羽釜



1．自然流路出土土器　瓦器摺鉢



2．自然流路出土土器　瓦器摺鉢・火舎・盤・甕

27

30

28

32

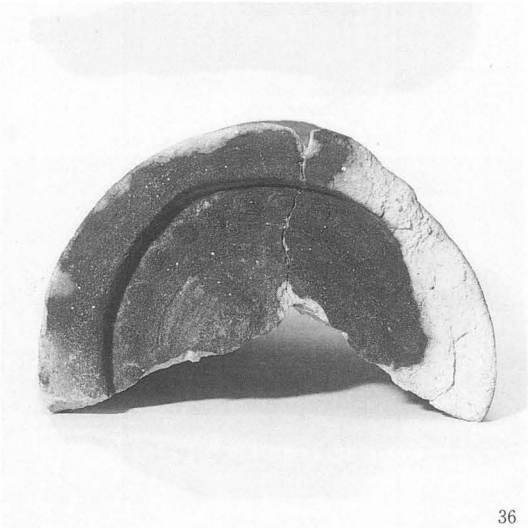
29

33

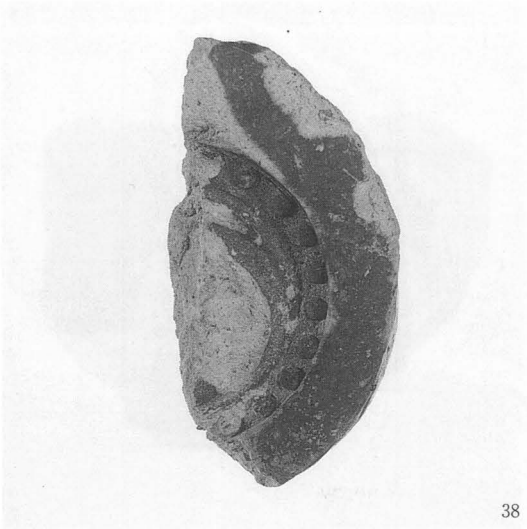
瓦　軒丸瓦

35

34

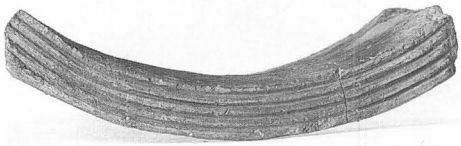

36

31

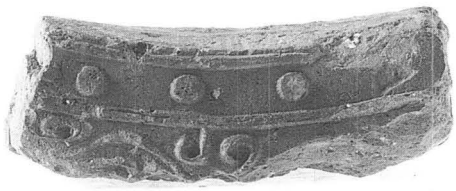

38

37

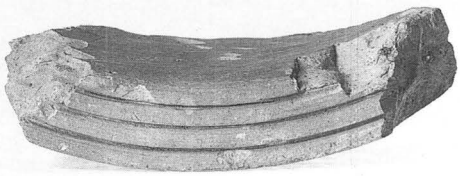
瓦　軒丸瓦・鳥衾



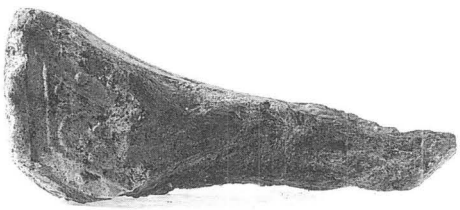
1



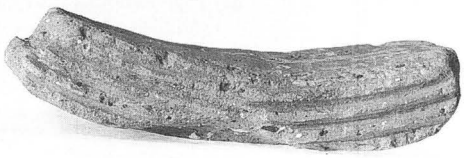
9



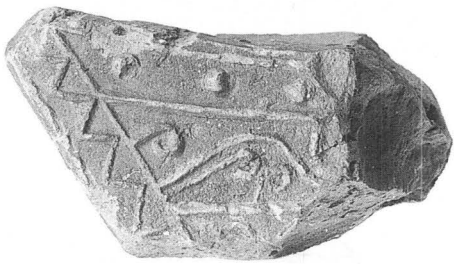
2



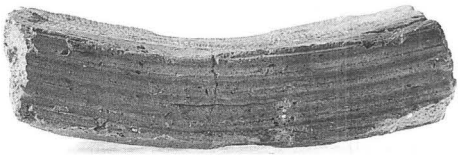
8



3

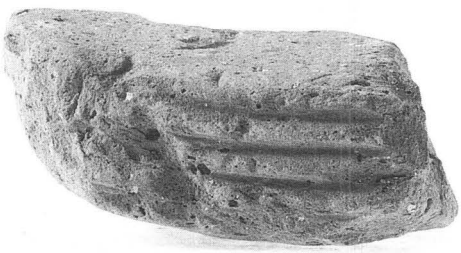


6



4

7

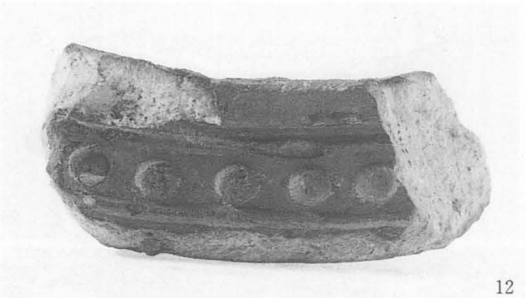


5

瓦　軒平瓦

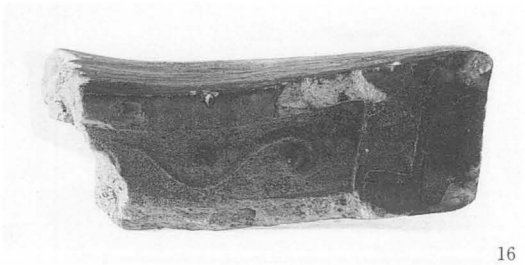
10

11


12

13

15

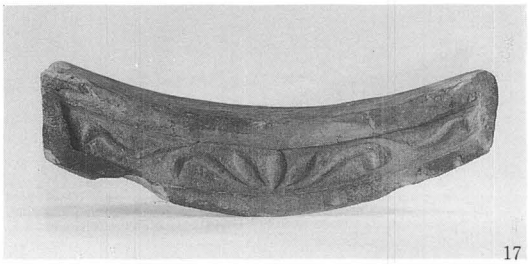

16

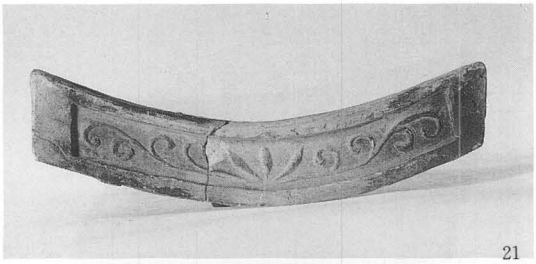
23

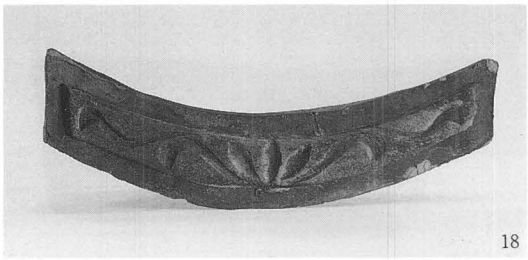
24

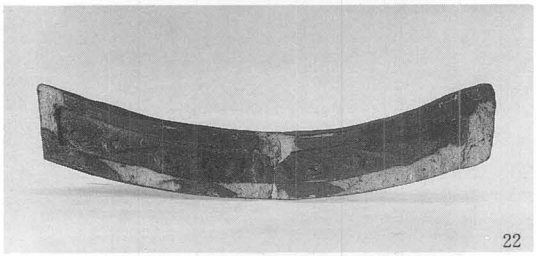
14

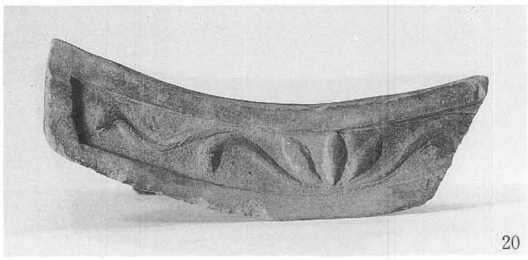
瓦　軒平瓦

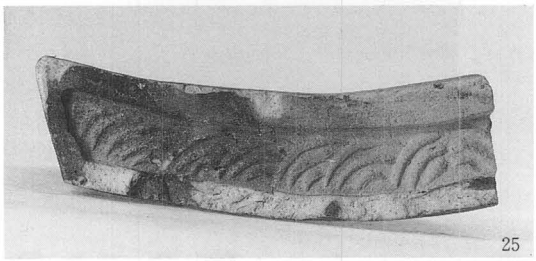

17


21

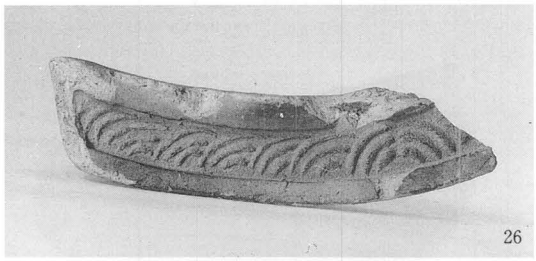

18

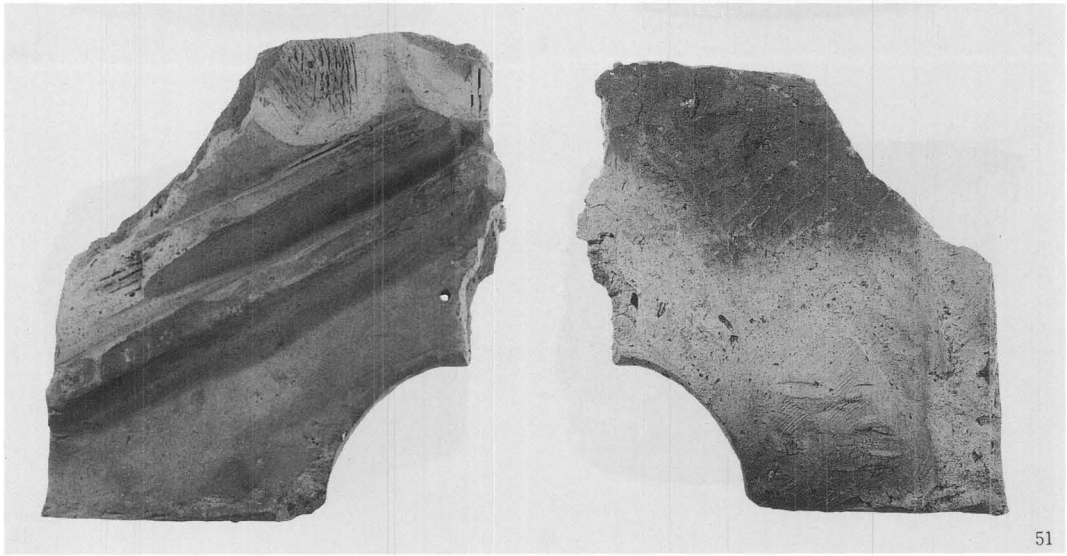

22


20


25

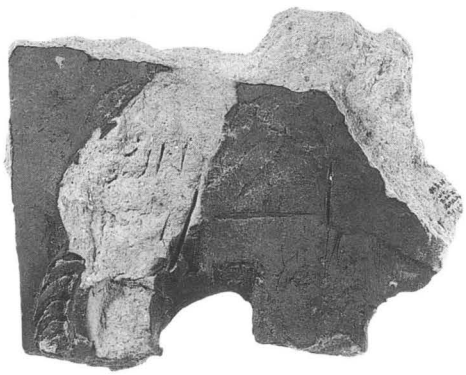
19


26


51

瓦　軒平瓦・飾り瓦

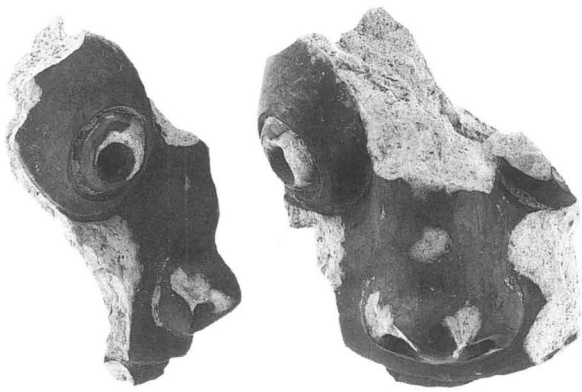
50



53

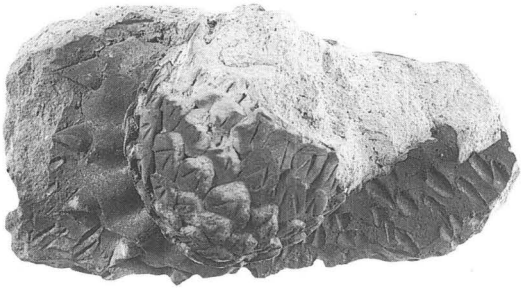
54

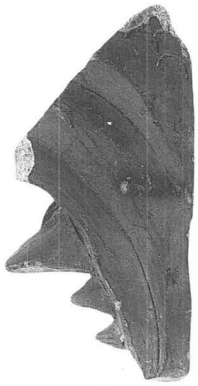
52



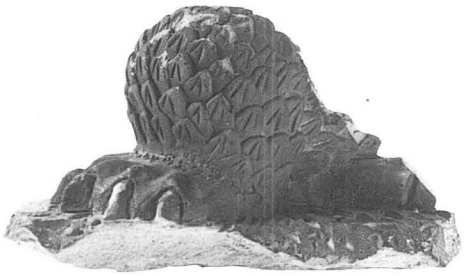
42

瓦　飾り瓦



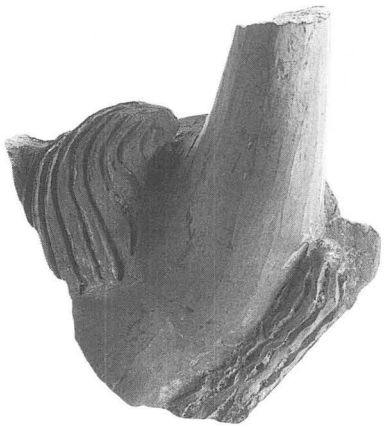


39



40

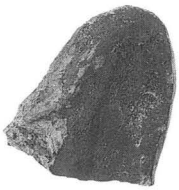
48



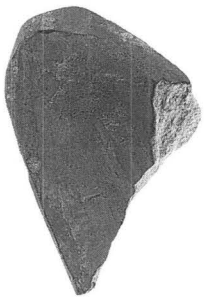
41

47

43

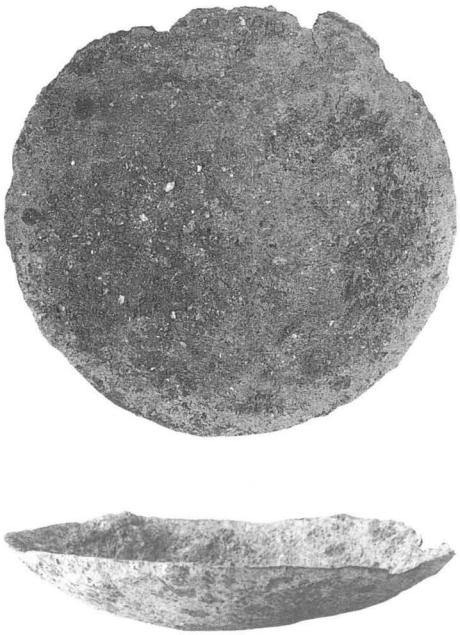


46

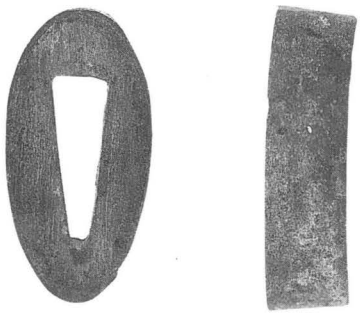


45

瓦　飾り瓦

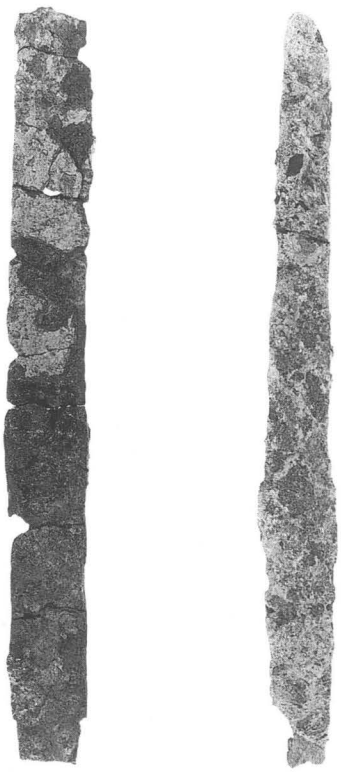


18



3

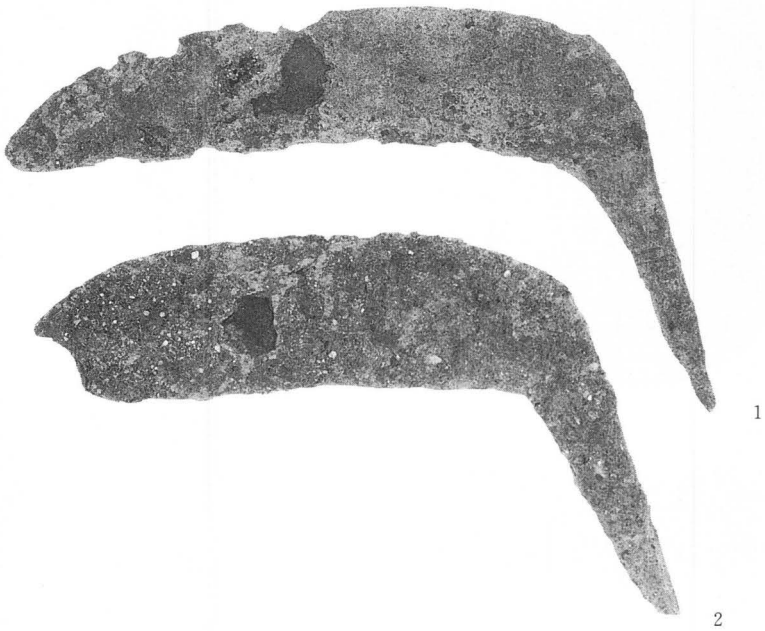
4



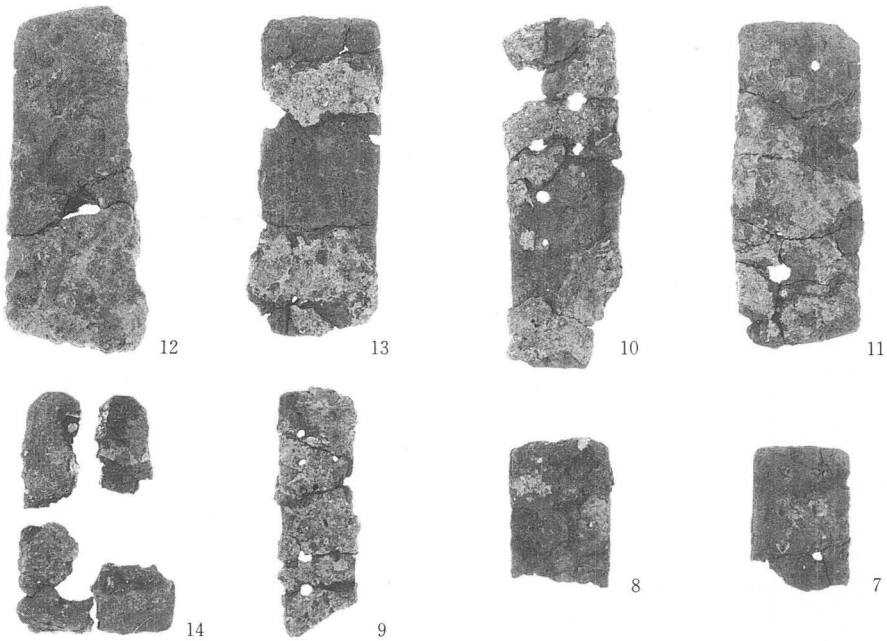
6　15

5

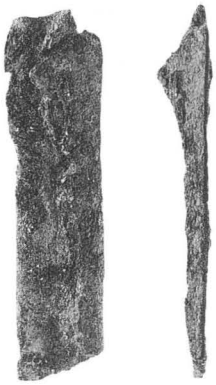
金属器　鯉口・鏃・皿・刀・刀子



1．金属器　鎌

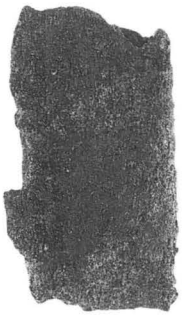


2．金属器　小札



16

17



21

19

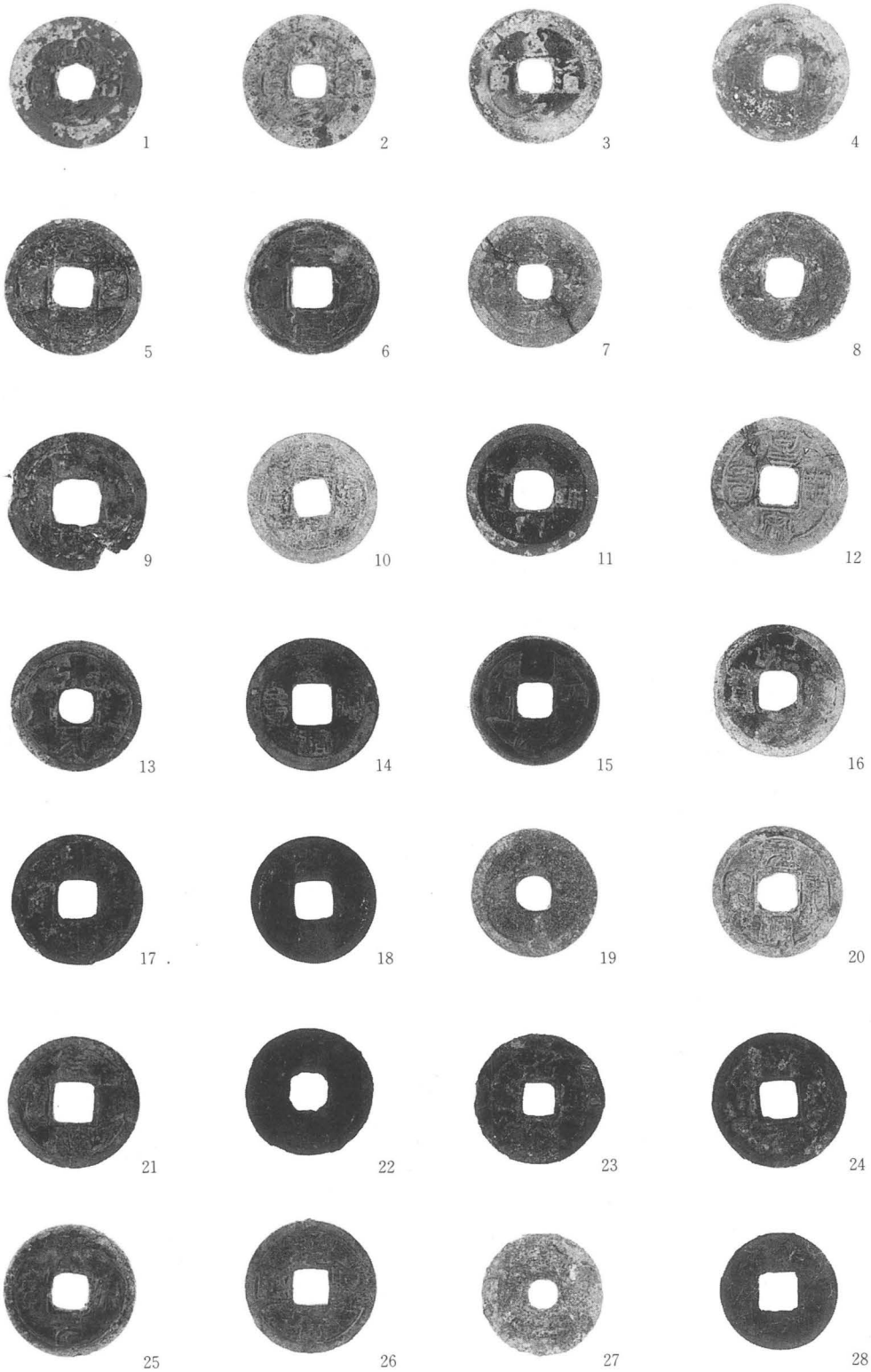
20

22

金属器　飾り金具・飾り釘・用途不明品

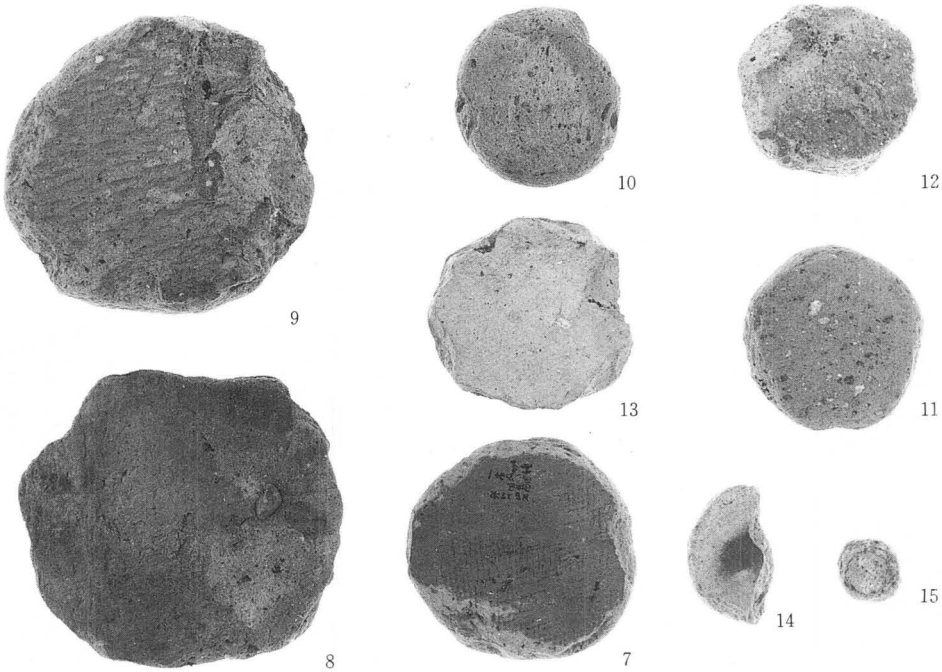
47
57
60
70
54
25
26
50
49
61
55
58
51
40
67
41
45
42
75
53
52
73
76
72
89
46
100
99
69
64
68
62
56
77
80
71
78
88
98
87
86
85
63
59
65
74
36
90
66
32
27
39
30
34
29
33
35
24
91
31
23
38
37

金属器　釘



銭　貨

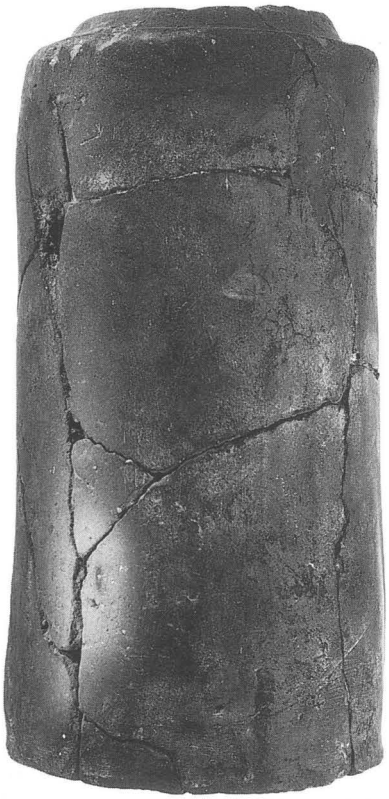
1．土製品　土馬・鬼瓦状土製品



2．土製品　円板状土製品

2′

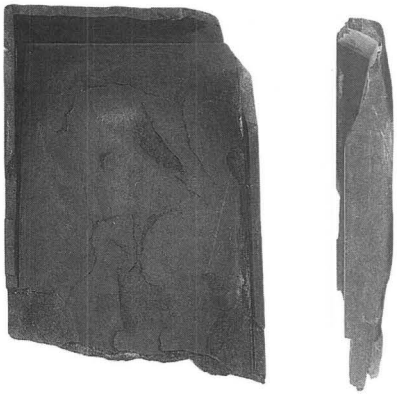
1′



2

1

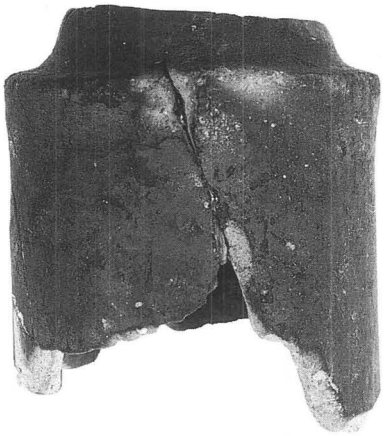
土製品　土管



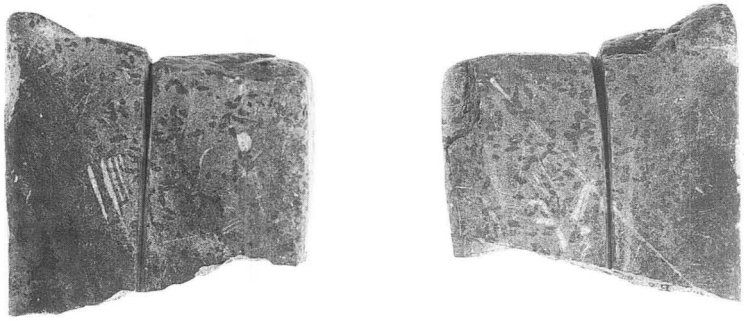
5

3′

4

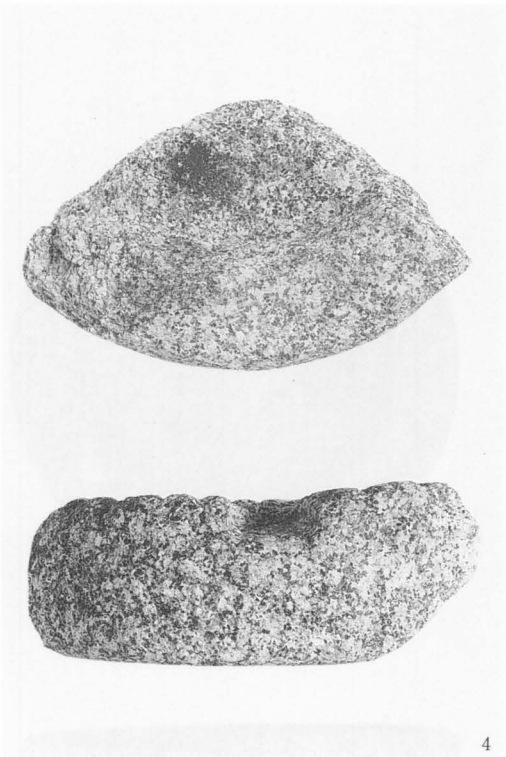


3

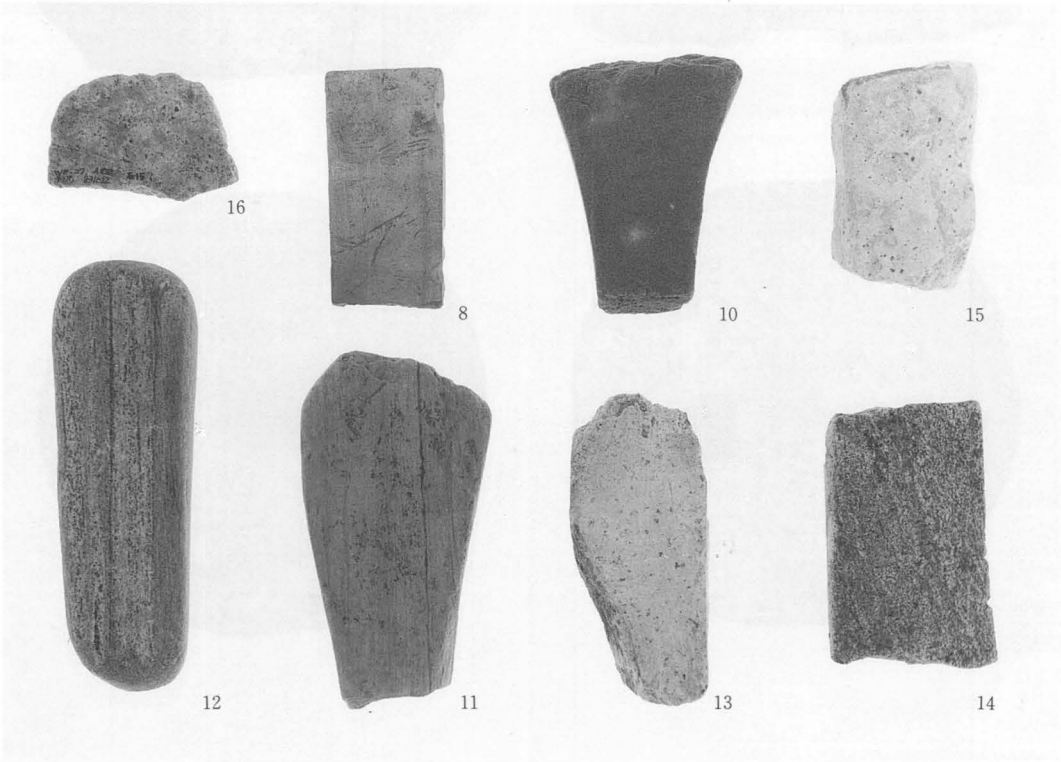


7

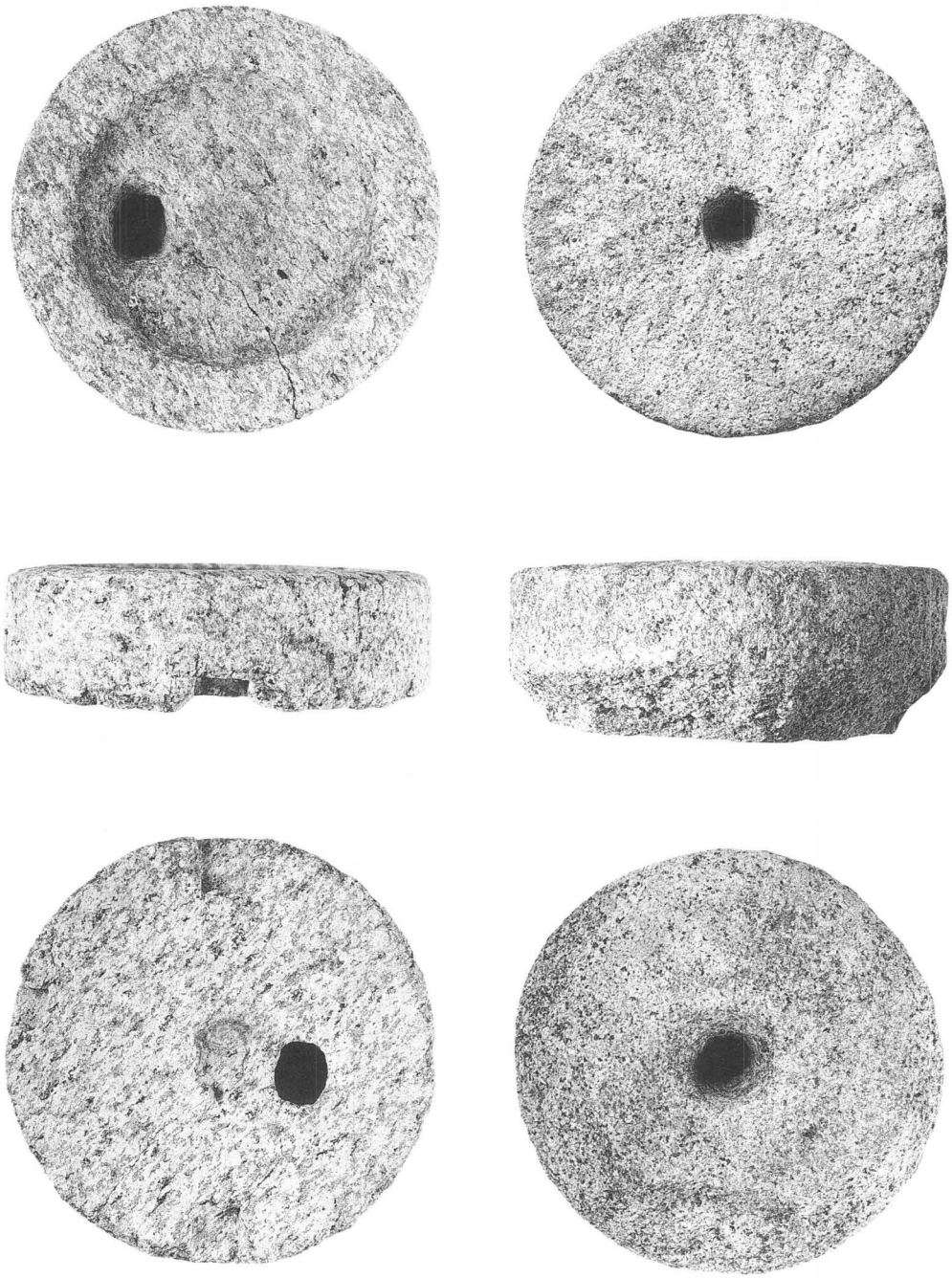
土製品　土管、石製品　硯・砥石



1．石製品　臼・台座

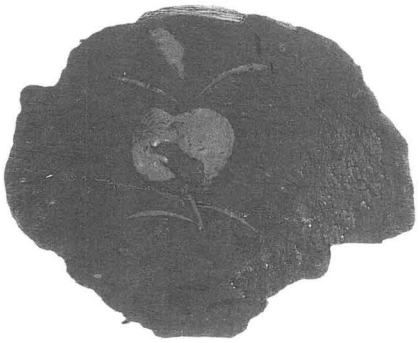


2．石製品　砥石



2　　3

石製品　臼



3

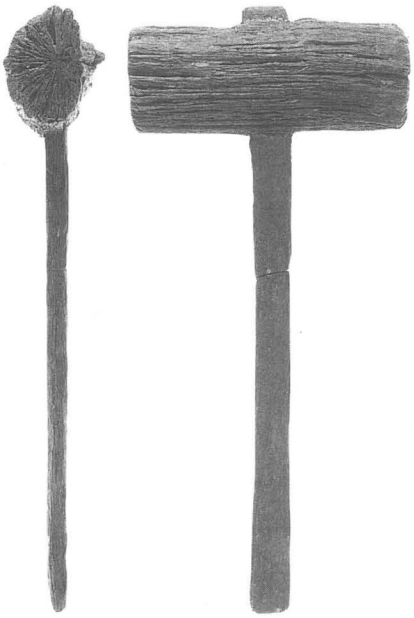
2

13

17

15

12



1

木製品　木槌・漆器椀・斉串・桶の側板・用途不明品

木製品　箸・曲物の底板・桶の底板・桶の側板

若江遺跡第27次発掘調査報告

１９８８年3月３１日

発　行　　財団法人 東大阪市文化財協会
印　刷　　明 文 堂 工 業 株 式 会 社